

SUSE Manager '5.0'

管理者ガイド

2024年11月18日



目次

管理ガイドの概要	1
1. アクション	2
1.1. 定期的なアクション	2
1.2. 動作チェーン	3
1.3. リモートコマンド	4
2. Ansibleの統合	6
2.1. 機能の概要	6
2.2. 要件と基本設定	6
2.3. インベントリの検査	7
2.4. Playbookの検出	7
2.5. Playbookの実行	7
2.6. Ansible制御ノードのセットアップ	7
2.6.1. SCAPセキュリティガイドパッケージのインストール	8
2.6.2. Ansibleインベントリファイルの作成	8
2.6.3. Ansibleノードとの通信の確立	9
2.7. コードとしてのコンプライアンス	10
2.7.1. SCAPセキュリティガイドパッケージのインストール	10
2.7.2. Ansible Playbookを使用した修復	10
3. 認証方法	12
3.1. シングルサインオン(SSO)による認証	12
3.1.1. 前提条件	12
3.1.2. SSOの有効化	13
3.1.3. SSOの実装例	14
3.2. PAMによる認証	18
4. バックアップと復元	19
4.1. SUSE Managerのバックアップ	19
4.2. smdbaによるデータベースの管理	21
4.3. smdbaによるデータベースのバックアップ	22
4.3.1. データベースの手動バックアップの実行	22
4.3.2. 自動バックアップのスケジュール	23
4.4. バックアップからの復元	23
4.5. アーカイブログ設定	24
4.6. 占有されているデータベーススペースの概要を取得する	24
4.7. データベースの移動	25
4.8. クラッシュしたルートパーティションからの回復	26

4.9. データベース接続情報.....	27
5. コンフィデンシャルコンピューティング	28
5.1. SUSE ManagerでのConfidential Computing.....	28
5.2. 要件	28
5.3. 制限事項.....	28
5.4. SUSE ManagerでのConfidential Computingの使用	28
5.4.1. レポートのステータス	32
5.5. 関連トピック.....	33
6. コンテンツのステージング	34
6.1. コンテンツステージングの有効化.....	34
6.2. コンテンツステージングの設定	34
7. チャンネル管理	36
7.1. チャンネル管理	36
7.2. チャンネルの削除	36
7.3. カスタムチャンネル	37
7.3.1. カスタムチャンネルおよびリポジトリの作成	37
7.3.2. カスタムチャンネル同期.....	41
7.3.3. カスタムチャンネルへのパッケージとパッチの追加.....	42
7.3.4. カスタムチャンネルの管理.....	43
7.4. カスタムチャンネル	43
7.4.1. カスタムチャンネルおよびリポジトリの作成	44
7.4.2. カスタムチャンネル同期.....	47
7.4.3. カスタムチャンネルへのパッケージとパッチの追加.....	49
7.4.4. カスタムチャンネルの管理.....	50
8. コンテンツライフサイクル管理	51
8.1. コンテンツライフサイクルプロジェクトの作成.....	51
8.2. フィルタタイプ	52
8.2.1. フィルタの rule パラメータ	53
8.3. フィルタテンプレート	53
8.3.1. SUSE製品に基づくライブパッチ処理.....	54
8.3.2. システムに基づくライブパッチ処理	54
8.3.3. デフォルトのAppStreamモジュール	55
8.4. コンテンツライフサイクルプロジェクトの構築.....	56
8.5. 環境のプロモート	57
8.6. 環境にクライアントを割り当てる.....	57
8.7. コンテンツライフサイクル管理の例.....	57
8.7.1. 月次パッチサイクルのプロジェクトの作成	58

8.7.2. 既存の月次パッチサイクルの更新	60
8.7.3. ライブパッチ処理でプロジェクトを強化.....	60
8.7.4. ライブパッチ処理用の新しいカーネルバージョンに切り替える.....	62
8.7.5. AppStreamフィルタ.....	62
9. 切断されたセットアップ	65
9.1. SCCからチャンネルとリポジトリを同期する	65
9.1.1. RMTの同期	65
9.1.2. SMTの同期	66
9.2. 必須チャンネル	67
9.3. 切断されたサーバ	67
9.3.1. 配備.....	68
9.3.2. 同期.....	68
10. ディスク容量管理	69
10.1. 監視対象ディレクトリ.....	69
10.2. しきい値.....	69
10.3. サービスのシャットダウン	70
10.4. スペースチェックの無効化	70
11. イメージの構築と管理	71
11.1. イメージの構築の概要.....	71
11.2. コンテナイメージ	71
11.2.1. 要件.....	72
11.2.2. 構築ホストの作成	72
11.2.3. コンテナ用アクティベーションキーの作成.....	73
11.2.4. イメージストアの作成.....	74
11.2.5. イメージプロファイルの作成	75
11.2.6. イメージの構築.....	77
11.2.7. イメージの取り込み	78
11.2.8. トラブルシューティング.....	79
11.3. OSイメージ.....	79
11.3.1. 要件.....	79
11.3.2. 構築ホストの作成	80
11.3.3. OSイメージ用アクティベーションキーの作成	82
11.3.4. イメージストアの作成.....	83
11.3.5. イメージプロファイルの作成	83
11.3.6. イメージの構築.....	86
11.3.7. トラブルシューティング.....	87
11.3.8. 制限事項	88
11.4. ビルドイメージのリスト	88

12. インフラストラクチャ保守タスク	90
12.1. サーバ	90
12.1.1. クライアントツール	91
12.2. サーバ間同期スレーブサーバ	91
12.3. モニタリングサーバ	91
12.4. プロキシ	91
13. サーバ間同期	93
13.1. サーバ間同期 - バージョン1	93
13.2. サーバ間同期 - バージョン2	94
13.2.1. ISSパッケージのインストール	95
13.2.2. コンテンツ同期	95
13.2.3. データベース接続設定	95
13.2.4. 既知の制限事項	95
14. SUSE Managerによるライブパッチ処理	96
14.1. ライブパッチ処理用のチャンネルの設定	96
14.1.1. ライブパッチ処理用のspacewalk-manage-channel-lifecycleを使用する	96
14.2. SLES 15でのライブパッチ処理	97
14.3. SLES 12でのライブパッチ処理	99
15. メンテナンスウィンドウ	101
15.1. メンテナンススケジュールタイプ	103
15.2. 制限されたアクションと制限されないアクション	104
16. mgr-syncの使用	105
17. PrometheusとGrafanaを使用したモニタリング	107
17.1. PrometheusとGrafana	107
17.1.1. Prometheus	107
17.1.2. Prometheus Exporters	108
17.1.3. Grafana	108
17.2. モニタリングサーバの設定	108
17.2.1. Prometheusのインストール	108
17.2.2. Grafanaのインストール	110
17.3. SUSE Managerのモニタリングの設定	112
17.3.1. サーバ自己監視	112
17.3.2. 管理対象システムの監視	115
17.3.3. Grafanaパスワードの変更	116
17.4. ネットワーク境界	116
17.4.1. リバースプロキシのセットアップ	117
17.5. セキュリティ	117

17.5.1. TLS証明書の生成.....	118
18. 組織	119
18.1. 組織の管理	119
18.1.1. 組織ユーザ.....	120
18.1.2. 信頼されている組織.....	120
18.1.3. 組織の設定.....	120
18.2. 状態の管理	120
18.2.1. 設定チャンネルの管理.....	120
19. パッチ管理	121
19.1. 撤回されたパッチ.....	121
19.1.1. チャンネルクローン.....	121
19.1.2. パッチの共有.....	122
20. SUSE ManagerのPTFsの使用	123
20.1. PTFパッケージについて.....	123
20.2. PTFパッケージのインストール.....	123
20.3. PTFのインストール後.....	124
20.4. パッチ適用済みバージョンのパッケージの削除.....	125
20.5. クライアント上のパッチ適用済みバージョンのパッケージを削除する	125
21. レポートの生成	126
21.1. <code>spacewalk-report</code> の使用	126
21.2. <code>spacewalk-report</code> およびレポーティングデータベース.....	127
21.3. 使用可能なレポートのリスト.....	127
22. セキュリティ	133
22.1. クライアントをマスター検証指紋に設定する	133
22.2. リポジトリメタデータの署名.....	134
22.3. ミラーソースパッケージ	135
22.4. OpenSCAPによるシステムセキュリティ.....	136
22.4.1. SCAPについて	136
22.4.2. SCAPスキャンのためのクライアントの準備.....	137
22.4.3. OpenSCAPコンテンツファイル.....	138
22.4.4. OpenSCAPプロファイルの検索.....	139
22.4.5. 監査スキャンの実行.....	139
22.4.6. スキャン結果.....	140
22.4.7. 修復	141
22.5. 監査.....	145
22.5.1. CVE監査	145
22.5.2. CVEステータス.....	146

23. SSL証明書	148
23.1. 自己署名SSL証明書	149
23.1.1. 既存のサーバ証明書の再作成	149
23.1.2. 新しいCAおよびサーバ証明書の作成	149
23.2. SSL証明書のインポート	150
23.2.1. 新しいインストール用証明書のインポート	151
23.2.2. 新しいプロキシインストール用の証明書のインポート	151
23.2.3. 証明書を置き換える	151
23.3. HTTP Strict Transport Security	152
24. サブスクリプションマッチング	154
24.1. クライアントをサブスクリプションにピン設定する	155
25. タスクスケジュール	156
25.1. 事前定義済みのタスクバッチ	157
26. 変更ログの調整	160
27. ユーザ	161
27.1. アカウントの無効化と削除	161
27.2. 管理者ロール	161
27.3. ユーザ許可とシステム	162
27.4. ユーザとチャンネルの許可	163
27.5. ユーザのデフォルト言語	163
27.5.1. ユーザデフォルトのインタフェーステーマ	163
28. トラブルシューティング	165
28.1. 自動インストールのトラブルシューティング	165
28.2. サポート終了製品のブートストラップリポジトリのトラブルシューティング	165
28.3. クライアントが複製したSaltクライアントのトラブルシューティング	166
28.4. 「ディスクがいっぱいになったコンテナ」イベントのトラブルシューティング	166
28.5. 破損したリポジトリのトラブルシューティング	167
28.6. パッケージが競合するカスタムチャンネルのトラブルシューティング	167
28.7. FQDNS grainの無効化のトラブルシューティング	168
28.8. ディスク容量のトラブルシューティング	169
28.9. ファイアウォールのトラブルシューティング	170
28.10. WAN接続を介したSUSE Managerサーバとプロキシ間の長い同期時間に関するトラブルシューティング	170
28.11. 無効なクライアントのトラブルシューティング	172
28.12. サーバ間同期のトラブルシューティング	173
28.13. ローカル発行者証明書のトラブルシューティング	174
28.14. ログインタイムアウトのトラブルシューティング	174

28.15. メール設定のトラブルシューティング	175
28.16. noexecで/tmpをマウントする場合のトラブルシューティング	175
28.17. noexecで/var/tmpをマウントする場合のトラブルシューティング	176
28.18. 十分なディスク容量がない場合のトラブルシューティング	176
28.19. 通知のトラブルシューティング	176
28.20. OESリポジトリの有効化のトラブルシューティング.....	176
28.21. パッケージの不整合のトラブルシューティング	177
28.22. grainを開始イベントに渡す場合のトラブルシューティング	177
28.23. プロキシの接続およびFQDNのトラブルシューティング.....	178
28.24. クローンクライアントの登録のトラブルシューティング	178
28.25. 削除されたクライアントの登録のトラブルシューティング	179
28.26.	
Web UIからの登録が失敗し、エラーが表示されない場合のトラブルシューティング.....	180
28.27. Red Hat CDNチャンネルと複数の証明書のトラブルシューティング	180
28.28. SUSE Managerサーバの名前変更のトラブルシューティング	181
28.29. RPC接続タイムアウトのトラブルシューティング	182
28.30. ダウンと表示されるSaltクライアントとDNS設定のトラブルシューティング.....	183
28.31. スキーマのアップグレードが失敗する場合のトラブルシューティング	184
28.32. 同期のトラブルシューティング	184
28.33. Taskomaticのトラブルシューティング.....	185
28.34. Web UIの読み込みが失敗する場合のトラブルシューティング	186

29. GNU Free Documentation License

187

管理ガイドの概要

Version: '5.0'

このドキュメントでは、SUSE Managerサーバで管理タスクを実行する方法について説明します。

Chapter 1. アクション

クライアントに対するアクションは、さまざまな方法で管理することができます。

- 自動化された定期的なアクションをスケジュールして、指定されたスケジュールでクライアントにhighstateまたは任意のカスタム状態のセットを適用できます。
- 個々のクライアント、システムグループ内のすべてのクライアント、または組織全体に定期的なアクションを適用できます。
- 動作チェーンを作成することにより、特定の順序で実行されるアクションを設定できます。
 - 動作チェーンは事前に作成および編集でき、適切な時間に実行するようにスケジュールできます。
- また、1つ以上のSaltクライアントに対してリモートコマンドを実行することもできます。
 - リモートコマンドを使用すると、個々のSaltクライアント、または検索語に一致するすべてのクライアントにコマンドを発行できます。

1.1. 定期的なアクション

個々のSaltクライアント、システムグループ、または組織内のすべてのクライアントに定期的なアクションを適用することができます。

現在、SUSE Managerは、次のアクションタイプを定期的なアクションとしてサポートしています。

- **Highstate:** highstateを実行します。
- **カスタム状態:** カスタム状態のセットを実行します。カスタム状態には、SUSE Managerによって提供される内部状態、またはユーザによって作成された設定チャンネルのいずれかを指定できます。

設定チャンネルの詳細については、**Client-configuration > Configuration-management**を参照してください。

プロシージャ: 新しい定期的なアクションを作成する

1. 個々のクライアントに定期的なアクションを適用するには、**[システム]** に移動し、クライアントをクリックしてスケジュールを設定し、**[定期的なアクション]** タブに移動します。
2. システムグループに定期的なアクションを適用するには、**システム > システムグループ**に移動し、スケジュールを設定するグループを選択して、**[定期的なアクション]** タブに移動します。
3. **[作成]** をクリックします。
4. **[動作タイプ]** ドロップダウンから動作タイプを選択します。
5. 新しいスケジュールの名前を入力します。
6. 定期的なアクションの頻度を選択します。
 - **毎時:** 各時間の分を入力します。たとえば、**15**は毎時15分にアクションを実行します。
 - **毎日:** 毎日の時間を選択します。たとえば、**01:00**は、SUSE Managerサーバのタイムゾーンで、毎日0100にアクションを実行します。

- **毎週:** 指定した時刻に毎週アクションを実行する曜日と時刻を選択します。
- **毎月:** 指定した時刻に毎月アクションを実行する日付と時刻を選択します。
- **独自のクォーツ書式:** 詳細オプションについては、独自のクォーツ文字列を入力します。たとえば、毎月毎週土曜日の0215に定期的なアクションを実行するには、次のように入力します。

```
0 15 2 ? * 7
```

7. オプション: **[テストモード]** スイッチを オンに切り替えて、テストモードでスケジュールを実行します。
8. **カスタム状態**タイプのアクションの場合は、利用可能な状態のリストから状態を選択し、btn: [変更点の保存]をクリックします。これにより、現在の状態選択のみが保存され、スケジュールは保存されません。
9. 次のペインで、選択した状態をドラッグアンドドロップして実行順序に配置し、**[確認]**をクリックします。
10. Click **[スケジュールの作成]**をクリックして保存し、既存のスケジュールの完全なリストを表示します。

組織管理者は、組織内のすべてのクライアントに定期的なアクションを設定および編集できます。**ホーム** > **組織** > **定期的なアクション**に移動して、組織全体に適用されるすべての定期的なアクションを表示します。

SUSE Manager管理者は、すべての組織のすべてのクライアントの定期的なアクションを設定および編集できます。**管理** > **組織**に移動し、管理する組織を選択して、**状態** > **定期的なアクション**タブに移動します。

1.2. 動作チェーン

クライアントに対して多数の連続動作を実行する必要がある場合は、順序を確実に反映するための動作チェーンを作成できます。

デフォルトでは、ほとんどのクライアントはコマンドが発行されるとすぐに動作を実行します。場合によっては、動作に時間がかかることがあります。これは、その後に実行された動作が失敗することを意味します。たとえば、クライアントに再起動を指示してから2番目のコマンドを発行すると、再起動がまだ行われているため、2番目の動作が失敗する可能性があります。アクションが正しい順序で実行されるようにするには、動作チェーンを使用します。



トランザクション更新システムの場合、動作チェーンは、再起動動作があるまで単一スナップショット内で実行されます。これによりいくつかの制限が発生する可能性があります。

詳細については、**Client-configuration** > **Clients-slemicro**を参照してください。

動作チェーンは、すべてのクライアントで使用できます。動作チェーンには、次の動作を任意の数、任意の順序で含めることができます。

- **システムの詳細** > **リモートコマンド**
- **システムの詳細** > **システムの再起動をスケジュール**

- システムの詳細 › 状態 › highstate
- システムの詳細 › ソフトウェア › パッケージ › 一覧表示/削除
- システムの詳細 › ソフトウェア › パッケージ › インストール
- システムの詳細 › ソフトウェア › パッケージ › アップグレード
- システムの詳細 › ソフトウェア › パッチ
- システムの詳細 › ソフトウェア › ソフトウェアチャンネル
- システムの詳細 › 設定
- イメージ › ビルド

プロシージャ: 新しい動作チェーンの作成

1. SUSE Manager Web UIで、動作チェーンで実行する最初の動作に移動します。たとえば、クライアントの **[システムの詳細]** に移動し、**[システムの再起動をスケジュール]** をクリックします。
2. **[以下に追加]** フィールドをオンにし、追加する動作チェーンを選択します。
 - これが最初の動作チェーンの場合は、**[新しい動作チェーン]** を選択します。
 - 動作チェーンがすでに存在する場合は、リストから選択します。
 - 既存の動作チェーンがすでにあるが、新しい動作チェーンを作成する場合は、作成する新しい動作チェーンの名前の入力を開始します。
3. 動作を確認します。動作はすぐには実行されず、新しい動作チェーンが作成され、これを確認する青いバーが画面の上部に表示されます。
4. **[以下に追加]** フィールドをオンにし、追加する動作チェーンの名前を選択して、動作チェーンに動作の追加を続行します。
5. 動作を追加し終わったら、**スケジュール › 動作チェーン** に移動して、リストから動作チェーンを選択します。
6. 動作をドラッグして正しい位置にドロップすることで、動作の順序を変更します。青いプラス記号をクリックして、動作が実行されるクライアントを表示します。 **[保存]** をクリックして、変更を保存します。
7. 実行する動作チェーンの時刻をスケジュールし、**[保存とスケジュール]** をクリックします。 **[保存]** または **[保存とスケジュール]** のいずれかをクリックせずにページを離れる場合、未保存の変更はすべて破棄されます。



動作チェーン内の1つの動作が失敗すると、動作チェーンが停止し、これ以上の動作は実行されません。

スケジュール › 待機中の動作 に移動して、動作チェーンからスケジュール済みの動作を確認できます。

1.3. リモートコマンド

リモートでコマンドを実行するようにクライアントを設定できます。これにより、クライアントに直接アクセスすることなく、スクリプトまたは個々のコマンドをクライアントに発行できます。

この機能はSaltクライアントで自動的に有効になるため、これ以上の設定を行う必要はありません。代わりに、このプロシージャを使用して手動で有効にすることもできます。

開始する前に、インストールされているオペレーティングシステムに適したツールの子チャンネルにクライアントがサブスクライブされていることを確認してください。 ソフトウェアチャンネルへのサブスクライブの詳細については、**Client-configuration** > **Channels**を参照してください。



- トランザクション更新システムの場合、リモートコマンドが単一スナップショット内で実行されることを考慮します。これによりいくつかの制限が発生する可能性があります。詳細については、**Client-configuration** > **Clients-slemicro**を参照してください。
- リモートコマンドはクライアントの/`tmp`/ディレクトリから実行されます。リモートコマンドが正確に機能するようにするには、`noexec`オプションを指定して/`tmp`をマウントしないでください。詳細については、**Administration** > **Troubleshooting**を参照してください。
- **[リモートコマンド]** ページから実行されるすべてのコマンドは、クライアント上でrootとして実行されます。 ワイルドカードを使用して、任意の数のシステムでコマンドを実行できます。 コマンドを発行する前に、必ず十分注意してコマンドを確認してください。

プロシージャ: Saltクライアントでリモートコマンドを実行する

1. **Salt** > **リモートコマンド**に移動します。
2. 最初のフィールドで、@記号の前に、発行するコマンドを入力します。
3. 2番目のフィールドで、@記号の後に、コマンドを発行するクライアントを入力します。 個々のクライアントの`minion-id`を入力することも、ワイルドカードを使用してクライアントの範囲をターゲットにすることもできます。
4. **[ターゲットの検索]**をクリックして、ターゲットにしたクライアントを確認し、正しい詳細情報を使用していることを確認します。
5. **[コマンドの実行]**をクリックして、ターゲットクライアントにコマンドを発行します。

Chapter 2. Ansibleの統合

現在、SUSE Linux Enterprise 15クライアントツールチャンネルでサポートされているAnsibleのバージョンは2.9 (LTS) です。 Ansible制御ノードでサポートされているOSバージョンはSUSE Linux Enterprise Server 15 SP3以降です。 Ansibleソフトウェアは、SUSE ManagerプロキシおよびSUSE Manager for Retailブランチサーバでも使用できます。 SUSE Linux Enterprise以外のオペレーティングシステムを実行する制御ノードの場合は、配布物に同梱されているAnsibleを使用します。

2.1. 機能の概要

SUSE Managerでは、システム管理者がAnsible制御ノードを操作できます。 サポートされる機能は次のとおりです。

- インベントリファイルの検査
- playbookの検出
- playbookの実行

詳細情報:

- インベントリは、管理されたAnsibleノードのソートされたリストです。 インベントリの整理の詳細については、https://docs.ansible.com/ansible/latest/inventory_guide/intro_inventory.htmlを参照してください。
- playbookは、インベントリの管理方法を説明する方法です。 playbookの詳細については、https://docs.ansible.com/ansible/latest/playbook_guide/playbooks_intro.htmlを参照してください。

2.2. 要件と基本設定

Ansible機能を使用するには、既存のAnsible制御ノードをSaltクライアントとしてSUSE Managerサーバに登録する必要があります。 Web UIの登録されているシステムの**システムの詳細**、**プロパティ**ページで、**[付属エンタイトルメント]** リストの**Ansible制御ノード**システムタイプを有効にする必要があります。

Ansible制御ノードシステムタイプを有効にすると、highstateに追加して**ansible**パッケージがシステムにインストールされ、**システムの詳細** > **Ansible** タブでAnsible機能が有効になります。

次のステップとして、**システムの詳細** > **Ansible** > **制御ノード** ページでAnsible playbookディレクトリおよびインベントリファイルへのパスを設定します。 インベントリパスとして、標準のAnsibleインベントリパス `/etc/ansible/hosts` を使用できます。 playbookディレクトリとして、playbookファイルが保存されている制御ノード上の任意のディレクトリを使用できます。 playbookディレクトリには、**.yml**ファイルが含まれているか、**.yml**ファイルを持つサブディレクトリが含まれています。

Ansible制御ノードのインストールと設定については、**Administration** > **Ansible-setup-control-node** を参照してください。

2.3. インベントリの検査

インベントリパスを定義した後、SUSE Managerを使用してその内容を検査できます。

プロシージャ: Web UIからのインベントリの検査

1. SUSE Manager Web UIで、**システムの詳細** > **Ansible** > **インベントリ**に移動します
2. インベントリパスをクリックして、制御ノードのインベントリ検査をリアルタイムで実行します。

2.4. Playbookの検出

playbookディレクトリを定義した後で、**システムの詳細** > **Ansible** > **playbook**ページでplaybookを検出できます。

インベントリの検査と同様に、playbookの検出操作は制御ノード上でリアルタイムに実行されます。

2.5. Playbookの実行

playbookの実行は、**システムの詳細** > **Ansible** > **playbook**ページからスケジュールできます。 実行するplaybookを選択した後で、**[playbookの実行のスケジュール]** ダイアログの **[インベントリパス]** ドロップダウンメニューから実行するインベントリファイルを選択できます。 項目を選択しない場合は、制御ノードで設定されているデフォルトのインベントリが使用されます。 ドロップダウンメニューには、インベントリパスで定義したインベントリと、playbookディレクトリでローカルに検出されたインベントリが表示されます。 これらは、playbookの詳細に **[カスタムインベントリ]** 項目として表示されます。 任意のインベントリパスを入力することもできます。

その後、playbookの実行時刻を選択するか、動作チェーンを選択します。 最終的に、SUSE Managerは制御ノードで動作としてplaybookを実行します。 操作の結果は、動作の詳細ページに表示されます。

2.6. Ansible制御ノードのセットアップ

Ansible制御ノードをセットアップするには、SUSE Manager Web UIから次のステップを実行します。

プロシージャ: Ansible制御ノードのセットアップ

1. SUSE Manager Web UIで、**管理** > **セットアップウィザード** > **製品**に移動し、**SUSE Linux Enterprise Server 15 SP5 x86_64**および**SUSE Manager Client Tools for SLE 15 x86_64**が選択および同期されていることを確認します。
2. SUSE Linux Enterprise 15 SP3クライアントを配備します。
3. SUSE Manager Web UIで、クライアントの**システム** > **概要**ページに移動します。 **ソフトウェア** > **ソフトウェアチャンネル**を選択し、クライアントを**SUSE Linux Enterprise Server 15 SP5 x86_64**と**SUSE Manager Client Tools for SLE 15 x86_64**チャンネルにサブスクライブします。



SUSE Managerクライアントツールには、**ansible**パッケージが含まれています。

4. クライアントの**詳細**、**プロパティ**を選択します。 [**付属エンタイトルメント**] リストで [**Ansible制御ノード**] を有効にして、[**プロパティの更新**]をクリックします。
5. クライアントの概要ページに移動し、**状態**、**highstate**を選択して、[**highstateの適用**]をクリックします。
6. **イベント**タブを選択して、highstateの状態を確認します。

2.6.1. SCAPセキュリティガイドパッケージのインストール

修復を実行するには、Ansible制御ノードにSCAPセキュリティガイドパッケージをインストールする必要があります。

プロシージャ: SCAPセキュリティガイドパッケージのインストール

1. **システム**、**概要**から、クライアントを選択します。次に、**ソフトウェア**、**パッケージ**、**インストール**をクリックします。
2. **scap-security-guide**を検索し、ご使用のシステムに適したパッケージをインストールします。パッケージ配布の要件については、次の表を参照してください。

表 1. SCAPセキュリティガイドパッケージの要件

パッケージ名	サポートされているシステム
scap-security-guide	openSUSE、SLES12、SLES15
scap-security-guide-redhat	CentOS 7、CentOS 8、Fedora、Oracle Linux 7、Oracle Linux 8、RHEL7、RHEL8、RHEL9、Red Hat OpenStack Platform 10、Red Hat OpenStack Platform 13、Red Hat Virtualization 4、Scientific Linux
scap-security-guide-debian	Debian 11、Debian 12
scap-security-guide-ubuntu	Ubuntu 20.04、Ubuntu 22.04

2.6.2. Ansibleインベントリファイルの作成

Ansible統合ツールは、playbookをインベントリファイルとして配備します。_Table 1_に一覧表示されている個々のオペレーティングシステムごとに1つのインベントリファイルを作成します。

プロシージャ: Ansibleインベントリファイルの作成

1. Ansibleが管理するインベントリファイルにホストを作成して追加します。 Ansibleインベントリのデフォルトパスは、`/etc/ansible/hosts`です。

リスト 1. インベントリの例

```
client240.mgr.example.org
client241.mgr.example.org
client242.mgr.example.org
client243.mgr.example.org ansible_ssh_private_key_file=/etc/ansible/some_ssh_key

[mygroup1]
client241.mgr.example.org
client242.mgr.example.org

[mygroup2]
client243.mgr.example.org

[all:vars]
ansible_ssh_private_key_file=/etc/ansible/my_ansible_private_key
```

2. SUSE Manager Web UIで、 [Ansible] タブから**Ansible** > **制御ノード**に移動して、制御ノードにインベントリファイルを追加します。
3. [**playbookディレクトリ**] セクションで、 [**Add a Playbook Directories**] (playbookディレクトリの追加) フィールドに `/usr/share/scap-security-guide/ansible` を追加し、 [**保存**] をクリックします。
4. [**インベントリファイル**] の下の [**インベントリファイルの追加**] フィールドにインベントリファイルの場所を追加し、 [**保存**] をクリックします。

リスト 2. 例

```
/etc/ansible/sles15
/etc/ansible/sles12
/etc/ansible/centos7
```

その他のplaybookの例については、 <https://github.com/ansible/ansible-examples> を参照してください。

2.6.3. Ansibleノードとの通信の確立

プロシージャ: Ansibleノードとの通信の確立

1. インベントリで使用しているSSHキーを作成します。

```
ssh-keygen -f /etc/ansible/my_ansible_private_key
```

2. 生成されたSSHキーをAnsible管理対象クライアントにコピーします。 例:

```
ssh-copy-id -i /etc/ansible/my_ansible_private_key root@client240.mgr.example.org
```

3. 次のように `/etc/ansible/ansible.cfg` で機密鍵を宣言します。

```
private_key_file = /etc/ansible/my_ansible_private_key
```

`my_ansible_private_key` を、機密鍵を含むファイルの名前に置き換えます。

4. 制御ノードから次のコマンドを実行して、Ansibleが動作していることをテストします。

```
ansible all -m ping
ansible mygroup1 -m ping
ansible client240.mgr.example.org -m ping
```

これで修復を実行できます。詳細については、[ansible-compliance-as-code.pdf](#)を参照してください。

2.7. コードとしてのコンプライアンス

このドキュメントでは、Ansible playbookを使用して、コード修復としてコンプライアンスを実行する方法について説明します。

bashスクリプトを使用してコード修復としてコンプライアンスを実行する方法の詳細については、[修復](#)を参照してください。

2.7.1. SCAPセキュリティガイドパッケージのインストール

修復を実行するには、Ansible制御ノードにSCAPセキュリティガイドパッケージをインストールする必要があります。

プロシージャ: SCAPセキュリティガイドパッケージのインストール

1. **システム** > **概要** から、クライアントを選択します。次に、**ソフトウェア** > **パッケージ** > **インストール** をクリックします。
2. **scap-security-guide** を検索し、ご使用のシステムに適したパッケージをインストールします。パッケージ配布の要件については、次の表を参照してください。

表 2. SCAPセキュリティガイドパッケージの要件

パッケージ名	サポートされているシステム
scap-security-guide	openSUSE、SLES12、SLES15
scap-security-guide-redhat	CentOS 7、CentOS 8、Fedora、Oracle Linux 7、Oracle Linux 8、RHEL7、RHEL8、RHEL9、Red Hat OpenStack Platform 10、Red Hat OpenStack Platform 13、Red Hat Virtualization 4、Scientific Linux
scap-security-guide-debian	Debian 11、Debian 12
scap-security-guide-ubuntu	Ubuntu 20.04、Ubuntu 22.04

2.7.2. Ansible Playbookを使用した修復

Ansible制御ノードが必要です。詳細については、**Administration** > **Ansible-setup-control-node** を参照してください。

次のプロシージャでは、Ansible playbookを使用して修復を実行する方法について説明します。

プロシージャ: Ansible Playbookを使用して修復を実行する

1. 制御ノードのシステムメニューから、**Ansible** > **playbook**を選択します。フォルダタブを展開し、playbookを選択します。
2. playbookをクリックします。
3. playbookを実行するには、クライアントのOS **インベントリパス**を選択します。例:

```
/etc/ansible/sles15
```

4. [**Schedule**] をクリックします。
5. [**イベント**] タブで、スケジュールされたイベントのステータスを確認します。

Chapter 3. 認証方法

SUSE Managerは、いくつかの異なる認証方法をサポートしています。このセクションでは、pluggable authentication modules (PAM)およびシングルサインオン(SSO)について説明します。

3.1. シングルサインオン(SSO)による認証

SUSE Managerは、Security Assertion Markup Language (SAML) 2プロトコルを実装することで、シングルサインオン(SSO)をサポートしています。

シングルサインオンは、ユーザが1組の資格情報を使用して複数のアプリケーションにアクセスできるようにする認証プロセスです。SAMLは、認証および許可データを交換するためのXMLベースの規格です。SAML IDサービスプロバイダ(IdP)は、SUSE Managerなどのサービスプロバイダ(SP)に認証および許可サービスを提供します。SUSE Managerは、シングルサインオンを有効にする必要がある3つのエンドポイントを公開します。

SUSE ManagerのSSOは以下をサポートします。

- SSOを使用したログイン。
- サービスプロバイダが開始したシングルログアウト(SLO)、およびIDサービスプロバイダのシングルログアウトサービス(SLS)を使用してログアウトする。
- アサーションとnamelDの暗号化。
- アサーションの署名。
- AuthNRequest、LogoutRequest、およびLogoutResponderによるメッセージ署名。
- アサーションコンシューマサービスエンドポイントの有効化。
- シングル ログアウト サービス エンドポイントの有効化。
- SPメタデータ(署名可能)の発行。

SUSE ManagerのSSOは以下をサポートしません。

- IDサービスプロバイダ(IdP)の製品の選択と実装。
- 他の製品のSAMLサポート(各製品のドキュメントで確認してください)。

SSOの実装例については、**Administration > Auth-methods-sso-example**を参照してください。



デフォルトの認証方法からシングルサインオンに変更する場合、新しいSSO資格情報はWeb UIにのみ適用されます。mgr-syncやspacecmdなどのクライアントツールは、引き続きデフォルトの認証方式でのみ動作します。

3.1.1. 前提条件

開始する前に、これらのパラメータを使用して外部IDサービスプロバイダを設定しておく必要があります。手順については、IdPのドキュメントを確認してください。



IdPユーザとSUSE ManagerユーザのマッピングはSAML:Attributeで指定します。SAML:AttributeはIdPで指定し、SAML認証時にSUSE Managerに渡す必要があります。この属性にはuidという名前を付け、ログイン後にマップされたSUSE Managerユーザを含める必要があります。シングルサインオンを有効にする前に、SUSE Managerが作成されている必要があります。

以下のエンドポイントが必要です。

- アサーションコンシューマサービス(ACS): SAMLメッセージを受け入れてサービスプロバイダへのセッションを確立するエンドポイント。SUSE ManagerのACSのエンドポイントは<https://server.example.com/rhn/manager/sso/acs>です
- シングルログアウトサービス(SLS): IdPからログアウト要求を開始するエンドポイント。SUSE ManagerのSLSのエンドポイントは<https://server.example.com/rhn/manager/sso/sls>です
- メタデータ: SAMLのSUSE Managerメタデータを取得するエンドポイント。SUSE Managerのメタデータのエンドポイントは<https://server.example.com/rhn/manager/sso/metadata>です

ユーザorgadminを使用したIdPによる認証が成功した後で、orgadminユーザがSUSE Managerに存在する場合は、orgadminユーザとしてSUSE Managerにログインします。

3.1.2. SSOの有効化



SSOの使用は、他のタイプの認証と相互に排他的であり、有効か無効のいずれかです。SSOはデフォルトで無効になっています。



サーバコンテナで手順を実行する前に、`mgrctl term`を使用します。

プロシージャ: SSOの有効化

1. ユーザがまだSUSE Managerに存在しない場合は、まず作成してください。
2. `/etc/rhn/rhn.conf`を編集して、次の行をファイルの最後に追加します。

```
java.sso = true
```

3. `/usr/share/rhn/config-defaults/rhn_java_sso.conf`で、カスタマイズするパラメータを見つけます。カスタマイズするパラメータを`/etc/rhn/rhn.conf`に挿入し、それらのパラメータの前に`java.sso`を付けます。たとえば、`/usr/share/rhn/config-defaults/rhn_java_sso.conf`で以下を見つけます。

```
onelogin.saml2.sp.assertion_consumer_service.url = https://YOUR-PRODUCT-HOSTNAME-OR-IP/rhn/manager/sso/acs
```

カスタマイズするには、オプション名の前に`java.sso.`を付けて、対応するオプションを`/etc/rhn/rhn.conf`に作成します。

```
java.sso.onelogin.saml2.sp.assertion_consumer_service.url = https://YOUR-PRODUCT-
HOSTNAME-OR-IP/rhn/manager/sso/acs
```

変更する必要があるすべての出現を見つけるには、プレースホルダ `YOUR-PRODUCT` および `YOUR-IDP-ENTITY` をファイル内で検索します。すべてのパラメータには、その意味についての簡単な説明が含まれていません。

4. spacewalkサービスを再起動して変更を取得します。

```
mgradm restart
```

SUSE ManagerのURLにアクセスすると、認証を要求されたSSO用IdPにリダイレクトされます。認証に成功すると、SUSE Manager Web UIにリダイレクトされ、認証されたユーザとしてログインします。SSOを使用したログインで問題が発生した場合は、SUSE Managerのログで詳細情報を確認してください。

3.1.3. SSOの実装例

この例では、3つのエンドポイントをSUSE Managerで公開し、Keycloak 21.0.1以降をIDサービスプロバイダ(IdP)として使用することによってSSOが実装されています。

まずKeycloak IdPをインストールしてから、SUSE Managerサーバを設定します。次に、エンドポイントをKeycloakクライアントとして追加し、ユーザを作成できます。



この例は、説明のみを目的としています。SUSEは、サードパーティのIDサービスプロバイダを推奨またはサポートしておらず、Keycloakとは提携していません。Keycloakのサポートについては、<https://www.keycloak.org/>を参照してください。

Keycloakは、マシンに直接インストールすることも、コンテナ内で実行することもできます。この例では、PodmanコンテナでKeycloakを実行します。Keycloakのインストールの詳細については、<https://www.keycloak.org/guides#getting-started>にあるKeycloakのドキュメントを参照してください。

プロシージャ: IDサービスプロバイダの設定

1. Keycloakのドキュメントに従って、PodmanコンテナにKeycloakをインストールします。
2. `-td`引数を使用してコンテナを実行し、プロセスが実行されたままになっていることを確認します。

```
podman run -td --name keycloak -p 8080:8080 -e KEYCLOAK_USER=admin -e
KEYCLOAK_PASSWORD=admin quay.io/keycloak/keycloak:21.0.1
```

3. Keycloak Web UIに `admin` ユーザとしてサインインし、次の詳細情報を使用して認証レームを作成します。
 - [名前] フィールドに、レームの名前を入力します。たとえば、`SUMA`。
 - [エンドポイント] フィールドで、[SAML 2.0 Identity Provider Metadata] リンクをクリックします。これにより、SUSE Manager設定ファイルにコピーするエンドポイントと証明書が表示されるページに移動します。

Keycloakをインストールしてレルムを作成したら、SUSE Managerサーバを準備できます。

プロシージャ: SUSE Managerサーバの設定

1. SUSE Managerサーバで、`/etc/rhn/rhn.conf`設定ファイルを開き、これらのパラメータを編集します。
<FQDN_SUMA>をSUSE Managerのインストールの完全修飾ドメイン名に置き換えます。

```
java.sso.onelogin.saml2.sp.entityid =
https://<FQDN_SUMA>/rhn/manager/sso/metadata
java.sso.onelogin.saml2.sp.assertion_consumer_service.url =
https://<FQDN_SUMA>/rhn/manager/sso/acs
java.sso.onelogin.saml2.sp.single_logout_service.url =
https://<FQDN_SUMA>/rhn/manager/sso/sls
```

2. 設定ファイルで、<FQDN>をKeycloakサーバの完全修飾ドメイン名に置き換えます。 <REALM>を認証レルムに置き換えます。たとえばSUMA。

```
java.sso.onelogin.saml2.idp.entityid = http://<FQDN_IDP>:8080/realms/<REALM>
java.sso.onelogin.saml2.idp.single_sign_on_service.url =
http://<FQDN_IDP>:8080/realms/<REALM>/protocol/saml
java.sso.onelogin.saml2.idp.single_logout_service.url =
http://<FQDN_IDP>:8080/realms/<REALM>/protocol/saml
```

3. IdPメタデータで、パブリックx509証明書を探します。 これには `http://<FQDN_IDP>:8080/realms/<REALM>/protocol/saml/descriptor`の形式が使用されます。 設定ファイルで、IdPのパブリックx509証明書を指定します。

```
java.sso.onelogin.saml2.idp.x509cert = -----BEGIN CERTIFICATE----- <CERTIFICATE> -----END CERTIFICATE-----
```

以下は、SSOを有効にした後のSUSE Managerの`rhn.conf`の例です。

```
java.sso = true

# This is the configuration file for Single Sign-On (SSO) via SAMLv2 protocol
# To enable SSO, set java.sso = true in /etc/rhn/rhn.conf
#
# Mandatory changes: search this file for:
# - YOUR-PRODUCT
# - YOUR-IDP-ENTITY
#
# See product documentation and the comments inline in this file for more
# information about every parameter.
#
#
#
# If 'strict' is True, then the Java Toolkit will reject unsigned
# or unencrypted messages if it expects them signed or encrypted
# Also will reject the messages if not strictly follow the SAML
#
# WARNING: In production, this parameter setting parameter MUST be set as "true".
# Otherwise your environment is not secure and will be exposed to attacks.
# Enable debug mode (to print errors)
# Identifier of the SP entity (must be a URI)
java.sso.onelogin.saml2.sp.entityid =
```

```

https://sumaserver.example.org/rhn/manager/sso/metadata

# Specifies info about where and how the <AuthnResponse> message MUST be
# returned to the requester, in this case our SP.
# URL Location where the <Response> from the IdP will be returned
java.sso.onelogin.saml2.sp.assertion_consumer_service.url =
https://sumaserver.example.org/rhn/manager/sso/acs

# Specifies info about where and how the <Logout Response> message MUST be
# returned to the requester, in this case our SP.
java.sso.onelogin.saml2.sp.single_logout_service.url =
https://sumaserver.example.org/rhn/manager/sso/sls

# Identifier of the IdP entity (must be a URI)
java.sso.onelogin.saml2.idp.entityid = http://idp.example.org:8080/realms/SUMA

# SSO endpoint info of the IdP. (Authentication Request protocol)
# URL Target of the IdP where the SP will send the Authentication Request Message
java.sso.onelogin.saml2.idp.single_sign_on_service.url =
http://idp.example.org:8080/realms/SUMA/protocol/saml

# SLO endpoint info of the IdP.
# URL Location of the IdP where the SP will send the SLO Request
java.sso.onelogin.saml2.idp.single_logout_service.url =
http://idp.example.org:8080/realms/SUMA/protocol/saml

# Public x509 certificate of the IdP
java.sso.onelogin.saml2.idp.x509cert = -----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIClzCCAX8CBgGC+tPbVjANBgkqhkiG9w0BAQsFADAPMQ0wCwYDVQQDDARTVU1BMB4XDThyMD
kwMTIwNTEwNFoXDTMyMDkwMTIwNTE0NFowDzENMA5G
A1UEAwwEU1VNQTCCASlWdQYJKoZIhvcNAQEBBQADggEPADCCAQoCggEBAMNSWJAaIB5mShT
kMBO5mrsOosyheEL8/A37WvuqDPwwEfm4x0cG7gmMHvONxYXZk+LRyzoQl2sBrNFrbMuu5dna
h5ZSMxQyUu697S280m4vliegGaFdbgH+g4FGBu
eSis1ssMzTcES+NUu17pLkMLNmSQtnCESnoL9q2SyeQSwYtr5dz1ydl6lZjwtaWeyQ9EGJNtJtLk3U4
+arLPCpHAWqFANLO9NeYcRDNUKhNBs1v5mHP+L066PZu1/DkE0mSgy/+qXaS0CgZVKqz8qB+bv
HVuAq9W60g1CjqZKbwvPu72p/7+d8z
9DXPIZ1uxdq19q/kLEP2TYLtgQobSHECAwEAATANBgkqhkiG9w0BAQsFAAOCAQEAg+raLMJD
o/P/yN1Z6SGGocK227WFqovBiE/mLYlp5Ff0+0jS1US1pISppJ94xOr8j0m7HW0Wu5xCz6oOhzXTet
nflbeRyr1Rms3BWdxyXgQ9bWUeZMWZ
HfDkTbhgRRmjDEwSSfEXRKQNvw41CpnlB3610++ejgGnjDvH7BbkCaoW55JF5j6DT/WYR0n7MkEI2
Ova9CH0e9X7Gny8iOAg26oziy06uy3P/lx9Z9RmHnvpvN/Q34SGEq9z/HlQVuP12UPj//iT21Jc17OO
ZFsZQXIGFTG6bXKmO42W8FdUDJU
ONoXZgjMb3eC7U691YyeowoqTY7mJKxNPprYY/LL0w== -----END CERTIFICATE-----

# Organization
java.sso.onelogin.saml2.organization.name = SUSE Manager admin
java.sso.onelogin.saml2.organization.displayname = SUSE Manager admin
java.sso.onelogin.saml2.organization.url = https://sumaserver.example.org
java.sso.onelogin.saml2.organization.lang =

# Contacts
java.sso.onelogin.saml2.contacts.technical.given_name = SUSE Manager admin
java.sso.onelogin.saml2.contacts.technical.email_address = suma@example.org
java.sso.onelogin.saml2.contacts.support.given_name = SUSE Manager admin
java.sso.onelogin.saml2.contacts.support.email_address = suma@example.org

```

SUSE Manager エンドポイントをKeycloakに追加できます。 Keycloakはエンドポイントをクライアントと呼びます。

プロシージャ: エンドポイントをクライアントとして追加する

1. Keycloak Web UIで、これらの詳細を使用して新しいクライアントを作成します。
 - `[Client type]` (クライアントタイプ) フィールドで、`[SAML]` を選択します。
 - `[クライアントID]` フィールドに、サーバ設定ファイルで指定されているエンドポイントを `java.sso.onelogin.saml2.idp.entityid` として入力します。 たとえ

ば、https://<FQDN_SUMA>/rhn/manager/sso/metadata。

2. [設定] タブで、これらの詳細を使用してクライアントを微調整します。
 - [Sign assertions] (アサーションに署名する) を [オン] に切り替えます。
 - [Signature algorithm] (署名アルゴリズム) フィールドで、 [RSA_SHA1] を選択します。
 - [SAML Signature Key Name] (SAML署名キー名) フィールドで、 [Key ID] (キーID) を選択します。
3. [キー] タブで次の操作を行います。
 - [Client signature required] (クライアントの署名が必要) を [オフ] に設定します。
4. [Advanced] (詳細) タブの [Fine Grain SAML Endpoint Configuration] セクションで、これらの詳細を使用して2つのエンドポイントを追加します。
 - [Assertion Consumer Service] (アサーションコンシューマサービス) フィールドの両方にサーバ設定ファイルで指定されているエンドポイント
を `java.sso.onelogin.saml2.sp.assertion_consumer_service.url` として入力します。 たとえば、https://<FQDN_SUMA>/rhn/manager/sso/acs。
 - [Logout Service] (ログアウトサービス) フィールドの両方に、サーバ設定ファイルで指定されているエンドポイントを `java.sso.onelogin.saml2.sp.single_logout_service.url` として入力します。 たとえば、https://<FQDN_SUMA>/rhn/manager/sso/sls。

エンドポイントをクライアントとして追加したら、クライアントスコープを設定し、KeycloakとSUSE Managerの間でユーザをマッピングできます。

プロシージャ: クライアントスコープとマッパーを設定する

1. Keycloak Web UIで、**クライアント** > **Client scopes** (クライアントスコープ) タブに移動し、デフォルトのクライアントスコープとして `role_list` を割り当てます。
2. **Client scopes** > **Mappers** (マッパー) タブに移動して、ユーザ属性 `uid` のマッパーをデフォルトの値を使用して追加します。このSAML属性はSUSE Managerによって想定されています。
3. **Client scopes** > **Mappers** (マッパー) に移動し、 [`role_list`] マッパーをクリックします。 [`Single Role Attribute`] (単一役割属性) を [オン] に設定します。
4. **ユーザ** > **管理** セクションに移動し、管理ユーザを作成します。このユーザは、SUSE Manager管理ユーザに一致する必要はありません。
5. **ユーザ** > **Role mappings** (ロールマッピング) タブに移動して、SUSE Manager管理ユーザのユーザ名に一致する値を持つ `uid` 属性を追加します。
6. **ユーザ** > **資格情報** タブに移動して、SUSE Manager管理ユーザによって使用されるのと同じパスワードを設定します。 .変更を保存します。

設定が完了したら、インストールが期待どおりに動作していることをテストできます。 SUSE Managerサーバを再起動して変更を取得し、SUSE Manager Web UIに移動します。インストールが正常に動作している場合は、Keycloak SSOページにリダイレクトされ、ここでは正常に認証できます。

3.2. PAMによる認証

SUSE Managerは、SSSDを用いることで、pluggable authentication modules (PAM)を使用したネットワークベースの認証システムをサポートしています。PAM は、SUSE Managerを集中認証メカニズムと統合できるようにする一連のライブラリであり、複数のパスワードを覚える必要がなくなります。SUSE Managerは、LDAP、Kerberos、およびその他のネットワークベースの認証をサポートしています。



ユーザ名では、英数字に加えて、`-`、`_`、`.`、`@`が許可されています。

プロシージャ: SSSDの設定

1. SUSE Manager Web UIで、**ユーザ** > **ユーザの作成**に移動し、新しいユーザまたは既存のユーザがPAMで認証されるようにします。
2. **[Pluggable Authentication Modules (PAM)]** チェックボックスをオンにします。パスワードとパスワードの確認フィールドの下にあります。
3. コンテナ内でSSSDを設定します。次のコマンドを使用してコンテナ内で接続します。

```
mgrctl term
```

次にファイルを変更します

```
/etc/sss/sss.conf
```

4. SUSE Managerを再起動します。

```
mgradm restart
```



SUSE Manager Web UIのパスワードを変更すると、SUSE Managerサーバのローカルパスワードのみが変更されます。PAMがそのユーザに対して有効になっている場合、ローカルパスワードはまったく使用されない可能性があります。たとえば、先に記載した例では、Kerberosパスワードは変更されません。ネットワークサービスのパスワード変更メカニズムを使用して、これらのユーザのパスワードを変更します。

PAMの設定の詳細については、SUSE Linux Enterprise Serverセキュリティガイドに、他のネットワークベースの認証方法でも機能する一般的な例が含まれています。また、Active Directoryサービスを設定する方法についても説明します。詳細については、<https://documentation.suse.com/sles/15-SP4/html/SLES-all/part-auth.html>を参照してください。

Chapter 4. バックアップと復元

SUSE Managerのインストールを定期的にバックアップして、データの損失を防ぎます。SUSE Managerは、インストールされているプログラムと設定だけでなくデータベースにも依存しているため、インストールのすべてのコンポーネントをバックアップすることが重要です。この章には、バックアップする必要があるファイルに関する情報が含まれており、データベースバックアップを管理するためのsmdbaツールについて説明しています。また、システム障害が発生した場合のバックアップからの復元に関する情報も含まれています。



使用するバックアップ方法にかかわらず、現在のインストールで使用している容量の3倍以上の空き容量が必要です。容量が不足するとバックアップが失敗する可能性があるため、頻繁に確認してください。

4.1. SUSE Managerのバックアップ

SUSE Managerのインストールをバックアップする最も包括的な方法は、関連するファイルとディレクトリをバックアップすることです。これにより、バックアップの管理にかかる時間を節約でき、障害発生時に再インストールと再同期をより速く実行できます。ただし、この方法ではディスク領域がかなり必要になるため、バックアップの実行に時間がかかることがあります。



必要なファイルとディレクトリのみをバックアップする場合は、次のリストを使用します。このプロセスをよりシンプルで包括的なものにするには、ここで指定したディレクトリだけでなく/etcと/rootディレクトリ全体をバックアップすることをお勧めします。一部のファイルは、関連するSUSE Manager機能を実際に使用している場合にのみ存在します。

- /etc/cobbler/
- /etc/dhcp.conf
- /etc/fstabおよび必要なISOマウントポイント。

UUIDが変更されている場合は、それに応じて、fstabエントリを更新していることを確認します。

- /etc/rhn/
- /etc/salt
- /etc/sudoers
- /etc/sysconfig/rhn/
- /root/.gnupg/
- /root/.ssh

このファイルはSSHトンネルまたはSSH pushを使用している場合に存在します。またid-susemanagerキーのコピーを保存しておく必要があります。

- /root/ssl-build/

- /srv/formula_metadata
- /srv/pillar
- /srv/salt
- /srv/susemanager
- /srv/tftpboot/
- /srv/www/cobbler
- /srv/www/htdocs/pub/
- /srv/www/os-images
- /var/cache/rhn
- /var/cache/salt
- /var/lib/cobbler/
- /var/lib/cobbler/templates/ (バージョン4.0より前は/var/lib/rhn/kickstarts/です)
- /var/lib/Kiwi
- /var/lib/rhn/
- /var/run/pgsql/
- /var/lib/salt/
- /var/run/salt/
- /var/spacewalk/
- スクリプト、KickstartまたはAutoYaSTプロファイル、カスタムRPMなどのカスタムデータを含むディレクトリ。



データベースをバックアップする必要もあります。バックアップはsmdbaツールで実行できます。

プロシージャ: 手動バックアップからの復元

1. `mgradm install podman`を使用してSUSE Managerサーバを再導入します。
2. SUSE Manager Web UIを使用するか、コマンドプロンプトで`mgr-sync`ツールを使用して、SUSE Managerリポジトリを再同期します。製品を再登録するか、登録およびSSL証明書生成セクションをスキップするかを選択できます。
3. `/var/lib/containers/storage/volumes/root/ssl-build/rhn-org-httpd-ssl-key-pair-MACHINE_NAME-VER-REL.noarch.rpm`パッケージを再インストールします。
4. 次回`rhn-search`サービスを開始するときに検索インデックスの再作成をスケジュールします。このコマンドはデバッグメッセージのみを生成し、エラーメッセージは生成しません。

```
rhn-search cleanindex
```

5. `/var/lib/containers/storage/volumes/var-spacewalk/_data/packages/`を復元する必要があるかどうかを確認します。`/var/lib/containers/storage/volumes/var-spacewalk/_data/packages/`がバックアップ

になかった場合は、復元する必要があります。ソースリポジトリが使用できる場合は、完全なチャンネル同期を使用して `/var/lib/containers/storage/volumes/var-spacewalk/_data/packages/` を復元できます。

```
mgr-sync refresh --refresh-channels
```

4.2. smdbaによるデータベースの管理

ローカルPostgreSQLデータベースを管理するには、`smdba`ツールを使用します。データベースのバックアップと復元、およびバックアップの管理を行うことができます。また、データベースのステータスを確認したり、再起動などの管理タスクを実行したりするために使用できます。`smdba`ツールの詳細については、[\[reference:cli-smdba\]](#)を参照してください。

`smdba`ツールは、ローカルPostgreSQLデータベースでのみ動作し、リモートアクセスされたデータベースやOracleデータベースでは動作しません。



サーバコンテナ内でシェルにアクセスするには、コンテナホストで `mgrctl term` を実行します。そこから、CLIツールを通常どおりに実行できます。



`smdba`ツールにはシステムの変更を実行するために `sudo` アクセスが必要です。開始する前に次の行の `/etc/sudoers` ファイルをチェックして、`admin` ユーザに対して `sudo` アクセスを有効にしていることを確認してください。

```
admin ALL=(postgres) /usr/bin/smdba
```

次のコマンドを使用して、データベースのランタイムステータスを確認します。

```
smdba db-status
```

このコマンドは、次のように、`online` または `offline` を返します。

```
Checking database core...  online
```

データベースの起動と停止は次のコマンドを使用して実行できます。

```
smdba db-start
```

および

```
smdba db-stop
```

4.3. smdbaによるデータベースのバックアップ

`smdba`ツールは継続的なアーカイブバックアップを実行します。このバックアップ方法では、現在のセッション中にデータベースに行われたすべての変更のログと、一連の従来のバックアップファイルが結合されます。クラッシュが発生した場合は、最初にディスク上の最新のバックアップファイルからデータベースの状態が復元され、次に現在のセッションのログが正確に再生されて、データベースが現在の状態に戻されます。データベースを実行している状態で`smdba`を使用した継続的なアーカイブバックアップが実行されるため、ダウンタイムは必要ありません。

このバックアップ方法は安定していて、通常は整合性のあるスナップショットを作成しますが、多くのストレージ容量を占有する可能性があります。バックアップに使用できる現在のデータベースサイズの3倍以上の容量があることを確認します。`/var/lib/pgsql/`に移動し、`df -h`を実行することで、現在のデータベースサイズを確認できます。

また、`smdba`ツールは、アーカイブを管理し、最新のバックアップと、ログの現在のアーカイブのみを保持します。ログファイルの最大ファイルサイズはわずか16MBであるため、ファイルがこのサイズに達すると新しいログファイルが作成されます。新しいバックアップを作成するたびに、以前のバックアップがパーズされてディスク領域が解放されます。`cron`を使用して`smdba`のバックアップをスケジュールし、ストレージが効果的に管理されるようにして、障害が発生した場合に備えて常にバックアップを準備しておくことをお勧めします。

4.3.1. データベースの手動バックアップの実行

`smdba`ツールはコマンドラインから直接実行できます。インストール直後、または設定に重大な変更を加えた場合は、データベースの手動バックアップを実行することをお勧めします。



`smdba`が初めて実行される場合、またはバックアップの場所を変更した場合は、アーカイブを実行する前にデータベースを再起動する必要があります。この結果、わずかなダウンタイムが発生します。通常のデータベースバックアップでは、ダウンタイムは必要ありません。

プロシージャ: データベースの手動バックアップの実行

1. バックアップ用の永続的なストレージ容量を割り当てます。この例では、`/var/spacewalk/`にあるディレクトリを使用しています。これはバックアップの永続的なターゲットになるため、常にサーバからアクセスできるようにしてください。
2. バックアップの場所で、バックアップのディレクトリを作成します。

rootとして:

```
install -d -o postgres -g postgres -m 700 /var/spacewalk/db-backup
```

3. バックアップの場所に適切な許可が設定されていることを確認します。

```
chown postgres:postgres /var/spacewalk/db-backup
```

- 最初に、バックアップを作成するには、`enable`オプションセットを指定して、`smdba backup-hot`コマンドを実行します。 これにより、指定されたディレクトリにバックアップが作成されます。必要に応じて、データベースを再起動します。

```
smdba backup-hot --enable=on --backup-dir=/var/spacewalk/db-backup
```

このコマンドはデバッグメッセージを生成し、次の出力で正常に終了します。

```
INFO: Finished
```

- バックアップファイルが`/var/spacewalk/db-backup`ディレクトリに存在することを確認し、バックアップが成功したことを確認してください。

4.3.2. 自動バックアップのスケジュール

`smdba`を使用してデータベースバックアップを実行するためにシステムをシャットダウンする必要はありません。ただし、大規模な操作であるため、バックアップの実行中にデータベースのパフォーマンスが低下する可能性があります。中断を最小限に抑えるために、定期的なデータベースバックアップを低トラフィック期間にスケジュールすることをお勧めします。



バックアップに使用できる現在のデータベースサイズの3倍以上の容量があることを確認します。 `/var/lib/pgsql/`に移動し、`df -h`を実行することで、現在のデータベースサイズを確認できます。

プロシージャ: 自動バックアップのスケジュール

- バックアップのディレクトリを作成し、適切な許可を(`root`として)設定します。

```
install -d -m 700 -o postgres -g postgres /var/spacewalk/db-backup
```

- `/etc/cron.d/db-backup-mgr`を開くか、存在しない場合は作成し、次の行を追加して、cronジョブを作成します。

```
0 2 * * * root /usr/bin/smdba backup-hot --enable=on --backup-dir=/var/spacewalk/db-backup
```

- バックアップディレクトリを定期的に確認し、バックアップが期待どおりに機能していることを確認します。

4.4. バックアップからの復元

`smdba`ツールを使用すると、障害が発生した場合にはバックアップから復元できます。

プロシージャ: バックアップから復元する

- データベースをシャットダウンします。

```
smdba db-stop
```

2. 復元プロセスを開始して、完了するまで待機します。

```
smdba backup-restore start
```

3. データベースを再起動します。

```
smdba db-start
```

4. RPMとデータベース間に違いがあるかどうかを確認します。

```
spacewalk-data-fsck
```

4.5. アーカイブログ設定

アーカイブログを使用すると、データベース管理ツール `smdba` でホットバックアップを実行できます。SUSE Managerに埋め込みデータベースがある場合、デフォルトでアーカイブログは有効になっています。

PostgreSQLは限られた数のアーカイブ ログを維持します。デフォルト設定を使用すると、サイズが16MiBの約64個のファイルが保存されます。

ユーザを作成し、チャンネルを同期します。

- SLES12-SP2-Pool-x86_64
- SLES12-SP2-Updates-x86_64
- SLE-Manager-Tools12-Pool-x86_64-SP2
- SLE-Manager-Tools12-Updates-x86_64-SP2

PostgreSQLは、追加で約1GBのデータを生成します。したがって、バックアップ戦略について考え、定期的にバックアップを作成することが重要です。

アーカイブログは `/var/lib/pgsql/data/pg_xlog/` (postgresql) に保存されます。

4.6. 占有されているデータベーススペースの概要を取得する

データベース管理者は、サブコマンド `space-overview` を使用して、占有されていたテーブルスペースに関するレポートを取得します。例:

```
smdba space-overview
```

出力:


```
SUSE Manager Database Control. Version 1.5.2
Copyright (c) 2012 by SUSE Linux Products GmbH
```

```
Tablespace | Size (Mb) | Avail (Mb) | Use %
-----+-----+-----+-----
postgres | 7 | 49168 | 0.013
susemanager | 776 | 48399 | 1.602
```

`smdba` コマンドは PostgreSQL で使用できます。より詳細なレポートの場合は、`space-tables` サブコマンドを使用します。テーブルとそのサイズの一覧が作成されます。例:

```
smdba space-tables
```

出力:

```
SUSE Manager Database Control. Version 1.5.2
Copyright (c) 2012 by SUSE Linux Products GmbH
```

```
Table | Size
-----+-----
public.all_primary_keys | 0 bytes
public.all_tab_columns | 0 bytes
public.allserverkeywordsincereboot | 0 bytes
public.dblink_pkey_results | 0 bytes
public.dual | 8192 bytes
public.evr_t | 0 bytes
public.log | 32 kB
...
```

4.7. データベースの移動

データベースを別の場所に移動できます。たとえば、データベースのストレージ容量が少なくなっている場合です。

プロシージャ: データベースの移動

1. SUSE Manager のデフォルトのストレージ場所は `/var/lib/pgsql/` です。たとえば、`/storage/postgres/` に移動する場合は、次のように操作を進めます。
2. コマンドプロンプトで、`root` として、実行中のデータベースを停止します。

```
rcpostgresql stop
```

実行中の `spacewalk` サービスをシャットダウンします。

```
spacewalk-service stop
```

3. 現在の作業ディレクトリ構造を `cp` に `-a`、`--archive` オプションを使用してコピーします。例:

```
cp --archive /var/lib/pgsql/ /storage/postgres/
```

このコマンドは、`/var/lib/pgsql/` の内容を `/storage/postgres/pgsql/` にコピーします。



`/var/lib/pgsql`ディレクトリの内容は同じままにしておく必要があります。同じままでないと、SUSE Managerデータベースが正常に動作しない可能性があります。また、十分な空きディスク容量があることも確認する必要があります。

- 新しいデータベースディレクトリをマウントします。

```
mount /storage/postgres/pgsql
```

- 新しいディレクトリに移動し、次のコマンドを実行して、所有権が `root:root`ではなく、`postgres:postgres`であることを確認します。

```
cd /storage/postgres/pgsql/
ls -l
```

出力:

```
total 8
drwxr-x--- 4 postgres postgres 47 Jun 2 14:35 ./
```

- `etc/fstab`を編集して、サーバfstabに新しいデータベースのマウント場所を追加します。
- 次のコマンドを使用して、データベースを起動します。

```
rcpostgresql start
```

- spacewalkサービスを開始します。

```
spacewalk-service start
```

4.8. クラッシュしたルートパーティションからの回復

ルートパーティションがクラッシュした場合は、追加のステップでSUSE Managerサーバを再起動できます。このセクションでは、`/var/lib/pgsql`および`/var/spacewalk/`にマウントされた、データベースとチャンネルに別のパーティションを使用してサーバをセットアップしていることを前提としています。



システムの新規インストール後、ほとんどのユーザとグループは異なるIDを取得します。ほとんどのバックアップシステムでは、IDの代わりに名前が保存され、正しい所有権と許可でファイルが復元されます。ただし、既存のパーティションをマウントする場合は、所有権を新しいシステムに合わせる必要があります。

プロシージャ: クラッシュしたルートパーティションから回復する

- SUSE Managerをインストールします。`/var/spacewalk`および`/var/lib/pgsql`パーティションはマウントしないでください。インストールが完了するまで待ってから、次のステップに進みます。
- データベースをシャットダウンします。

```
rcpostgresql stop
```

3. サービスをシャットダウンします。

```
spacewalk-service stop
```

4. `/var/spacewalk`および`/var/lib/pgsql`パーティションをマウントします。
5. SUSE Managerのバックアップに一覧にされているディレクトリを復元します。
6. データベースを起動します。

```
rcpostgresql start
```

7. spacewalkサービスを開始します。

```
spacewalk-service start
```

SUSE Managerは、データベースや同期されたチャンネルを失うことなく正常に動作するはずです。

4.9. データベース接続情報

`/etc/rhn/rhn.conf`で次の変数を追加または編集して、SUSE Managerデータベースに接続する情報を設定できます。

```
db_backend = postgresql
db_user = susemanager
db_password = susemanager
db_name = susemanager
db_host = localhost
db_port = 5432
db_ssl_enabled =
```

Chapter 5. コンフィデンシャルコンピューティング

Confidential Computingは、ハードウェアベースの高信頼実行環境(TEE)を利用して、使用中のデータを保護できる技術です。TEEとは、データの整合性、データの機密性、およびコードの整合性に対して強化されたレベルのセキュリティを提供する環境のタイプです。

5.1. SUSE ManagerでのConfidential Computing

TEEの信頼性は認証プロセスによってチェックされます。SUSE Managerを、登録されているシステムの認証サーバとして使用できます。これにより、このモードで動作しているシステムのレポートページが生成されます。これらのシステムは定期的に認証およびチェックする必要があります。過去のチェックの履歴も保存されており、要求に応じて利用できます。

Confidential Computingの検証は、認証されるシステムが実行されている使用ハードウェアと環境によって異なります。



Confidential Computingの認証はx86_64アーキテクチャでのみ利用できます。

5.2. 要件

Confidential Computingは、次の特性を持つ環境にセットアップできます。

- 認証されるシステム(仮想マシン)がSLES15 SP6であり、SUSE Managerにブートストラップされる
- ハードウェアにAMD EPYC Milan CPUまたはAMD EPYC Genoa CPUが搭載されている必要がある
- BIOSがConfidential Computingの認証を許可するように設定されている必要がある
- ホストOSと仮想化ソフトウェア(KVMおよびlibvirt)でConfidential Computingがサポートされている必要がある

5.3. 制限事項

- SLES15 SP6のConfidential Computingの認証はテクノロジープレビューとして提供されています。
- SUSE ManagerのConfidential Computingの検証はテクノロジープレビューとして提供されています。
- セキュアブートは認証されますが、現在のところKVMセキュリティブートとSNPゲストは同時に使用できません。

5.4. SUSE ManagerでのConfidential Computingの使用



Confidential Computingをホストにセットアップして設定する正確な手順については、OSベンダのマニュアルを参照してください。

プロシージャ: SUSE Managerのインストール中に認証コンテナを有効にする

1. 認証コンテナは、`mgradm install podman`を使用してSUSE Managerをインストールする際に有効にし

す。

2. ファイル `mgradm.yaml` に以下を追加します。

```
coco:
  replicas: 1
```

プロシージャ: SUSE Managerのインストール後に認証コンテナを有効にする

1. インストール後に認証コンテナを有効にするには、コマンドラインパラメータ `mgradm` を使用します。
2. 次のコマンドを実行します。

```
mgradm scale --coco-replicas 1
```

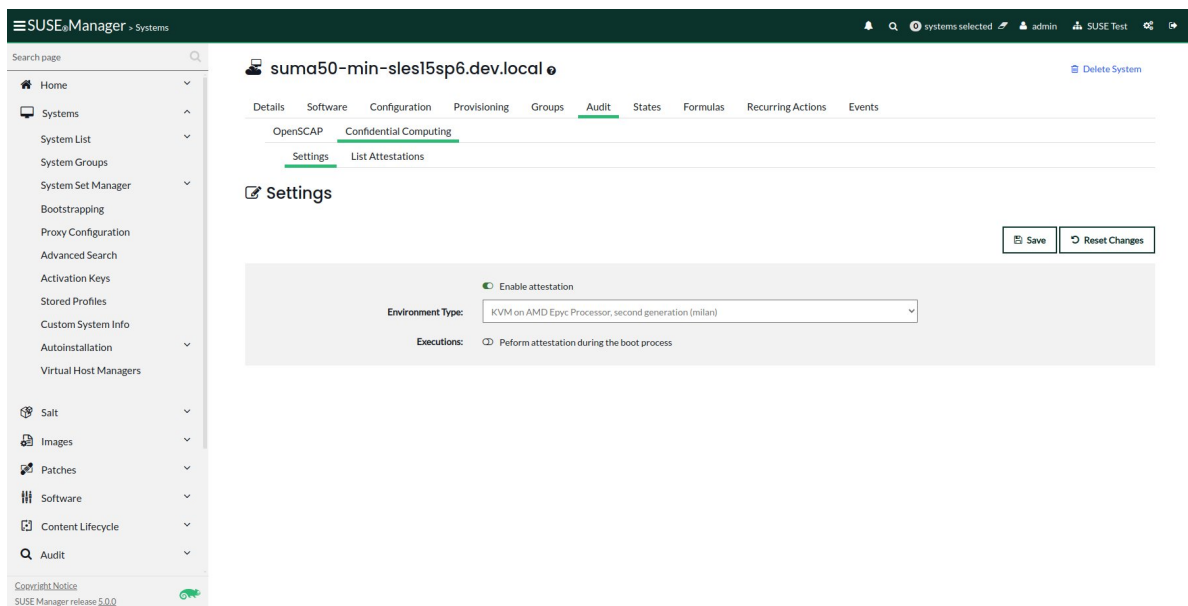
プロシージャ: SUSE Managerのインストール後に認証コンテナを有効にする

1. すでに有効な認証コンテナを無効にするには、次のコマンドを実行します。

```
mgradm scale --coco-replicas 0
```

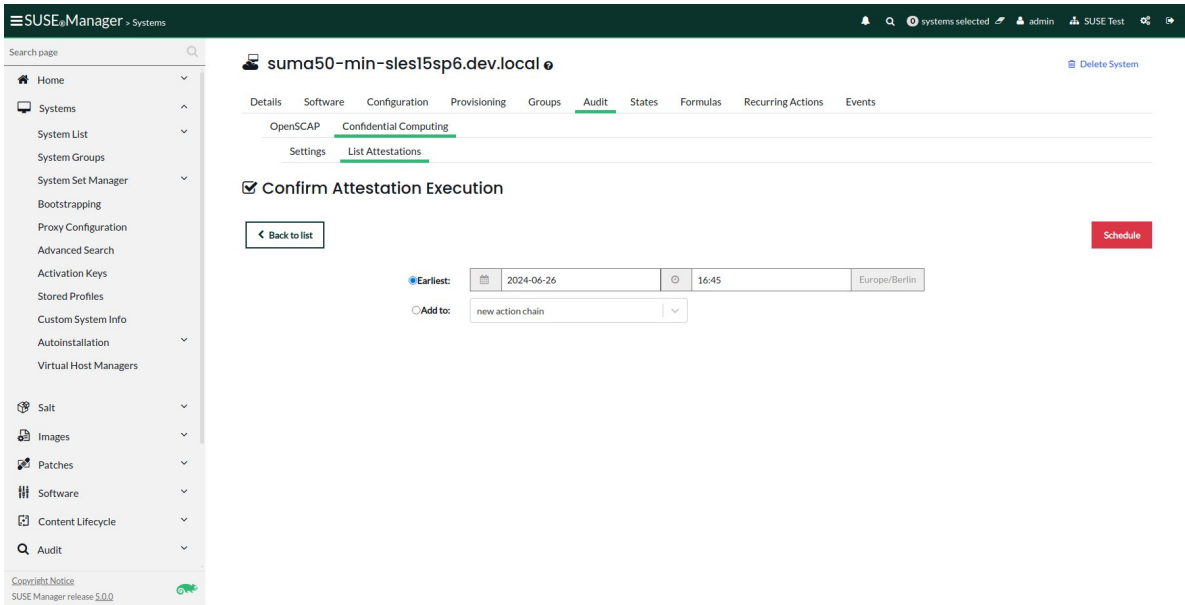
プロシージャ: 認証を有効にする

1. 選択したシステムで、**監査** > **Confidential Computing** > **設定** (コンフィデンシャルコンピューティング > 設定) に移動します。
2. トグルボタンを選択して認証を有効にします。
3. フィールド **環境タイプ** で、ドロップダウンリストから正しいオプションを選択します。
4. **[保存]** をクリックして、変更を保存します。

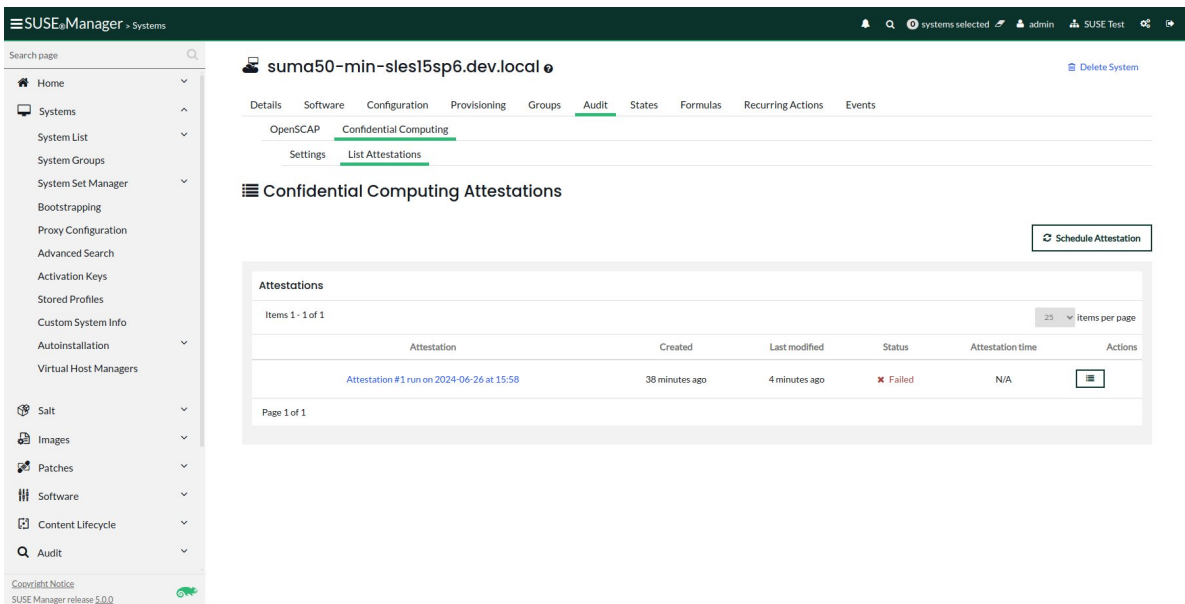


プロシージャ: 新しい認証をスケジュールする

1. 選択したシステムで、**監査** > **Confidential Computing** > **List Attestations** (コンフィデンシャルコンピューティング > 認証の一覧) タブに移動します。
2. **[認証のスケジュールを設定する]** をクリックします。新しいフォームが開きます。
3. **指定時刻以降にスケジュール** で、認証の実行時刻を選択します。
4. 必要に応じて、**以下に追加** オプションを選択して、新しく作成した認証を動作チェーンに追加します。
5. **[スケジュール]** をクリックして、新しい認証の実行を保存してスケジュールします。



6. 選択したシステムで、**監査** > **Confidential Computing** > **List Attestations** (コンフィデンシャルコンピューティング > 認証の一覧) タブに移動します。
7. 表示するレポートを見つけて選択します。



8. 選択した検証レポートをクリックすると、**概要**タブが開きます。

The screenshot shows the SUSE Manager interface for a system named 'suma50-min-sles15sp6.dev.local'. The 'Audit' tab is selected, and the 'Attestation Report details' page is displayed. The 'Overview' sub-tab is active, showing a table with the following data:

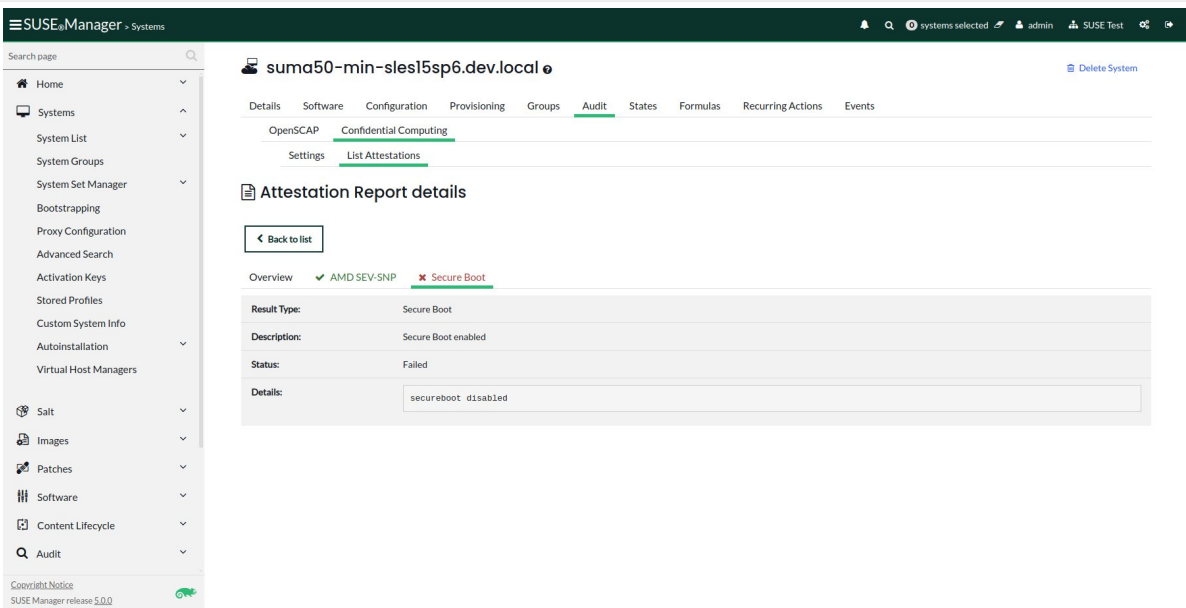
Overview	
Status:	Failed
System:	suma50-min-sles15sp6.dev.local (1000010000)
Environment Type:	KVM on AMD Epyc Processor, second generation (milan)
Created on:	39 minutes ago
Last modified on:	5 minutes ago
Action:	Confidential Computing Attestation scheduled by admin

9. 次のタブ**SEV-SNP**に移動します。

The screenshot shows the SUSE Manager interface for the same system. The 'AMD SEV-SNP' sub-tab is now active, displaying the same table as in the previous screenshot:

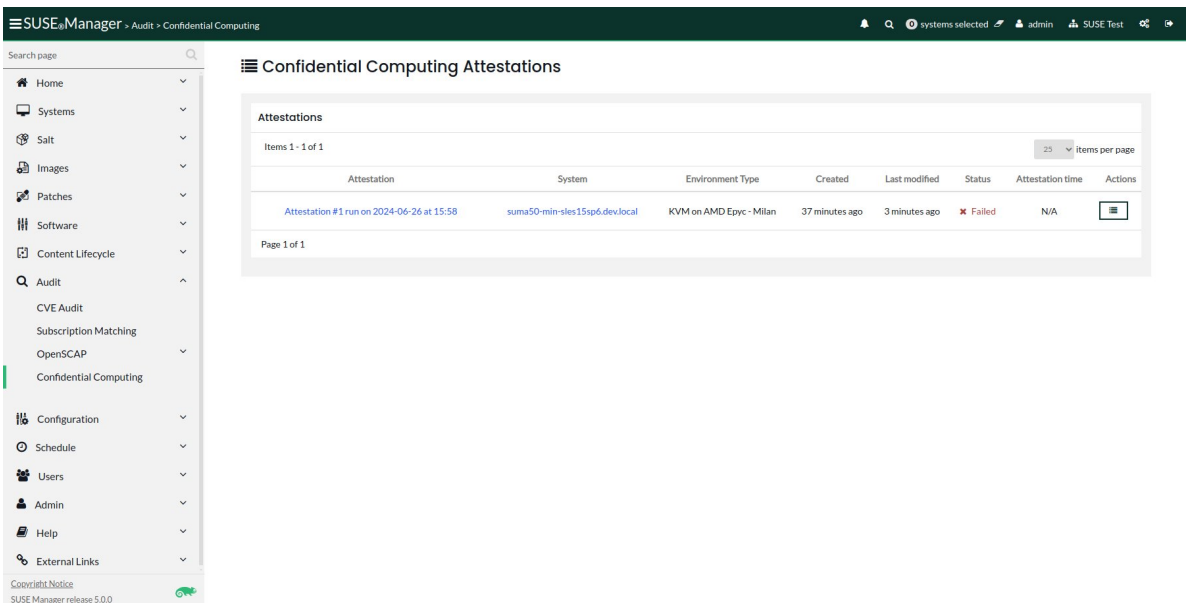
AMD SEV-SNP	
Status:	Failed
System:	suma50-min-sles15sp6.dev.local (1000010000)
Environment Type:	KVM on AMD Epyc Processor, second generation (milan)
Created on:	39 minutes ago
Last modified on:	5 minutes ago
Action:	Confidential Computing Attestation scheduled by admin

10. 最後に、次のタブ**セキュアブート**に移動します。



プロシージャ: 監査から検証レポートを表示する

1. ナビゲーションバーから、**監査** > **Confidential Computing** (コンフィデンシャルコンピューティング) を選択します。
2. メインパネルにすべての認証の一覧が表示されます。



3. 表示するレポートを見つけて選択します。

5.4.1. レポートのステータス

認証レポートは次のいずれかのステータスになります。

待機中

これはスケジュールされた認証のデフォルトのステータスです。プロセスがまだ開始されていないか完了していないため、レポートはまだ利用可能ではありません。

成功

スケジュールされた認証によって、表示可能なレポートが作成されると、プロセスのステータスは**成功**になります。

失敗

スケジュールされた認証が失敗し、その結果レポートが作成されない場合、プロセスのステータスは**失敗**になります。

5.5. 関連トピック

- Confidential Computingの詳細については、<https://confidentialcomputing.io> (外部リンク)を参照してください。

Chapter 6. コンテンツのステージング

ステージングは、クライアントがインストール前にパッケージを事前にダウンロードするために使用されます。これにより、パッケージのインストールをスケジュールされたらすぐに開始できるため、メンテナンスウィンドウに必要な時間を短縮できます。

6.1. コンテンツステージングの有効化

組織全体のコンテンツステージングを管理できます。SUSE Manager Web UIで、**管理** > **組織**に移動して、使用可能な組織のリストを表示します。組織の名前をクリックし、**[ステージングコンテンツの有効化]** ボックスをオンにして、この組織のクライアントがパッケージデータをステージングできるようにします。



組織を作成および管理するには、SUSE Manager管理者としてログインする必要があります。

`/etc/sysconfig/rhn/up2date`を編集し、次の行を追加または編集して、コマンドプロンプトでステージングを有効にすることもできます。

```
stagingContent=1
stagingContentWindow=24
```

`stagingContentWindow`パラメータは時間単位で表される時間値で、ダウンロードの開始時間を決定します。これは、スケジュールされたインストールまたは更新時間までの時間数です。この例では、インストール時間の24時間前にコンテンツがダウンロードされます。ダウンロードの開始時間は、システムで選択した連絡方法によって異なります。割り当てられた連絡方法は、次の`mgr_check`が実行される時間を設定します。

次回、アクションがスケジュールされると、パッケージは自動的にダウンロードされますが、インストールはされません。スケジュールされた時間に、ステージングされたパッケージがインストールされます。

6.2. コンテンツステージングの設定

コンテンツステージングを設定するために使用される次の2つのパラメータがあります。

- `salt_content_staging_advance`は、コンテンツステージングウィンドウが開くまでの時間です(時間単位)。これは、インストールが開始されるまでの時間数で、この時間に達するとパッケージのダウンロードを開始できます。
- `salt_content_staging_window`は、コンテンツステージングウィンドウの期間(時間単位)です。これは、インストールが開始されるまでにクライアントがパッケージをステージングする必要がある時間数です。

たとえば `salt_content_staging_advance`が6時間に設定されていて、`salt_content_staging_window`が2時間に設定されている場合、ステージングウィンドウはインストール時間の6時間前に開き、2時間開いたままになります。インストールが開始されるまで、残りの4時間以内にパッケージはダウンロードされません。

`salt_content_staging_advance`および`salt_content_staging_window`の両方に同じ値を設定する場合、インストールが開始されるまでパッケージをダウンロードできます。

`/usr/share/rhn/config-defaults/rhn_java.conf`で、コンテンツステージングパラメータを設定します。

デフォルト値:

- `salt_content_staging_advance: 8 hours`
- `salt_content_staging_window: 8 hours`



これらのパラメータを正しく機能させるには、コンテンツステージングを有効にする必要があります。

Chapter 7. チャンネル管理

チャンネルはソフトウェアパッケージをグループ化する方法です。

SUSE Managerでは、チャンネルはベースチャンネルと子チャンネルにグループ化され、ベースチャンネルはオペレーティングシステムのタイプ、バージョン、およびアーキテクチャ別にグループ化され、子チャンネルは関連するベースチャンネルと互換性があります。クライアントがベースチャンネルに割り当てられている場合、そのシステムでは関連する子チャンネルのみをインストールできます。この方法でチャンネルを編成すると、互換性のあるパッケージのみが各システムにインストールされます。

ソフトウェアチャンネルは、リポジトリを使用してパッケージを提供します。チャンネルはリポジトリをSUSE Managerにミラーリングし、パッケージ名やその他のデータはSUSE Managerデータベースに保存されます。1つのチャンネルに関連付けられたリポジトリはいくつでも持つことができます。これらのリポジトリのソフトウェアは、クライアントを適切なチャンネルにサブスクライブすることでクライアントにインストールできます。

クライアントはベースチャンネルにのみ割り当てることができます。その後、クライアントは、そのベースチャンネルとその子チャンネルのいずれかに関連付けられたリポジトリからパッケージをインストールまたは更新できます。

SUSE Managerには、SUSE Managerを実行するために必要なすべてのものを提供する、複数のベンダチャンネルが用意されています。SUSE Managerの管理者とチャンネル管理者には、チャンネル管理権限があり、これにより、独自のカスタムチャンネルを作成して管理することができます。環境で独自のパッケージを使用する場合は、カスタムチャンネルを作成できます。カスタムチャンネルはベースチャンネルとして使用することも、ベンダベースチャンネルに関連付けることもできます。

カスタムチャンネルの作成の詳細については、**Administration > Custom-channels**を参照してください。

7.1. チャンネル管理

デフォルトでは、すべてのユーザがシステムにチャンネルをサブスクライブできます。Web UIを使用してチャンネルに制限を実装できます。

プロシージャ: チャンネルへのサブスクライバアクセスの制限

1. SUSE Manager Web UIで、**ソフトウェア > チャンネルリスト**に移動して、編集するチャンネルを選択します。
2. **[ユーザごとのサブスクリプション制限]** セクションを見つけて、**[この組織内の指定されたユーザのみがこのチャンネルにサブスクライブできます]** をオンにします。 **[更新]** をクリックして、変更を保存します。
3. **[サブスクライバ]** タブに移動して、必要に応じてユーザを選択または選択解除します。

7.2. チャンネルの削除

コマンドプロンプトからベンダソフトウェアチャンネルを削除できます。

プロシージャ: ベンダチャンネルを削除する

1. SUSE Managerサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、使用できるベンダチャンネルを一覧にし、削除するチャンネルをメモします。

```
mgr-sync list チャンネル
```

2. チャンネルを削除します。

```
spacewalk-remove-channel -c <channel-name>
```

- チャンネルを手動で削除する方法の詳細については、[removing-channels.pdf](#)を参照してください。
- カスタムチャンネルの削除については、**Administration** > **Custom-channels**を参照してください。

7.3. カスタムチャンネル

カスタムチャンネルを使用すると、クライアントを更新するために使用できる、独自のソフトウェアパッケージとリポジトリを作成できます。また、環境内でサードパーティベンダが提供するソフトウェアを使用することもできます。

このセクションでは、カスタムチャンネルを作成、管理、および削除する方法について詳細に説明します。カスタムチャンネルを作成および管理できるようにするには、管理者権限が必要です。

7.3.1. カスタムチャンネルおよびリポジトリの作成

カスタムチャンネルを作成する前に、関連付けるベースチャンネルと、コンテンツに使用するリポジトリを決定します。

クライアントシステムにインストールする必要があるカスタムソフトウェアパッケージがある場合は、カスタム子チャンネルを作成して管理できます。システムにチャンネルを割り当てる前に、SUSE Manager Web UIでチャンネルを作成し、パッケージのリポジトリを作成する必要があります。



クライアントシステムと互換性のないパッケージを含む子チャンネルを作成しないでください。

ベンダによって提供されたパッケージを使用する場合は、ベースチャンネルとしてベンダチャンネルを選択できます。または **[なし]** を選択して、カスタムチャンネルをベースチャンネルにします。

プロシージャ: カスタムチャンネルの作成

1. SUSE Manager Web UIで、**ソフトウェア** > **管理** > **チャンネル**に移動して、**[チャンネルの作成]**をクリックします。
2. **[ソフトウェアチャンネルの作成]** ページで、チャンネルに名前(たとえば、**My Tools SLES 15 SP1 x86_64**)、およびラベル(たとえば、**my-tools-sles15sp1-x86_64**)を付けます。ラベルにはスペースまたは

大文字を含めないでください。

3. [親チャンネル] ドロップダウンで、関連するベースチャンネル(たとえば、`SLE-Product-SLES15-SP1-Pool for x86_64`)を選択します。パッケージに互換性のある親チャンネルを選択していることを確認します。
4. [アーキテクチャ] ドロップダウンで、適切なハードウェアアーキテクチャ(たとえば、`x86_64`)を選択します。
5. ご使用の環境に応じて、連絡先の詳細、チャンネルアクセス制御、およびGPGフィールドに追加情報を入力します。
6. [チャンネルの作成] をクリックします。

カスタムチャンネルでは、追加のセキュリティ設定が必要になる場合があります。多くのサードパーティベンダは、GPGを使用してパッケージをセキュリティ保護しています。カスタムチャンネルでGPGで保護されたパッケージを使用する場合は、メタデータの署名に使用されたGPGキーを信頼する必要があります。次に、[メタデータは署名されていますか?] チェックボックスをオンにして、パッケージメタデータを信頼できるGPGキーと照合します。

リモートチャンネルおよびリポジトリがGPGキーで署名されている場合、これらのGPGキーをインポートして信頼することができます。たとえば、SUSE Managerサーバのコマンドラインから `spacewalk-repo-sync` を実行します。

```
/usr/bin/spacewalk-repo-sync -c <channellabelname> -t yum
```

基盤となる `zypper` コールは、利用可能な場合はキーをインポートします。Web UIはこの機能を提供していません。

これは、ミラーするリポジトリが特別な方法で設定されていて、署名の横のリポジトリに「キー」が提供されている場合にのみ機能します。これは、Open Build Service (OBS)によって生成されたすべてのリポジトリに該当します。その他のリポジトリについては、特別な準備ステップが必要です(以下を参照)。



デフォルトでは、新しいチャンネルを作成する際に [GPGチェックの有効化] フィールドがオンになっています。チャンネルにカスタムパッケージとアプリケーションを追加する場合は、このフィールドをオフにして、署名されていないパッケージをインストールできるようにしてください。パッケージが信頼されていないソースからのものである場合、GPGチェックを無効にするとセキュリティリスクが生じます。

リポジトリが有効なソフトウェアリポジトリである場合は、Web UIを使用してSUSE Managerに追加することのみできます。必要なリポジトリメタデータが使用できることを事前に確認してください。これに関しては、`createrepo`や`reprepro`などのツールが便利です。`mgrpush`はリポジトリを作成せずに単一のRPMをチャンネルにプッシュするのに役立ちます。詳細については、`createrepo_c`および`reprepro`のマニュアルページを参照してください。

プロシージャ: ソフトウェアリポジトリの追加

1. SUSE Manager Web UIで、ソフトウェア > 管理 > リポジトリに移動し、[リポジトリの作成] をクリックします。

2. [リポジトリの作成] ページで、リポジトリにラベル(たとえば、`my-tools-sles15sp1-x86_64-repo`)を付けます。
3. [リポジトリURL] フィールドに、`repdata`ファイル(たとえば、`file:///opt/mytools/`)を含むディレクトリへのパスを指定します。このフィールドでは、任意の有効なアドレス指定プロトコルを使用できます。
4. [メタデータは署名されていますか?] チェックボックスをオフにします。
5. オプション: リポジトリでクライアント証明書認証が必要な場合は、SSLフィールドに入力します。
6. [リポジトリの作成] をクリックします。

先に示したプロシージャは、ミラーリングするリポジトリが署名の横にあるリポジトリに「キー」を提供する場合にのみ機能します。これはOBSによって生成されたすべてのリポジトリに該当しますが、通常、OBSによって提供されていないオペレーティングシステムの他のリポジトリには該当しません。

使用するリポジトリにGPGキーがない場合は、自分でGPGキーを指定し、GPGキーをキーリングに手動でインポートできます。`gpg`コマンドラインツールを使用して`/var/lib/spacewalk/gpgdir`キーリングにキーをインポートすると、永続的に保存されます。`chroot`環境が消去されても、キーは保持されます。

プロシージャ: GPGキーを使用してソフトウェアリポジトリを作成する

1. キーをキーリングにインポートするコマンドは次のとおりです。

```
mgradm gpg add /path/to/gpg.key
```



`uyuni_suite`、`uyuni_component`、および`uyuni_arch`のクエリパラメータを使用して、Debianの非フラットリポジトリを追加します。

`uyuni_suite`

必須です。Debianのドキュメントでは、これは`distribution`とも呼ばれています。このパラメータでは、`apt`ソースを指定します。このパラメータを指定しない場合は、元のアプローチが使用されます。パラメータの末尾が`/`の場合、リポジトリはフラットとして識別されます。

`uyuni_component`

オプションです。このパラメータは1つのコンポーネントのみを指定できます。コンポーネントを一覧にすることはできません。`apt`ソースエントリでは複数のコンポーネントを指定できますが、Uyuniでは指定できません。代わりに、コンポーネントごとに個別のリポジトリを作成する必要があります。

`uyuni_arch`

オプションです。省略すると、データベースからチャンネルのSQLクエリを使用してアーキテクチャ名が計算されます。チャンネルのアーキテクチャと一致しない場合は、明示的に`uyuni_arch`を指定します(アーキテクチャの命名があいまいな場合があります)。

ここにいくつかの例があります。

表 3. Debian非フラットリポジトリマッピング

タイプ	ソース行 / URL
apt ソース行	<code>deb https://pkg.jenkins.io/debian-stable binary/</code>
URLマッピング	<code>https://pkg.jenkins.io/debian-stable?uyuni_suite=binary/</code>
aptソース行	<code>deb https://deb.debian.org/debian/dists stable main</code>
URLマッピング	<code>https://deb.debian.org/debian/dists?uyuni_suite=stable&uyuni_component=main</code>

Debianリポジトリ定義フォーマットに関する情報はこちらをご覧ください。この情報は、<https://wiki.debian.org/DebianRepository/Format#Overview>に基づいています。

リポジトリ定義フォーマットは次のとおりです。

```
deb uri suite [コンポーネント1] [コンポーネント2] [...]
```

例:

```
deb https://deb.debian.org/debian/dists stable main
```

または

```
deb https://pkg.jenkins.io/debian-stable binary/
```

スイートとコンポーネントのペアごとに、仕様ではベースURL + suite + componentに基づいて計算される個別のURLを定義しています。

プロシージャ: リポジトリをチャンネルに割り当てる

1. **ソフトウェア** > **管理** > **チャンネル**に移動して、新たに作成されたカスタムチャンネルの名前をクリックし、新しいリポジトリをカスタムチャンネルに割り当てます。
2. [**リポジトリ**] タブに移動し、チャンネルに割り当てるリポジトリがオンになっていることを確認し、**[リポジトリの更新]**をクリックします。
3. デフォルトでは、同期プロセスはすぐに開始されます。

チャンネルの同期の詳細については、[administration:custom-channels.pdf](#)を参照してください。

プロシージャ: アクティベーションキーへのカスタムチャンネルの追加

1. SUSE Manager Web UIで、**システム** > **アクティベーションキー**に移動して、カスタムチャンネルを追加するキーを選択します。
2. **[詳細]** タブの **[子チャンネル]** リストで、関連付けるチャンネルを選択します。 必要に応じて、複数のチャンネルを選択できます。
3. **[アクティベーションキーの更新]** をクリックします。

7.3.2. カスタムチャンネル同期

重要な更新を見逃さないようにするため、SUSEでは、カスタムチャンネルをリモートリポジトリの変更に合わせて最新の状態に保つことをお勧めします。

デフォルトでは、作成したすべてのカスタムチャンネルに対して同期が自動的に行われます。特に、次のことが発生します。

- UIから、または `spacewalk-common-channels` を使用して、リポジトリをチャンネルに追加した後
- 毎日のタスク `mgr-sync-refresh-default` の一部として、すべてのカスタムおよびベンダチャンネルを同期します。

このデフォルトの動作を無効にするには、`/etc/rhn/rhn.conf` に以下を設定します。

```
java.unify_custom_channel_management = 0
```

このプロパティをオフにすると、同期は自動的に実行されません。カスタムチャンネルを最新の状態に保つには、次の操作を行う必要があります。

- **[同期]** タブに移動し、**[今すぐ同期]** をクリックして手動で同期し、
- **[リポジトリ]** タブから自動同期スケジュールを設定します。

プロセス開始時には、チャンネルの同期が終了したかどうかを確認するいくつかの方法があります。

- SUSE ManagerのWeb UIで、**管理** > **セットアップウィザード**に移動し、**[製品]** タブを選択します。このダイアログには、同期中の各製品の完了バーが表示されます。
- SUSE ManagerのWeb UIで、**ソフトウェア** > **管理** > **チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。 **リポジトリ** > **同期** タブに移動します。リポジトリ名の横に **[同期状態]** が表示されます。
- コマンドプロンプトで同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

同期の進行中に各子チャンネルは独自のログを生成します。 ベースチャンネルと子チャンネルのすべてのログファイルを確認して、同期が完了していることを確認する必要があります。

次のカスタムチャンネル同期オプションが利用できます。

リポジトリから削除されたチャンネル内のパッケージを保持する

これにより、`strict`モードがオフになります。

エラーを同期しない

パッチを同期しません。

最新パッケージのみ同期する

最新のパッケージバージョンのみを同期します。

キックスタート可能なツリーの作成

このオプションは、Kickstartによる自動インストール用にディレクトリツリーを準備します。

エラーが発生したら終了する

エラーが発生した場合、同期を停止します。

これらのオプションはチャンネルごとに永続的に保存されます。[今すぐ同期]ボタンをクリックした場合も、同期を実行する前にチャンネルオプションが保存されます。

7.3.3. カスタムチャンネルへのパッケージとパッチの追加

既存のチャンネルからクローンを作成せずに新しいカスタムチャンネルを作成する場合、そのチャンネルにはパッケージやパッチは含まれません。SUSE Manager Web UIを使用して、必要なパッケージとパッチを追加できます。

カスタムチャンネルには、クローンまたはカスタムのパッケージまたはパッチのみを含めることができ、チャンネルの基本アーキテクチャに一致する必要があります。カスタムチャンネルに追加されたパッチは、チャンネルに存在するパッケージに適用する必要があります。

プロシージャ: カスタムチャンネルへのパッケージの追加

1. SUSE Manager Web UIで、**ソフトウェア** > **管理** > **チャンネル**に移動して、**[パッケージ]** タブに移動します。
2. オプション: **[一覧表示/削除]** タブに移動して、現在チャンネル内にあるすべてのパッケージを表示します。
3. **[追加]** タブに移動して、チャンネルに新しいパッケージを追加します。
4. パッケージを提供する親チャンネルを選択し、**[パッケージの表示]**をクリックして、リストに入力します。
5. カスタムチャンネルに追加するパッケージをオンにして、**[パッケージの追加]**をクリックします。
6. 選択に問題がなければ、**[追加の確認]**をクリックして、チャンネルにパッケージを追加します。
7. オプション: **ソフトウェア** > **管理** > **チャンネル**に移動し、**パッケージ** > **比較**タブに移動して、現在のチャンネルのパッケージを別のチャンネルのパッケージと比較できます。2つのチャンネルを同じにするには、**[違いをマージする]**ボタンをクリックし、競合を解決します。

プロシージャ: カスタムチャンネルへのパッチの追加

1. SUSE Manager Web UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動して、**[パッチ]** タブに移動します。
2. オプション: **[一覧表示/削除]** タブに移動して、現在チャンネル内のすべてのパッチを表示します。
3. **[追加]** タブに移動し、追加するパッチの種類を選択して、チャンネルに新しいパッチを追加します。
4. パッチを提供する親チャンネルを選択し、**[関連付けられたパッチの表示]**をクリックして、リストに入力します。
5. カスタムチャンネルに追加するパッチをオンにして、**[確認]**をクリックします。
6. 選択に問題がなければ、**[確認]**をクリックして、チャンネルにパッチを追加します。

7.3.4. カスタムチャンネルの管理

SUSE Manager管理者とチャンネル管理者は任意のチャンネルを変更または削除できます。

チャンネルを変更または削除する権限を他のユーザに付与するには、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動して、編集するチャンネルを選択します。 **[マネージャ]** タブに移動して、権限を付与するユーザをオンにします。 **[更新]**をクリックして、変更を保存します。



一連のクライアントに割り当てられているチャンネルを削除すると、削除されたチャンネルに関連付けられているすべてのクライアントのチャンネル状態が直ちに更新されます。これは、変更がリポジトリファイルに正確に反映されるようにするためです。

Web UIを使用してSUSE Managerチャンネルを削除することはできません。 カスタムチャンネルのみを削除できます。

プロシージャ: カスタムチャンネルの削除

1. SUSE Manager Web UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動して、削除するチャンネルを選択します。
2. **[ソフトウェアチャンネルの削除]**をクリックします。
3. **[チャンネルの削除]** ページで、削除するチャンネルの詳細を確認し、**[システムのサブスクリプションを中止]** チェックボックスをオンにして、まだサブスクリプションされている可能性のあるシステムからカスタムチャンネルを削除します。
4. **[チャンネルの削除]**をクリックします。

チャンネルを削除しても、削除されたチャンネルの一部であるパッケージは自動的に削除されません。 チャンネルが削除されたパッケージを更新することはできません。

SUSE Manager Web UIで、チャンネルに関連付けられていないパッケージを削除できます。 **ソフトウェア**、**管理**、**パッケージ**に移動して、削除するパッケージをオンにして、**[パッケージの削除]**をクリックします。

7.4. カスタムチャンネル

カスタムチャンネルを使用すると、クライアントを更新するために使用できる、独自のソフトウェアパッケージとリポジトリを作成できます。 また、環境内でサードパーティベンダが提供するソフトウェアを使用す

することもできます。

このセクションでは、カスタムチャンネルを作成、管理、および削除する方法について詳細に説明します。カスタムチャンネルを作成および管理できるようにするには、管理者権限が必要です。

7.4.1. カスタムチャンネルおよびリポジトリの作成

カスタムチャンネルを作成する前に、関連付けるベースチャンネルと、コンテンツに使用するリポジトリを決定します。

クライアントシステムにインストールする必要があるカスタムソフトウェアパッケージがある場合は、カスタム子チャンネルを作成して管理できます。システムにチャンネルを割り当てる前に、SUSE Manager Web UIでチャンネルを作成し、パッケージのリポジトリを作成する必要があります。



クライアントシステムと互換性のないパッケージを含む子チャンネルを作成しないでください。

ベンダによって提供されたパッケージを使用する場合は、ベースチャンネルとしてベンダチャンネルを選択できます。または [なし] を選択して、カスタムチャンネルをベースチャンネルにします。

プロシージャ: カスタムチャンネルの作成

1. SUSE Manager Web UIで、**ソフトウェア** > **管理** > **チャンネル**に移動して、[チャンネルの作成]をクリックします。
2. [ソフトウェアチャンネルの作成] ページで、チャンネルに名前(たとえば、`My Tools SLES 15 SP1 x86_64`)、およびラベル(たとえば、`my-tools-sles15sp1-x86_64`)を付けます。ラベルにはスペースまたは大文字を含めないでください。
3. [親チャンネル] ドロップダウンで、関連するベースチャンネル(たとえば、`SLE-Product-SLES15-SP1-Pool for x86_64`)を選択します。パッケージに互換性のある親チャンネルを選択していることを確認します。
4. [アーキテクチャ] ドロップダウンで、適切なハードウェアアーキテクチャ(たとえば、`x86_64`)を選択します。
5. ご使用の環境に応じて、連絡先の詳細、チャンネルアクセス制御、およびGPGフィールドに追加情報を入力します。
6. [チャンネルの作成]をクリックします。

カスタムチャンネルでは、追加のセキュリティ設定が必要になる場合があります。多くのサードパーティベンダは、GPGを使用してパッケージをセキュリティ保護しています。カスタムチャンネルでGPGで保護されたパッケージを使用する場合は、メタデータの署名に使用されたGPGキーを信頼する必要があります。次に、[メタデータは署名されていますか?] チェックボックスをオンにして、パッケージメタデータを信頼できるGPGキーと照合します。

リモートチャンネルおよびリポジトリがGPGキーで署名されている場合、これらのGPGキーをインポートして信頼することができます。たとえば、SUSE Managerサーバのコマンドラインから `spacewalk-repo-sync` を実行します。

```
/usr/bin/spacewalk-repo-sync -c <channellabelname> -t yum
```

基盤となるzypperコールは、利用可能な場合はキーをインポートします。Web UIはこの機能を提供していません。

これは、ミラーするリポジトリが特別な方法で設定されていて、署名の横のリポジトリに「キー」が提供されている場合にのみ機能します。これは、Open Build Service (OBS)によって生成されたすべてのリポジトリに該当します。その他のリポジトリについては、特別な準備ステップが必要です(以下を参照)。



デフォルトでは、新しいチャンネルを作成する際に [GPGチェックの有効化] フィールドがオンになっています。チャンネルにカスタムパッケージとアプリケーションを追加する場合は、このフィールドをオフにして、署名されていないパッケージをインストールできるようにしてください。パッケージが信頼されていないソースからのものである場合、GPGチェックを無効にするとセキュリティリスクが生じます。

リポジトリが有効なソフトウェアリポジトリである場合は、Web UIを使用してSUSE Managerに追加することのみできます。必要なリポジトリメタデータが使用できることを事前に確認してください。これに関しては、`createrepo`や`reprepro`などのツールが便利です。`mgrpush`はリポジトリを作成せずに単一のRPMをチャンネルにプッシュするのに役立ちます。詳細については、`createrepo_c`および`reprepro`のマニュアルページを参照してください。

プロシージャ: ソフトウェアリポジトリの追加

1. SUSE Manager Web UIで、**ソフトウェア** > **管理** > **リポジトリ**に移動し、[**リポジトリの作成**]をクリックします。
2. [**リポジトリの作成**] ページで、リポジトリにラベル(たとえば、`my-tools-sles15sp1-x86_64-repo`)を付けます。
3. [**リポジトリURL**] フィールドに、`repdata`ファイル(たとえば、`file:///opt/mytools/`)を含むディレクトリへのパスを指定します。このフィールドでは、任意の有効なアドレス指定プロトコルを使用できます。
4. [**メタデータは署名されていますか?**] チェックボックスをオフにします。
5. オプション: リポジトリでクライアント証明書認証が必要な場合は、SSLフィールドに入力します。
6. [**リポジトリの作成**]をクリックします。

先に示したプロシージャは、ミラーリングするリポジトリが署名の横にあるリポジトリに「キー」を提供する場合にのみ機能します。これはOBSによって生成されたすべてのリポジトリに該当しますが、通常、OBSによって提供されていないオペレーティングシステムの他のリポジトリには該当しません。

使用するリポジトリにGPGキーがない場合は、自分でGPGキーを指定し、GPGキーをキーリングに手動でインポートできます。`gpg`コマンドラインツールを使用して`/var/lib/spacewalk/gpgdir`キーリングにキーをインポートすると、永続的に保存されます。chroot環境が消去されても、キーは保持されます。

プロシージャ: GPGキーを使用してソフトウェアリポジトリを作成する

1. キーをキーリングにインポートするコマンドは次のとおりです。

```
mgradm gpg add /path/to/gpg.key
```



`uyuni_suite`、`uyuni_component`、および`uyuni_arch`のクエリパラメータを使用して、Debianの非フラットリポジトリを追加します。

`uyuni_suite`

必須です。 Debianのドキュメントでは、これは`distribution`とも呼ばれています。 このパラメータでは、`apt`ソースを指定します。 このパラメータを指定しない場合は、元のアプローチが使用されます。パラメータの末尾が`/`の場合、リポジトリはフラットとして識別されます。

`uyuni_component`

オプションです。このパラメータは1つのコンポーネントのみを指定できます。コンポーネントを一覧にすることはできません。`apt`ソースエントリでは複数のコンポーネントを指定できますが、Uyuniでは指定できません。代わりに、コンポーネントごとに個別のリポジトリを作成する必要があります。

`uyuni_arch`

オプションです。 省略すると、データベースからチャンネルのSQLクエリを使用してアーキテクチャ名が計算されます。 チャンネルのアーキテクチャと一致しない場合は、明示的に`uyuni_arch`を指定します(アーキテクチャの命名があいまいな場合があります)。

ここにいくつかの例があります。

表 4. Debian非フラットリポジトリマッピング

タイプ	ソース行 / URL
apt ソース行	<code>deb https://pkg.jenkins.io/debian-stable binary/</code>
URLマッピング	<code>https://pkg.jenkins.io/debian-stable? uyuni_suite=binary/</code>
aptソース行	<code>deb https://deb.debian.org/debian/dists stable main</code>
URLマッピング	<code>https://deb.debian.org/debian/dists? uyuni_suite=stable&uyuni_component=main</code>

Debianリポジトリ定義フォーマットに関する情報はこちらをご覧ください。この情報は、<https://wiki.debian.org/DebianRepository/Format#Overview>に基づいています。

リポジトリ定義フォーマットは次のとおりです。

```
deb uri suite [コンポーネント1] [コンポーネント2] [...]
```

例:

```
deb https://deb.debian.org/debian/dists stable main
```

または

```
deb https://pkg.jenkins.io/debian-stable binary/
```

スイートとコンポーネントのペアごとに、仕様ではベースURL + suite + componentに基づいて計算される個別のURLを定義しています。

プロシージャ: リポジトリをチャンネルに割り当てる

1. **ソフトウェア** > **管理** > **チャンネル**に移動して、新たに作成されたカスタムチャンネルの名前をクリックし、新しいリポジトリをカスタムチャンネルに割り当てます。
2. [**リポジトリ**] タブに移動し、チャンネルに割り当てるリポジトリがオンになっていることを確認し、**[リポジトリの更新]**をクリックします。
3. デフォルトでは、同期プロセスはすぐに開始されます。

チャンネルの同期の詳細については、[administration:custom-channels.pdf](#)を参照してください。

プロシージャ: アクティベーションキーへのカスタムチャンネルの追加

1. SUSE Manager Web UIで、**システム** > **アクティベーションキー**に移動して、カスタムチャンネルを追加するキーを選択します。
2. [**詳細**] タブの [**子チャンネル**] リストで、関連付けるチャンネルを選択します。 必要に応じて、複数のチャンネルを選択できます。
3. **[アクティベーションキーの更新]**をクリックします。

7.4.2. カスタムチャンネル同期

重要な更新を見逃さないようにするため、SUSEでは、カスタムチャンネルをリモートリポジトリの変更に合わせて最新の状態に保つことをお勧めします。

デフォルトでは、作成したすべてのカスタムチャンネルに対して同期が自動的に行われます。特に、次のことが発生します。

- UIから、または`spacewalk-common-channels`を使用して、リポジトリをチャンネルに追加した後
- 毎日のタスク`mgr-sync-refresh-default`の一部として、すべてのカスタムおよびベンダチャンネルを同期します。

このデフォルトの動作を無効にするには、`/etc/rhn/rhn.conf`に以下を設定します。

```
java.unify_custom_channel_management = 0
```

このプロパティをオフにすると、同期は自動的に実行されません。カスタムチャンネルを最新の状態に保つには、次の操作を行う必要があります。

- **[同期]** タブに移動し、**[今すぐ同期]**をクリックして手動で同期し、
- **[リポジトリ]** タブから自動同期スケジュールを設定します。

プロセス開始時には、チャンネルの同期が終了したかどうかを確認するいくつかの方法があります。

- SUSE ManagerのWeb UIで、**管理** > **セットアップウィザード**に移動し、**[製品]** タブを選択します。このダイアログには、同期中の各製品の完了バーが表示されます。
- SUSE ManagerのWeb UIで、**ソフトウェア** > **管理** > **チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。 **リポジトリ** > **同期**タブに移動します。リポジトリ名の横に **[同期状態]** が表示されます。
- コマンドプロンプトで同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

同期の進行中に各子チャンネルは独自のログを生成します。 ベースチャンネルと子チャンネルのすべてのログファイルを確認して、同期が完了していることを確認する必要があります。

次のカスタムチャンネル同期オプションが利用できます。

リポジトリから削除されたチャンネル内のパッケージを保持する

これにより、`strict`モードがオフになります。

エラータを同期しない

パッチを同期しません。

最新パッケージのみ同期する

最新のパッケージバージョンのみを同期します。

キックスタート可能なツリーの作成

このオプションは、Kickstartによる自動インストール用にディレクトリツリーを準備します。

エラーが発生したら終了する

エラーが発生した場合、同期を停止します。

これらのオプションはチャンネルごとに永続的に保存されます。[今すぐ同期]ボタンをクリックした場合も、同期を実行する前にチャンネルオプションが保存されます。

7.4.3. カスタムチャンネルへのパッケージとパッチの追加

既存のチャンネルからクローンを作成せずに新しいカスタムチャンネルを作成する場合、そのチャンネルにはパッケージやパッチは含まれません。SUSE Manager Web UIを使用して、必要なパッケージとパッチを追加できます。

カスタムチャンネルには、クローンまたはカスタムのパッケージまたはパッチのみを含めることができ、チャンネルの基本アーキテクチャに一致する必要があります。カスタムチャンネルに追加されたパッチは、チャンネルに存在するパッケージに適用する必要があります。

プロシージャ: カスタムチャンネルへのパッケージの追加

1. SUSE Manager Web UIで、**ソフトウェア** > **管理** > **チャンネル**に移動して、**[パッケージ]** タブに移動します。
2. オプション: **[一覧表示/削除]** タブに移動して、現在チャンネル内にあるすべてのパッケージを表示します。
3. **[追加]** タブに移動して、チャンネルに新しいパッケージを追加します。
4. パッケージを提供する親チャンネルを選択し、**[パッケージの表示]**をクリックして、リストに入力します。
5. カスタムチャンネルに追加するパッケージをオンにして、**[パッケージの追加]**をクリックします。
6. 選択に問題がなければ、**[追加の確認]**をクリックして、チャンネルにパッケージを追加します。
7. オプション: **ソフトウェア** > **管理** > **チャンネル**に移動し、**パッケージ** > **比較**タブに移動して、現在のチャンネルのパッケージを別のチャンネルのパッケージと比較できます。2つのチャンネルを同じにするには、**[違いをマージする]**ボタンをクリックし、競合を解決します。

プロシージャ: カスタムチャンネルへのパッチの追加

1. SUSE Manager Web UIで、**ソフトウェア** > **管理** > **チャンネル**に移動して、**[パッチ]** タブに移動します。
2. オプション: **[一覧表示/削除]** タブに移動して、現在チャンネル内のすべてのパッチを表示します。
3. **[追加]** タブに移動し、追加するパッチの種類を選択して、チャンネルに新しいパッチを追加します。
4. パッチを提供する親チャンネルを選択し、**[関連付けられたパッチの表示]**をクリックして、リストに入力します。
5. カスタムチャンネルに追加するパッチをオンにして、**[確認]**をクリックします。
6. 選択に問題がなければ、**[確認]**をクリックして、チャンネルにパッチを追加します。

7.4.4. カスタムチャンネルの管理

SUSE Manager管理者とチャンネル管理者は任意のチャンネルを変更または削除できます。

チャンネルを変更または削除する権限を他のユーザに付与するには、**ソフトウェア** > **管理** > **チャンネル**に移動して、編集するチャンネルを選択します。 **[マネージャ]** タブに移動して、権限を付与するユーザをオンにします。 **[更新]** をクリックして、変更を保存します。



一連のクライアントに割り当てられているチャンネルを削除すると、削除されたチャンネルに関連付けられているすべてのクライアントのチャンネル状態が直ちに更新されます。これは、変更がリポジトリファイルに正確に反映されるようにするためです。

Web UIを使用してSUSE Managerチャンネルを削除することはできません。 カスタムチャンネルのみを削除できます。

プロシージャ: カスタムチャンネルの削除

1. SUSE Manager Web UIで、**ソフトウェア** > **管理** > **チャンネル**に移動して、削除するチャンネルを選択します。
2. **[ソフトウェアチャンネルの削除]** をクリックします。
3. **[チャンネルの削除]** ページで、削除するチャンネルの詳細を確認し、**[システムのサブスクリプションを中止]** チェックボックスをオンにして、まだサブスクリプションされている可能性のあるシステムからカスタムチャンネルを削除します。
4. **[チャンネルの削除]** をクリックします。

チャンネルを削除しても、削除されたチャンネルの一部であるパッケージは自動的に削除されません。 チャンネルが削除されたパッケージを更新することはできません。

SUSE Manager Web UIで、チャンネルに関連付けられていないパッケージを削除できます。 **ソフトウェア** > **管理** > **パッケージ**に移動して、削除するパッケージをオンにして、**[パッケージの削除]** をクリックします。

Chapter 8. コンテンツライフサイクル管理

コンテンツライフサイクル管理では運用クライアントを更新する前にパッケージをカスタマイズおよびテストできます。これは、限られたメンテナンスウィンドウ中に更新を適用する必要がある場合に特に役立ちます。

コンテンツライフサイクル管理では、ソフトウェアチャンネルをソースとして選択し、必要に応じて環境に合わせて調整して、運用クライアントにインストールする前に徹底的にテストすることができます。

ベンダチャンネルを直接変更することはできませんが、パッケージとカスタムパッチを追加または削除することで、それらのチャンネルのクローンを作成し、クローンを変更することができます。これらのクローンチャンネルをテストクライアントに割り当てて、クライアントが期待どおりに動作することを確認できます。



デフォルトでは、クローンベンダチャンネルは元のベンダチャンネルと一致し、依存関係を自動的に選択します。 `/etc/rhn/rhn.conf`に次のオプションを追加することにより、クローンチャンネルの自動選択を無効にできます。

```
java.cloned_channel_auto_selection = false
```

次に、すべてのテストに合格すると、クローンチャンネルを運用サーバにプロモートできます。

これは、ソフトウェアチャンネルがライフサイクルで移動できる一連の環境を通じて実現されます。ほとんどの環境ライフサイクルには、少なくともテスト環境と運用環境が含まれていますが、必要な数の環境を持つことができます。

このセクションでは、基本的なコンテンツライフサイクル手順、および使用可能なフィルタについて説明します。より具体的な例については、**Administration** > **Content-lifecycle-examples**を参照してください。

8.1. コンテンツライフサイクルプロジェクトの作成

コンテンツライフサイクルを設定するには、プロジェクトから開始する必要があります。プロジェクトでは、ソフトウェアチャンネルソース、パッケージの検索に使用されるフィルタ、およびビルド環境について定義します。

プロシージャ: コンテンツライフサイクルプロジェクトの作成

1. SUSE Manager Web UIで、**コンテンツライフサイクル** > **プロジェクト**に移動し、**[プロジェクトの作成]**をクリックします。
2. **[ラベル]** フィールドに、プロジェクトのラベルを入力します。 **[ラベル]** フィールドには、小文字、数字、ピリオド、ハイフン、およびアンダースコアのみを入力できます。
3. **[名前]** フィールドに、プロジェクトのわかりやすい名前を入力します。
4. **[作成]** ボタンをクリックして、プロジェクトを作成し、プロジェクトページに戻ります。
5. **[Attach/Detach Sources]** (ソースの割り当て/取り外し) をクリックします。

6. **[ソース]** ダイアログで、ソースタイプを選択し、プロジェクトの ベースチャンネルを選択します。チャンネルが必須か推奨されるかに関する情報を含め、選択したベースチャンネルで使用可能な子チャンネルが表示されます。
7. 必要な子チャンネルをオンにし、**[保存]**をクリックして、プロジェクトページに戻ります。 選択したソフトウェアチャンネルが表示されているはずですが。
8. **[フィルタの割り当て/取り外し]**をクリックします。
9. **[フィルタ]** ダイアログで、プロジェクトに割り当てるフィルタを選択します。 新しいフィルタを作成するには、**[新しいフィルタの作成]**をクリックします。
10. **[環境の追加]**をクリックします。
11. **[環境ライフサイクル]** ダイアログで、最初の環境に、名前、ラベル、および説明を付けて、**[保存]**をクリックします。 **[ラベル]** フィールドには、小文字、数字、ピリオド、ハイフン、およびアンダースコアのみを入力できます。
12. ライフサイクルのすべての環境が完了するまで、環境の作成を続行します。 作成時に **[前に挿入]** フィールドで環境を選択することで、ライフサイクルの環境の順序を選択できます。

8.2. フィルタタイプ

SUSE Managerでは、プロジェクトの構築に使用するコンテンツを制御するために、さまざまなタイプのフィルタを作成できます。 フィルタを使用すると、ビルドに含めるパッケージまたはビルドから除外するパッケージを選択できます。 たとえば、すべてのカーネルパッケージを除外したり、一部のパッケージの特定のリリースのみを含めることができます。

サポートされているフィルタは次のとおりです。

- パッケージのフィルタリング
 - by name (名前別)
 - by name, epoch, version, release, and architecture (名前、エポック、バージョン、リリース、およびアーキテクチャ別)
 - by provided name (指定された名前別)
- パッチフィルタリング
 - by advisory name (アドバイザリ名別)
 - by advisory type (アドバイザリタイプ別)
 - by synopsis (概要別)
 - by keyword (キーワード別)
 - by date (日付別)
 - by affected package (影響を受けるパッケージ別)
- モジュール
 - by stream (ストリーム別)



パッケージの依存は、コンテンツのフィルタリング中には解決されません。

フィルタで使用できるマッチャーは複数あります。使用できるマッチャーは、選択したフィルタ タイプによって異なります。

使用できるマッチャーは次のとおりです。

- 含む
- 一致（正規表現の形式を取る必要があります）
- 等しい
- 新しい
- 新しいか等しい
- 古いか等しい
- 古い
- 新しいか等しい

8.2.1. フィルタの rule パラメータ

各フィルタには許可または拒否のいずれかに設定できる rule パラメータがあります。フィルタは次のように処理されます。

- パッケージまたはパッチが拒否フィルタを満たす場合は、結果から除外されます。
- パッケージまたはパッチが許可フィルタを満たす場合は、結果に含まれます（拒否フィルタによって除外された場合でも）。

この動作は、一般的な拒否フィルタを使用して多数のパッケージまたはパッチを除外し、特定の許可フィルタで特定のパッケージまたはパッチを「チェリーピック」する場合に役立ちます。



コンテンツフィルタは組織内でグローバルなものであり、プロジェクト間で共有できません。



プロジェクトにすでに構築されたソースが含まれている場合、環境を追加すると、既存のコンテンツが自動的に入力されます。コンテンツは、サイクルの以前の環境から引き出されます（存在していた場合）。以前の環境がない場合は、プロジェクトソースが再度構築されるまで空のままになります。

8.3. フィルタテンプレート

いくつかの一般的なシナリオでフィルタの作成を支援するため、SUSE Managerにはフィルタテンプレートが用意されています。これらのテンプレートを適用すると、特定のユースケースに合わせてカスタマイズされた一連のフィルタを事前に作成できます。

このセクションでは、使用可能なテンプレートとその使用方法について説明します。

8.3.1. SUSE製品に基づくライブパッチ処理

ライブパッチ処理を含むプロジェクトでは、ライブパッチパッケージのみがクライアントに更新として提供されるように、定期的な将来のカーネルパッケージを除外する必要があります。一方で、システムの整合性を維持するために、すでにインストールされている通常のカーネルパッケージを含める必要があります。

このテンプレートを適用すると、この動作を実現するために必要な3つのフィルタが作成されます。

- ベースカーネルバージョンと同じ`kernel-default`パッケージを含むパッチを許可する
- `reboot_suggested`キーワードを含むパッチを拒否する
- `installhint(reboot-needed)`という名前を提供するパッケージを含むパッチを拒否する

ライブパッチ処理プロジェクトの設定方法の詳細については、[administration:content-lifecycle-examples.pdf](#)を参照してください。

プロシージャ: テンプレートの適用

1. SUSE Manager Web UIで、**コンテンツライフサイクル** > **フィルタ**に移動して、**[Create Filter]** (フィルタの作成) をクリックします。
2. ダイアログで、**[テンプレートを使用する]** をクリックします。それに応じて入力に変更されます。
3. **[プレフィクス]** フィールドに名前のプレフィクスを入力します。この値は、テンプレートによって作成された個々のフィルタの名前の前に追加されます。テンプレートがプロジェクトのコンテキストで適用されている場合、このフィールドにはプロジェクトラベルが事前に入力されます。
4. **[テンプレート]** フィールドで、**[SUSE製品に基づくライブパッチ処理]** を選択します。
5. **[製品]** フィールドで、ライブパッチ処理を設定する製品を選択します。
6. **[カーネル]** フィールドで、選択した製品で使用可能なバージョンのリストからカーネルバージョンを選択します。以降の通常のカーネルパッチを拒否するフィルタは、このバージョンに基づきます。
7. **[保存]** をクリックして、フィルタを作成します。
8. **コンテンツライフサイクル** > **プロジェクト**に移動して、プロジェクトを選択します。
9. **[フィルタの割り当て / 取り外し]** をクリックします。
10. 指定したプレフィクスを持つフィルタを3つ選択し、**[保存]** をクリックします。

8.3.2. システムに基づくライブパッチ処理

特定の登録済みシステムにインストールされているカーネルバージョンに基づいてライブパッチ処理プロジェクトを設定する場合、「システムに基づくライブパッチ処理」テンプレートを使用できます。

このテンプレートを適用すると、この動作を実現するために必要な3つのフィルタが作成されます。

- ベースカーネルバージョンと同じ`kernel-default`パッケージを含むパッチを許可する
- `reboot_suggested`キーワードを含むパッチを拒否する
- `installhint(reboot-needed)`という名前を提供するパッケージを含むパッチを拒否する

ライブパッチ処理プロジェクトの設定方法の詳細については、[administration:content-lifecycle-examples.pdf](#)を参照してください。

プロシージャ: テンプレートの適用

1. SUSE Manager Web UIで、**コンテンツライフサイクル** > **フィルタ**に移動して、**[Create Filter]** (フィルタの作成) をクリックします。
2. ダイアログで、**[テンプレートを使用する]** をクリックします。 それに応じて入力に変更されます。
3. **[プレフィクス]** フィールドに、名前のプレフィクスを入力します。 この値はテンプレートによって作成されたすべてのフィルタの名前の前に追加されます。 テンプレートがプロジェクトのコンテキストで適用されている場合は、このフィールドにはプロジェクトラベルが事前に入力されます。
4. **[テンプレート]** フィールドで、**[固有のシステムに基づくライブパッチ処理]** を選択します。
5. **[システム]** フィールドで、リストからシステムを選択するか、システム名の入力を開始して、オプションを絞り込みます。
6. **[カーネル]** フィールドで、選択したシステムにインストールされているバージョンのリストからカーネルバージョンを選択します。 以降の通常のカーネルパッチを拒否するフィルタは、このバージョンに基づきます。
7. **[保存]** をクリックして、フィルタを作成します。
8. **コンテンツライフサイクル** > **プロジェクト**に移動して、プロジェクトを選択します。
9. **[フィルタの割り当て/取り外し]** をクリックします。
10. 指定したプレフィクスを持つフィルタを3つ選択し、**[保存]** をクリックします。

8.3.3. デフォルトのAppStreamモジュール

プロジェクトに含まれているモジュラーリポジトリですべてのモジュールを使用できるようにする場合は、このフィルタテンプレートを使用してモジュールを自動的に追加できます。

このテンプレートを適用すると、モジュールごとにAppStreamフィルタとそのデフォルトストリームが作成されます。

このプロセスがプロジェクトのページから実行された場合、フィルタは自動的にプロジェクトに追加されません。追加されない場合は、作成されたフィルタを**コンテンツライフサイクル** > **フィルタ**に一覧表示し、必要に応じて任意のプロジェクトに追加できます。

個々のフィルタを編集して別のモジュールストリームを選択したり、ターゲットリポジトリからそのモジュールを除外するために完全に削除したりできます。



すべてのモジュールストリームが相互に互換性があるわけではないため、個々のストリームを変更すると、モジュール間依存関係を正常に解決できない可能性があります。この場合、プロジェクトの詳細ページのフィルタペインに問題を説明するエラーが表示され、すべてのモジュールの選択が互換性を持つようになるまでビルドボタンは無効になります。



Red Hat Enterprise Linux 9以降、モジュールには定義済みのデフォルトストリームがありません。したがって、Red Hat Enterprise Linux 9のソースでこのテンプレートを使用しても効果はありません。

AppStreamリポジトリをコンテンツライフサイクル管理で設定する方法の詳細については、[administration:content-lifecycle-examples.pdf](#)を参照してください。

プロシージャ: テンプレートの適用

1. SUSE ManagerのWeb UIで、**Content Lifecycle** > **Projects**に移動し、プロジェクトを選択します。
2. **[フィルタ]** セクションで、**[フィルタの割り当て/取り外し]**をクリックし、**[新しいフィルタの作成]**をクリックします。
3. ダイアログで、**[テンプレートを使用する]**をクリックします。それに応じて入力に変更されます。
4. **[プレフィクス]** フィールドに、名前のプレフィクスを入力します。この値はテンプレートによって作成されたすべてのフィルタの名前の前に追加されます。テンプレートがプロジェクトのコンテキストで適用されている場合は、このフィールドにはプロジェクトラベルが事前に入力されます。
5. **[テンプレート]** フィールドで、**[デフォルトのAppStreamモジュール]**を選択します。
6. **[チャンネル]** フィールドで、モジュールを取得するモジュラーチャンネルを選択します。このドロップダウンには、モジュラーチャンネルのみが表示されます。
7. **[保存]**をクリックして、フィルタを作成します。
8. **[フィルタ]** セクションまでスクロールして、新しく割り当てられたAppStreamフィルタを確認します。
9. 個々のフィルタを編集/削除して、ニーズに合わせてプロジェクトを調整できます。

8.4. コンテンツライフサイクルプロジェクトの構築

プロジェクトを作成し、環境を定義し、ソースとフィルタを割り当てたら、初めてプロジェクトを構築できます。

構築によって、割り当てられたソースにフィルタが適用され、プロジェクトの最初の環境にそれらが複製されます。

複数のコンテンツプロジェクトのソースとして同じベンダチャンネルを使用できます。この場合、SUSE Managerはクローンチャンネルごとに新しいパッチクローンを作成しません。代わりに、1つのパッチクローンがすべてのクローンチャンネル間で共有されます。これにより、パッチが撤回された場合やパッチ内のパッケージが変更された場合など、ベンダがパッチを変更すると問題が発生する可能性があります。コンテンツプロジェクトの1つを構築すると、コンテンツプロジェクトの他の環境や組織内の他のコンテンツプロジェクトチャンネルにチャンネルがある場合でも、クローンパッチを共有するすべてのチャンネルがデフォルトでオリジナルと同期されます。この動作は、組織の設定で自動パッチ同期をオフにすることで変更できます。パッチを共有しているすべてのチャンネルのパッチを後で手動で同期するには、**ソフトウェア** > **管理** > **チャンネル**に移動し、同期するチャンネルをクリックして、**[同期]** サブタブに移動します。パッチを手動で同期しても、パッチを共有するすべての組織チャンネルに影響します。

プロシージャ: コンテンツライフサイクルプロジェクトの構築

1. SUSE Manager Web UIで、**コンテンツライフサイクル** > **プロジェクト**に移動し、構築するプロジェクトを選択します。



プロジェクトを構築する前に、利用可能な環境があることを確認してください。

2. 割り当てられたソースとフィルタを確認し、**[ビルド]**をクリックします。
3. このビルドの変更または更新を説明するバージョンメッセージを提供します。
4. **[環境ライフサイクル]** セクションでビルドの進行状況を監視できます。

ビルドが完了すると、環境バージョンが1つ増え、ソフトウェアチャンネルなどのビルドソースをクライアントに割り当てることができます。

8.5. 環境のプロモート

プロジェクトが構築されると、構築されたソースを順次、環境にプロモートできます。

プロシージャ: 環境のプロモート

1. SUSE Manager Web UIで、**コンテンツライフサイクル** > **プロジェクト**に移動し、作業するプロジェクトを選択します。
2. **[環境ライフサイクル]** セクションで、後継環境にプロモートする環境を見つけ、**[Promote]** (プロモート) をクリックします。
3. **[環境ライフサイクル]** セクションでビルドの進行状況を監視できます。

8.6. 環境にクライアントを割り当てる

コンテンツライフサイクルプロジェクトを構築およびプロモートすると、SUSE Managerはソフトウェアチャンネルのツリーを作成します。クライアントを環境に追加するには、クライアントの **[システムの詳細]** ページの**ソフトウェア** > **ソフトウェアチャンネル**を使用して、ベースソフトウェアチャンネルと子ソフトウェアチャンネルをクライアントに割り当てます。



新たに追加されたクローンチャンネルはクライアントに自動的に割り当てられません。ソースを追加またはプロモートする場合は、チャンネル割り当てを手動で確認して更新する必要があります。

自動割り当ては、今後のバージョンでSUSE Managerに追加される予定です。

8.7. コンテンツライフサイクル管理の例

このセクションでは、コンテンツライフサイクル管理の使用法の一般的な例をいくつか示します。これらの例を使用して、独自にカスタマイズされた実装を構築します。

8.7.1. 月次パッチサイクルのプロジェクトの作成

月次パッチサイクルのプロジェクト例は、以下で構成されます。

- **By Date** (日付別) フィルタの作成
- プロジェクトへのフィルタの追加
- 新しいプロジェクトビルドへのフィルタの適用
- プロジェクトからのパッチの除外
- プロジェクトにパッチを含める

8.7.1.1. By Date (日付別) フィルタの作成

指定した日付以降にリリースされたすべてのパッチは **By Date** (日付別) フィルタによって除外されます。このフィルタは、月次パッチサイクルに従うコンテンツライフサイクルプロジェクトに役立ちます。

プロシージャ: By Date (日付別) フィルタの作成

1. SUSE Manager Web UIで、**コンテンツライフサイクル** > **フィルタ**に移動して、**[Create Filter]** (フィルタの作成) をクリックします。
2. **[フィルタ名]** フィールドに、フィルタの名前を入力します。たとえば、**Exclude patches by date** (日付別にパッチを除外する)。
3. **[フィルタタイプ]** フィールドで、**[Patch (Issue date)]** (パッチ(発行日)) を選択します。
4. **[マッチャー]** フィールドでは、**[later or equal]** (それ以降) が自動選択されます。
5. 日時を選択します。
6. **[保存]** をクリックします。

8.7.1.2. プロジェクトへのフィルタの追加

プロシージャ: プロジェクトへのフィルタの追加

1. SUSE Manager Web UIで、**コンテンツライフサイクル** > **プロジェクト**に移動して、リストからプロジェクトを選択します。
2. **[フィルタの割り当て/取り外し]** リンクをクリックして、すべての使用可能なフィルタを表示します
3. 新しい **[Exclude patches by date]** (日付別にパッチを除外する) を選択します。
4. **[保存]** をクリックします。

8.7.1.3. 新しいプロジェクトビルドへのフィルタの適用

新しいフィルタがフィルタリストに追加されますが、プロジェクトに適用する必要があります。フィルタを適用するには、最初の環境を構築する必要があります。

プロシージャ: フィルタの使用

1. **[ビルド]** をクリックして、最初の環境を構築します。
2. オプション: メッセージを追加します。メッセージを使用して、ビルド履歴を追跡できます。
3. テストサーバで新しいチャンネルを使用して、フィルタが正しく機能していることを確認します。
4. **[Promote]** (プロモート) をクリックして、次の環境にコンテンツを移動します。多数のフィルタがある場合、または非常に複雑な場合は、ビルドに時間がかかります。

8.7.1.4. プロジェクトからのパッチの除外

テストは、問題を発見するのに役立つ場合があります。問題が見つかった場合は、**by date** (日付別) フィルタの前にリリースされた問題のパッチを除外します。

プロシージャ: パッチの除外

1. SUSE Manager Web UIで、**コンテンツライフサイクル** > **フィルタ** に移動して、**[Create Filter]** (フィルタの作成) をクリックします。
2. **[フィルタ名]** フィールドに、フィルタの名前を入力します。たとえば、**[Exclude openjdk patch]** (openjdkパッチの除外)。
3. **[フィルタタイプ]** フィールドで、**[Patch (Advisory Name)]** (パッチ(アドバイザリ名)) を選択します。
4. **[マッチャー]** フィールドで、**[等しい]** を選択します。
5. **[アドバイザリ名]** フィールドに、アドバイザリの名前を入力します。たとえば、**SUSE-15-2019-1807**。
6. **[保存]** をクリックします。
7. **コンテンツライフサイクル** > **プロジェクト** に移動して、プロジェクトを選択します。
8. **[フィルタの割り当て/取り外し]** リンクをクリックして、**[Exclude openjdk patch]** (openjdkパッチの除外) を選択し、**[保存]** をクリックします。

[ビルド] ボタンを使用してプロジェクトを再構築すると、新しいフィルタが、以前に追加した **[by date]** (日付別) フィルタとともに使用されます。

8.7.1.5. プロジェクトにパッチを含める

この例では、セキュリティアラートを受信しています。重要なセキュリティパッチが、現在作業している月の最初の日から数日後にリリースされました。新しいパッチの名前は**SUSE-15-2019-2071**です。この新しいパッチを環境に含める必要があります。



[許可] フィルタ規則は、**[拒否]** フィルタ規則の除外機能を上書きします。詳細については、**Administration > Content-lifecycle** を参照してください。

プロシージャ: プロジェクトにパッチを含める

1. SUSE Manager Web UIで、**コンテンツライフサイクル** > **フィルタ** に移動して、**[Create Filter]** (フィルタの作成) をクリックします。
2. **[フィルタ名]** フィールドに、フィルタの名前を入力します。たとえば、**Include kernel security fix**

(カーネルセキュリティ修正を含める)。

3. [フィルタタイプ] フィールドで、[Patch (Advisory Name)] (パッチ(アドバイザリ名)) を選択します。
4. [マッチャー] フィールドで、[等しい] を選択します。
5. [アドバイザリ名] フィールドに、「SUSE-15-2019-2071」と入力し、[許可] をオンにします。
6. [保存]をクリックして、フィルタを保存します。
7. コンテンツライフサイクルのプロジェクトに移動して、リストからプロジェクトを選択します。
8. [フィルタの割り当て/取り外し]をクリックして、[Include kernel security patch] (カーネルセキュリティパッチを含める) を選択します。
9. [保存]をクリックします。
10. [ビルド]をクリックして、環境を再構築します。

8.7.2. 既存の月次パッチサイクルの更新

月次パッチサイクルが完了すると、次の月のパッチサイクルを更新できます。

プロシージャ: 月次パッチサイクルの更新

1. [by date] (日付別) フィールドで、フィルタの日付を次の月に変更します。または、新しいフィルタを作成して、プロジェクトへの割り当てを変更します。
2. SUSE-15-2019-1807の除外フィルタをプロジェクトから取り外すことができるかどうか確認します。この問題を解決するために使用できる新しいパッチがある場合があります。
3. 以前に追加した [許可] フィルタを取り外します。パッチはデフォルトで含まれています。
4. プロジェクトを再構築して、来月のパッチを適用した新しい環境を作成します。

8.7.3. ライブパッチ処理でプロジェクトを強化

このセクションでは、ライブパッチ処理用の環境を作成するためのフィルタの設定について説明します。

ライブパッチ処理を使用する準備をしている場合には、いくつかの重要な考慮事項があります



- システムでカーネルバージョンを1つだけ使用してください。 ライブパッチ処理パッケージは、特定のカーネルとともにインストールされます。
- ライブパッチ処理の更新は、1つのパッチとして出荷されます。
- 新しいシリーズのライブパッチ処理カーネルを開始するカーネルパッチごとに、**要再起動**フラグが表示されます。 これらのカーネルパッチには、ライブパッチ処理ツールが付属しています。 それらをインストールしたら、翌年になる前に少なくとも1回システムを再起動する必要があります。
- インストール済みカーネルバージョンに一致するライブパッチ更新のみをインストールします。
- ライブパッチは、スタンドアロンパッチとして提供されます。 現在インストールされているカーネルバージョンよりも新しいカーネルバージョンの通常のカーネルパッチをすべて除外する必要があります。

8.7.3.1. より新しいカーネルバージョンのパッケージを除外する

この例では、`SUSE-15-2019-1244`パッチでシステムを更新します。 このパッチには、`kernel-default-4.12.14-150.17.1-x86_64`が含まれています。

より新しいバージョンの`kernel-default`を含むすべてのパッチを除外する必要があります。

プロシージャ: より新しいカーネルバージョンのパッケージを除外する

1. SUSE Manager Web UIで、**コンテンツライフサイクル** > **フィルタ**に移動して、**[Create Filter]** (フィルタの作成) をクリックします。
2. **[フィルタ名]** フィールドに、フィルタの名前を入力します。たとえば、**Exclude kernel greater than 4.12.14-150.17.1** (4.12.14-150.17.1より新しいカーネルを除外する)。
3. **[フィルタタイプ]** フィールドで、**[Patch (Contains Package)]** (パッチ(パッケージを含む)) を選択します。
4. **[マッチャー]** フィールドで、**[version greater than]** (指定したものより新しいバージョン) を選択します。
5. **[パッケージ名]** フィールドに、「`kernel-default`」と入力します。
6. **[エポック]** フィールドを空のままにします。
7. **[バージョン]** フィールドに、「`4.12.14`」と入力します。
8. **[リリース]** フィールドに、「`150.17.1`」と入力します。
9. **[保存]** をクリックして、フィルタを保存します。
10. **コンテンツライフサイクル** > **プロジェクト**に移動して、プロジェクトを選択します。
11. **[フィルタの割り当て/取り外し]** をクリックします。
12. **[Exclude kernel greater than 4.12.14-150.17.1]** (4.12.14-150.17.1より新しいカーネルを除外する

) を選択して、**[保存]**をクリックします。

[ビルド]をクリックすると、新しい環境が作成されます。新しい環境には、インストールしたバージョンまでのすべてのカーネルパッチが含まれています。



より新しいカーネルバージョンのすべてのカーネルパッチは削除されます。ライブパッチ処理カーネルは、シリーズの最初でない限り、引き続き使用できます。



このプロシージャはフィルタテンプレートを使用して自動化できます。ライブパッチ処理フィルタテンプレートの適用方法の詳細については、[administration:content-lifecycle.pdf](#)を参照してください。

8.7.4. ライブパッチ処理用の新しいカーネルバージョンに切り替える

特定のカーネルバージョン用のライブパッチ処理は、1年間のみ利用できます。1年後、システムのカーネルを更新する必要があります。以下の環境変更を実行します。

プロシージャ: 新しいカーネルバージョンに切り替える

1. アップグレードするカーネルバージョンを決定します。例: [4.12.14-150.32.1](#)
2. 新しいカーネルバージョンフィルタを作成します。
3. 以前のフィルタ **[Exclude kernel greater than 4.12.14-150.17.1]** (4.12.14-150.17.1より新しいカーネルを除外する) を取り外し、新しいフィルタを割り当てます。

[ビルド]をクリックして、環境を再構築します。新しい環境には、選択した新しいカーネルバージョンまでのすべてのカーネルパッチが含まれています。これらのチャンネルを使用しているシステムには、インストールに使用できるカーネル更新があります。アップグレードを実行した後で、システムを再起動する必要があります。新しいカーネルは1年間有効です。その年にインストールされたすべてのパッケージは、現在のライブパッチ処理カーネルフィルタと一致します。

8.7.5. AppStream フィルタ

コンテンツライフサイクル管理プロジェクトでは、AppStream フィルタを使用して、モジュラーリポジトリを通常のリポジトリに変換できます。これはパッケージをリポジトリに保持し、モジュールのメタデータを削除することにより行われます。その結果作成されたリポジトリは、通常のリポジトリと同じ方法でSUSE Managerで使用できます。



SUSE Manager 5.0から、AppStreamリポジトリはWeb UI全体でネイティブにサポートされています。

したがって、このプロセスはAppStreamリポジトリを操作するために必須ではありません。

AppStream フィルタはターゲットリポジトリに含める単一のモジュールストリームを選択します。複数のフィルタを追加して、複数のモジュールストリームを選択できます。

CLMプロジェクトでAppStreamフィルタを使用しない場合は、モジュラーソースのモジュールメタデータは未加工のままで、ターゲットリポジトリには同じモジュールメタデータが含まれます。CLMプロジェクトで少なくとも1つのAppStreamフィルタが有効になっている限り、すべてのターゲットリポジトリが通常のリポジトリに変換されます。

場合によっては、どのモジュールのパッケージも含めずに通常のリポジトリを構築したい場合があります。これを行うには、マッチャー **なし (モジュール化を無効にする)** を使用して AppStream フィルタを追加します。これにより、ターゲットリポジトリ内のすべてのモジュールが無効になります。これは、ほとんどのモジュールのデフォルトバージョンが通常のパッケージとして AppStream リポジトリにすでに含まれている、Red Hat Enterprise Linux 9 のクライアントに特に役立ちます。

AppStream フィルタを使用するには、Red Hat Enterprise Linux AppStreams などのモジュラーリポジトリを含む CLM プロジェクトが必要です。開始する前に、必要なモジュールがソースとして含まれていることを確認してください。

プロシージャ: AppStream フィルタの使用

1. SUSE Manager Web UI で、Red Hat Enterprise Linux 8 または 9 CLM プロジェクトに移動します。プロジェクトに AppStream チャンネルが含まれていることを確認します。
2. **[Create Filter]** (フィルタの作成) をクリックし、次のパラメータを使用します。
 - **[フィルタ名]** フィールドには、新しいフィルタの名前を入力します。
 - **[フィルタタイプ]** フィールドで、**[Module (Stream)]** (モジュール(ストリーム)) を選択します。
 - **[マッチャー]** フィールドで、**[等しい]** を選択します。
 - **[モジュール名]** フィールドに、モジュール名を入力します。たとえば、`postgresql`。
 - **[ストリーム]** フィールドに、目的のストリームの名前を入力します。たとえば、`10`。このフィールドを空のままにする場合、モジュールのデフォルトのストリームが選択されます。
3. **[保存]** をクリックして、新しいフィルタを作成します。
4. **コンテンツライフサイクル > プロジェクト** に移動して、プロジェクトを選択します。
5. **[フィルタの割り当て / 取り外し]** をクリックし、新しい AppStream フィルタを選択して、**[保存]** をクリックします。

[Create/Edit Filter] (フィルタの作成/編集) フォームのブラウズ機能を使用して、モジュラーチャンネルで使用可能なモジュールストリームのリストからモジュールを選択できます。

プロシージャ: 使用可能なモジュールストリームのブラウズ

1. SUSE Manager Web UI で、Red Hat Enterprise Linux 8 または 9 CLM プロジェクトに移動します。プロジェクトに AppStream チャンネルが含まれていることを確認します。
2. **[Create Filter]** (フィルタの作成) をクリックし、次のパラメータを使用します。
 - **[フィルタ名]** フィールドには、新しいフィルタの名前を入力します。
 - **[フィルタタイプ]** フィールドで、**[Module (Stream)]** (モジュール(ストリーム)) を選択します。

- [マッチャー] フィールドで、[等しい] を選択します。
3. [Browse available modules] (使用可能なモジュールをブラウズ) をクリックして、すべてのモジュラーチャンネルを表示します。
 4. モジュールとストリームをブラウズするチャンネルを選択します。
 - [モジュール名] フィールドで、検索するモジュール名の入力を開始するか、リストから選択します。
 - [ストリーム] フィールドで、検索するストリーム名の入力を開始するか、リストから選択します。



チャンネル選択はモジュールのブラウズのみを目的としています。 選択したチャンネルはフィルタとともに保存されず、CLMプロセスには影響しません。

ターゲットリポジトリに含める他のモジュールストリーム用に追加のAppStreamフィルタを作成できます。 選択したストリームが依存するモジュールストリームは自動的に含まれます。



競合する、互換性のない、または欠落しているモジュールストリームを指定しないように注意してください。 たとえば、同じモジュールから2つのストリームを選択すると無効になります。

プロシージャ: モジュール化の無効化

1. SUSE Manager Web UIで、Red Hat Enterprise Linux 8または9 CLMプロジェクトに移動します。 プロジェクトにAppStreamチャンネルが含まれていることを確認します。
2. [Create Filter] (フィルタの作成) をクリックし、次のパラメータを使用します。
 - [フィルタ名] フィールドには、新しいフィルタの名前を入力します。
 - [フィルタタイプ] フィールドで、[Module (Stream)] (モジュール(ストリーム)) を選択します。
 - [マッチャー] フィールドで、[なし (モジュール化を無効にする)] を選択します。
3. [保存] をクリックして、新しいフィルタを作成します。
4. コンテンツライフサイクル > プロジェクトに移動して、プロジェクトを選択します。
5. [フィルタの割り当て/取り外し] をクリックし、新しいAppStreamフィルタを選択して、[保存] をクリックします。

これにより、モジュールに属するパッケージを除いて、モジュールのメタデータがターゲットリポジトリから効率的に削除されます。

Web UIの[ビルド] ボタンを使用してCLMプロジェクトを構築する場合、ターゲットリポジトリは、選択したモジュールストリームからのパッケージを含む、モジュールを含まない通常のリポジトリです。



Red Hat Enterprise Linux 8のプロジェクトでモジュール化を完全に無効にすると、一部のモジュールが Red Hat Enterprise Linux 8での正常な動作に不可欠であるため、環境に不具合が生じる可能性があります。

Chapter 9. 切断されたセットアップ

SUSE Managerは、インターネット接続できない場合は、切断された環境で使用できます。

リポジトリミラーリングツール(RMT)はSUSE Linux Enterprise 15以降で使用できます。RMTは、古いSUSE Linux Enterpriseインストールで使用できる、サブスクリプション管理ツール(SMT)に代わるものです。

切断されたSUSE Managerセットアップでは、RMTまたはSMTは外部ネットワークを使用してSUSE Customer Centerに接続します。すべてのソフトウェアチャンネルとリポジトリは、リムーバブルストレージデバイスに同期されます。その後、ストレージデバイスを使用して、切断されたSUSE Managerのインストールを更新できます。

このセットアップにより、SUSE Managerのインストールをオフラインで、切断された環境のままにできます。



SUSE Managerサーバを直接管理するには、RMTまたはSMTインスタンスを使用する必要があります。カスケードで2番目のRMTまたはSMTインスタンスを管理するために使用することはできません。

RMTの詳細については、<https://documentation.suse.com/sles/15-SP4/html/SLES-all/book-rmt.html>を参照してください。

9.1. SCCからチャンネルとリポジトリを同期する

9.1.1. RMTの同期

SUSE Linux Enterprise 15インストールでRMTを使用して、SUSE Linux Enterprise 12以降を実行しているクライアントを管理できます。

SUSE Managerのインストールごとに専用RMTインスタンスを設定することをお勧めします。

プロシージャ: RMTの設定

1. RMTインスタンスで、RMTパッケージをインストールします。

```
zypper in rmt-server
```

2. YaSTを使用してRMTを設定します。

```
yast2 rmt
```

3. プロンプトに従ってインストールを完了します。

RMTの設定の詳細については、<https://documentation.suse.com/sles/15-SP4/html/SLES-all/book-rmt.html>を参照してください。

プロシージャ: RMTとSCCの同期

1. RMTインスタンスで、組織で使用可能なすべての製品とリポジトリを一覧にします。

```
rmt-cli products list --all
rmt-cli repos list --all
```

2. 組織で使用可能なすべての更新を同期します。

```
rmt-cli sync
```

systemdを使用して定期的に同期するようにRMTを設定することもできます。

3. 必要な製品を有効にします。たとえば、SLES 15を有効にするには、次のようにします。

```
rmt-cli product enable sles/15/x86_64
```

4. リムーバブルストレージに同期されたデータをエクスポートします。この例では、ストレージメディアは/mnt/usbにマウントされます。

```
rmt-cli export data /mnt/usb
```

5. リムーバブルストレージに有効なリポジトリをエクスポートします。

```
rmt-cli export settings /mnt/usb
rmt-cli export repos /mnt/usb
```



外部ストレージが、RMTユーザが書き込み可能なディレクトリにマウントされていることを確認します。RMTユーザ設定は、`/etc/rmt.conf`の`cli`セクションで変更できます。

9.1.2. SMTの同期

SMTはSUSE Linux Enterprise 12に含まれ、SUSE Linux Enterprise 10以降を実行しているクライアントを管理するために使用できます。

SMTでは、リポジトリとパッケージを同期するために、SMTインスタンス上にローカルミラーディレクトリを作成する必要があります。

SMTのインストールおよび設定に関する詳細については、<https://documentation.suse.com/sles/12-SP5/html/SLES-all/book-smt.html>を参照してください。

プロシージャ: SMTとSCCの同期

1. SMTインスタンスで、データベース置換ファイルを作成します。

```
smt-sync --createdbreplacementfile /tmp/dbrepl.xml
```

2. 同期されたデータをリムーバブルストレージにエクスポートします。この例では、ストレージメディアは `/mnt/usb` にマウントされます。

```
smt-sync --todir /mnt/usb
smt-mirror --dbreplfile /tmp/dbrepl.xml --directory /mnt/usb \
--fromlocalsmt -L /var/log/smt/smt-mirror-export.log
curl https://scc.suse.com/suma/product_tree.json -o /mnt/usb/product_tree.json
```



外部ストレージがRMTユーザによって書き込み可能なディレクトリにマウントされていることを確認します。 `/etc/smt.conf` のSMTユーザ設定を変更できます。

9.2. 必須チャンネル

SUSE Managerが指定されたチャンネルを同期できるようにするには、対応するSUSE Managerクライアントツールチャンネルが必要です。これらのチャンネルが有効でない場合、SUSE Managerはその製品を検出できない場合があります。

次のコマンドを実行して、これらの必須チャンネルを有効にします。

SLES 12およびSLES for SAPやSLE HPCなどのSLES 12に基づく製品

```
RMT:rmt-cli products enable sle-manager-tools/12/x86_64
```

```
SMT:smt repos -p sle-manager-tools,12,x86_64
```

SLES 15およびSLES for SAPやSLE HPCなどのSLES 15に基づく製品

```
RMT:rmt-cli products enable sle-manager-tools/15/x86_64
```

```
SMT:smt repos -p sle-manager-tools,15,x86_64
```

次に、チャンネルをミラーリングしてエクスポートします。

他のディストリビューションまたはアーキテクチャを有効にすることができます。製品チャンネルまたはリポジトリのミラーリングを有効にする方法の詳細については、次のドキュメントを参照してください。

RMT

<https://documentation.suse.com/sles/15-SP4/html/SLES-all/cha-rmt-mirroring.html#sec-rmt-mirroring-enable-disable>

SMT

<https://documentation.suse.com/sles/12-SP5/single-html/SLES-smt/index.html#smt-mirroring-manage-domirror>

9.3. 切断されたサーバ

SUSE Managerを切断済みのサーバとして設定するには、Air-gapped配備の手順に従います。

9.3.1. 配備

切断済みのサーバは、提供されたイメージを使用して仮想マシン(VM)として配備することをお勧めします。SUSE ManagerサーバのAir-gapped配備については、**Installation-and-upgrade > Container-deployment**を参照してください。

最後のコマンドは**--mirrorPath**オプションを指定して実行し、`</media/disk>`はご使用のマウントポイントに置き換えることに留意してください。

```
mgradm install podman --mirrorPath </media/disk>
```

9.3.2. 同期

SUSE Customer Centerデータでロードされたリムーバブルメディアがある場合は、それを使用して切断されたサーバを同期できます。



同期に使用するリムーバブルメディアは常に同じマウントポイントで使用できる必要があります。ストレージメディアがマウントされていない場合は、同期をトリガしないでください。これにより、データが破損します。

プロシージャ: 切断されたサーバの同期

1. Tomcatサービスを再起動します。

```
mgrctl exec -ti -- systemctl restart tomcat
```

2. ローカルデータを更新します。

```
mgrctl exec -ti -- mgr-sync refresh
```

3. 同期を実行します。

```
mgrctl exec -ti -- mgr-sync list channels  
mgrctl exec -ti -- mgr-sync add channel channel-label
```



`server.susemanager.fromdir`が設定されている場合、SUSE ManagerはSUSE Customer Center資格情報が有効かどうかを確認できないことに注意してください。代わりに、警告サインが表示され、SCCオンラインチェックは実行されません。

Chapter 10. ディスク容量管理

ディスク容量が不足すると、SUSE Managerデータベースとファイル構造に深刻な影響を及ぼす可能性があります。場合によっては回復できなくなります。

SUSE Managerは、空きディスク容量のために一部のディレクトリを監視します。監視するディレクトリと作成される警告を変更できます。すべての設定は、`/etc/rhn/rhn.conf`設定ファイルで行われます。

監視対象ディレクトリのいずれかの使用可能容量が警告しきい値を下回ると、設定された電子メールアドレスにメッセージが送信され、サインインページの上部に通知が表示されます。

10.1. 監視対象ディレクトリ

デフォルトでは、SUSE Managerは以下のディレクトリを監視します。

- `/var/lib/pgsql`
- `/var/pacewalk`
- `/var/cache`
- `/srv`

監視するディレクトリは、`spacecheck_dirs`パラメータで変更できます。スペースで区切って、複数のディレクトリを指定できます。

例:

```
spacecheck_dirs = /var/lib/pgsql /var/pacewalk /var/cache /srv
```

ボリュームの詳細については、<https://documentation.suse.com/suma/5.0/en/suse-manager/installation-and-upgrade/container-management/persistent-container-volumes.html>を参照してください。

10.2. しきい値

デフォルトでは、SUSE Managerは、監視対象ディレクトリで使用可能な合計容量の10%未満になると警告を作成します。また、監視対象ディレクトリの空き容量が5%未満になると、クリティカルアラートが作成されます。

これらのアラートしきい値は`spacecheck_free_alert`および`spacecheck_free_critical`パラメータを使用して変更できます。

例:

```
spacecheck_free_alert = 10  
spacecheck_free_critical = 5
```

10.3. サービスのシャットダウン

デフォルトでは、クリティカルアラートしきい値に達すると、SUSE Managerはspacewalkサービスをシャットダウンします。

この動作は、`spacecheck_shutdown`パラメータで変更できます。 `true`の値はシャットダウン機能を有効にします。その他の値は無効にします。

例:

```
spacecheck_shutdown = true
```

10.4. スペースチェックの無効化

スペースチェックツールはデフォルトで有効になっています。 次のコマンドを使用して完全に無効にできません。

```
systemctl stop spacewalk-diskcheck.timer  
systemctl disable spacewalk-diskcheck.timer
```

`spacewalk-diskcheck.timer`を無効にすると、アラートのしきい値に達した場合に定期的な電子メールアラートが停止しますが、警告通知はサインインページの上部に表示されます。

Chapter 11. イメージの構築と管理

11.1. イメージの構築の概要

SUSE Managerでは、システム管理者はコンテナおよびOSイメージを構築し、結果をイメージストアにプッシュできます。

プロシージャ: イメージの構築とプッシュ

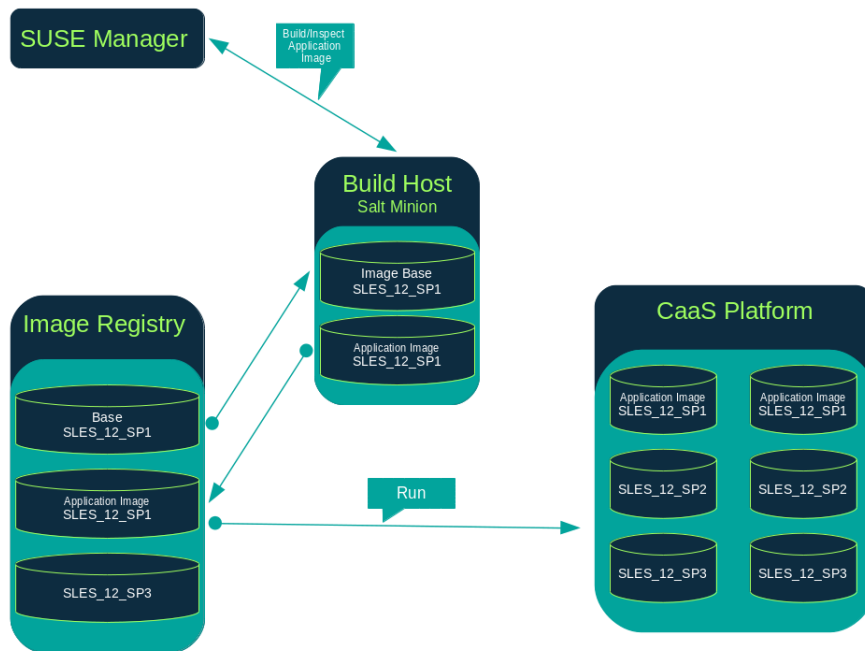
1. イメージストアを定義します。
2. イメージプロファイルを定義し、それをソース(gitリポジトリまたはディレクトリのいずれか)に関連付けます。
3. イメージを構築します。
4. イメージをイメージストアにプッシュします。

SUSE Managerでは、2つの異なるビルドタイプ(Dockerfile、およびKiwiイメージシステム)をサポートしています。

Kiwiビルドタイプは、システムイメージ、仮想イメージ、およびその他のイメージの構築に使用されます。Kiwiビルドタイプのイメージストアは、サーバ上の`/srv/www/os-images`にあるファイルシステムディレクトリとして事前定義されています。SUSE Managerは、`://<SERVER-FQDN>/os-images/`からHTTPS経由でイメージストアを提供します。イメージストアの場所は固有であり、カスタマイズできません。

イメージは`/srv/www/os-image/ORGANIZATION-ID`に保存されます。

11.2. コンテナイメージ



11.2.1. 要件

コンテナ機能は、SUSE Linux Enterprise Server 12以降を実行しているSaltクライアントで使用できます。開始する前に、ご使用の環境が次の要件を満たしていることを確認してください。

- Dockerfileと設定スクリプトを含む発行済みのgitリポジトリ。リポジトリはパブリックにもプライベートにもでき、GitHub、GitLab、またはBitBucketでホストする必要があります。
- Dockerレジストリなどの適切に設定されたイメージストア。

コンテナの詳細については、<https://documentation.suse.com/container/all/html/Container-guide/>を参照してください。

11.2.2. 構築ホストの作成

SUSE Managerでイメージを構築するには、構築ホストを作成して設定する必要があります。コンテナビルドホストは、SUSE Linux Enterprise 12以降を実行しているSaltクライアントです。このセクションでは、構築ホストの初期設定について説明します。

構築ホスト上のオペレーティングシステムは、ターゲットイメージ上のオペレーティングシステムと一致する必要があります。



たとえば、SUSE Linux Enterprise Server 15 (SP2以降)のOSバージョンを実行している構築ホスト上にSUSE Linux Enterprise Server 15ベースのイメージを構築します。SUSE Linux Enterprise Server 12 SP5またはSUSE Linux Enterprise Server 12 SP4 OSバージョンを実行している構築ホスト上にSUSE Linux Enterprise Server 12ベースのイメージを構築します。

クロスアーキテクチャビルドはサポートされていません。

SUSE Manager Web UIから、次のステップを実行して、構築ホストを設定します。

プロシージャ: ホストの構築

1. システム › 概要ページから、構築ホストとして指定されるSaltクライアントを選択します。
2. 選択したクライアントの [システムの詳細] ページから、コンテナモジュールを割り当てます。 **ソフトウェア** › **ソフトウェアチャンネル**に移動して、コンテナモジュール(たとえば、[SLE-Module-Containers15-Pool] と [SLE-Module-Containers15-Updates])を有効にします。 [サブスクリプションの変更]をクリックして確定します。
3. システムの詳細 › プロパティページから、[付属エンタイトルメント] リストからコンテナビルドホストを有効にします。[プロパティの更新]をクリックして確定します。
4. **highstate**を適用して必要なすべてのパッケージをインストールします。 システムの詳細ページで、**状態** › **highstate**を選択し、[highstate の適用] をクリックします。または、SUSE Managerサーバのコマンドラインからhighstateを適用します。

```
salt '$your_client' state.highstate
```

11.2.3. コンテナ用アクティベーションキーの作成

SUSE Managerを使用して構築されたコンテナは、イメージを構築するときに、アクティベーションキーに関連付けられたチャンネルをリポジトリとして使用します。このセクションでは、この目的のためにアドホックアクティベーションキーを作成する方法について説明します。



コンテナを構築するには、SUSE Manager Default以外のチャンネルに関連付けられているアクティベーションキーが必要です。

プロシージャ: アクティベーションキーの作成

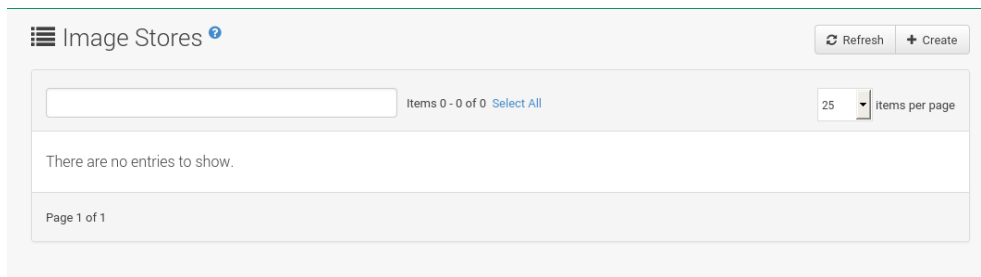
1. システム › アクティベーションキーを選択します。
2. [キーの作成]をクリックします。
3. [説明] と [キー] 名を入力します。ドロップダウンメニューを使用してこのキーと関連付ける [ベースチャンネル] を選択します。

4. [アクティベーションキーの作成]で確定します。

詳細については、**Client-configuration > Activation-keys**を参照してください。

11.2.4. イメージストアの作成

すべての構築されたイメージは、イメージストアにプッシュされます。このセクションでは、イメージストアの作成について説明します。



プロシージャ: イメージストアの作成

1. **イメージ > ストア**を選択します。
2. [作成] をクリックして、新しいストアを作成します。

3. [ラベル] フィールドにイメージストアの名前を定義します。
4. コンテナレジストリホスト(内部か外部)の完全修飾ドメイン名(FQDN)として、[URI] フィールドに入力して、イメージレジストリへのパスを指定します。

registry.example.com

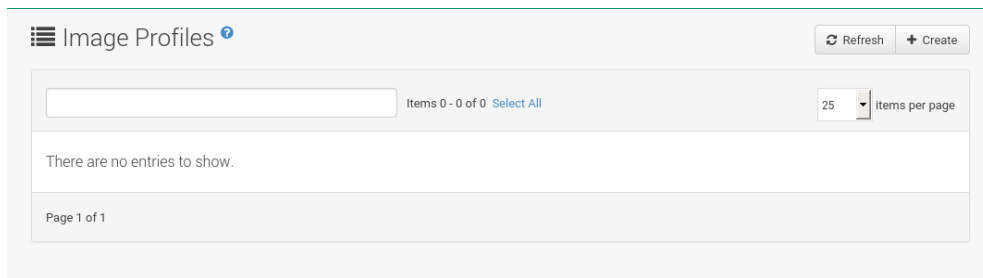
レジストリURI を使用して、すでに使用されているレジストリのイメージストアを指定することもできます。

registry.example.com:5000/myregistry/myproject

5. [作成] をクリックして、新しいイメージストアを追加します。

11.2.5. イメージプロファイルの作成

すべてのコンテナイメージは、構築手順を含む、イメージプロファイルを使用して構築されます。このセクションでは、SUSE Manager Web UIでイメージプロファイルを作成する方法について説明します。



プロセス: イメージプロファイルの作成

1. イメージプロファイルを作成するには、**イメージ** > **プロファイル**を選択し、**[作成]**をクリックします。

2. **[ラベル]** フィールドに入力して、イメージプロファイルの名前を指定します。



コンテナイメージタグがmyproject/myimageなどの形式である場合は、イメージストアのレジストリURIに/myprojectサフィックスが含まれていることを確認します。

3. **[イメージタイプ]** としてDockerfileを使用します。
4. ドロップダウンメニューを使用して、**[ターゲットのイメージストア]** フィールドからレジストリを選択します。
5. **[パス]** フィールドに、GitHub、GitLab、またはBitBucketリポジトリのURLを入力します。URLはhttp、https、またはトークン認証URLである必要があります。以下の形式のいずれかを使用します。

GitHubパスオプション

- GitHubシングルユーザプロジェクトリポジトリ

```
https://github.com/USER/project.git#branchname:folder
```

- GitHub組織プロジェクトリポジトリ

```
https://github.com/ORG/project.git#branchname:folder
```

- GitHubトークン認証

gitリポジトリがプライベートな場合、認証を含むようにプロファイルのURLを変更します。GitHubトークンで認証するには次のURL形式を使用します。

```
https://USER:<AUTHENTICATION_TOKEN>@github.com/USER/project.git#master:/container/
```

- GitLabシングルユーザプロジェクトリポジトリ

```
https://gitlab.example.com/USER/project.git#master:/container/
```

- GitLabグループプロジェクトリポジトリ

```
https://gitlab.example.com/GROUP/project.git#master:/container/
```

- GitLabトークン認証

gitリポジトリがプライベートで、パブリックにアクセスできない場合は、認証を含むようにプロファイルのgit URLを変更する必要があります。GitLabトークンで認証するには、次のURL形式を使用します。

```
https://gitlab-ci-token:<AUTHENTICATION_TOKEN>@gitlab.example.com/USER/project.git#master:/container/
```



gitブランチを指定しない場合は、デフォルトで**master**ブランチが使用されます。**folder**が指定されていない場合、イメージソース(Dockerfileソース)はGitHubまたはGitLabチェックアウトのルートディレクトリにあると想定されます。

6. [アクティベーションキー] を選択します。アクティベーションキーは、プロファイルを使用するイメージが正しいチャンネルとパッケージに確実に割り当てられるようにします。



アクティベーションキーをイメージプロファイルに関連付けると、プロファイルを使用するすべてのイメージで正しいソフトウェアチャンネルとチャンネル内のすべてのパッケージが確実に使用されるようになります。

7. [作成] ボタンをクリックします。

11.2.5.1. Dockerfileソースの例

再利用できるイメージプロファイルは<https://github.com/SUSE/manager-build-profiles>で公開されています。



ARGパラメータは、構築されたイメージがSUSE Managerが提供する目的のリポジトリに関連付けられていることを確認します。 ARGパラメータを使用すると、構築ホスト自体で使用されるSUSE Linux Enterprise Serverのバージョンとは異なる可能性のあるSUSE Linux Enterprise Serverのイメージバージョンを構築することもできます。

例: リポジトリファイルを示すARG repoパラメータとechoコマンドは、目的のチャンネルバージョンの正しいパスを作成し、リポジトリファイルに挿入します。

リポジトリは、イメージプロファイルに割り当てたアクティベーションキーによって決定されます。

```
FROM registry.example.com/sles12sp2
MAINTAINER Tux Administrator "tux@example.com"

### Begin: These lines Required for use with {productname}

ARG repo
ARG cert

# Add the correct certificate
RUN echo "$cert" > /etc/pki/trust/anchors/RHN-ORG-TRUSTED-SSL-CERT.pem

# Update certificate trust store
RUN update-ca-certificates

# Add the repository path to the image
RUN echo "$repo" > /etc/zypp/repos.d/susemanager:dockerbuild.repo

### End: These lines required for use with {productname}

# Add the package script
ADD add_packages.sh /root/add_packages.sh

# Run the package script
RUN /root/add_packages.sh

# After building remove the repository path from image
RUN rm -f /etc/zypp/repos.d/susemanager:dockerbuild.repo
```

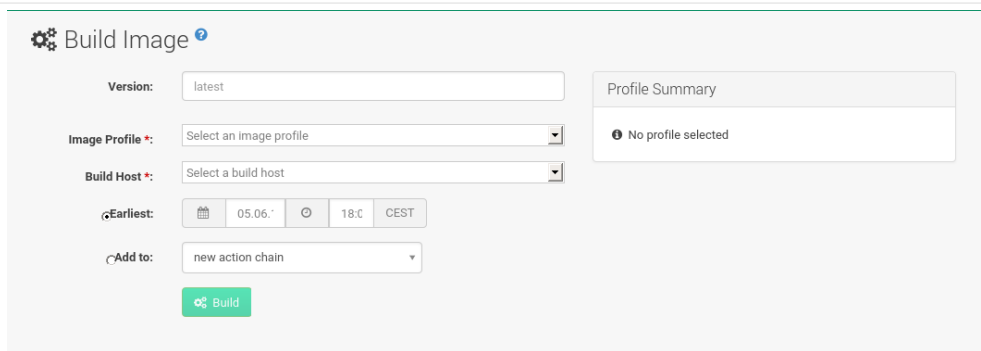
11.2.5.2. カスタム情報のキーと値のペアをDocker buildargsとして使用する

カスタム情報のキーと値のペアを割り当てて、イメージプロファイルに情報を添付できます。 さらに、これらのキーと値のペアは、Dockerビルドコマンドにbuildargsとして渡されます。

使用可能なカスタム情報キーと追加のキーの作成に関する詳細については、[Reference](#) › [Systems](#)を参照してください。

11.2.6. イメージの構築

イメージを構築するには、2つの方法があります。 左側のナビゲーションバーからイメージ › ビルドを選択するか、イメージ › プロファイルリストのビルドアイコンをクリックします。



プロシージャ: イメージのビルド

1. **イメージ** > **ビルド** を選択します。
2. デフォルトの **latest** (コンテナにのみ関連する) 以外のバージョンを使用する場合は、別のタグ名を追加します。
3. **[Build Profile]** (ビルドプロファイル) と **[構築ホスト]** を選択します。



ビルドフィールドの右側にある **[プロファイル概要]** に注目します。ビルドプロファイルを選択すると、選択したプロファイルに関する詳細情報がこの領域に表示されます。

4. ビルドをスケジュールするには、**[ビルド]** ボタンをクリックします。

11.2.7. イメージの取り込み

任意のイメージの取り込みおよび検査が可能です。左側のナビゲーションバーから **イメージ** > **イメージリスト** を選択します。 **[取り込み]** ダイアログのテキストボックスに入力します。処理が完了すると、取り込まれたイメージが **[イメージリスト]** ページに一覧表示されます。

プロシージャ: イメージの取り込み

1. **イメージ** > **イメージリスト** から、**[取り込み]** をクリックして、 **[イメージの取り込み]** ダイアログを開きます。
2. **[イメージの取り込み]** ダイアログで、次のフィールドに入力します。

イメージストア

検査のためにイメージがプルされるレジストリ。

イメージ名

レジストリのイメージの名前。

イメージバージョン

レジストリのイメージのバージョン。

構築ホスト

イメージをプルして検査する構築ホスト。

アクティベーションキー

イメージが検査されるソフトウェアチャンネルへのパスを提供するアクティベーションキー。

3. 確定するには、**[取り込み]**をクリックします。

イメージのエントリがデータベースに作成され、SUSE Managerの**Inspect Image**（イメージの検査）アクションがスケジュールされます。

処理が完了すると、取り込まれたイメージが**イメージリスト**に表示されます。イメージが取り込まれたことを示す異なるアイコンが**[ビルド]**列に表示されます。取り込まれたイメージのステータスアイコンはイメージの**[概要]**タブにも表示されます。

11.2.8. トラブルシューティング

イメージを操作する場合の既知の問題がいくつかあります。

- レジストリまたはgitリポジトリにアクセスするためのHTTPS証明書はカスタム状態ファイルによってクライアントに配備する必要があります。
- Dockerを使用したSSH gitアクセスは現在サポートされていません。

11.3. OSイメージ

OSイメージは、Kiwiイメージシステムによって構築されます。出力イメージはカスタマイズ可能で、PXE、QCOW2、LiveCD、またはその他のタイプのイメージにすることができます。

Kiwiビルドシステムの詳細については、[Kiwiのドキュメント](#)を参照してください。

11.3.1. 要件

Kiwiイメージ構築機能は、SUSE Linux Enterprise Server 12およびSUSE Linux Enterprise Server 11を実行しているSaltクライアントで利用できます。

Kiwiイメージ設定ファイルおよび設定スクリプトは、以下の場所のいずれかからアクセスできる必要があります。

- Gitリポジトリ
- HTTPでホストされたtarball
- ローカル構築ホストディレクトリ

gitで提供される完全なKiwiリポジトリの例については、<https://github.com/SUSE/manager-build-profiles/tree/master/OSImage>を参照してください。



Kiwiで構築されたOSイメージを実行しているホストには、少なくとも1GBのRAMが必要です。ディスク容量は、イメージの実際のサイズによって異なります。詳細については、基になるシステムのドキュメントを参照してください。

11.3.2. 構築ホストの作成

SUSE Managerであらゆる種類のイメージを構築するには、構築ホストを作成して設定します。OSイメージ構築ホストは、SUSE Linux Enterprise Server 15 (SP2以降)またはSUSE Linux Enterprise Server 12 (SP4以降)で実行されているSaltクライアントです。

このプロシージャでは、構築ホストの初期設定について説明します。



構築ホスト上のオペレーティングシステムは、ターゲットイメージ上のオペレーティングシステムと一致する必要があります。

たとえば、SUSE Linux Enterprise Server 15 (SP2以降)のOSバージョンを実行している構築ホスト上にSUSE Linux Enterprise Server 15ベースのイメージを構築します。SUSE Linux Enterprise Server 12 SP5またはSUSE Linux Enterprise Server 12 SP4 OSバージョンを実行している構築ホスト上にSUSE Linux Enterprise Server 12ベースのイメージを構築します。

クロスアーキテクチャビルドはできません。たとえば、SUSE Linux Enterprise Server 15 SP3を実行しているRaspberry PI (aarch64アーキテクチャ)構築ホストにRaspberry PI SUSE Linux Enterprise Server 15 SP3を構築する必要があります。

プロシージャ: SUSE Manager Web UIでの構築ホストの設定

1. システム > 概要ページから構築ホストとして指定するクライアントを選択します。
2. システムの詳細 > プロパティタブに移動して、[付属エンタイトルメント] [OS イメージビルドホスト] を有効にします。[プロパティの更新]で確定します。

3. システムの詳細、ソフトウェア、ソフトウェアチャンネルに移動し、構築ホストのバージョンに応じて必要なソフトウェアのチャンネルを有効にします。
 - SUSE Linux Enterprise Server 12構築ホストでは、SUSE Managerクライアントツール([SLE-Manager-Tools12-Pool](#)と[SLE-Manager-Tools12-Updates](#))が必要です。
 - SUSE Linux Enterprise Server 15構築ホストでは、SUSE Linux Enterprise Serverモジュール[SLE-Module-DevTools15-SP4-Pool](#)と[SLE-Module-DevTools15-SP4-Updates](#)が必要です。
 - スケジュールを設定して[確認]をクリックします。
4. [highstate](#)を適用してKiwiと必要なすべてのパッケージをインストールします。 システムの詳細ページで、状態、[highstate](#)を選択し、[[highstateの適用](#)]をクリックします。 または、SUSE Managerサーバのコマンドラインから[highstate](#)を適用します。

```
salt '$your_client' state.highstate
```

11.3.2.1. SUSE Manager Webサーバのパブリック証明書RPM

構築ホストのプロビジョニングでは、SUSE Manager証明書RPMを構築ホストにコピーします。 この証明書はSUSE Managerによって提供されるリポジトリにアクセスするために使用されます。

証明書は、[mgr-package-rpm-certificate-osimage](#)パッケージスクリプトでRPMにパッケージ化されます。パッケージスクリプトは新しいSUSE Managerのインストール中に自動的に呼び出されます。

[spacewalk-certs-tools](#)パッケージをアップグレードすると、アップグレードシナリオではデフォルト値を使用してパッケージスクリプトが呼び出されます。 ただし、証明書パスが変更された場合や使用できない場合は、アップグレードプロシージャの完了後に、`--ca-cert-full-path <path_to_certificate>`を使用してパッケージスクリプトを手動で呼び出します。

11.3.2.2. パッケージスクリプトの呼び出し例

```
/usr/sbin/mgr-package-rpm-certificate-osimage --ca-cert-full-path /root/ssl-build/RHN-ORG-TRUSTED-SSL-CERT
```

証明書を含むRPMパッケージは、次のようなsalt-accessibleディレクトリに保存されます。

```
/usr/share/susemanager/salt/images/rhn-org-trusted-ssl-cert-osimage-1.0-1.noarch.rpm
```

証明書を含むRPMパッケージは、ローカル構築ホストリポジトリで提供されます。

```
/var/lib/Kiwi/repo
```

ビルドソースに SUSE Manager SSL証明書を含むRPMパッケージを指定し、Kiwiの設定に `bootstrap` セクションの必須パッケージとして `rhn-org-trusted-ssl-cert-osimage` が含まれていることを確認します。



リスト 3. config.xml

```
...
<packages type="bootstrap">
  ...
  <package name="rhn-org-trusted-ssl-cert-osimage" bootinclude="true"/>
</packages>
...
```

11.3.3. OSイメージ用アクティベーションキーの作成

イメージの構築時にOSイメージがリポジトリとして使用できるチャンネルに関連付けられたアクティベーションキーを作成します。

アクティベーションキーはOSイメージの構築に必須です。



OSイメージを構築するには、**SUSE マネージャデフォルト**以外のチャンネルに関連付けられたアクティベーションキーが必要です。

プロシージャ: アクティベーションキーの作成

1. Web UIで、**システム** > **アクティベーションキー**を選択します。
2. **[キーの作成]** をクリックします。
3. **[説明]**、**[キー]** の名前を入力し、ドロップダウンボックスを使用してキーに関連付ける **[ベースチャンネル]** を選択します。
4. **[アクティベーションキーの作成]** で確定します。

詳細については、**Client-configuration** > **Activation-keys**を参照してください。

11.3.4. イメージストアの作成

OSイメージには、大量のストレージ容量が必要になる場合があります。したがって、OSイメージストアは、ルートパーティションとは別の、独自のパーティションまたはBtrfsサブボリュームに配置することをお勧めします。デフォルトでは、イメージストアは `/srv/www/os-images` にあります。

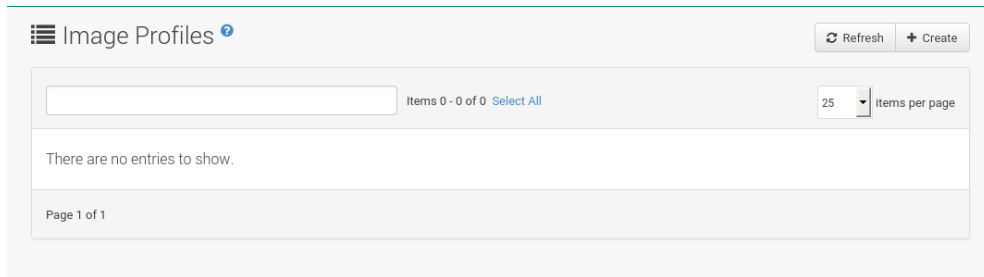


システム、仮想、およびその他のイメージの構築に使用されるKiwiビルドタイプのイメージストアは、まだサポートされていません。

イメージは常に `/srv/www/os-images/ORGANIZATION-ID` に保存され、HTTP/HTTPS `https://<susemanager_host>/os-images/ORGANIZATION-ID` を介してアクセスできます。

11.3.5. イメージプロファイルの作成

Web UIを使用してイメージプロファイルを管理します。



プロシージャ: イメージプロファイルの作成

1. イメージプロファイルを作成するには、**イメージ** > **プロファイル** から選択し、**[作成]** をクリックします。

Edit Image Profile: 'SUSE-MicroOS-Default'

Label *: SUSE-MicroOS-Default

Image Type *: Kiwi

Target Image Store *: SUSE Manager OS Image Store
https://server.lf.local/os-images/1/

Config URL *: https://github.com/SUSE/manager-build-profiles#master:OSImage/SUSE-MicroOS50
Git URL pointing to the directory containing the Kiwi config files
Example: https://mygit.com#<branchname>:path/to/kiwi/config
See also the [SUSE Manager templates repository](#) for some out-of-the-box working examples.

Kiwi options: --profile Default
Kiwi command line options
Example: --profile jeos

Activation Key *: 1-image
SUSE-MicroOS-5.0-Pool for x86_64
o SUSE-MicroOS-5.0-Updates for x86_64

Custom Info Values: Select...
These key-value pairs will be added to the build command as 'buildarg' values
[Create additional custom info keys](#)

2. **[ラベル]** フィールドに、**イメージプロファイル** の名前を入力します。

3. [イメージタイプ] として [Kiwi] を使用します。
4. イメージストアは自動的に選択されます。
5. Kiwi設定ファイルを含むディレクトリに [設定URL] を入力します。
 - a. git URI
 - b. HTTPS tarball
 - c. 構築ホストローカルディレクトリへのパス
6. 必要に応じて [Kiwiオプション] を入力します。 Kiwi設定ファイルで複数のプロファイルが指定されている場合、`--profile <name>`を使用してアクティブなプロファイルを選択します。他のオプションについては、Kiwiのドキュメントを参照してください。
7. [アクティベーションキー] を選択します。 アクティベーションキーにより、プロファイルを使用したイメージが正しいチャンネルとパッケージに確実に割り当てられます。



アクティベーションキーをイメージプロファイルに関連付け、イメージプロファイルで正しいソフトウェアチャンネルとパッケージが使用されるようにします。

8. [作成] ボタンで確定します。

ソースフォーマットオプション

- リポジトリへのgit/HTTP(S) URL

構築するイメージのソースを含むgitリポジトリへのURL。 リポジトリのレイアウトによって、URLは次のようになります。

```
https://github.com/SUSE/manager-build-profiles
```

URLの#文字の後にブランチを指定できます。この例では、`master` ブランチを使用します。

```
https://github.com/SUSE/manager-build-profiles#master
```

:文字の後のイメージソースを含むディレクトリを指定できます。この例では、`OSImage/POS_Image-JeOS6`を使用します。

```
https://github.com/SUSE/manager-build-profiles#master:OSImage/POS_Image-JeOS6
```

- tarballへのHTTP(S) URL

WebサーバでホストされているtarアーカイブへのURL (圧縮または非圧縮)。

```
https://myimagesourceserver.example.org/MyKiwiImage.tar.gz
```

- 構築ホスト上のディレクトリへのパス

Kiwiビルドシステムソースを含むディレクトリへのパスを入力します。このディレクトリは選択し

た構築ホスト上に存在する必要があります。

```
/var/lib/Kiwi/MyKiwimage
```

11.3.5.1. Kiwiソースの例

Kiwiソースは少なくとも `config.xml` で構成されています。通常、`config.sh` と `images.sh` も存在します。ソースには `root` サブディレクトリの下に最終イメージにインストールするファイルも含めることができます。

Kiwiビルドシステムについては、[Kiwiのドキュメント](#) を参照してください。

SUSEでは、[SUSE/manager-build-profiles](#) パブリックGitHubリポジトリで、完全に機能するイメージソースの例を提供しています。

リスト 4. JeOS config.xmlの例

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<image schemaversion="6.1" name="POS_Image_JeOS6">
  <description type="system">
    <author>Admin User</author>
    <contact>noemail@example.com</contact>
    <specification>SUSE Linux Enterprise 12 SP3 JeOS</specification>
  </description>
  <preferences>
    <version>6.0.0</version>
    <packagemanager>zypper</packagemanager>
    <bootsplash-theme>SLE</bootsplash-theme>
    <bootloader-theme>SLE</bootloader-theme>

    <locale>en_US</locale>
    <keytable>us.map.gz</keytable>
    <timezone>Europe/Berlin</timezone>
    <hwclock>utc</hwclock>

    <rpm-excludedocs>true</rpm-excludedocs>
    <type boot="saltboot/suse-SLES12" bootloader="grub2" checkprebuilt="true" compressed
    ="false" filesystem="ext3" fsmountoptions="acl" fsnocheck="true" image="pxe" kernelcmdline
    ="quiet"></type>
  </preferences>
  <!-- CUSTOM REPOSITORY
  <repository type="rpm-dir">
    <source path="this://repo"/>
  </repository>
  -->
  <packages type="image">
    <package name="patterns-sles-Minimal"/>
    <package name="aaa_base-extras"/> <!-- wouldn't be SUSE without that ;-) -->
    <package name="kernel-default"/>
    <package name="salt-minion"/>
    ...
  </packages>
  <packages type="bootstrap">
    ...
    <package name="sles-release"/>
    <!-- this certificate package is required to access {productname} repositories
    and is provided by {productname} automatically -->
    <package name="rhncert-trusted-ssl-cert-osimage" bootinclude="true"/>
  </packages>
  <packages type="delete">
    <package name="mtools"/>
    <package name="initvicons"/>
    ...
  </packages>
</image>
```

11.3.6. イメージの構築

Web UIを使用してイメージを構築する2つの方法があります。 **イメージ › ビルド**を選択するか、 **イメージ › プロファイル**リストのビルドアイコンをクリックします。

プロシージャ: イメージのビルド

1. **イメージ** > **ビルド** を選択します。
2. デフォルトの **latest** (コンテナのみに適用) 以外のバージョンが必要な場合は別のタグ名を追加します。
3. [**イメージプロファイル**] および [**構築ホスト**] を選択します。



[**プロファイル概要**] がビルドフィールドの右側に表示されます。ビルドプロファイルを選択したら、選択したプロファイルに関する詳細情報がここに表示されます。

4. ビルドをスケジュールするには、[**ビルド**] ボタンをクリックします。



ビルドサーバは、イメージ構築プロセス中にどのような形式のオートマウンタも実行できません。必要に応じて、Gnomeセッションがrootとして実行されていないことを確認します。オートマウンタが実行されている場合、イメージのビルドは正常に終了しますが、イメージのチェックサムが異なるためエラーが発生します。

イメージが正常に構築されると、検査フェーズが開始されます。検査フェーズ中に、SUSE Managerではイメージに関する情報を収集します。

- イメージにインストールされているパッケージのリスト
- イメージのチェックサム
- イメージタイプと他のイメージの詳細



構築されたイメージタイプが **PXE** の場合は、Saltピラーも生成されます。イメージのピラーはデータベースに保存され、Saltサブシステムは生成されたイメージに関する詳細にアクセスできます。詳細には、イメージファイルの場所と提供場所、イメージのチェックサム、ネットワークブートに必要な情報などが含まれます。

生成されたピラーはすべての接続されているクライアントで使用できます。

11.3.7. トラブルシューティング

イメージを構築するには、いくつかの依存ステップが必要です。ビルドが失敗した場合は、Salt状態の結果とビルドログを調査することで、失敗の原因を特定できます。ビルドが失敗した場合は、次のチェックを実

行できます。

- 構築ホストがビルドソースにアクセスできる
- 構築ホストとSUSE Managerサーバの両方にイメージ用の十分なディスク容量がある
- アクティベーションキーには正しいチャンネルが関連付けられている
- 使用されるビルドソースが有効である
- SUSE Managerのパブリック証明書を含むRPMパッケージは最新で/usr/share/susemanager/salt/images/rhn-org-trusted-ssl-cert-osimage-1.0-1.noarch.rpmから入手できます。パブリック証明書RPMを更新する方法の詳細については、[構築ホストの作成](#)を参照してください。

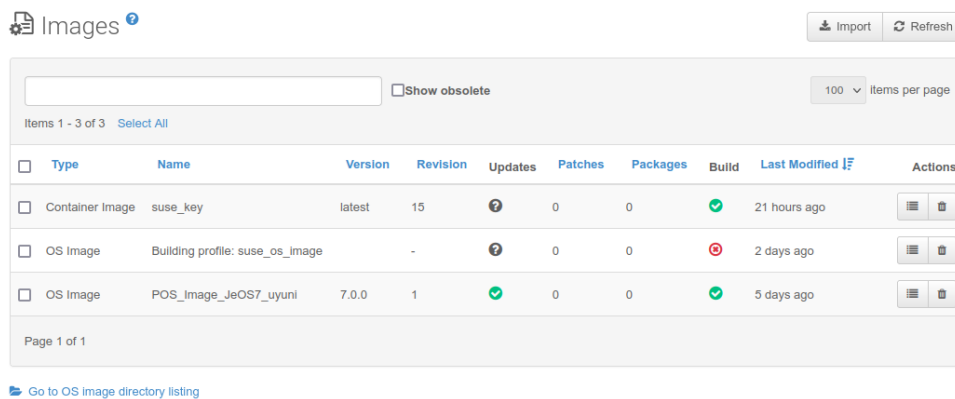
11.3.8. 制限事項

このセクションには、イメージを操作するときのいくつかの既知の問題が含まれています。

- HTTPソースまたはgitリポジトリへのアクセスに使用されるHTTPS証明書は、カスタム状態ファイルによってクライアントに配備するか、手動で設定する必要があります。
- Kiwiベースのイメージの取り込みはサポートされていません。

11.4. ビルドイメージのリスト

使用できるビルドイメージを一覧にするには、**イメージ** > **イメージリスト**を選択します。すべてのイメージのリストが表示されます。



The screenshot shows the 'Images' management interface. At the top, there are 'Import' and 'Refresh' buttons. Below is a search bar and a 'Show obsolete' checkbox. The main content is a table with columns: Type, Name, Version, Revision, Updates, Patches, Packages, Build, Last Modified, and Actions. There are three rows of data:

Type	Name	Version	Revision	Updates	Patches	Packages	Build	Last Modified	Actions
Container Image	suse_key	latest	15	?	0	0	✓	21 hours ago	[Menu] [Delete]
OS Image	Building profile: suse_os_image	-	-	?	0	0	⊘	2 days ago	[Menu] [Delete]
OS Image	POS_Image_JeOS7_uyuni	7.0.0	1	✓	0	0	✓	5 days ago	[Menu] [Delete]

At the bottom, there is a 'Page 1 of 1' indicator and a link 'Go to OS Image directory listing'.

イメージに関する表示されたデータには、イメージの **[名前]**、その **[バージョン]**、**[リビジョン]**、およびビルドの **[ステータス]** が含まれます。また、イメージに使用できる可能性のあるパッチやパッケージの更新のリストを使用してイメージの更新ステータスを確認することもできます。

OSイメージの場合、**[名前]** および **[バージョン]** フィールドはkiwiソースから作成され、ビルドが成功したときに更新されます。ビルド中またはビルドが失敗した後は、これらのフィールドにはプロファイル名に基づく一時的な名前が表示されます。

[リビジョン] はビルドが成功するたびに自動的に増えます。OSイメージの場合、複数のリビジョンがストア内に共存できます。

コンテナイメージの場合、ストアには最新リビジョンのみが保持されます。以前のリビジョン(パッケージ、パッチなど)に関する情報は保存され、**[非推奨の表示]** チェックボックスを使用して一覧にすることができます。

イメージの**[詳細]**ボタンをクリックすると、詳細ビューが表示されます。詳細ビューには、関連するパッチの正確なリスト、イメージ内にインストールされたすべてのパッケージのリスト、およびビルドログが含まれます。

[削除]ボタンをクリックすると、リストからイメージが削除されます。また、関連するピラー、OSイメージストアからのファイル、および非推奨のリビジョンも削除されます。



パッチおよびパッケージリストは、ビルド後の検査状態が正常だった場合にのみ使用できます。

Chapter 12. インフラストラクチャ保守タスク

スケジュールされたダウンタイム期間で作業する場合、SUSE Managerサーバの重要なダウンタイムの前、その最中、およびその後に行う必要があるすべての作業を覚えておくことが困難な場合があります。サーバ間同期スレーブサーバやSUSE ManagerプロキシなどのSUSE Managerサーバ関連のシステムも影響を受けるため、考慮する必要があります。

SUSEでは、常にSUSE Managerインフラストラクチャを更新し続け続けることをお勧めします。これには、サーバ、プロキシ、構築ホストが含まれます。SUSE Managerサーバを更新し続けないと、必要な場合に環境の一部を更新できない場合があります。

このセクションには、ダウンタイム期間のチェックリストと、各ステップの実行に関する詳細情報へのリンクが含まれています。

12.1. サーバ

プロシージャ: サーバの確認

1. 最新の更新を適用します。
2. 必要に応じて、最新のサービスパックにアップグレードします。
3. `spacewalk-service status`を実行し、必要なすべてのサービスが稼働しているかどうかを確認します。

パッケージ マネージャを使用して更新をインストールできます。

- YaSTの詳細については、<https://documentation.suse.com/sles/15-SP4/html/SLES-all/cha-onlineupdate-you.html>を参照してください。
- zypperの設定の詳細については、<https://documentation.suse.com/sles/15-SP4/html/SLES-all/cha-sw-cl.html#sec-zypper>を参照してください。

デフォルトでは、SUSE Managerサーバに対していくつかの更新チャンネルが設定され、有効になっています。新規および更新されたパッケージは自動的に使用可能になります。

SUSE Managerを最新のまにするには、SUSE Customer Centerに直接接続するか、Repository Management Tool (RMT)を使用します。RMTは、切断された環境のローカルインストールソースとして使用できます。

次のコマンドを使用して、更新チャンネルがご使用のシステムで使用できることを確認できます。

```
zypper lr
```

出力は次のようになります。

Name	Enabled	GPG Check	Refresh
SLE-Module-Basesystem15-SP4-Pool	Yes	(r) Yes	No
SLE-Module-Basesystem15-SP4-Updates	Yes	(r) Yes	Yes
SLE-Module-Python2-15-SP4-Pool	Yes	(r) Yes	No
SLE-Module-Python2-15-SP4-Updates	Yes	(r) Yes	Yes
SLE-Product-SUSE-Manager-Server-4.3-Pool	Yes	(r) Yes	No
SLE-Product-SUSE-Manager-Server-4.3-Updates	Yes	(r) Yes	Yes
SLE-Module-SUSE-Manager-Server-4.3-Pool	Yes	(r) Yes	No
SLE-Module-SUSE-Manager-Server-4.3-Updates	Yes	(r) Yes	Yes
SLE-Module-Server-Applications15-SP4-Pool	Yes	(r) Yes	No
SLE-Module-Server-Applications15-SP4-Updates	Yes	(r) Yes	Yes
SLE-Module-Web-Scripting15-SP4-Pool	Yes	(r) Yes	No
SLE-Module-Web-Scripting15-SP4-Updates	Yes	(r) Yes	Yes

SUSE Managerは、新しいパッケージを提供するために保守更新(MU)をリリースします。保守更新は、新しいバージョン番号で示されます。たとえば、メジャーリリース4.3は、MUがリリースされると4.3.1にインクリメントされます。

Web UIのナビゲーションバーの下部を参照して、実行中のバージョンを確認できます。 `api.getVersion()` XMLRPC APIコールでバージョン番号をフェッチすることもできます。

12.1.1. クライアントツール

サーバを更新する際には、クライアント上の一部のツールも更新することを検討してください。クライアント上で `salt-minion`、`zypper`、およびその他の関連する管理パッケージを更新することは厳密な要件ではありませんが、一般的にはベストプラクティスです。たとえば、サーバの保守更新では、メジャーな新しいSaltバージョンが導入される場合があります。その後、Saltクライアントは引き続き動作しますが、後で問題が発生する可能性があります。これを回避するには、`salt-minion`パッケージが利用可能になったら常に更新してください。SUSEは、`salt-minion`が常に安全に更新できるようにします。

12.2. サーバ間同期スレーブサーバ

サーバ間同期スレーブサーバを使用している場合は、SUSE Managerサーバ更新が完了した後で更新してください。

サーバ間同期の詳細については、**Administration** > **Iss**を参照してください。

12.3. モニタリングサーバ

Prometheusにモニタリングサーバを使用している場合は、SUSE Managerサーバの更新が完了した後で更新してください。

モニタリングの詳細については、**Administration** > **Monitoring**を参照してください。

12.4. プロキシ

プロキシは、SUSE Managerサーバの更新が完了したらすぐに更新する必要があります。

一般的に、別のバージョンのサーバに接続されたプロキシの実行はサポートされていません。 唯一の例外

は、サーバが最初に更新されることが予想される更新期間の場合で、プロキシは以前のバージョンを一時的に実行できます。



常に、最初にサーバをアップグレードしてから任意のプロキシをアップグレードしてください。

Chapter 13. サーバ間同期

複数のSUSE Managerがインストールされている場合は、サーバ間でコンテンツをコピーする必要があります。サーバ間同期(ISS)を使用すると、あるサーバ(ソース)からデータをエクスポートし、別の(ターゲット)サーバにインポートできます。これは、ハブ配備シナリオや切断されたセットアップに役立ちます。



バージョン2のISS実装では、SUSEはマスター/スレーブの概念を削除しました。コンテンツは、SUSE Managerサーバ間で任意の方向にエクスポートおよびインポートできます。



SUSE Manager 5.0からサーバ間同期(バージョン1)機能は非推奨となり、その後、将来のバージョンで削除される予定です。

13.1. サーバ間同期 - バージョン1



SUSE Manager 5.0からサーバ間同期(バージョン1)機能は非推奨となり、その後、将来のバージョンで削除される予定です。

複数のSUSE Managerがインストールされている場合は、コンテンツと許可が必ず一致している必要があります。サーバ間同期(ISS)を使用すると、複数のSUSE Managerサーバを接続して、最新のまにすることができます。

ISSバージョン1を設定するには、一方のSUSE Managerサーバをマスターとして定義し、他方をスレーブとして定義する必要があります。競合する設定が存在する場合は、システムがマスター設定を優先します。



ISSマスターはスレーブが接続されているという理由でのみマスターです。これは、スレーブを定義して、最初にISSマスターを設定する必要があることを意味します。その後、ISSスレーブをマスターに接続して設定できます。

プロシージャ: ISSマスターの設定

1. SUSE Manager Web UIで、**管理** > **ISS設定** > **マスターセットアップ**に移動し、**[新規スレーブの追加]**をクリックします。
2. **[スレーブの詳細の編集]** ダイアログで、ISSマスターの最初のスレーブに関する次の詳細を提供します。
 - **[スレーブの完全修飾ドメイン名]** フィールドに、ISSスレーブのFQDNを入力します。 例: `server2.example.com`。
 - **[スレーブの同期を許可しますか?]** チェックボックスをオンにして、スレーブがマスターと同期できるようにします。
 - **[すべての組織をスレーブに同期しますか?]** チェックボックスをオンにして、すべての組織をこのスレーブに同期します。
3. **[作成]** をクリックして、ISSスレーブを追加します。
4. **[選択された組織のエクスポートを許可します]** セクションで、このスレーブをマスターにエクスポート

トできる組織をオンにし、**[組織を許可]**をクリックします。

ISSスレーブを設定する前に、適切なCA証明書があることを確認する必要があります。

プロシージャ: マスターCA証明書をISSスレーブにコピーする

1. ISSマスターで、`/srv/www/htdocs/pub/RHN-ORG-TRUSTED-SSL-CERT`にあるCA証明書を見つけ、ISSスレーブに転送できるコピーを作成します。
2. ISSスレーブで、CA証明書ファイルを`/etc/pki/trust/anchors/`ディレクトリに保存します。

証明書をコピーしたら、ISSスレーブを設定できます。

プロシージャ: ISSスレーブの設定

1. SUSE Manager Web UIで、**管理** > **ISS設定** > **スレーブセットアップ**に移動し、**[新規マスターの追加]**をクリックします。
2. **[新規マスターの詳細]** ダイアログで、サーバがISSマスターとして使用するための詳細を提供します。
 - **[マスターの完全修飾ドメイン名]** フィールドに、このスレーブのISSマスターのFQDNを入力します。例: `server1.example.com`。
 - **[このマスターのCA 証明書のファイル名]** フィールドに、ISSマスターのCA証明書への絶対パスを入力します。これは`/etc/pki/trust/anchors/RHN-ORG-TRUSTED-SSL-CERT`である必要があります。
3. **[新規マスターの追加]**をクリックし、このマスターにISSスレーブを追加します。

プロシージャ: ISSセットアップの完了

1. ISSスレーブのコマンドプロンプトで、ISSマスターと同期します。

```
mgr-inter-sync
```

2. オプション: 単一チャンネルを同期するには、次のコマンドを使用します。

```
mgr-inter-sync -c <channel-name>
```

3. SUSE Manager Web UIで、**管理** > **ISS設定** > **Configure Master-to-Slave Mappings (マスターとスレーブのマッピングの設定)**に移動して、同期する組織を選択します。

13.2. サーバ間同期 - バージョン2

複数のSUSE Managerがインストールされている場合は、サーバ間でコンテンツをコピーする必要があります。サーバ間同期(ISS)を使用すると、あるサーバ(ソース)からデータをエクスポートし、別の(ターゲット)サーバにインポートできます。これは、ハブ配備シナリオや切断されたセットアップに役立ちます。



バージョン2のISS実装では、SUSEはマスター/スレーブの概念を削除しました。コンテンツは、SUSE Managerサーバ間で任意の方向にエクスポートおよびインポートできます。

13.2.1. ISSパッケージのインストール

ISSを使用するには、ソースサーバとターゲットサーバに`inter-server-sync`パッケージをインストールする必要があります。

13.2.2. コンテンツ同期



サーバコンテナで手順を実行する前に、`mgrctl term`を使用します。

プロシージャ: ソースサーバへのデータのエクスポート

1. ソースサーバのコマンドラインで、ISSエクスポートコマンドを実行します。 `-h`オプションでは、詳細なヘルプを提供します。

```
inter-server-sync export -h
```

エクスポートプロシージャにより、インポートプロシージャに必要なデータをすべて含む出力ディレクトリが作成されます。

プロシージャ: ターゲットサーバへのエクスポートディレクトリのコピー

1. ソースサーバのコンテンツをターゲットサーバに同期する必要があります。 コマンドラインで、`root`として、次のコマンドを実行します。

```
rsync -r <PATH_EXPORTED_DIR> root@<TARGET_SERVER>:~/
```

すべてのコンテンツがコピーされたら、そのインポートを開始します。

プロシージャ: ターゲットサーバへのデータのインポート

1. ターゲットサーバのコマンドラインで、ISSインポートコマンドを実行します。 `-h`オプションにより詳細なヘルプが提供されます。

```
inter-server-sync import -h
```

13.2.3. データベース接続設定

データベース接続設定は`/etc/rhn/rhn.conf`からデフォルトでロードされます。 プロパティファイルの場所はパラメータ`--serverConfig`で上書きできます。

13.2.4. 既知の制限事項

- ソースサーバとターゲットサーバは同じバージョンである必要がある。
- エクスポートとインポートの組織名は同じである必要がある。

Chapter 14. SUSE Managerによるライブパッチ処理

カーネル更新を実行するには、通常、システムの再起動が必要です。共通脆弱性識別子(CVE)パッチはできるだけ早く適用する必要がありますが、ダウンタイムを許容できない場合は、ライブパッチ処理を使用してこれらの重要な更新を挿入し、再起動の必要性をスキップできます。

ライブパッチ処理を設定するプロシージャはSLES 12とSLES 15ではわずかに異なります。このセクションでは両方のプロシージャについて説明します。

14.1. ライブパッチ処理用のチャンネルの設定

完全なカーネルパッケージを更新するたびに再起動が必要です。したがって、ライブパッチ処理を使用しているクライアントは、割り当てられているチャンネルで新しいカーネルを使用できないことが重要です。ライブパッチ処理を使用しているクライアントは、ライブパッチ処理チャンネルで実行中のカーネルの更新を取得します。

ライブパッチ処理用のチャンネルを管理するには次の2つの方法があります。

コンテンツライフサイクル管理を使用して製品ツリーのクローンを作成し、実行中のバージョンより新しいカーネルバージョンを削除します。このプロシージャは、[administration:content-lifecycle-examples.pdf](#)で説明されています。これは推奨される解決策です。

または、`spacewalk-manage-channel-lifecycle`ツールを使用します。このプロシージャはより手動であり、Web UIと同様にコマンドラインツールが必要です。このプロシージャはSLES 15 SP5のこのセクションで説明されていますが、SLE 12 SP4以降でも機能します。

14.1.1. ライブパッチ処理用のspacewalk-manage-channel-lifecycleを使用する

複製されたベンダチャンネルは、開発の場合は`dev`、運用の場合は`testing`または`prod`で始まる必要があります。このプロシージャでは`dev`クローンチャンネルを作成し、そのチャンネルを`testing`にプロモートさせます。

プロシージャ: ライブパッチ処理チャンネルの複製

1. クライアントのコマンドプロンプトで、`root`として、現在のパッケージチャンネルツリーを取得します。

```
# spacewalk-manage-channel-lifecycle --list-channels
Spacewalk Username: admin
Spacewalk Password:
Channel tree:

1. sles15-sp5-pool-x86_64
  └─ sle-live-patching15-pool-x86_64-sp5
  └─ sle-live-patching15-updates-x86_64-sp5
  └─ sle-manager-tools15-pool-x86_64-sp5
  └─ sle-manager-tools15-updates-x86_64-sp5
  └─ sles15-sp5-updates-x86_64
```


2. `spacewalk-manage-channel` コマンド に `init` 引数を指定して、元のベンダチャンネルの新しい開発クローンを自動的に作成します。

```
spacewalk-manage-channel-lifecycle --init -c sles15-sp5-pool-x86_64
```

3. `dev-sles15-sp5-updates-x86_64` がチャンネルリストで使用できることを確認します。

作成した `dev` クローンチャンネルを確認し、再起動が必要なカーネル更新をすべて削除します。

プロシージャ: クローンチャンネルから非ライブカーネルパッチを削除する

1. システム › システム一覧からクライアントを選択し、[カーネル] フィールドに表示されるバージョンをメモして、現在のカーネルバージョンを確認します。
2. SUSE Manager Web UIで、システム › 概要からクライアントを選択し、ソフトウェア › 管理 › チャンネルタブに移動して、`dev-sles15-sp5-updates-x86_64` を選択します。 [パッチ] タブに移動して、[パッチの一覧表示/削除] をクリックします。
3. 検索バーに「カーネル」と入力し、クライアントが現在使用しているカーネルに一致するカーネルバージョンを特定します。
4. 現在インストールされているカーネルより新しいすべてのカーネルバージョンを削除します。

これでチャンネルにライブパッチ処理を適用するように設定され、`testing` にプロモートできるようになりました。このプロシージャでは、ライブパッチ処理の子チャンネルもクライアントに追加し、適用できるように準備します。

プロシージャ: ライブパッチ処理チャンネルのプロモート

1. クライアントのコマンドプロンプトで、`root` として、`dev-sles15-sp5-pool-x86_64` チャンネルを新しい `testing` チャンネルにプロモートして複製します。

```
# spacewalk-manage-channel-lifecycle --promote -c dev-sles15-sp5-pool-x86_64
```

2. SUSE Manager Web UIで、システム › 概要からクライアントを選択し、ソフトウェア › ソフトウェアチャンネルタブに移動します。
3. 新しい `test-sles15-sp5-pool-x86_64` カスタムチャンネルを確認してベースチャンネルを変更し、両方の対応するライブパッチ処理の子チャンネルを確認します。
4. [次へ] をクリックして、詳細が正しいことを確認して、[確認] をクリックして、変更を保存します。

これで、使用できる CVE パッチを選択して表示し、ライブパッチ処理でこれらの重要なカーネル更新を適用できるようになりました。

14.2. SLES 15でのライブパッチ処理

SLES 15以降のシステムでは、ライブパッチ処理は `klp livepatch` ツールで管理されます。

開始する前に、以下を確認します。

- SUSE Managerが完全に更新されている。
- SLES 15 (SP1以降)を実行している1つ以上のSaltクライアントがある。
- SLES 15 SaltクライアントはSUSE Managerに登録されている。
- ライブパッチ処理の子チャンネルを含む、アーキテクチャに適したSLES 15チャンネルにアクセスできる。
- クライアントが完全に同期されている。
- クライアントをライブパッチ処理用に準備されているクローンチャンネルに割り当てる。 準備の詳細については、**Administration** > **Live-patching-channel-setup**を参照してください。

プロシージャ: ライブパッチ処理の設定

1. **システム** > **概要**からライブパッチ処理で管理するクライアントを選択し、**ソフトウェア** > **パッケージ** > **インストール**タブに移動します。 **kernel-livepatch**パッケージを検索して、インストールします。

The screenshot shows the SUSE Manager Web UI for system g137.suse.de. The 'Software' tab is selected, and the 'Packages' sub-tab is active. A search filter 'kernel-livepatch' is applied, resulting in 1 of 6 items being selected. The selected package is 'kernel-livepatch-4_12_14-197_10-default-1-3.3.1' for x86_64 architecture.

Package Name	Architecture
<input type="checkbox"/> kernel-livepatch-4_12_14-195-default-4-10.1	x86_64
<input checked="" type="checkbox"/> kernel-livepatch-4_12_14-197_10-default-1-3.3.1	x86_64
<input type="checkbox"/> kernel-livepatch-4_12_14-197_4-default-3-2.1	x86_64
<input type="checkbox"/> kernel-livepatch-4_12_14-197_7-default-2-2.1	x86_64
<input type="checkbox"/> kernel-livepatch-tools-1.1-9.5	x86_64
<input type="checkbox"/> kernel-livepatch-tools-devel-1.1-9.5	x86_64

2. highstateを適用してライブパッチ処理を有効にし、クライアントを再起動します。
3. ライブパッチ処理で管理するクライアントごとに繰り返します。
4. ライブパッチ処理が正しく有効化されていることを確認するには、**システム** > **システム一覧**からクライアントを選択し、**[カーネル]** フィールドに **ライブパッチ**が表示されていることを確認します。

プロシージャ: ライブパッチのカーネルへの適用

1. SUSE Manager Web UIで、**システム** > **概要**からクライアントを選択します。画面の上部のバナーに、クライアントに使用できる重要なパッケージ数と、重要ではないパッケージ数が表示されます。
2. **[重大]** をクリックすると、使用可能な重大なパッチのリストが表示されます。
3. **[Important: Security update for the Linux kernel]** (重要: Linuxカーネル用のセキュリティ更新) という概要のパッチを選択します。セキュリティバグには該当する場合はCVE番号も含まれます。

4. オプション: 適用するパッチのCVE番号がわかっている場合は、**監査** > **CVE監査**で検索し、必要なクライアントにパッチを適用します。



- すべてのカーネルパッチがライブパッチであるわけではありません。非ライブカーネルパッチは [セキュリティ] シールドアイコンの横にある [要再起動] アイコンで示されます。これらのパッチでは常に再起動が必要です。
- ライブパッチを適用することで、すべてのセキュリティ問題を修正できるわけではありません。一部のセキュリティ問題は、カーネルの完全な更新を適用することによってのみ修正でき、再起動が必要です。これらの問題に割り当てられたCVE番号は、ライブパッチには含まれていません。CVE監査では、この要件が表示されません。

14.3. SLES 12でのライブパッチ処理

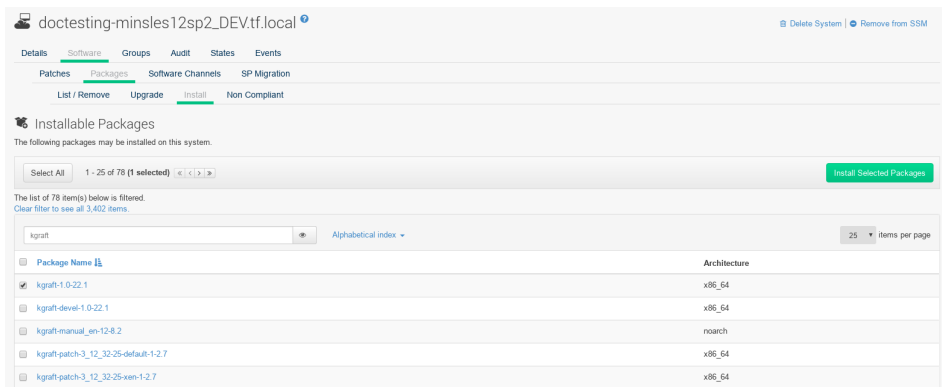
SLES 12システムでは、ライブパッチ処理はkGraftで管理されます。kGraftの使用に関する詳細については、<https://documentation.suse.com/sles/12-SP5/html/SLES-all/cha-kgraft.html>を参照してください。

開始する前に、以下を確認します。

- SUSE Managerが完全に更新されている。
- SLES 12 (SP1以降)を実行している1つ以上のSaltクライアントがある。
- SLES 12 SaltクライアントがSUSE Managerに登録されている。
- ライブパッチ処理の子チャンネルを含む、アーキテクチャに適したSLES 12チャンネルにアクセスできる。
- クライアントが完全に同期されている。
- クライアントをライブパッチ処理用に準備されているクローンチャンネルに割り当てる。準備の詳細については、**Administration** > **Live-patching-channel-setup**を参照してください。

プロシージャ: ライブパッチ処理の設定

1. **システム** > **概要**からライブパッチ処理を使用して管理するクライアントを選択し、システムの詳細ページで、**ソフトウェア** > **パッケージ** > **インストール**タブに移動します。kgraftパッケージを検索して、インストールします。



2. highstateを適用してライブパッチ処理を有効にし、クライアントを再起動します。
3. ライブパッチ処理で管理するクライアントごとに繰り返します。
4. ライブパッチ処理が正常に有効化されていることを確認するには、**システム** > **システム一覧**からクライアントを選択し、**[ライブパッチ処理]** が **[カーネル]** フィールドに表示されていることを確認します。

プロシージャ: ライブパッチのカーネルへの適用

1. SUSE Manager Web UIで、**システム** > **概要**からクライアントを選択します。画面の上部のバナーに、クライアントに使用できる重要なパッケージ数と、重要ではないパッケージ数が表示されます。
2. **[重大]** をクリックすると、使用可能な重大なパッチのリストが表示されます。
3. **[Important: Security update for the Linux kernel]** (重要: Linuxカーネル用のセキュリティ更新) という概要のパッチを選択します。セキュリティバグには該当する場合はCVE番号も含まれます。
4. オプション: 適用するパッチのCVE番号がわかっている場合は、**監査** > **CVE監査**で検索し、必要なクライアントにパッチを適用します。



- すべてのカーネルパッチがライブパッチであるわけではありません。非ライブカーネルパッチは **[セキュリティ]** シールドアイコンの横にある **[要再起動]** アイコンで示されます。これらのパッチでは常に再起動が必要です。
- ライブパッチを適用しても、すべてのセキュリティ問題を修正できるわけではありません。一部のセキュリティの問題は、カーネルの完全な更新を適用することのみ修正でき、再起動が必要です。これらの問題に割り当てられたCVE番号は、ライブパッチには含まれていません。CVE監査ではこの要件が表示されます。

Chapter 15. メンテナンスウィンドウ

SUSE Managerのメンテナンスウィンドウ機能を使用すると、スケジュールされたメンテナンスウィンドウ期間中にアクションを実行するようにスケジュールできます。メンテナンスウィンドウスケジュールを作成してクライアントに適用すると、指定した期間外に一部のアクションを実行できなくなります。



メンテナンスウィンドウは、システムロックとは異なる方法で動作します。システムロックは必要に応じてオンまたはオフに切り替えられますが、メンテナンスウィンドウではアクションを許可する期間が定義されます。また、許可されたアクションと制限されたアクションが異なります。システムロックの詳細については、**Client-configuration** › **System-locking**を参照してください。

メンテナンスウィンドウには、カレンダーとスケジュールの両方が必要です。カレンダーは、定期的なイベントを含むメンテナンスウィンドウイベントの日付と時刻を定義し、**ical**形式にする必要があります。スケジュールは、カレンダーで定義されたイベントを使用して、メンテナンスウィンドウを作成します。スケジュールを作成する前に、アップロード用の**ical**ファイルを作成するか、**ical**ファイルにリンクしてカレンダーを作成する必要があります。

スケジュールを作成したら、SUSE Managerサーバに登録されているクライアントに割り当てることができます。メンテナンススケジュールが割り当てられているクライアントは、メンテナンスウィンドウ以外に制限されたアクションを実行できません。

制限されたアクションによってクライアントが大幅に変更され、クライアントの実行を停止させる可能性があります。制限されたアクションの例は次のとおりです。

- パッケージのインストール
- クライアントのアップグレード
- 製品の移行
- highstateアプリケーション(Saltクライアント用)

制限されたアクションは、安全であるとみなされ、クライアントに問題が発生する可能性が低いマイナーアクションです。制限されたアクションの例は次のとおりです。

- パッケージプロファイルの更新
- ハードウェアの更新
- ソフトウェアチャンネルのサブスクリプション

開始する前に、アップロード用の**ical**ファイルを作成するか、**ical**ファイルにリンクしてカレンダーを作成する必要があります。**ical**ファイルは、Microsoft Outlook、Google Calendar、KOrganizerなどのお好みのカレンダーツールで作成できます。

プロシージャ: 新しいメンテナンスカレンダーのアップロード

1. SUSE Manager Web UIで、**スケジュール** › **メンテナンスウィンドウ** › **カレンダー**に移動し、**[作成]**をクリックします。

2. **[カレンダー名]** セクションに、カレンダーの名前を入力します。
3. **ical**ファイルへのURLを指定するか、ファイルを直接アップロードします。
4. **[Create Calendar]** (カレンダーの作成) をクリックして、カレンダーを保存します。

プロシージャ: 新しいスケジュールの作成

1. SUSE Manager Web UIで、**スケジュール** > **メンテナンスウィンドウ** > **スケジュール**に移動して、**[作成]** をクリックします。
2. **[スケジュール名]** セクションに、スケジュールの名前を入力します。
3. オプション: **ical**ファイルに複数のスケジュールに適用するイベントが含まれている場合は、**[マルチ]** をオンにします。
4. このスケジュールに割り当てるカレンダーを選択します。
5. **[スケジュールの作成]** をクリックして、スケジュールを保存します。

プロシージャ: スケジュールをクライアントに割り当てる

1. SUSE Manager Web UIで、**システム** > **システム一覧**に移動して、スケジュールに割り当てるクライアントを選択し、**[System Properties]** (システムのプロパティ) パネルを見つけて、**[これらのプロパティを編集します]** をクリックします。または、**システム** > **システムセットマネージャ**に移動し、**その他** > **メンテナンスウィンドウ** タブを使用して、システムセットマネージャからクライアントを割り当てることができます。
2. **[システムの詳細を編集]** ページで、**[メンテナンススケジュール]** フィールドを見つけて、割り当てるスケジュールの名前を選択します。
3. **[プロパティの更新]** をクリックし、メンテナンススケジュールを割り当てます。



新しいメンテナンススケジュールをクライアントに割り当てると、クライアントですでにいくつかの制限されたアクションがスケジュールされている可能性があり、これらが新しいメンテナンススケジュールと競合する可能性があります。この場合は、Web UIにエラーが表示され、スケジュールをクライアントに割り当てるできません。この問題を解決するには、スケジュールを割り当てるときに、**[影響する動作のキャンセル]** オプションをオンにします。これにより、新しいメンテナンススケジュールと競合する、以前にスケジュールされた動作がすべてキャンセルされます。

メンテナンスウィンドウを作成したら、メンテナンスウィンドウ中に実行される、パッケージの更新などの制限されたアクションをスケジュールできます。

プロシージャ: パッケージのアップグレードのスケジュール

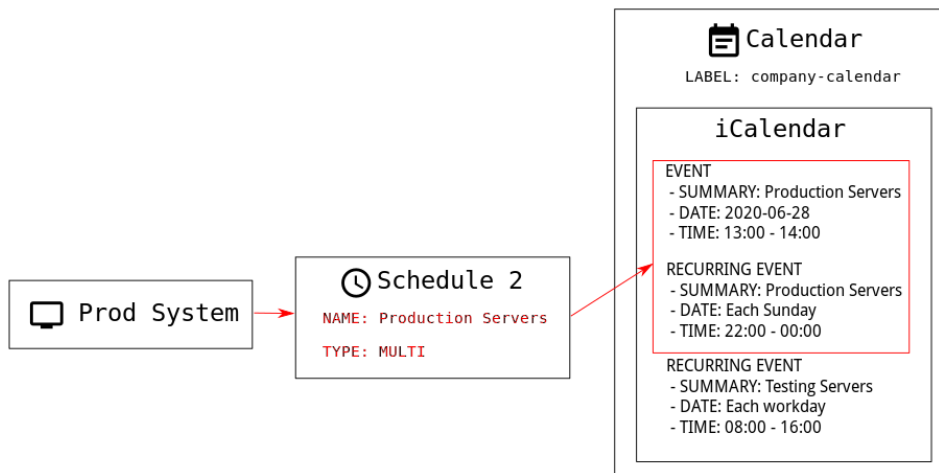
1. SUSE Manager Web UIで、**システム** > **システム一覧**に移動して、アップグレードするクライアントを選択し、**ソフトウェア** > **パッケージ** > **アップグレード** タブに移動します。
2. リストからアップグレードするパッケージを選択し、**[パッケージのアップグレード]** をクリックします。
3. **[メンテナンスウィンドウ]** フィールドで、クライアントがアップグレードの実行に使用するメンテナンスウィンドウを選択します。

4. **[確認]**をクリックして、パッケージのアップグレードをスケジュールします。

15.1. メンテナンススケジュールタイプ

カレンダーを作成すると、1回限りのイベントまたは繰り返し発生するイベントのいずれかを含むイベントが多数含まれます。各イベントには**[概要]**フィールドが含まれます。1つのカレンダーに対して複数のメンテナンススケジュールを作成する場合は、**[概要]**フィールドを使用して、それぞれのイベントを指定できます。

たとえば、運用サーバのスケジュールを作成し、テストサーバに別のスケジュールを作成したい場合があります。この場合、運用サーバのイベントには**SUMMARY: Production Servers**を指定し、テストサーバのイベントには**SUMMARY: Testing Servers**を指定します。



スケジュールには、シングルとマルチの2つのタイプがあります。カレンダーに複数のスケジュールに適用されるイベントが含まれている場合は**[マルチ]**を選択し、カレンダーファイルで使した**[概要]**フィールドに従ってスケジュールに名前を付ける必要があります。

プロシージャ: マルチスケジュールの作成

1. SUSE Manager Web UIで、**スケジュール**、**メンテナンスウィンドウ**、**スケジュール**に移動して、**[作成]**をクリックします。
2. **[スケジュール名]** セクションに、スケジュールの名前を入力します。カレンダーの**[概要]**フィールドに一致していることを確認します。
3. **[マルチ]** オプションをオンにします。
4. このスケジュールに割り当てるカレンダーを選択します。
5. **[スケジュールの作成]**をクリックして、スケジュールを保存します。
6. 次のスケジュールを作成するには、**[作成]**をクリックします。
7. **[スケジュール名]** セクションに、2番目のスケジュールの名前を入力します。2番目のカレンダーの**[概要]**フィールドに一致していることを確認します。
8. **[マルチ]** オプションをオンにします。
9. **[スケジュールの作成]**をクリックして、スケジュールを保存します。

10. 作成する必要がある各スケジュールごとに繰り返します。

15.2. 制限されたアクションと制限されないアクション

このセクションには、制限されたアクションと制限されないアクションのリスト全体が含まれています。

制限されたアクションにより、クライアントが大幅に変更され、クライアントの実行が停止する可能性があります。制限されたアクションは、メンテナンスウィンドウ中にのみ実行できます。制限されたアクションは次のとおりです。

- パッケージ操作(たとえば、パッケージのインストール、更新、または削除)
- パッチの更新
- クライアントの再起動
- トランザクションのロールバック
- 設定管理の変更タスク
- highstateの適用(Saltクライアント用)
- 自動インストールと再インストール
- リモートコマンド
- 製品移行
- クラスタ操作



Saltクライアントの場合は、**Salt** > **リモートコマンド**に移動することで、いつでもリモートコマンドを直接実行できます。これは、Saltクライアントがメンテナンスウィンドウ中であるかどうかに関係なく適用されます。リモートコマンドの詳細については、**Administration** > **Actions**を参照してください。

制限されないアクションは、安全であるとみなされ、クライアントに問題が発生する可能性が少ないマイナーアクションです。アクションが制限されない場合、定義では、無制限であり、いつでも実行できます。

Chapter 16. mgr-syncの使用

`mgr-sync`ツールは、コマンドプロンプトで使用されます。 Web UIでは必ずしも使用できるとは限らないSUSE Managerを使用するための機能を提供します。 `mgr-sync`の主な用途は、SUSE Customer Centerへの接続、製品およびパッケージ情報の取得、SUSE Managerサーバと同期するためのチャンネルの準備です。

このツールは、SUSEサポートサブスクリプションで使用するよう設計されています。 openSUSE、CentOS、Ubuntuなどのオープンソースディストリビューションには必要ありません。

`mgr-sync`に使用できるコマンドおよび引数を以下の表に一覧表示しています。 `mgr-sync`コマンドには次の構文を使用します。

```
mgr-sync [-h] [--version] [-v] [-s] [-d {1,2,3}] {list,add,refresh,delete}
```

表 5. mgr-syncコマンド

コマンド	説明	使用例
list	チャンネル、組織の資格情報、または製品を一覧表示する	<code>mgr-sync list channels</code>
add	チャンネル、組織の資格情報、または製品を追加する	<code>mgr-sync add channel <channel_name></code>
refresh	製品、チャンネル、およびサブスクリプションのローカルコピーを更新する	<code>mgr-sync refresh</code>
delete	ローカルシステムから既存のSCC組織の資格情報を削除する	<code>mgr-sync delete credentials</code>
sync	指定されたチャンネルを同期するか、空白のままの場合は尋ねる	<code>mgr-sync sync channel <channel_name></code>

コマンドに固有のオプションの全リストを表示するには、次のコマンドを使用します。

```
mgr-sync <command> --help
```

表 6. mgr-syncオプション引数

オプション	短縮オプション	説明	使用例
help	h	コマンドの使用方法与オプションを表示する	<code>mgr-sync --help</code>
version	N/A	現在インストールされているバージョンの <code>mgr-sync</code> を表示する	<code>mgr-sync --version</code>

オプション	短縮オプション	説明	使用例
verbose	v	詳細な出力を提供する	<code>mgr-sync --verbose refresh</code>
store-credentials	s	資格情報をローカルの隠しファイルに保存する	<code>mgr-sync --store-credentials</code>
debug	d	追加のデバッグ情報をログに記録する。レベル1、2、3が必要です。3は、最も多くのデバッグ情報を提供します。	<code>mgr-sync -d 3 refresh</code>
no-sync	N/A	add コマンドと一緒に使用して、同期を開始せずに製品またはチャンネルを追加する	<code>mgr-sync --no-sync add <channel_name></code>

`mgr-sync`のログは次の場所にあります。

- `/var/lib/containers/storage/volumes/var-log/_data/rhn/mgr-sync.log`
- `/var/lib/containers/storage/volumes/var-log/_data/rhn/rhn_web_api.log`

Chapter 17. PrometheusとGrafanaを使用したモニタリング

PrometheusとGrafanaを使用して、SUSE Manager環境を監視できます。SUSE Managerサーバとプロキシはself-health metricsを提供できます。また、Saltクライアント上に多数のPrometheus exportersをインストールして管理することもできます。

PrometheusとGrafanaパッケージは以下のSUSE Managerクライアントツールに含まれています。

- SUSE Linux Enterprise 12
- SUSE Linux Enterprise 15
- openSUSE Leap 15.x

SUSE Managerサーバとは別のマシンにPrometheusとGrafanaをインストールする必要があります。管理対象のSalt SUSEクライアントをモニタリングサーバとして使用することをお勧めします。他のクライアントはモニタリングサーバとしてサポートされていません。

Prometheusはプルメカニズムを使用してメトリックをフェッチするため、サーバは監視対象クライアントへのTCP接続を確立できる必要があります。クライアントには対応するオープンポートがあり、ネットワークを介して到達できる必要があります。または、リバースプロキシを使用して接続を確立することもできます。



監視するクライアントごとに、モニタリングアドオンサブスクリプションが必要です。SUSE Customer Centerにアクセスして、SUSE Managerのサブスクリプションを管理してください。

17.1. PrometheusとGrafana

17.1.1. Prometheus

Prometheusはオープンソースのモニタリングツールで、リアルタイムメトリックを時系列データベースに記録するために使用されます。メトリックはHTTP経由でプルされるため、高いパフォーマンスと拡張性が実現します。

Prometheusメトリックは時系列データ、または同じグループやディメンションに属するタイムスタンプ付きの値です。メトリックはその名前とラベルセットで固有に識別されます。

メトリック名	ラベル	タイムスタンプ	値
<pre>http_requests_total{status="200", method="GET"} @1557331801.111 42236</pre>			

監視対象の各アプリケーションまたはシステムは、コードインストールメンテーションまたはPrometheus exportersを使用して、上記の形式でメトリックを公開する必要があります。

17.1.2. Prometheus Exporters

Exportersは、サードパーティシステムからメトリックをPrometheusメトリックとしてエクスポートするのに役立つライブラリです。Exportersは、Prometheusメトリックを直接使用して特定のアプリケーションまたはシステムをインストールできない場合に役立ちます。複数のexportersを監視対象ホスト上で実行して、ローカルメトリックをエクスポートできます。

Prometheusコミュニティは公式exportersのリストを提供し、さらに多くのものをコミュニティの貢献として見つけることができます。詳細およびexportersの詳細なリストについては、<https://prometheus.io/docs/instrumenting/exporters/>を参照してください。

17.1.3. Grafana

Grafanaは、データの視覚化、モニタリング、および分析を行うためのツールです。一定期間の特定のメトリックを表すパネルを使用してダッシュボードを作成するために使用されます。Grafanaは通常、Prometheusと一緒に使用されますが、Elasticsearch、MySQL、PostgreSQL、Influx DBなどの他のデータソースもサポートしています。Grafanaの詳細については、<https://grafana.com/docs/>を参照してください。

17.2. モニタリングサーバの設定

モニタリングサーバを設定するには、PrometheusとGrafanaをインストールして設定する必要があります。

17.2.1. Prometheusのインストール

モニタリングサーバがSaltクライアントの場合、SUSE Manager Web UIを使用してPrometheusパッケージをインストールできます。インストールできない場合は、モニタリングサーバに手動でパッケージをダウンロードしてインストールできます。Prometheusソフトウェアは、SUSE ManagerプロキシおよびSUSE Manager for Retailブランチサーバでも使用できます。



- サーバコンテナ内でシェルにアクセスするには、コンテナホストで`mgctl term`を実行します。
- コンテナ内からファイルをコピーするには、`mgctl cp`を使用します。



Prometheusはデータの保存にPOSIXファイルシステムを想定しています。非POSIX準拠ファイルシステムはサポートされていません。NFSファイルシステムはサポートされていません。

プロシージャ: Web UIを使用したPrometheusのインストール

1. SUSE Manager Web UIで、Prometheusをインストールするシステムの詳細ページを開き、`[Formula]` タブに移動します。
2. `[Prometheus]` チェックボックスをオンにして、モニタリング式を有効にし、`[保存]` をクリックします。
3. 上部メニューの `[Prometheus]` タブに移動します。

4. [SUSE Manager サーバ] セクションに、有効なSUSE Manager API資格情報を入力します。入力した資格情報でモニタリングするシステムセットにアクセスできることを確認してください。
5. 必要に応じて、他の設定オプションをカスタマイズします。
6. [**Save Formula**] (Formulaの保存) をクリックします。
7. highstateを適用し、正常に完了したことを確認します。
8. Prometheusインタフェースが正しくロードされることを確認します。ブラウザで、ポート9090で、PrometheusがインストールされているサーバのURLに移動します(たとえば、<http://example.com:9090>)。

モニタリング式の詳細については、**Specialized-guides** > **Salt**を参照してください。

プロシージャ: Prometheusを手動でインストールおよび設定する

1. モニタリングサーバで、`golang-github-prometheus-prometheus`パッケージをインストールします。

```
zypper in golang-github-prometheus-prometheus
```

2. Prometheusサービスを有効にします。

```
systemctl enable --now prometheus
```

3. Prometheusインタフェース が正しくロードされていることを確認します。 ブラウザで、ポート9090で、PrometheusがインストールされているサーバのURLに移動します(たとえば、<http://example.com:9090>)。
4. `/etc/prometheus/prometheus.yml`にある設定ファイルを開いて、この設定情報を追加します。`server.url`をSUSE ManagerサーバのURIで置き換え、SUSE Manager資格情報に一致するように [ユーザー名] および [パスワード] フィールドを調整します。

```

# {productname} self-health metrics
scrape_configs:
- job_name: 'mgr-server'
  static_configs:
  - targets:
    - 'server.url:9100' # Node exporter
    - 'server.url:9187' # PostgreSQL exporter
    - 'server.url:5556' # JMX exporter (Tomcat)
    - 'server.url:5557' # JMX exporter (Taskomatic)
    - 'server.url:9800' # Taskomatic
  - targets:
    - 'server.url:80' # Message queue
  labels:
    __metrics_path__: /rhn/metrics

# Managed systems metrics:
- job_name: 'mgr-clients'
  uyuni_sd_configs:
  - server: "http://server.url"
    username: "admin"
    password: "admin"
  relabel_configs:
  - source_labels: [__meta_uyuni_exporter]
    target_label: exporter
  - source_labels: [__address__]
    replacement: "No group"
    target_label: groups
  - source_labels: [__meta_uyuni_groups]
    regex: (.+)
    target_label: groups
  - source_labels: [__meta_uyuni_minion_hostname]
    target_label: hostname
  - source_labels: [__meta_uyuni_primary_fqdn]
    regex: (.+)
    target_label: hostname
  - source_labels: [hostname, __address__]
    regex: (.*);*(.*)
    replacement: ${1}:${2}
    target_label: __address__
  - source_labels: [__meta_uyuni_metrics_path]
    regex: (.+)
    target_label: __metrics_path__
  - source_labels: [__meta_uyuni_proxy_module]
    target_label: __param_module
  - source_labels: [__meta_uyuni_scheme]
    target_label: __scheme__

```

5. 設定ファイルを保存します。
6. Prometheusサービスを再起動します。

```
systemctl restart prometheus
```

Prometheus設定オプションの詳細については、<https://prometheus.io/docs/prometheus/latest/configuration/configuration/>にある公式Prometheusドキュメントを参照してください。

17.2.2. Grafanaのインストール

モニタリングサーバがSUSE Managerで管理されているクライアントの場合は、SUSE ManagerのWeb UIを使用してGrafanaパッケージをインストールできます。それ以外の場合は、モニタリングサーバにパッケージを手動でダウンロードしてインストールできます。



GrafanaはSUSE Managerプロキシでは使用できません。

プロシージャ: Web UIを使用したGrafanaのインストール

1. SUSE Manager Web UIで、Grafanaがインストールされるシステムの詳細ページを開き、**[Formula]** タブに移動します。
2. **[Grafana]** チェックボックスをオンにして、モニタリング式を有効にし、**[保存]** をクリックします。
3. 上部メニューの **[Grafana]** タブに移動します。
4. **[Enable and configure Grafana]** (Grafanaの有効化と設定) セクションに、Grafanaにログインするために使用する管理者資格情報を入力します。
5. **[Datasources]** (データソース) セクションで、Prometheus URLフィールドがPrometheusが実行されているシステムを指していることを確認します。
6. 必要に応じて、他の設定オプションをカスタマイズします。
7. **[Save Formula]** (Formulaの保存) をクリックします。
8. highstateを適用し、正常に完了したことを確認します。
9. Grafanaインタフェースが正しくロードされていることを確認します。ブラウザで、ポート3000で、GrafanaがインストールされているサーバのURLに移動します(たとえば、<http://example.com:3000>)。



SUSE Managerには、サーバのセルフヘルス、基本的なクライアントモニタリングなどのためのダッシュボードがあらかじめ構築されています。プロビジョニングするダッシュボードは、式の設定ページで選択できます。

プロシージャ: Grafanaの手動インストール

1. **grafana**パッケージをインストールします。

```
zypper in grafana
```

2. Grafanaサービスを有効にします。

```
systemctl enable --now grafana-server
```

3. ブラウザで、ポート3000で、GrafanaがインストールされているサーバのURLに移動します(たとえば、<http://example.com:3000>)。
4. ログインページで、ユーザ名とパスワードに**admin**と入力します。
5. **[ログイン]** をクリックします。ログインに成功すると、パスワードを変更するプロンプトが表示されます。
6. プロンプトで**[OK]** をクリックし、パスワードを変更します。
7. サイドメニューの歯車アイコンにカーソルを移動すると、設定オプションが表示されます。
8. **[Data sources]** (データソース) をクリックします。

9. **[Add data source]** (データソースの追加) をクリックすると、サポートされているすべてのデータソースのリストが表示されます。
10. Prometheusデータソースを選択します。
11. Prometheusサーバの正しいURLを指定してください。
12. **[Save & test]** (保存とテスト) をクリックします。
13. ダッシュボードをインポートするには、サイドメニューの[+]アイコンをクリックし、**[取り込み]**をクリックします。
14. SUSE Managerサーバの概要については、ダッシュボードID: **17569**をロードします。
15. SUSE Managerクライアントの概要については、ダッシュボードID: **17570**をロードします。



- モニタリング式の詳細については、**Specialized-guides** > **Salt**を参照してください。
- Grafanaを手動でインストールおよび設定する方法の詳細については、<https://grafana.com/docs>を参照してください。

17.3. SUSE Managerのモニタリングの設定

SUSE Manager 4以降では、サーバがPrometheus self-health metricsを公開できるようにして、クライアントシステムにexportersをインストールして設定することもできます。

17.3.1. サーバ自己監視

Server self-health metricsは、ハードウェア、オペレーティングシステム、およびSUSE Managerの内部を対象としています。これらのメトリックは、Prometheus exportersと組み合わせられた、Javaアプリケーションのインストールメンテーションによって利用可能になります。

以下のexporterパッケージはSUSE Managerサーバに同梱されています。

- Node exporter: [golang-github-prometheus-node_exporter](#)。

- https://github.com/prometheus/node_exporterを参照してください。
- PostgreSQL exporter: `prometheus-postgres_exporter`。
 - https://github.com/wrouesnel/postgres_exporterを参照してください。
- JMX exporter: `prometheus-jmx_exporter`。
 - https://github.com/prometheus/jmx_exporterを参照してください。

以下のexporterパッケージはSUSE Managerプロキシに同梱されています。

- Node exporter: `golang-github-prometheus-node_exporter`。
 - https://github.com/prometheus/node_exporterを参照してください。
- Squid exporter: `golang-github-boynux-squid_exporter`。
 - <https://github.com/boynux/squid-exporter>を参照してください。

exporterパッケージはSUSE Managerサーバおよびプロキシに事前インストールされていますが、各systemdデーモンはデフォルトで無効になっています。

プロシージャ: 自己監視の有効化

1. SUSE Manager Web UIで、**管理** > **マネージャ設定** > **モニタリング**に移動します。
2. **[Enable services]** (サービスの有効化) をクリックします。
3. TomcatとTaskomaticを再起動します。
4. ポート9090で、PrometheusサーバのURLに移動します(たとえば、<http://example.com:9090>)。
5. Prometheus UIで、**ステータス** > **Targets (ターゲット)** に移動して、`mgr-server`グループのすべてのエンドポイントが起動していることを確認します。
6. Web UIを使用してGrafanaもインストールしている場合、サーバインサイトがSUSE Managerサーバダッシュボードの**管理**[Manager Configuration > Monitoring (マネージャの設定 > モニタリング)]に表示されます。



Web UIを使用して有効にできるのは、サーバのセルフヘルスマニタリングだけです。プロキシのメトリックは、Prometheusによって自動的に収集されません。プロキシでセルフヘルスマニタリングを有効にするには、exportersを手動でインストールして有効にする必要があります。

以下の関連メトリックがSUSE Managerサーバに収集されます。

表 7. サーバ統計(ポート80)

メトリック	タイプ	説明
uyuni_all_systems	ゲージ	全システムの数
uyuni_virtual_systems	ゲージ	仮想システムの数

メトリック	タイプ	説明
uyuni_inactive_systems	ゲージ	休止中のシステムの数
uyuni_outdated_systems	ゲージ	旧式パッケージを持つシステムの数

表 8. PostgreSQL exporter (ポート9187)

メトリック	タイプ	説明
pg_stat_database_tup_fetched	カウンタ	クエリによってフェッチされた行数
pg_stat_database_tup_inserted	カウンタ	クエリによって挿入された行数
pg_stat_database_tup_updated	カウンタ	クエリによって更新された行数
pg_stat_database_tup_deleted	カウンタ	クエリによって削除された行数
mgr_serveractions_completed	ゲージ	完了したアクションの数
mgr_serveractions_failed	ゲージ	失敗したアクションの数
mgr_serveractions_picked_up	ゲージ	ピックアップされたアクションの数
mgr_serveractions_queued	ゲージ	キューに入れられたアクションの数

表 9. JMX exporter (Tomcatポート5556、Taskomaticポート5557)

メトリック	タイプ	説明
java_lang_Threading_ThreadCount	ゲージ	アクティブなスレッドの数
java_lang_Memory_HeapMemoryUsage_used	ゲージ	現在のヒープメモリ使用量

表 10. サーバメッセージキュー(ポート80)

メトリック	タイプ	説明
message_queue_thread_pool_threads	カウンタ	これまでに作成されたメッセージキュースレッドの数
message_queue_thread_pool_threads_active	ゲージ	現在アクティブなメッセージキュースレッドの数
message_queue_thread_pool_task_count	カウンタ	これまでに送信されたタスクの数
message_queue_thread_pool_completed_task_count	カウンタ	これまでに完了したタスクの数

表 11. Salt Queue (ポート80)

メトリック	タイプ	説明
salt_queue_thread_pool_size	ゲージ	Saltキューごとに作成されたスレッドの数
salt_queue_thread_pool_active_threads	ゲージ	キューごとに現在アクティブなSaltスレッドの数
salt_queue_thread_pool_task_total	カウンタ	キューごとに送信されたタスクの数
salt_queue_thread_pool_completed_task_total	カウンタ	キューごとに完了したタスクの数

すべてのsalt_queue値には、キュー番号を値として持つ「queue」という名前のラベルがあります。

表 12. Taskomaticスケジューラ(ポート9800)

メトリック	タイプ	説明
taskomatic_scheduler_threads	カウンタ	これまでに作成されたスケジューラスレッドの数
taskomatic_scheduler_threads_active	ゲージ	現在アクティブなスケジューラスレッドの数
taskomatic_scheduler_completed_task_count	カウンタ	これまでに完了したタスクの数

17.3.2. 管理対象システムの監視

Prometheus metrics exportersは、式を使用してSaltクライアントにインストールおよび設定できます。パッケージはSUSE Managerクライアントツールチャンネルから入手でき、SUSE Manager Web UIで直接有効化および設定できます。

これらのexportersは管理対象システムにインストールできます。

- Node exporter: `golang-github-prometheus-node_exporter`。
 - https://github.com/prometheus/node_exporterを参照してください。
- PostgreSQL exporter: `prometheus-postgres_exporter`。
 - https://github.com/wrouesnel/postgres_exporterを参照してください。
- Apache exporter: `golang-github-lusitaniae-apache_exporter`。
 - https://github.com/Lusitaniae/apache_exporterを参照してください。



SLE Microでは、Node exporterとBlackbox exporterのみが利用できます。

exporterをインストールして設定したら、Prometheusを使用して監視対象システムからメトリックを収集できます。Web UIを使用してモニタリングサーバを設定している場合、メトリック収集は自動的に行われません。

プロシージャ: クライアントでのPrometheus Exportersの設定

1. SUSE Manager Web UIで、監視対象のクライアントの詳細ページを開き、**Formula**タブに移動します。
2. [**Prometheus Exporters**] formulaで、**[有効]** チェックボックスをオンにします。
3. **[保存]**をクリックします。
4. **Formula** > **Prometheus Exporters**タブに移動します。
5. 有効にするexportersを選択し、必要に応じて引数をカスタマイズします。 **[アドレス]** フィールドは、コロンで始まるポート番号(**:9100**)か、完全に解決可能なアドレス(**example:9100**)のいずれかを受け入れます。
6. **[Save Formula]** (Formulaの保存) をクリックします。
7. highstateを適用します。



モニタリング式は、対応するグループ内の個々のシステムに使用されているのと同じ設定を適用することによって、システムグループにも設定できます。

モニタリング式の詳細については、**Specialized-guides** > **Salt**を参照してください。

17.3.3. Grafanaパスワードの変更

Grafanaパスワードを変更するには、Grafanaのドキュメントに記載されているステップに従います。

- <https://grafana.com/docs/grafana/latest/administration/user-management/user-preferences/#change-your-grafana-password>

Grafana管理者パスワードを紛失した場合は、次のコマンドでrootとしてリセットできます。

```
grafana-cli --configOverrides cfg:default.paths.data=/var/lib/grafana --homepath /usr/share/grafana admin reset-admin-password <new_password>
```

17.4. ネットワーク境界

Prometheusはプルメカニズムを使用してメトリックをフェッチするため、サーバは監視対象クライアントとのTCP接続を確立する必要があります。デフォルトでは、Prometheusは次のポートを使用します。

- Node exporter: 9100
- PostgreSQL exporter: 9187
- Apache exporter: 9117

さらに、Prometheusを実行するホストとは異なるホストでAlertmanagerを実行している場合は、ポート9093も開く必要があります。AlertmanagerはPrometheusソリューションの一部であり、Prometheusサーバインスタンスなどのクライアントアプリケーションによって送信されるアラートを処理します。Alertmanagerの詳細については、<https://prometheus.io/docs/alerting/latest/alertmanager/>を参照してください。

クラウドインスタンスにインストールされているクライアントの場合、モニタリングサーバにアクセスできるセキュリティグループに必要なポートを追加できます。

または、Prometheusインスタンスをexportersのローカルネットワークにデプロイし、フェデレーションを設定することもできます。これにより、メインのモニタリングサーバはローカルのPrometheusインスタンスから時系列をスクレイピングできます。この方法を使用する場合は、Prometheus APIポート(9090)を開くだけで済みます。

Prometheusフェデレーションの詳細については、<https://prometheus.io/docs/prometheus/latest/federation/>を参照してください。

ネットワーク境界から要求をプロキシすることもできます。PushProxのようなツールは、プロキシとクライアントをネットワークバリアの両側に配備し、PrometheusがNATなどのネットワークトポロジ全体で動作できるようにします。

PushProxの詳細については、<https://github.com/RobustPerception/PushProx>を参照してください。

17.4.1. リバースプロキシのセットアップ

Prometheusはブルメカニズムを使用してメトリックをフェッチするため、サーバは監視対象クライアント上の各exporter へのTCP接続を確立する必要があります。ファイアウォール設定を簡素化するため、exportersにリバースプロキシを使用して、単一のポートですべてのメトリックを公開できます。

プロシージャ: リバースプロキシを使用したPrometheus Exportersのインストール

1. SUSE Manager Web UIで、監視対象のシステムの詳細ページを開き、**[Formula]** タブに移動します。
2. **[Prometheus Exporters]** チェックボックスをオンにして、exporters formulaを有効にし、**[保存]** をクリックします。
3. 上部メニューの **[Prometheus Exporters]** タブに移動します。
4. **[Enable reverse proxy]** (リバースプロキシを有効にする) オプションをオンにして、有効なリバースプロキシポート番号を入力します。たとえば、**9999**。
5. 必要に応じて他のexportersをカスタマイズします。
6. **[Save Formula]** (Formulaの保存) をクリックします。
7. highstateを適用し、正常に完了したことを確認します。

モニタリング式の詳細については、**Specialized-guides > Salt**を参照してください。

17.5. セキュリティ

PrometheusサーバとPrometheus node exporterは、TLS暗号化と認証でエンドポイントを保護するための組み込みメカニズムを提供します。SUSE Manager Web UIは、関連するすべてのコンポーネントの設定を簡素化します。TLS証明書は、ユーザが提供して配備する必要があります。SUSE Managerでは、次のセキュリティモデルを有効にします。

- Node exporter: TLS暗号化とクライアント証明書ベースの認証
- Prometheus: TLS暗号化と基本認証

利用可能なすべてのオプションの設定の詳細については、**Specialized-guides** > **Salt**を参照してください。

17.5.1. TLS証明書の生成

デフォルトでは、SUSE Managerはモニタリング設定を保護するための証明書を提供しません。セキュリティを提供するために、自己署名された、またはサードパーティの認証局(CA)によって署名されたカスタム証明書を生成またはインポートできます。

このセクションでは、SUSE Manager CAで自己署名したPrometheusおよびNode exporter minionsのクライアント/サーバ証明書を生成する方法について説明します。

プロシージャ: サーバ/クライアントTLS証明書の作成

1. SUSE Managerサーバのコマンドプロンプトで、次のコマンドを実行します。

```
rhns-ssl-tool --gen-server --dir="/root/ssl-build" --set-country="COUNTRY" \  
--set-state="STATE" --set-city="CITY" --set-org="ORGANIZATION" \  
--set-org-unit="ORGANIZATION UNIT" --set-email="name@example.com" \  
--set-hostname="minion.example.com" --set-cname="minion.example.com" --no-rpm
```

`set-cname`パラメータが、Saltクライアントの完全修飾ドメイン名(FQDN)であることを確認します。複数のエイリアスが必要な場合は、`set-cname`パラメータを複数回使用できます。

2. `server.crt`および`server.key`ファイルをSalt minionにコピーし、`prometheus`ユーザに読み取りアクセスを提供します。

Chapter 18. 組織

組織は、SUSE Manager内でユーザのアクセスと許可を管理するために使用されます。

ほとんどの環境では、単一の組織で十分です。ただし、より複雑な環境では、複数の組織が必要な場合があります。ビジネス内の物理的な場所ごとに、またはさまざまなビジネス機能ごとに組織を設定したい場合があります。

組織を作成したら、ユーザを作成して組織に割り当てることができます。次に、組織レベルで許可を割り当てることができます。この許可は、組織に割り当てられたすべてのユーザにデフォルトで適用されます。

PAMやシングルサインオンなど、新しい組織の認証方法を設定することもできます。認証の詳細については、**Administration > Auth-methods**を参照してください。



組織を作成および管理するには、SUSE Manager管理者としてログインする必要があります。

プロシージャ: 新しい組織の作成

1. SUSE Manager Web UIで、**管理 > 組織**に移動して、**[組織の作成]**をクリックします。
2. **[組織の作成]** ダイアログで、次のフィールドに入力します。
 - **[Organization Name]** (組織名) フィールドに、新しい組織の名前を入力します。名前は3~128文字である必要があります。
 - **[希望のログイン]** フィールドに、組織の管理者に使用するログイン名を入力します。これは新しい管理者アカウントである必要があります。現在サインインしている組織を含め、既存の管理者アカウントを使用して、新しい組織にサインインすることはできません。
 - **[希望のパスワード]** フィールドに、新しい組織の管理者のパスワードを入力します。 **[パスワードの確認]** フィールドにパスワードを再度入力して確認します。パスワードの強度はパスワードフィールドの下の色付きバーで示されます。
 - **[電子メール]** フィールドに、新しい組織の管理者の電子メールアドレスを入力します。
 - **[ファーストネーム(名)]** フィールドで、挨拶文を選択し、新しい組織の管理者の名前を入力します。
 - **[ラストネーム(姓)]** フィールドに、新しい組織の管理者の姓を入力します。
3. **[組織の作成]**をクリックします。

18.1. 組織の管理

SUSE Manager Web UIで、**管理 > 組織**に移動して、利用可能な組織のリストを表示します。管理する組織の名前をクリックします。

管理 > 組織セクションから、組織のユーザ、信頼、設定、および状態を管理するタブにアクセスできます。



組織を管理できるのは管理者のみです。組織を管理するには、変更する組織の正しい管理者としてサインインしていることを確認してください。

18.1.1. 組織ユーザ

[**ユーザ**] タブに移動して、組織に関連付けられているすべてのユーザとそのロールのリストを表示します。ユーザ名をクリックすると、ユーザを追加、変更、または削除する [**ユーザ**] メニューに移動します。

18.1.2. 信頼されている組織

[**信頼**] タブに移動して、信頼されている組織を追加または削除します。組織間で信頼を確立することにより、それらの組織間でコンテンツを共有し、ある組織から別の組織にクライアントを転送できるようになります。

18.1.3. 組織の設定

[**設定**] タブに移動し、組織の設定を管理します。これには、ステージングされたコンテンツの使用、および SCAP ファイルの使用が含まれます。

コンテンツステージングの詳細については、**Administration** > **Content-staging** を参照してください。

OpenSCAPの詳細については、**Reference** > **Audit** を参照してください。

18.2. 状態の管理

[**状態**] タブに移動して、組織のすべてのクライアントの Salt 状態を管理します。状態を使用すると、グローバルセキュリティポリシーを定義したり、すべてのクライアントに共通の管理ユーザを追加したりできます。

Salt 状態の情報については、**Specialized-guides** > **Salt** を参照してください。

18.2.1. 設定チャンネルの管理

組織全体に適用する設定チャンネルを選択できます。設定チャンネルは、SUSE Manager Web UI で **設定** > **チャンネル** に移動して作成できます。SUSE Manager Web UI を使用して組織に設定チャンネルを適用します。

プロシージャ: 組織への設定チャンネルの適用

1. SUSE Manager Web UI で、**ホーム** > **所属企業/組織** > **設定チャンネル** に移動します。
2. 検索機能を使用して、名前チャンネルを見つけます。
3. 適用するチャンネルをオンにし、**[変更点の保存]** をクリックします。これにより、データベースに保存されますが、チャンネルに変更は適用されません。
4. **[適用]** をクリックして変更を適用します。これにより、組織内のすべてのクライアントに変更が適用されるようにタスクがスケジュールされます。

Chapter 19. パッチ管理

この章では、パッチ管理に関連するさまざまなトピックについて説明します。

19.1. 撤回されたパッチ

ベンダから新しいパッチがリリースされると、テストで特定されなかったいくつかのシナリオでは、パッチに望ましくない副作用(セキュリティ、安定性)が生じる可能性があります。これが発生すると(非常にまれ)、ベンダは通常、新しいパッチをリリースします。このパッチには、そのベンダが実施している内部プロセスによっては、数時間または数日かかる場合があります。

SUSEでは、「撤回されたパッチ」と呼ばれる新しいメカニズム(2021年)を導入し、このようなパッチのアドバイザーステータスを(「最終」または「安定」ではなく)「撤回」に設定することで、ほぼ即座にこのようなパッチを取り消します。



アドバイザーステータス属性が「撤回」に設定されている場合、パッチは「撤回」されています。パッケージが「撤回された」パッチに属している場合、そのパッケージは「撤回」されています。

撤回されたパッチまたはパッケージは、SUSE Managerのシステムにはインストールできません。撤回されたパッケージをインストールする唯一の方法は、`zypper install`を使用して手動で実行し、正確なパッケージバージョンを指定することです。例:

```
zypper install vim-8.0.1568-5.14.1
```

パッチおよびパッケージの撤回ステータスは、SUSE ManagerのWeb UIの⊗アイコンで示されます。たとえば、以下を参照してください。

- チャンネルのパッケージのリスト
- チャンネルのパッチのリスト

システムにインストールされているパッチまたはパッケージが撤回されると、そのシステムのインストール済みパッケージリストに⊗アイコンも表示されます。SUSE Managerでは、このようなパッチまたはパッケージをダウングレードする方法は提供されていません。

19.1.1. チャンネルクローン

複製されたチャンネルを使用する場合は、元のチャンネルからクローンへの撤回されたアドバイザーステータスの伝播に注意する必要があります。

ベンダチャンネルを組織に複製すると、チャンネルパッチも複製されます。

ベンダがチャンネル内のパッチを撤回し、SUSE Managerがこのチャンネルを同期する(たとえば、夜間ジョブと同期する)、「撤回」属性はクローンパッチに伝播されず、クローンチャンネルにサブスクライブされたクライアントによって監視されません。属性をクローンチャンネルに伝播するには、次のいずれかの方法を使用します。

- パッチ同期(ソフトウェア › 管理 › **cloned channel** (クローンチャンネル) › パッチ › 同期)。この機能を使用すると、クローンチャンネルのパッチの属性をオリジナルに合わせることができます。
- コンテンツライフサイクル管理。コンテンツライフサイクル管理のコンテキストでのクローンチャンネルの詳細については、**Client-configuration › Channels**を参照してください。

19.1.2. パッチの共有

組織内で複数のベンダチャンネルのクローンを作成する場合、パッチは複数回複製されるのではなく、クローンチャンネル間で共有されます。その結果、(パッチ同期機能または先述のコンテンツライフサイクル管理を使用して)複製されたパッチを同期すると、複製されたパッチを使用するすべてのチャンネルでその変更が確認されます。

例:

1. 2つのコンテンツライフサイクル管理プロジェクト `prj1` と `prj2` を検討します。
2. これらのプロジェクトの両方に2つの環境 `dev` と `test` があります。
3. これらのプロジェクトの両方にソースチャンネルとして設定されたベンダチャンネルがあります。
4. このシナリオのすべてのチャンネル(合計4つのクローンチャンネル)は、ベンダチャンネルの最新の状態に合わせて調整されます。
5. ベンダがソースチャンネル内のパッチを撤回し、夜間ジョブがそのパッチを SUSE Manager に同期します。
6. 4つのチャンネルのいずれも、パッチを直接使用するのではなく、パッチクローンを使用しているため、この変更を認識しません。
7. パッチを同期するとすぐに(これら2つのプロジェクトのいずれかを構築するか、または4つのクローンチャンネルのいずれかでパッチ同期機能を使用する)、パッチの共有により、*すべて*のクローンチャンネルがそのパッチを撤回されたものと認識します。

Chapter 20. SUSE ManagerのPTFsの使用

SUSEでは、お客様に直接出荷される現在サポートされているすべてのソリューションに対して一時的な修正を提供しています。これらのPTFs (プログラムの一時的な修正)は、SUSE Managerで同期できるリポジトリとして利用できるようになりました。

20.1. PTFパッケージについて

PTFパッケージはプロキシパッケージを介してインストールされ、`ptf-xxxxxx`という名前が付けられます。ここで、xxxxxxはパッケージのバージョンではなく、パッケージの番号と名前の一部です。

これらは、ソフトウェアに修正が含まれていることがわかっている正しいバージョンのパッケージに依存します。このタイプのパッケージは次のとおりです。

- 誤ってインストールすることはできません(つまり、zypper更新はインストールを推奨しません)。
- 誤って削除することはできません(つまり、ユーザがzypperコマンドラインで明示的に指定しない限り、新しいパッケージバージョンはPTFバージョンに置き換わりません)。
- PTFによって以前に解決された特定の問題に新しいバージョンが対処することがわかっている場合にのみ更新されます。
- システムにすでにインストールされているパッケージのみを更新します(つまり、ソフトウェアが複数のパッケージに分割されている場合、PTFは現在システムにインストールされているパッケージのみを置き換えます)。

サポートケース調査の過程で、パッケージの正しいIDと、影響を受けるサービスの配備/再起動方法についての指示がSUSEサポートによって提供されます。

20.2. PTFパッケージのインストール



PTFパッケージは現在、SLE 12およびSLE 15ベースのシステムでのみサポートされています。他のバージョンまたはオペレーティングシステムにはこの機能がないため、ページは表示されません。

プロシージャ: コマンドラインを使用してPTFリポジトリを有効にし、同期する

1. コンソールで、`mgr-sync refresh`と入力します。
2. 「`mgr-sync list channel`」と入力し、SCCアカウント名とその名前の`ptfs`で始まるチャンネルを探します。例: `a123456-sles-15.3-ptfs-x86_64`。
3. `mgr-sync add channel <label>`を使用してPTFチャンネルを有効にします。

このチャンネルは現在使用可能になり、同じベースチャンネルを使用しているすべてのシステムに追加できます。

PTFパッケージは、システムの更新時に自動的に選択されないため、明示的にインストールする必要があります。SUSEカスタマーサポートは、特定の問題を修正するためのPTF番号を提供しています。この番号を使用して、PTFリストでプロキシパッケージを特定できます。SUSE ManagerのWeb UIには、インストール

できるPTFが提供されているすべてのシステム用に、PTFを一覧にしたページがあります。

プロシージャ: SUSE ManagerのWeb UIを使用したPTFリポジトリの有効化および同期

1. SUSE ManagerのWeb UIで、**管理** > **セットアップウィザード** > **製品**に移動し、PTFリポジトリを有効にする製品を探します。
2. 製品同期ステータスの横にある**[製品チャンネルの表示]**をクリックします。
3. 製品の必須チャンネルとオプションチャンネルを一覧表示したポップアップが表示されます。
4. オプションのチャンネルリストで、自分のSCCアカウント名とptfsで名前が始まるチャンネルを探します。例: `a123456-sles-15.3-ptfs-x86_64`。
5. チャンネル名の横にあるチェックボックスを使用してチャンネルを選択し、**[確認]**をクリックして同期をスケジュールします。

オプションチャンネルを追加できるようにするには、製品をインストールする必要があることに注意してください。

プロシージャ: PTFパッケージのインストール

1. SUSE Manager Web UIで、**システム** > **システム一覧**に移動して、PTFをインストールするクライアントを選択します。
2. **システム** > **ソフトウェア** > **パッケージ** > **ソフトウェアチャンネル**に移動し、**PTF channel** (PTFチャンネル) を選択します。
3. **[次へ]**、**[ソフトウェアチャンネルの変更確認]**、**[確認]**をクリックします。
4. チャンネルの割り当てが完了しているかどうかを確認するには、**システム** > **Events** > **History (イベント > 履歴)**に移動して結果を確認します。
5. **システム** > **ソフトウェア** > **PTFs** > **インストールサブタブ**に移動します。
6. インストールするPTFパッケージを選択します。
7. **[PTFのインストール]**、**[Program Temporary Fixes (PTFs)インストールの確認]**、**[確認]**をクリックします。
8. PTFのインストール結果を確認するには、**システム** > **Events** > **History (イベント > 履歴)**に移動します。

APIを使用してPTFをインストールする必要がある場合は、プロキシパッケージ名とともに通常の`system.schedulePackageInstall` APIを使用できます。

20.3. PTFのインストール後

PTFを確認して報告された問題に対処すると、更新されたパッケージは、通常のメンテナンス更新として更新リポジトリで広く配布される前に、今後のメンテナンス更新に含める対象として追跡されます。

この修正を含む定期的な更新がリリースされると、PTFの更新バージョンもアカウント固有のPTFリポジトリにリリースされます。更新されたPTFにより厳密な依存関係が削除され、更新を再度インストールできるようになります。

PTFの修正を含む保守更新の置き換えは、標準のパッケージ更新またはパッチのインストールによって自動的に行われます。

20.4. パッチ適用済みバージョンのパッケージの削除

PTFをアンインストールする必要がある場合、パッチが適用されていないバージョンのパッケージをシステムにインストールする必要がある場合、単純なパッケージ削除は使用できません。PTFパッケージは、標準パッケージリストページでは選択できません。

プロシージャ: PTFパッケージの削除

1. SUSE Manager Web UIで、**システム** > **システム一覧**に移動して、PTFを削除するクライアントを選択します。
2. **システム** > **ソフトウェア** > **PTFs** > **一覧表示/削除**サブタブに移動します。
3. 削除するPTFパッケージを選択します。
4. **[PTFsの削除]**をクリックし、**[Program Temporary Fixes (PTFs)削除の確認]** ページで、**[確認]**をクリックします。
5. 結果を確認するには、**システム** > **イベント** > **履歴**に移動します。



PTFを削除するには、特別なバージョンの`libzypp`と`zypper`をクライアントシステムにインストールする必要があります。`removeptf`がサポートされているかどうかを確認するには、`zypper --help`を確認します。**[List/Remove (リスト/削除)]** タブは、この条件を満たしている場合にのみ表示されます。

APIを使用してPTFを削除する必要がある場合は、プロキシパッケージ名とともに通常の`system.schedulePackageRemove` APIを使用できます。

20.5. クライアント上のパッチ適用済みバージョンのパッケージを削除する

コンソールを使用してPTFをクライアント上で直接削除する必要がある場合、特別なコマンド`zypper removeptf`を使用する必要があります。他の方法はすべて、エラーになるか、重要なパッケージがシステムから削除されてシステムが使用不能になるなどの望まない動作を招く可能性があります。

Chapter 21. レポートの生成

SUSE Managerでは、ユーザがさまざまなレポートを作成できます。これらのレポートはサブスクライブしたシステム、ユーザ、および組織のインベントリを取得するのに役立ちます。レポートの使用は、特に多数のシステムを管理している場合は、SUSE Manager Web UIから手動で情報を収集するより簡単な場合が多いです。

コマンドラインツール`spacewalk-report`を使用して事前設定されたレポートを生成することができますが、**Specialized-guides** › **Large-deployments**を導入することで、完全にカスタマイズされたレポートを生成することもできます。これは、SQL言語をサポートする任意のレポートングツールをレポートングデータベースに接続し、データを直接抽出することで実現できます。データの可用性と構造の詳細については、レポートングデータベーススキーマのドキュメントを参照してください。

21.1. spacewalk-reportの使用



サーバコンテナで手順を実行する前に、`mgrctl term`を使用します。

レポートを生成するには、`spacewalk-reports`パッケージをインストールしている必要があります。`spacewalk-report`コマンドを使用すると、SUSE Manager全体のコンテンツ、システム、およびユーザーリソースに関するレポートを整理して表示できます。



Specialized-guides › **Large-deployments**の導入により、`spacewalk-report`はデフォルトでレポートングデータベースからデータを収集するようになりました。詳細については`spacewalk-report`および`レポートングデータベース`を参照してください。

次に関するレポートを生成できます。

システムインベントリ

SUSE Managerに登録されているすべてのシステムを一覧にします。

パッチ

登録されているシステムに関連するすべてのパッチを一覧にします。重大度、および特定のパッチに適用されるシステムでパッチをソートできます。

ユーザ

すべての登録済みユーザおよび特定のユーザに関連するすべてのシステムを一覧にします。

CSV形式でレポートを取得するには、サーバのコマンドプロンプトで次のコマンドを実行します。

```
spacewalk-report <report_name>
```

21.2. spacewalk-reportおよびレポーティングデータベース

spacewalk-reportは、デフォルトで新しいレポーティングデータベースを使用してデータを抽出します。これは、新しく生成されたレポートには、データの構造と形式にいくつかの相違があることを意味します。すべてのレポートに共通する相違点は次のとおりです。

- レポートデータはリアルタイムでは変更されず、スケジュールされたタスクの実行によってのみ更新されます。
- データの重複が削除され、以前は「多値」とみなされていた列には、`;`で区切られた複数の値が含まれるようになりました。これはまた、コマンドラインオプション`--multival-on-rows`と`--multival-separator`が新しいレポートには適用されなくなったことも意味します。これは、これらの動作がデフォルトになったためです。
- すべてのレポートで、新しい列の`mgm_id`と`synced_date`が導入され、ハブシナリオの管理サーバと、アプリケーションデータベースから情報が最後に更新された時刻を識別します。
- すべてのブール値は、`1/0`値ではなく、`True/False`で表されるようになりました。
- 列`org_id`は、数値識別子ではなく組織名を含む、`organization`に置き換えられました。
- 「サーバ」という用語は「システム」に置き換えられました。したがって、たとえば、列`server_id`は`system_id`と呼ばれるようになりました。

レポート固有の変更については、[使用可能なレポートのリスト](#)を参照してください。



この変更された動作によって問題が発生した場合、新しいオプション`--legacy-report`を使用して、アプリケーションデータベースに対して実行される古いレポートにフォールバックできます。

hubレポートの詳細については、[Specialized-guides > Large-deployments](#)を参照してください。

21.3. 使用可能なレポートのリスト

この表は、使用可能なレポートを一覧表示します。

表 13. spacewalk-reportレポート

レポート	呼び出される手段	説明	レポーティングデータベースを使用するか	具体的な違い
アクション	<code>actions</code>	すべてのアクション。	はい	列 <code>id</code> が <code>action_id</code> と呼ばれるようになりました

レポート	呼び出される手段	説明	レポーティングデータベースを使用するか	具体的な違い
アクティベーションキー	<code>activation-keys</code>	すべてのアクティベーションキー、およびそれらに関連付けられたエンタイトルメント、チャンネル、設定チャンネル、システムグループ、およびパッケージ。	いいえ	
アクティベーションキー: チャンネル	<code>activation-keys-channels</code>	すべてのアクティベーションキーおよび各キーに関連付けられたエンティティ。	いいえ	
アクティベーションキー: 設定	<code>activation-keys-config</code>	すべてのアクティベーションキーおよび各キーに関連付けられた設定チャンネル。	いいえ	
アクティベーションキー: サーバグループ	<code>activation-keys-groups</code>	すべてのアクティベーションキーおよび各キーに関連付けられたシステムグループ。	いいえ	
アクティベーションキー: パッケージ	<code>activation-keys-packages</code>	すべてのアクティベーションキーおよび各キーが配備できるパッケージ。	いいえ	
チャンネルパッケージ	<code>channel-packages</code>	チャンネル内のすべてのパッケージ。	はい	
チャンネルレポート	<code>channels</code>	指定されたチャンネルの詳細レポート。	はい	
クローンチャンネルレポート	<code>cloned-channels</code>	クローンチャンネルの詳細レポート。	はい	
設定ファイル	<code>config-files</code>	ファイルの内容とファイル情報を含む、全組織の全設定ファイルのリビジョン。	いいえ	

レポート	呼び出される手段	説明	レポーティングデータベースを使用するか	具体的な違い
最新の設定ファイル	<code>config-files-latest</code>	ファイルの内容とファイル情報を含む、全組織の最新設定ファイルのリビジョン。	いいえ	
カスタムチャンネル	<code>custom-channels</code>	特定の組織が所有するすべてのチャンネルのチャンネルメタデータ。	はい	列 <code>id</code> は <code>channel_id</code> と呼ばれるようになりました
カスタム情報	<code>custom-info</code>	クライアントカスタム情報。	はい	
チャンネルのパッチ	<code>errata-channels</code>	チャンネル内のすべてのパッチ。	はい	
パッチの詳細	<code>errata-list</code>	登録済みクライアントに影響するすべてのパッチ。	はい	
すべてのパッチ	<code>errata-list-all</code>	すべてのパッチ。	いいえ	
クライアント用パッチ	<code>errata-systems</code>	適用可能なパッチおよび影響を受ける登録済みクライアント。	はい	
ホストゲスト	<code>host-guests</code>	ホストおよびゲストのマッピング。	はい	
非アクティブなクライアント	<code>inactive-systems</code>	非アクティブなクライアント。	はい	必須パラメータは「しきい値」と呼ばれます。
システムインベントリ	<code>inventory</code>	サーバに登録されているクライアントと、ハードウェアおよびソフトウェアの情報。	はい	列 <code>osad_status</code> は削除されました。
キックスタートスクリプト	<code>kickstart-scripts</code>	詳細を含む、すべてのキックスタートスクリプト。	いいえ	
キックスタートツリー	<code>kickstartable-trees</code>	キックスタートツリー。	いいえ	"

レポート	呼び出される手段	説明	レポートिंगデータベースを使用するか	具体的な違い
すべてのアップグレード可能バージョン	<code>packages-updates-all</code>	アップグレード可能なすべてのより新しいパッケージバージョン。	はい	
最新のアップグレード可能なバージョン	<code>packages-updates-newest</code>	アップグレード可能な最新のパッケージバージョン。	はい	
プロキシの概要	<code>proxies-overview</code>	すべてのプロキシとそれぞれに登録されたクライアント。	はい	
リポジトリ	<code>repositories</code>	関連付けられたSSLの詳細およびフィルタを含むすべてのリポジトリ。	いいえ	
SCAPの結果	<code>scap-scan</code>	OpenSCAP <code>sccdf</code> 評価の結果。	はい	
SCAPの結果	<code>scap-scan-results</code>	別の形式でのOpenSCAP <code>sccdf</code> 評価の結果。	はい	
システムデータ	<code>splice-export</code>	スプライス統合に必要なクライアントデータ。	いいえ	
システム通貨	<code>system-currency</code>	登録済みクライアントごとに使用可能なパッチの数。	いいえ	
システムの追加パッケージ	<code>system-extra-packages</code>	クライアントがサブスクライブしているチャンネルから利用できない、すべてのクライアントにインストールされたすべてのパッケージ。	はい	
システムグループ	<code>system-groups</code>	システムグループ。	はい	
システムグループのアクティベーションキー	<code>system-groups-keys</code>	システムグループのアクティベーションキー。	いいえ。	
システムグループのシステム	<code>system-groups-systems</code>	システムグループのクライアント。	はい	

レポート	呼び出される手段	説明	レポートングデータベースを使用するか	具体的な違い
システムグループユーザ	<code>system-groups-users</code>	システムグループおよびシステムグループに対する許可を持つユーザ。	いいえ	
履歴: システム	<code>system-history</code>	クライアントごとのイベント履歴。	はい	
履歴: チャンネル	<code>system-history-channels</code>	チャンネルイベント履歴。	はい	
履歴: 設定	<code>system-history-configuration</code>	設定イベント履歴	はい	列 <code>created_date</code> は削除されました。
履歴: エンタイトルメント	<code>system-history-entitlements</code>	システムエンタイトルメントイベント履歴。	はい	
履歴: エラータ	<code>system-history-errata</code>	エラーイベント履歴。	はい	列 <code>created_date</code> は削除されました。
履歴: キックスタート	<code>system-history-kickstart</code>	キックスタートイベント履歴。	はい	列 <code>created_date</code> は削除されました。
履歴: パッケージ	<code>system-history-packages</code>	パッケージイベント履歴。	はい	列 <code>created_date</code> は削除されました。
履歴: SCAP	<code>system-history-scap</code>	OpenSCAPイベント履歴。	はい	列 <code>created_date</code> は削除されました。
MD5証明書	<code>system-md5-certificates</code>	MD5チェックサムを持つ証明書を使用するすべての登録済みクライアント。	いいえ	
インストール済みパッケージ	<code>system-packages-installed</code>	クライアントにインストールされたパッケージ。	はい	
システムプロファイル	<code>system-profiles</code>	サーバに登録されているすべてのクライアントと、ソフトウェアおよびシステムグループ情報。	いいえ	
ユーザ	<code>users</code>	SUSE Managerに登録されたすべてのユーザ。	はい	列 <code>organization_id</code> は削除されました。

レポート	呼び出される手段	説明	レポートングデータベースを使用するか	具体的な違い
MD5ユーザ	<code>users-md5</code>	MD5暗号化パスワードを使用している全組織の全ユーザと、その詳細とロール。	はい	列 <code>organization_id</code> は削除されました。
管理されるシステム	<code>users-systems</code>	個々のユーザが管理できるクライアント。	はい	列 <code>organization_id</code> は削除されました。

個々のレポートに関する詳細については、オプション`--info`または`--list-fields-info`およびレポート名を指定して、`spacewalk-report`を実行します。これにより、レポートに使用可能なフィールドの説明とリストが表示されます。

プログラムの呼び出しとオプションの詳細については、`spacewalk-report(8)`マニュアルページ、および`spacewalk-report`コマンドの`--help`パラメータを参照してください。

Chapter 22. セキュリティ

22.1. クライアントをマスター検証指紋に設定する

高度に安全なネットワーク設定では、Saltクライアントが特定のマスターに接続していることを確認したい場合があります。クライアントからマスターへの検証を設定するには、Salt Minionの設定ファイル内にマスターの指紋を入力します。

- クライアントでSalt Minionを使用している場合、`/etc/salt/minion.d/custom.conf`
- クライアントでSalt Bundleを使用している場合、`/etc/venv-salt-minion/minion.d/custom.conf`

その後、次のプロシージャに従います。



サーバコンテナ内でシェルにアクセスするには、コンテナホストで`mgrctl term`を実行します。

プロシージャ: マスターの指紋をクライアントに追加する

1. マスターのコマンドプロンプトで、rootとして、次のコマンドを使用して、`master.pub`の指紋を見つけます。

```
salt-key -F master
```

クライアントで、`/etc/salt/minion.d/custom.conf`または`/etc/venv-salt-minion/minion.d/custom.conf`設定ファイルを開きます。次の行を、指紋の例を置き換えてマスターの指紋に追加します。

```
master_finger: 'ba:30:65:2a:d6:9e:20:4f:d8:b2:f3:a7:d4:65:11:13'
```

2. サービスを再起動します。salt-minionの場合は、次のコマンドを実行します。

```
systemctl restart salt-minion
```

3. または、venv-salt-minionの場合は、次のコマンドを実行します。

```
systemctl restart venv-salt-minion
```

Salt Bundleの詳細については、**Client-configuration** > **Contact-methods-saltbundle**を参照してください。

クライアントからのセキュリティの設定については、<https://docs.saltstack.com/en/latest/ref/configuration/minion.html>を参照してください。

22.2. リポジトリメタデータの署名

リポジトリメタデータを署名できるようにするにはカスタムGPGキーが必要です。



サーバコンテナ内でシェルにアクセスするには、コンテナホストで `mgrctl term` を実行します。

プロシージャ: カスタムGPGキーの生成

1. rootユーザとして、`gpg`コマンドを使用して、新しいキーを生成します。

```
mgrctl exec -- gpg --gen-key
```

2. プロンプトが表示されたら、サイズが2048ビットのRSAをキータイプとして選択し、キーの適切な有効期限を選択します。新しいキーの詳細を確認して、「y」と入力して確定します。
3. プロンプトが表示されたら、キーに関連付けられた名前と電子メールアドレスを入力します。必要に応じて、キーの識別に役立つコメントを追加することもできます。ユーザIDに問題がなければ、「0」と入力して確定します。
4. プロンプトが表示されたら、キーを保護するパスフレーズを入力します。
5. キーは自動的にキーリングに追加されます。キーリングにキーを一覧表示して確認できます。

```
gpg --list-keys
```

6. テキストエディタでファイルを開き、次の行を追加して、キーリングのパスワードを `/etc/rhn/signing.conf` 設定ファイルに追加します。

```
GPGPASS="password"
```

GPGキーの更新については、**Administration** > **Troubleshooting** を参照してください。

`mgr-sign-metadata-ctl` コマンドを使用してコマンドラインでメタデータ署名を管理できます。

プロシージャ: メタデータ署名の有効化

1. 使用するキーの短い識別子を知っている必要があります。使用可能な公開鍵を短い形式で一覧表示できます。

```
mgrctl exec -- gpg --keyid-format short --list-keys
...
pub  rsa2048/3E7BFE0A 2019-04-02 [SC] [expires: 2021-04-01]
     A43F9EC645ED838ED3014B035CFA51BF3E7BFE0A
uid   [ultimate] SUSE Manager
sub  rsa2048/118DE7FF 2019-04-02 [E] [expires: 2021-04-01]
```

2. `mgr-sign-metadata-ctl` コマンドを使用してメタデータ署名を有効化します。

```

mgrctl exec -- mgr-sign-metadata-ctl enable 3E7BFE0A
OK. Found key 3E7BFE0A in keyring.
DONE. Set key 3E7BFE0A in /etc/rhn/signing.conf.
DONE. Enabled metadata signing in /etc/rhn/rhn.conf.
DONE. Exported key 4E2C3DD8 to /srv/susemanager/salt/gpg/mgr-keyring.gpg.
DONE. Exported key 4E2C3DD8 to /var/spacwalk/gpg/<KEY_NAME>.key.
NOTE. For the changes to become effective run:
mgr-sign-metadata-ctl regen-metadata

```

- このコマンドを使用して設定が正しいことを確認できます。

```
mgrctl exec -- mgr-sign-metadata-ctl check-config
```

- サービスを再起動し、メタデータの再生成をスケジュールして変更を取得します。

```
mgrctl exec -- mgr-sign-metadata-ctl regen-metadata
```

`mgr-sign-metadata-ctl` コマンドを使用して他のタスクを実行することもできます。 `mgr-sign-metadata-ctl --help` を使用して、完全なリストを表示します。

リポジトリメタデータ署名はグローバルオプションです。有効にすると、サーバ上のすべてのソフトウェアチャンネルで有効になります。これは、サーバに接続されているすべてのクライアントが、パッケージをインストールまたは更新できるようにするために、新しいGPGキーを信頼する必要があることを意味します。

プロシージャ: クライアントへのGPGキーのインポート

- GPGキーをクライアントに配備すると、salt状態で動作します。
- SUSE Manager Web UIを使用してhighstateを適用します。

GPGキーのトラブルシューティングの詳細については、**Administration > Troubleshooting** を参照してください。

22.3. ミラーソースパッケージ

独自のパッケージをローカルに構築する場合、または法的な理由でパッケージのソースコードが必要な場合は、SUSE Managerサーバ上のソースパッケージをミラーリングできます。



ソースパッケージをミラーリングすると、大量のディスク容量が消費される可能性があります。



サーバコンテナで手順を実行する前に、`mgrctl term` を使用します。

プロシージャ: ソースパッケージのミラーリング

- `/etc/rhn/rhn.conf` 設定ファイルを開いて、次の行を追加します。

```
server.sync_source_packages = 1
```

2. Spacewalkサービスを再起動して、変更を取得します。

```
mgradm restart
```

現在、この機能はすべてのリポジトリに対してグローバルにのみ有効にできます。ミラーリングに個々のリポジトリを選択することはできません。

この機能を有効にすると、次のリポジトリ同期後に、ソースパッケージがSUSE Manager Web UIで使用できるようになります。これらはバイナリパッケージのソースとして表示され、Web UIから直接ダウンロードできます。Web UIを使用して、ソースパッケージをクライアントにインストールすることはできません。

22.4. OpenSCAPによるシステムセキュリティ

SUSE ManagerはOpenSCAPを使用してクライアントを監査します。任意のクライアントのコンプライアンススキャンをスケジュールして表示できます。

22.4.1. SCAPについて

Security Content Automation Protocol (SCAP)は、コミュニティのアイデアから派生した相互運用可能な仕様を統合したものです。これは、エンタープライズシステムのシステムセキュリティを維持するために、National Institute of Standards and Technology (NIST)によって維持されている一連の仕様です。

SCAPは、システムのセキュリティを維持するための標準化されたアプローチを提供するために作成されました。また、使用される標準は、コミュニティや企業のビジネスニーズを満たすために継続的に変更されます。新しい仕様はNISTのSCAPリリースサイクルによって管理され、一貫性のある再現可能な改訂ワークフローを提供します。詳細については、以下を参照してください。

- <http://scap.nist.gov/timeline.html>
- <https://csrc.nist.gov/projects/security-content-automation-protocol>
- <https://www.open-scap.org/features/standards/>
- <https://ncp.nist.gov/repository?scap>

SUSE ManagerはOpenSCAPを使用してSCAP仕様を実装します。OpenSCAPは、Extensible Configuration Checklist Description Format (XCCDF)を利用した監査ツールです。XCCDFは、チェックリストの内容を表現する標準的な方法であり、セキュリティチェックリストを定義します。また、Common Platform Enumeration (CPE)、Common Configuration Enumeration (CCE)、Open Vulnerability and Assessment Language (OVAL)などの他の仕様と組み合わせて、SCAP検証済みの製品で処理できるSCAP表現のチェックリストを作成します。

OpenSCAPはSUSEセキュリティチームが作成したコンテンツを使用して、パッチの存在を確認します。OpenSCAPは、システムセキュリティ設定をチェックし、標準と仕様に基づいたルールを使用して、システムに侵害の兆候がないかどうかを検査します。SUSEセキュリティチームの詳細については、<https://www.suse.com/support/security>を参照してください。

22.4.2. SCAPスキャンのためのクライアントの準備

開始する前に、SCAPスキャン用にクライアントシステムを準備する必要があります。



OpenSCAP監査は、SSH接続メソッドを使用するSaltクライアントでは使用できません。



スキャンクライアントは、スキャンするクライアントのメモリと計算能力を大量に消費する可能性があります。Red Hatクライアントの場合、スキャンする各クライアントで少なくとも2GBのRAMが使用可能であることを確認してください。

開始する前にOpenSCAPスキャナとSCAPセキュリティガイド(コンテンツ)パッケージをインストールしてください。オペレーティングシステムに応じて、これらのパッケージはベースオペレーティングシステムまたはSUSE Managerクライアントツールのいずれかに含まれています。

次の表に、必要なパッケージを一覧表示します。

表 14. OpenSCAPパッケージ

オペレーティングシステム	スキャナ	コンテンツ
SLES	openscap-utils	scap-security-guide
openSUSE	openscap-utils	scap-security-guide
RHEL	openscap-utils	scap-security-guide-redhat
CentOS	openscap-utils	scap-security-guide-redhat
Oracle Linux	openscap-utils	scap-security-guide-redhat
Ubuntu	libopenscap8	scap-security-guide-ubuntu
Debian	libopenscap8	scap-security-guide-debian

RHEL 7および互換システムでは、`scap-security-guide`パッケージが提供されています。このパッケージには、古い内容が含まれています。SUSE Managerクライアントツールにある`scap-security-guide-redhat`パッケージを使用することをお勧めします。

SUSEは、異なるOpenSCAPプロファイル用の `scap-security-guide` パッケージを提供しています。 `scap-security-guide` の現在のバージョンでは、SUSEは次のプロファイルをサポートしています。

- SUSE Linux Enterprise Server 12および15のDISA STIGプロファイル
- SUSE Linux Enterprise Server 12および15のANSSI-BP-028プロファイル
- SUSE Linux Enterprise Server 12および15のPCI-DSSプロファイル
- SUSE Linux Enterprise Server 15のHIPAAプロファイル
- SUSE Linux Enterprise Server 12および15のCISプロファイル
- SUSE Linux Enterprise Server for SAP Applications 15のパブリッククラウドイメージ用の強化
- SUSE Linux Enterprise 15用のパブリッククラウドの強化
- SLE 12および15の標準のシステムセキュリティプロファイル

このリストに記載されていない他のプロファイルは、コミュニティが提供するものであり、SUSEによって公式にサポートされていません。

SUSE以外のオペレーティングシステムの場合、含まれるプロファイルはコミュニティが提供します。これらはSUSEによって公式にサポートされていません。

22.4.3. OpenSCAPコンテンツファイル

OpenSCAPは、SCAPコンテンツファイルを使用してテストルールを定義します。これらのコンテンツファイルは、XCCDFまたはOVAL標準に基づいて作成されます。『SCAPセキュリティガイド』に加えて、公開されているコンテンツファイルをダウンロードして、要件に合わせてカスタマイズできます。デフォルトのコンテンツファイルテンプレート用のSCAPセキュリティガイドパッケージをインストールできます。または、XCCDFまたはOVALに精通している場合は、独自のコンテンツファイルを作成できます。

テンプレートを使用してSCAPコンテンツファイルを作成することをお勧めします。独自のカスタムコンテンツファイルを作成して使用する場合は、自己責任で作成してください。カスタムコンテンツファイルを使用してシステムが破損した場合、SUSEのサポートを受けられない可能性があります。

コンテンツファイルを作成したら、ファイルをクライアントに転送する必要があります。これは、物理的なストレージメディアを使用して他のファイルを移動するのと同じ方法で行うことができます。または、Salt (たとえば、`salt-cp`やSalt File Server)、`ftp`や`scp`を使用してネットワークを介して移動することもできます。

SUSE Managerで管理しているクライアントにコンテンツファイルを配布するパッケージを作成することをお勧めします。パッケージの整合性を確認するために、パッケージに署名して検証することができます。詳細については、**Administration > Custom-channels**を参照してください。

22.4.4. OpenSCAPプロファイルの検索

オペレーティングシステムによって、使用可能なOpenSCAPコンテンツファイルとプロファイルが異なります。1つのコンテンツファイルに複数のプロファイルを含めることができます。

RPMベースのオペレーティングシステムでは、次のコマンドを使用して、使用可能なSCAPファイルの場所を決定します。

```
rpm -ql <scap-security-guide-package-name-from-table>
```

DEBベースのオペレーティングシステムでは、次のコマンドを使用して、使用可能なSCAPファイルの場所を決定します。

```
dpkg -L <scap-security-guide-package-name-from-table>
```

ニーズに合う1つの SCAPコンテンツファイルを特定したら、クライアントに使用可能なプロファイルを一覧にします。

```
oscap info /usr/share/xml/scap/ssg/content/ssg-sle15-ds-1.2.xml
Document type: Source Data Stream
Imported: 2021-03-24T18:14:45

Stream: scap_org.open-scap_datastream_from_xccdf_ssg-sle15-xccdf-1.2.xml
Generated: (null)
Version: 1.2
Checklists:
  Ref-Id: scap_org.open-scap_cref_ssg-sle15-xccdf-1.2.xml
  Status: draft
  Generated: 2021-03-24
  Resolved: true
  Profiles:
    Title: CIS SUSE Linux Enterprise 15 Benchmark
    Id: xccdf_org.ssgproject.content_profile_cis
    Title: Standard System Security Profile for SUSE Linux Enterprise 15
    Id: xccdf_org.ssgproject.content_profile_standard
    Title: DISA STIG for SUSE Linux Enterprise 15
    Id: xccdf_org.ssgproject.content_profile_stig
  Referenced check files:
    ssg-sle15-oval.xml
    system: http://oval.mitre.org/XMLSchema/oval-definitions-5
    ssg-sle15-ocil.xml
    system: http://scap.nist.gov/schema/ocil/2
    https://ftp.suse.com/pub/projects/security/oval/suse.linux.enterprise.15.xml
    system: http://oval.mitre.org/XMLSchema/oval-definitions-5
  Checks:
    Ref-Id: scap_org.open-scap_cref_ssg-sle15-oval.xml
    Ref-Id: scap_org.open-scap_cref_ssg-sle15-ocil.xml
    Ref-Id: scap_org.open-scap_cref_ssg-sle15-cpe-oval.xml
  Dictionaries:
    Ref-Id: scap_org.open-scap_cref_ssg-sle15-cpe-dictionary.xml
```

スキャンを実行するためのファイルパスとプロファイルをメモします。

22.4.5. 監査スキャンの実行

コンテンツファイルをインストールまたは転送したら、監査スキャンを実行できます。 監査スキャン
は、SUSE Manager Web UIを使用してトリガできます。 SUSE Manager APIを使用して、定期的なスキャン

をスケジュールすることもできます。

プロシージャ: Web UIからの監査スキュンの実行

1. SUSE Manager Web UIで、**システム** > **システム一覧**に移動して、スキャンするクライアントを選択します。
2. **[監査]** タブ、および **[スケジュール]** サブタブに移動します。
3. **[XCCDFドキュメントへのパス]** フィールドに、クライアントで使用するSCAPテンプレートとプロファイルのパラメータを入力します。例:

```
Command: /usr/bin/oscap xccdf eval
Command-line arguments: --profile xccdf_org.ssgproject.content_profile_stig
Path to XCCDF document: /usr/share/xml/scap/ssg/content/ssg-sle15-ds-1.2.xml
```



--fetch-remote-resourcesパラメータを使用する場合は、大量のRAMが必要です。さらに、**file_recv_max_size**の値を増やす必要がある場合があります。

4. スキャンは、クライアントの次にスケジュールされた同期時に実行されます。



XCCDFコンテンツファイルはリモートシステムで実行される前に検証されます。コンテンツファイルに無効な引数が含まれている場合は、テストに失敗します。

プロシージャ: APIからの監査スキュンの実行

1. 開始する前に、スキャンするクライアントにPythonおよびXML-RPCライブラリがインストールされていることを確認します。
2. 既存のスクリプトを選択するか、**system.scap.scheduleXccdfScan**を使用してシステムスキャンをスケジュールするスクリプトを作成します。例:

```
#!/usr/bin/python3
client = xmlrpc.client.ServerProxy('https://server.example.com/rpc/api')
key = client.auth.login('username', 'password')
client.system.scap.scheduleXccdfScan(key, <1000010001>,
'<path_to_xccdf_file.xml>',
'--profile <profile_name>')
```

この例では、* **<1000010001>**はシステムID (sid)です。* **<path_to_xccdf_file.xml>**は、クライアント上のコンテンツファイルの場所へのパスです。たとえば、**/usr/share/xml/scap/ssg/content/ssg-sle15-ds-1.2.xml**。* **<profile_name>**はoscapコマンドの追加の引数です。たとえば、**united_states_government_configuration_baseline** (USGCB)を使用します。

3. コマンドプロンプトから、スキャンするクライアント上でスクリプトを実行します。

22.4.6. スキャン結果

実行したスキャンに関する情報は、SUSE Manager Web UIにあります。結果の表を表示するには、**監査** > **OpenSCAP** > **全スキャン**に移動します。この表のデータの詳細については、**Reference** > **Audit**を参照してください。

スキャンに関する詳細情報を使用できるようにするには、クライアントで有効にする必要があります。SUSE Manager Web UIで、**管理** > **組織**に移動し、クライアントが属する組織をクリックします。 **[設定]** タブに移動し、**[詳細なSCAPファイルのアップロードを有効にする]** オプションをオンにします。有効にすると、スキャンごとに、追加情報を含む追加のHTMLファイルが生成されます。結果には、次のような追加の行が表示されます。

```
Detailed Results: xccdf-report.html xccdf-results.xml scap-yast2sec-oval.xml.result.xml
```

コマンドラインからスキャン情報を取得するには、`spacewalk-report`コマンドを使用します。

```
spacewalk-report system-history-scap
spacewalk-report scap-scan
spacewalk-report scap-scan-results
```

SUSE Manager APIを使用して、`system.scap`ハンドラを使用して結果を表示することもできます。

22.4.7. 修復

クライアントシステムを強化するために、修復用のBashスクリプトとAnsible playbookが同じSCAPセキュリティガイドパッケージで提供されます。例:

リスト 5. bashスクリプト

```
/usr/share/scap-security-guide/bash/sle15-script-cis.sh
/usr/share/scap-security-guide/bash/sle15-script-standard.sh
/usr/share/scap-security-guide/bash/sle15-script-stig.sh
```

リスト 6. Ansible playbook

```
/usr/share/scap-security-guide/ansible/sle15-playbook-cis.yml
/usr/share/scap-security-guide/ansible/sle15-playbook-standard.yml
/usr/share/scap-security-guide/ansible/sle15-playbook-stig.yml
```

クライアントシステムでAnsibleを有効にした後、リモートコマンドまたはAnsibleを使用して実行できます。

22.4.7.1. Bashスクリプトを使用して修復を実行する

`scap-security-guide`パッケージをすべてのターゲットシステムにインストールします。 詳細については、**Administration** > **Ansible-setup-control-node**を参照してください。

パッケージ、チャンネル、スクリプトは、オペレーティングシステムと配布ごとに異なります。 [修復Bashスクリプトの例](#)セクションに例を一覧表示しています。

22.4.7.1.1. リモートコマンドとして単一システムでBashスクリプトを実行する

単一システムでリモートコマンドとしてBashスクリプトを実行します。

1. **システム** > **概要** タブから、インスタンスを選択します。次に、**詳細** > **リモートコマンド** で、Bashスクリプトを次のように記述します。

```
#!/bin/bash
chmod +x -R /usr/share/scap-security-guide/bash
/usr/share/scap-security-guide/bash/sle15-script-stig.sh
```

2. **[Schedule]** をクリックします。



配布とバージョンの間でフォルダ名とスクリプト名が変わります。 [修復Bashスクリプトの例](#) セクションに例を一覧表示しています。

22.4.7.1.2. 複数のシステムでシステムセットマネージャを使用してbashスクリプトを実行する

複数のシステムでリモートコマンドとして一度にBashスクリプトを実行します。

1. システムグループが作成されたら **[システムグループ]** をクリックし、テーブルから **[SSM で 使用]** を選択します。
2. **[システムセットマネージャ]** から、**その他** > **リモートコマンド** の下で、次のようなBashスクリプトを記述します。

```
#!/bin/bash
chmod +x -R /usr/share/scap-security-guide/bash
/usr/share/scap-security-guide/bash/sle15-script-stig.sh
```

3. **[Schedule]** をクリックします。

22.4.7.2. 修復Bashスクリプトの例

22.4.7.2.1. SUSE Linux Enterprise openSUSEおよび亜種

SUSE Linux EnterpriseおよびopenSUSEスクリプトデータの例。

パッケージ

scap-security-guide

チャンネル

- SLE12: SLES12 Updates
- SLE15: SLES15 Module Basesystem Updates

Bashスクリプトディレクトリ

`/usr/share/scap-security-guide/bash/`

Bashスクリプト

```

opensuse-script-standard.sh
sle12-script-standard.sh
sle12-script-stig.sh
sle15-script-cis.sh
sle15-script-standard.sh
sle15-script-stig.sh

```

22.4.7.2.2. Red Hat Enterprise LinuxおよびCentOS Bashスクリプトデータ

Red Hat Enterprise LinuxおよびCentOSスクリプトデータの例。



centos7-updatesのscap-security-guideには、Red Hat Enterprise Linuxスクリプトのみが含まれています。

パッケージ

scap-security-guide-redhat

チャンネル

- SUSE Managerツール

Bashスクリプトディレクトリ

`/usr/share/scap-security-guide/bash/`

Bashスクリプト

```

centos7-script-pci-dss.sh
centos7-script-standard.sh
centos8-script-pci-dss.sh
centos8-script-standard.sh
fedora-script-ospp.sh
fedora-script-pci-dss.sh
fedora-script-standard.sh
ol7-script-anssi_nt28_enhanced.sh
ol7-script-anssi_nt28_high.sh
ol7-script-anssi_nt28_intermediary.sh
ol7-script-anssi_nt28_minimal.sh
ol7-script-cjis.sh
ol7-script-cui.sh
ol7-script-e8.sh
ol7-script-hipaa.sh
ol7-script-ospp.sh
ol7-script-pci-dss.sh
ol7-script-sap.sh
ol7-script-standard.sh
ol7-script-stig.sh
ol8-script-anssi_bp28_enhanced.sh
ol8-script-anssi_bp28_high.sh
ol8-script-anssi_bp28_intermediary.sh
ol8-script-anssi_bp28_minimal.sh
ol8-script-cjis.sh
ol8-script-cui.sh
ol8-script-e8.sh
ol8-script-hipaa.sh
ol8-script-ospp.sh
ol8-script-pci-dss.sh
ol8-script-standard.sh
rhel7-script-anssi_nt28_enhanced.sh
rhel7-script-anssi_nt28_high.sh
rhel7-script-anssi_nt28_intermediary.sh

```

```
rhel7-script-anssi_nt28_minimal.sh
rhel7-script-C2S.sh
rhel7-script-cis.sh
rhel7-script-cjis.sh
rhel7-script-cui.sh
rhel7-script-e8.sh
rhel7-script-hipaa.sh
rhel7-script-ncp.sh
rhel7-script-ospp.sh
rhel7-script-pci-dss.sh
rhel7-script-rhelh-stig.sh
rhel7-script-rhelh-vpp.sh
rhel7-script-rht-ccp.sh
rhel7-script-standard.sh
rhel7-script-stig_gui.sh
rhel7-script-stig.sh
rhel8-script-anssi_bp28_enhanced.sh
rhel8-script-anssi_bp28_high.sh
rhel8-script-anssi_bp28_intermediary.sh
rhel8-script-anssi_bp28_minimal.sh
rhel8-script-cis.sh
rhel8-script-cjis.sh
rhel8-script-cui.sh
rhel8-script-e8.sh
rhel8-script-hipaa.sh
rhel8-script-ism_o.sh
rhel8-script-ospp.sh
rhel8-script-pci-dss.sh
rhel8-script-rhelh-stig.sh
rhel8-script-rhelh-vpp.sh
rhel8-script-rht-ccp.sh
rhel8-script-standard.sh
rhel8-script-stig_gui.sh
rhel8-script-stig.sh
rhel9-script-pci-dss.sh
rhosp10-script-cui.sh
rhosp10-script-stig.sh
rhosp13-script-stig.sh
rhv4-script-pci-dss.sh
rhv4-script-rhvh-stig.sh
rhv4-script-rhvh-vpp.sh
sl7-script-pci-dss.sh
sl7-script-standard.sh
```

22.4.7.2.3. Ubuntu Bashスクリプトデータ

Ubuntuスクリプトデータの例。

パッケージ

scap-security-guide-ubuntu

チャンネル

- SUSE Managerツール

Bashスクリプトディレクトリ

`/usr/share/scap-security-guide/`

Bashスクリプト


```

ubuntu1804-script-anssi_np_nt28_average.sh
ubuntu1804-script-anssi_np_nt28_high.sh
ubuntu1804-script-anssi_np_nt28_minimal.sh
ubuntu1804-script-anssi_np_nt28_restrictive.sh
ubuntu1804-script-cis.sh
ubuntu1804-script-standard.sh
ubuntu2004-script-standard.sh

```

22.4.7.2.4. Debian Bashスクリプトデータ

Debianスクリプトデータの例。

パッケージ

scap-security-guide-debian

チャンネル

- SUSE Managerツール

Bashスクリプトディレクトリ

`/usr/share/scap-security-guide/bash/`

Bashスクリプト

```

# Debian 11
debian11-script-anssi_np_nt28_average.sh
debian11-script-anssi_np_nt28_high.sh
debian11-script-anssi_np_nt28_minimal.sh
debian11-script-anssi_np_nt28_restrictive.sh
debian11-script-standard.sh
# Debian 12
debian12-script-anssi_np_nt28_average.sh
debian12-script-anssi_np_nt28_high.sh
debian12-script-anssi_np_nt28_minimal.sh
debian12-script-anssi_np_nt28_restrictive.sh
debian12-script-standard.sh

```

22.5. 監査

SUSE Managerでは、一連の監査タスクを通じてクライアントを追跡できます。クライアントがすべてのパブリックセキュリティパッチ(CVE)を適用して最新の状態になっていることを確認し、サブスクリプションマッチングを実行して、OpenSCAPを使用して仕様のコンプライアンスを確認できます。

SUSE Manager Web UIで、[\[監査\]](#) に移動して、監査タスクを実行します。

22.5.1. CVE監査

CVE (共通脆弱性識別子)は、一般に知られているセキュリティの脆弱性に対する修正です。



CVEが利用可能になったらすぐにクライアントに適用する必要があります。

各CVEには、識別番号、脆弱性の説明、および詳細情報へのリンクが含まれています。

CVE識別番号

は、**CVE-YEAR-XXXX**の形式を使用します。

SUSE Manager Web UIで、**監査** > **CVE監査**に移動して、すべてのクライアントとその現在のパッチステータスのリストを表示します。

デフォルトでは、CVEデータは毎日2300に更新されます。 CVE監査を開始する前に、データを更新して最新のパッチが適用されていることを確認することをお勧めします。

プロシージャ: CVEデータの更新

1. SUSE Manager Web UIで、**管理** > **タスクスケジュール**に移動し、**cve-server-channels-default**スケジュールを選択します。
2. [**cve-server-channels-bunch**]をクリックします。
3. [**1 回のみの実行スケジュール**]をクリックして、タスクをスケジュールします。 CVE監査を続行する前に、タスクを完了させてください。

プロシージャ: パッチステータスの確認

1. SUSE Manager Web UIで、**監査** > **CVE監査**に移動します。
2. 特定のCVEのパッチステータスを確認するには、**[CVE番号]** フィールドにCVE IDを入力します。
3. 検索するパッチステータスを選択するか、すべてのステータスをオンのままにしてすべてを検索します。
4. [**監査サーバ**]をクリックしてすべてのシステムを確認するか、**[監査イメージ]**をクリックしてすべてのイメージを確認します。

このページで使用されるパッチステータスアイコンの詳細については、**Reference** > **Audit**を参照してください。

各システムについて、**[次の動作]** 列には、脆弱性に対処するために実行する必要がある情報が表示されます。 該当する場合は、候補チャンネルまたはパッチのリストも表示されます。 さらにバッチ処理を行うためにシステムを**[システムセット]** に割り当てすることもできます。

SUSE Manager APIを使用して、クライアントのパッチステータスを確認できます。**audit.listSystemsByPatchStatus** APIメソッドを使用します。 このメソッドの詳細については、『SUSE Manager API ガイド』を参照してください。

22.5.2. CVEステータス

クライアントのCVEステータスは通常、**影響を受けています**、**影響を受けません**、または**パッチ適用済みのいずれか**です。 これらのステータスは、SUSE Managerで使用できる情報にのみ基づいています。

SUSE Manager内で、次の定義が適用されます。

特定の脆弱性の影響を受けるシステム

脆弱性がマークされた関連パッチ内の同じパッケージのバージョンより前のバージョンのパッケージがインストールされているシステム。

特定の脆弱性の影響を受けないシステム

脆弱性がマークされた関連パッチにも含まれているパッケージがインストールされていないシステム。

特定の脆弱性に対するパッチが適用されたシステム

脆弱性がマークされた関連パッチ内の同じパッケージのバージョン以上のバージョンのパッケージがインストールされているシステム。

関連パッチ

関連するチャンネルでSUSE Managerによって知られているパッチ。

関連するチャンネル

システムに割り当てられたSUSE Managerによって管理されるチャンネル、システムに割り当てられたクローンチャンネルのオリジナルチャンネル、システムにインストールされている製品にリンクされたチャンネル、またはシステムの過去または将来のサービスパックチャンネル。



SUSE Manager内で使用されている定義のため、状況によってはCVE監査結果が正しくない場合があります。たとえば、管理されていないチャンネル、管理されていないパッケージ、または準拠していないシステムが誤って報告される可能性があります。

Chapter 23. SSL証明書

SUSE Managerでは、SSL証明書を使用して、クライアントが正しいサーバに登録されていることを確認します。

SSLを使用してSUSE Managerサーバに登録するすべてのクライアントは、サーバ証明書に対して検証することにより、適切なサーバに接続していることを確認します。このプロセスはSSLハンドシェイクと呼ばれます。

SSLハンドシェイク中に、クライアントはサーバ証明書のホスト名が予期しているホスト名と一致することを確認します。クライアントは、サーバ証明書が信頼できるかどうかを確認する必要があります。

認証局(CA)は、他の証明書に署名するために使用される証明書です。証明書が有効であるとみなされ、クライアントが証明書と正常に照合できるようにするには、すべての証明書が認証局(CA)によって署名されている必要があります。

SSL認証が正しく機能するためには、クライアントがルートCAを信頼する必要があります。これは、ルートCAがすべてのクライアントにインストールされる必要があることを意味します。

SSL認証のデフォルトの方法は、SUSE Managerで自己署名証明書を使用することです。この場合、SUSE Managerはすべての証明書を生成し、ルートCAはサーバ証明書に直接署名しています。

別の方法は、中間CAを使用する方法です。この場合、ルートCAは中間CAに署名します。中間CAは任意の数の他の中間CAに署名することができ、最後のCAはサーバ証明書に署名します。これはチェーン証明書と呼ばれます。

チェーン証明書で中間CAを使用している場合は、ルートCAがクライアントにインストールされ、サーバ証明書がサーバにインストールされます。SSLハンドシェイク中に、クライアントはルートCAとサーバ証明書の間の中間証明書のチェーン全体を検証できる必要があります。そのため、クライアントはすべての中間証明書にアクセスする必要があります。

これを実現するには、主に2つの方法があります。以前のバージョンのSUSE Managerでは、デフォルトですべての中間CAがクライアントにインストールされます。ただし、サーバ上でサービスを設定してクライアントに提供することも可能です。この場合、SSLハンドシェイク中に、サーバはサーバ証明書とすべての中間CAを提示します。このメカニズムは現在、新しいデフォルト設定として使用されています。

デフォルトでは、SUSE Managerは中間CAなしの自己署名証明書を使用します。セキュリティを強化するために、サードパーティのCAを手配して証明書に署名できます。サードパーティのCAは、証明書に含まれる情報が正しいことを確認するためにチェックを実行します。通常、このサービスには年会費がかかります。サードパーティのCAを使用すると、証明書のスプーフィングが難しくなり、インストールに対する保護が強化されます。サードパーティのCAによって署名された証明書がある場合は、SUSE Managerのインストール環境にインポートできます。

このマニュアルでは、SSL証明書の使用について2つのステップで説明します。

1. SUSE Managerツールを使用して自己署名証明書を作成する方法
2. SUSE Managerサーバまたはプロキシに証明書を配備する方法

証明書が独自のPKIや外部PKIなどのサードパーティのインスタンスによって提供されている場合は、ステップ1をスキップできます。

- 自己署名証明書の作成方法詳細については、**Administration** > **Ssl-certs-selfsigned**を参照してください。
- 証明書インポート方法の詳細については、**Administration** > **Ssl-certs-imported**を参照してください。

23.1. 自己署名SSL証明書

デフォルトでは、SUSE Managerは自己署名証明書を使用します。この場合、証明書はSUSE Managerによって作成され、署名されます。この方法では、証明書の詳細が正しいことを保証するために独立した認証局を使用しません。サードパーティCAは、証明書に含まれる情報が正しいことを確認するためにチェックを実行します。サードパーティCAの詳細については、**Administration** > **Ssl-certs-imported**を参照してください。

このセクションでは、新規または既存のインストールで自己署名証明書を作成または再作成する方法について説明します。

SSLキーおよび証明書のホスト名はそれらを配備するマシンの完全修飾ホスト名に一致する必要があります。

23.1.1. 既存のサーバ証明書の再作成

既存の証明書の有効期限が切れているか、何らかの理由で動作を停止している場合は、既存のCAから新しいサーバ証明書を生成できます。

プロシージャ: 既存のサーバ証明書の再作成

1. SUSE Managerサーバのコマンドプロンプトで、サーバ証明書を再生成します。

```
mgrctl exec -ti -- rhn-ssl-tool --gen-server --dir="/root/ssl-build" --set-country="COUNTRY" \  
--set-state="STATE" --set-city="CITY" --set-org="ORGANIZATION" \  
--set-org-unit="ORGANIZATION UNIT" --set-email="name@example.com" \  
--set-hostname="susemanager.example.com" --set-cname="example.com"
```

`set-cname`パラメータがSUSE Managerサーバの完全修飾ドメイン名であることを確認します。複数のエイリアスが必要な場合は複数回、`set-cname`パラメータを使用できます。

秘密鍵とサーバ証明書はディレクトリ`/root/ssl-build/susemanager/`に`server.key`と`server.crt`として検索できます。最後のディレクトリの名前は、`--set-hostname`オプションで使用されるホスト名に依存します。

23.1.2. 新しいCAおよびサーバ証明書の作成



ルートCAを置き換える必要がある場合は注意してください。サーバとクライアントの間の信頼チェーンを切断する可能性があります。その場合は、管理ユーザがすべてのクライアントにログインしてCAを直接配備する必要があります。

プロシージャ: 新しい証明書の作成

1. SUSE Managerサーバのコマンドプロンプトで、古い証明書ディレクトリを新しい場所に移動します。

```
mgrctl exec -- mv /root/ssl-build /root/old-ssl-build
```

2. 新しいCA証明書を生成します。

```
mgrctl exec -ti -- rhn-ssl-tool --gen-ca --dir="/root/ssl-build" --set-country="COUNTRY" \  
--set-state="STATE" --set-city="CITY" --set-org="ORGANIZATION" \  
--set-org-unit="ORGANIZATION UNIT" --set-common-name="SUSE Manager CA Certificate" \  
--set-email="name@example.com"
```

3. 新しいサーバ証明書を生成します。

```
mgrctl exec -ti -- rhn-ssl-tool --gen-server --dir="/root/ssl-build" --set-country="COUNTRY" \  
--set-state="STATE" --set-city="CITY" --set-org="ORGANIZATION" \  
--set-org-unit="ORGANIZATION UNIT" --set-email="name@example.com" \  
--set-hostname="susemanager.example.top" --set-cname="example.com"
```

`set-cname`パラメータがSUSE Managerサーバの完全修飾ドメイン名であることを確認します。複数のエイリアスが必要な場合は複数回、`set-cname`パラメータを使用できます。

ホスト名とcnameを使用して、各プロキシのサーバ証明書も生成する必要があります。

23.2. SSL証明書のインポート

このセクションでは、新しいSUSE ManagerのインストールにSSL証明書を設定する方法、および既存の証明書を置き換える方法について説明します。

開始する前に、以下があることを確認します。

- 認証局(CA) SSLパブリック証明書。CAチェーンを使用している場合は、すべての中間CAも使用できる必要があります。
- SSLサーバ秘密鍵
- SSLサーバ証明書

すべてのファイルがPEM形式である必要があります。

SSLサーバ証明書のホスト名は、配備先マシンの完全修飾ホスト名と一致している必要があります。ホスト名は、証明書のX509v3 `Subject Alternative Name`セクションで設定できます。環境が必要な場合は、複数のホスト名を一覧にすることもできます。サポートされているキーの種類は、`RSA`と`EC` (Elliptic Curve)です。

サードパーティの機関は通常、中間CAを使用して、要求されたサーバ証明書に署名します。この場合、チェーン内のすべてのCAが使用できる必要があります。中間CAを指定するために使用できる追加のパラメータまたはオプションがない場合は、すべてのCA (ルートCAおよび中間CA)が1つのファイルに保存されるように注意してください。

23.2.1. 新しいインストール用証明書のインポート

デフォルトで、SUSE Managerは自己署名証明書を使用します。初期セットアップを完了した後、デフォルトの証明書を、インポートされた証明書に置き換えることができます。

プロシージャ: 新しいSUSE Managerサーバへの証明書のインポート

1. **Installation-and-upgrade** > **Container-deployment**の手順に従ってSUSE Managerサーバを配備します。必ず、正しいファイルをパラメータとして`mgradm install podman`に渡してください。パラメータは次のとおりです。

```
3rd Party SSL Certificate Flags:
--ssl-ca-intermediate 文字列 中間CA証明書のパス
--ssl-ca-root 文字列 ルートCA証明書のパス
--ssl-server-cert 文字列 サーバ証明書のパス
--ssl-server-key 文字列 サーバキーのパス
```

23.2.2. 新しいプロキシインストール用の証明書のインポート

デフォルトでは、SUSE Managerプロキシは自己署名証明書を使用します。初期セットアップを完了した後、デフォルトの証明書を、インポートされた証明書に置き換えることができます。

プロシージャ: 新しいSUSE Managerプロキシへの証明書のインポート

1. **Installation-and-upgrade** > **Container-deployment**の手順に従ってSUSE Managerプロキシをインストールします。
2. プロンプトに従ってセットアップを完了します。



サーバとプロキシのすべてのサーバ証明書に署名するには、同じ認証局を使用します。異なるCAで署名された証明書は一致しません。

23.2.3. 証明書を置き換える

SUSE Managerのインストールでアクティブな証明書を新しい証明書に置き換えることができます。証明書を置き換えるには、インストールされているCA証明書を新しいCAに置き換えてから、データベースを更新します。

プロシージャ: 既存の証明書を置き換える

1. SUSE Managerサーバのコマンドプロンプトで、コマンド`mgr-ssl-cert-setup`を呼び出して、パラメータとして証明書を提供します。

```
mgrctl exec -- mgr-ssl-cert-setup --root-ca-file=<Path_to_Root_CA_Certificate> --server-cert-file=<Server_Cert_File> --server-key-file=<Server_Key_File>
```

中間CAは、`--root-ca-file`で指定されたファイルで使用することも、`--intermediate-ca-file`で追加オプションとして指定することもできます。`--intermediate-ca-file`オプションは複数回指定できます。このコマ

ンドは、提供されたファイルに対していくつかのテストを実行し、それらが有効であり、要求されたユースケースに使用できるかどうかをテストします。

1. サービスを再起動して変更を取得します。

```
mgrctl exec -- spacewalk-service stop
mgrctl exec -- systemctl restart postgresql.service
mgrctl exec -- spacewalk-service start
```

プロキシを使用している場合は、各プロキシのホスト名とcnameを使用してサーバ証明書RPMを生成する必要があります。証明書を置き換えるには、SUSE Managerプロキシでもmgr-ssl-cert-setupを使用する必要があります。SUSE ManagerプロキシにはPostgreSQLデータベースがないため、spacewalk-service restartのみで十分です。

ルートCAが変更された場合は、SUSE Managerに接続されているすべてのクライアントに配備する必要があります。

プロシージャ: Saltクライアント上のルートCAのデプロイ

1. SUSE Manager Web UIで、**システム** > **概要**に移動します。
2. すべてのSaltクライアントをチェックして、システムセットマネージャに追加します。
3. **システム** > **システムセットマネージャ** > **概要**に移動します。
4. **[状態]** フィールドで、**[適用]**をクリックして、システムの状態を適用します。
5. **[highstate]** ページで、**[highstateの適用]**をクリックして、クライアントに変更を伝播します。

23.3. HTTP Strict Transport Security

HTTP Strict Transport Security (HSTS)は、プロトコルダウングレード攻撃やクッキーハイジャックなどの中間者攻撃からWebサイトを保護するのに役立つポリシーメカニズムです。

SUSE ManagerではHSTSを有効にできます。SUSE Managerサーバに対して有効にするには、次の手順に従います。

手順

1. 設定ファイルを新規作成します。

```
mgrctl exec -- echo 'Header always set Strict-Transport-Security "max-age=63072000;
includeSubDomains"' >/etc/apache2/conf.d/zz-spacewalk-www-hsts.conf
```

2. 次のコマンドでApacheを再起動します。

```
mgrctl exec -- systemctl restart apache2
```

SUSE Managerプロキシに対して有効にするには、次の手順に従います。

手順

1. 新しい設定ファイルを作成します(例: `/etc/uyuni/custom-httpd.conf`)。
2. 次の行を追加します。

```
`Header always set Strict-Transport-Security "max-age=63072000; includeSubDomains`
```

3. コマンドを実行します。

```
mgrpxy install podman --tuning-httpd /etc/uyuni/custom-httpd.conf config.tar.gz
```



新しい設定ファイルに`<filename>.conf`という名前を付ける場合は、適切なタイミングでロードされるようにしてください。たとえば、`spacewalk-www.conf`で定義されたものを上書きするには、新しいファイルがアルファベット順でこのファイルの後にある必要があります。Apacheがファイルをロードする方法の詳細については、<https://httpd.apache.org/docs>を参照してください。



SUSE Managerで生成されたデフォルトのSSL証明書または自己署名証明書を使用してHSTSを有効にすると、このような証明書に署名するために使用されたCAがブラウザによって信頼されていない限り、ブラウザはHTTPSでの接続を拒否します。SUSE Managerで生成されたSSL証明書を使用している場合は、<http://<SERVER-HOSTNAME>/pub/RHN-ORG-TRUSTED-SSL-CERT>にあるファイルをすべてのユーザのブラウザにインポートすることでこの証明書を信頼することができます。

Chapter 24. サブスクリプションマッチング

SUSE製品にはSUSE Customer Center (SCC)によって管理されるサブスクリプションが必要です。 SUSE Managerは、SCCアカウントに対して登録済みの全クライアントのサブスクリプションステータスをチェックする夜間レポートを実行します。 このレポートには、どのクライアントがどのサブスクリプションを使用しているか、残りのサブスクリプション数と使用できるサブスクリプション数、および現在のサブスクリプションがないクライアントに関する情報が表示されます。

監査 > **サブスクリプションマッチング**に移動して、レポートを表示します。

[**Subscriptions Report**] (サブスクリプションレポート) タブには、現在のサブスクリプションと期限切れサブスクリプションに関する情報が表示されます。

[**Unmatched Products Report**] (一致しない製品レポート) タブには、現在のサブスクリプションがないクライアントのリストが表示されます。 これには、一致できなかったクライアント、SUSE Managerに現在登録されていないクライアントが含まれます。 このレポートには、製品名とまだ一致していないシステムの数が含まれます。

[**ピン**] タブでは、関連するサブスクリプションに個々のクライアントを関連付けることができます。 これは、サブスクリプションマネージャがクライアントをサブスクリプションに自動的に正常に関連付けられない場合に特に役立ちます。

[**メッセージ**] タブには、マッチングプロセス中にサブスクリプションマッチャーによって生成されたすべてのメッセージが表示されます。 これらは、結果を理解し、マッチングを改善するのに役立つ情報を提供します。

レポートは.csv形式でダウンロードすることも、コマンドプロンプトから`/var/lib/spacwalk/subscription-matcher/`ディレクトリでアクセスすることもできます。

デフォルトでは、サブスクリプションマッチャーは毎日午前0時に実行されます。 これを変更するには、**管理** > **タスクスケジュール**に移動し、[**gatherer-matcher-default**] をクリックします。 必要に応じてスケジュールを変更し、[**スケジュールの更新**]をクリックします。

レポートは現在のクライアントと現在のサブスクリプションしか一致させることができないため、一致が時間の経過とともに変化することがあります。 同じクライアントが常に同じサブスクリプションと一致するわけではありません。 これは、新規クライアントの登録または登録解除、もしくはサブスクリプションの追加または期限切れが原因である可能性があります。

サブスクリプションマッチャーは、アカウント内のサブスクリプションの条項によって制限される、不一致の製品数を自動的に減らそうとします。 ただし、不完全なハードウェア情報、不明な仮想マシンホストの割り当て、または不明なパブリッククラウドで実行されているクライアントがある場合は、利用可能なサブスクリプションが十分でないことがマッチャーに表示されることがあります。 正確性を確保するために、常にSUSE Managerに含まれるクライアントに関する完全なデータがあることを確認してください。



サブスクリプションマッチャーは、常にクライアントとサブスクリプションを正確に一致させるとは限りません。 これは監査に代わるものではありません。

24.1. クライアントをサブスクリプションにピン設定する

サブスクリプションマッチャーが特定のクライアントと正しいサブスクリプションを自動的に一致させない場合は、それらを手動でピン設定することができます。ピンを作成すると、サブスクリプションマッチャーは特定のサブスクリプションを特定のシステムまたはシステムのグループと一致させることを優先します。

ただし、マッチャーは常にピンを尊重するわけではありません。これは、利用可能なサブスクリプション、およびサブスクリプションをクライアントに適用できるかどうかによって異なります。さらに、サブスクリプションの条項に違反する一致が発生した場合、またはピンが無視された場合にマッチャーがより正確な一致を検出した場合、ピンは無視されます。

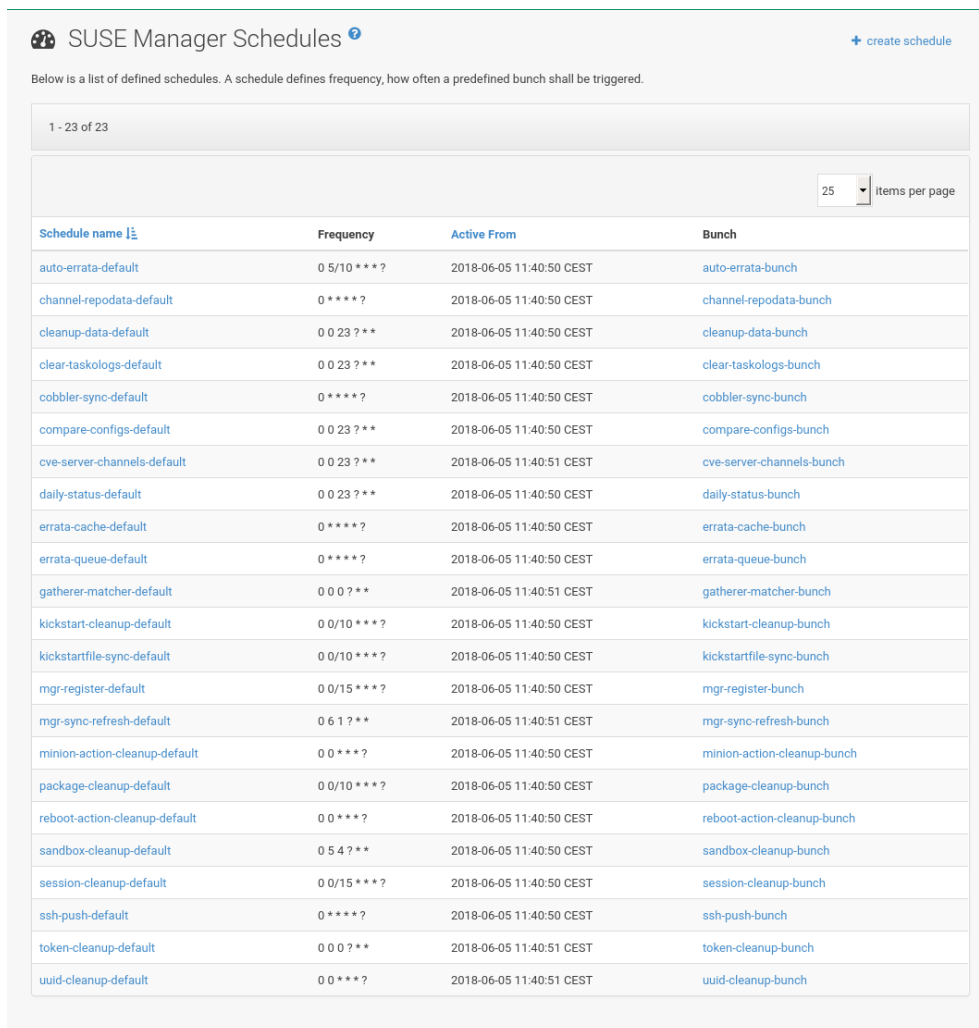
新しいピンを追加するには、**[ピンの追加]**をクリックし、ピンを設定するクライアントを選択します。



定期的な、または多数のクライアントにピンの設定を使用することはお勧めしません。Subscription Matcherツールは、一般的にほとんどのインストールに十分な精度があります。

Chapter 25. タスクスケジュール

事前定義されたすべてのタスクバッチは、**管理者** > **タスクスケジュール**の下に一覧表示されます。



SUSE Manager Schedules [+ create schedule](#)

Below is a list of defined schedules. A schedule defines frequency, how often a predefined bunch shall be triggered.

1 - 23 of 23

25 items per page

Schedule name	Frequency	Active From	Bunch
auto-errata-default	0 5/10 ***?	2018-06-05 11:40:50 CEST	auto-errata-bunch
channel-repodata-default	0 ****?	2018-06-05 11:40:50 CEST	channel-repodata-bunch
cleanup-data-default	0 0 23 ? **	2018-06-05 11:40:50 CEST	cleanup-data-bunch
clear-tasklogs-default	0 0 23 ? **	2018-06-05 11:40:50 CEST	clear-tasklogs-bunch
cobbler-sync-default	0 ****?	2018-06-05 11:40:50 CEST	cobbler-sync-bunch
compare-configs-default	0 0 23 ? **	2018-06-05 11:40:50 CEST	compare-configs-bunch
cve-server-channels-default	0 0 23 ? **	2018-06-05 11:40:51 CEST	cve-server-channels-bunch
daily-status-default	0 0 23 ? **	2018-06-05 11:40:50 CEST	daily-status-bunch
errata-cache-default	0 ****?	2018-06-05 11:40:50 CEST	errata-cache-bunch
errata-queue-default	0 ****?	2018-06-05 11:40:50 CEST	errata-queue-bunch
gatherer-matcher-default	0 0 0 ? **	2018-06-05 11:40:51 CEST	gatherer-matcher-bunch
kickstart-cleanup-default	0 0/10 ***?	2018-06-05 11:40:50 CEST	kickstart-cleanup-bunch
kickstartfile-sync-default	0 0/10 ***?	2018-06-05 11:40:50 CEST	kickstartfile-sync-bunch
mgr-register-default	0 0/15 ***?	2018-06-05 11:40:50 CEST	mgr-register-bunch
mgr-sync-refresh-default	0 6 1 ? **	2018-06-05 11:40:51 CEST	mgr-sync-refresh-bunch
minion-action-cleanup-default	0 0 ****?	2018-06-05 11:40:50 CEST	minion-action-cleanup-bunch
package-cleanup-default	0 0/10 ***?	2018-06-05 11:40:50 CEST	package-cleanup-bunch
reboot-action-cleanup-default	0 0 ****?	2018-06-05 11:40:50 CEST	reboot-action-cleanup-bunch
sandbox-cleanup-default	0 5 4 ? **	2018-06-05 11:40:50 CEST	sandbox-cleanup-bunch
session-cleanup-default	0 0/15 ***?	2018-06-05 11:40:50 CEST	session-cleanup-bunch
ssh-push-default	0 ****?	2018-06-05 11:40:50 CEST	ssh-push-bunch
token-cleanup-default	0 0 0 ? **	2018-06-05 11:40:51 CEST	token-cleanup-bunch
uuid-cleanup-default	0 0 ****?	2018-06-05 11:40:51 CEST	uuid-cleanup-bunch

SUSE Manager Schedules (SUSE Managerスケジュール) > **スケジュール名**をクリックして、**スケジュール名** > **基本的なスケジュール詳細**を開き、無効にしたり、頻度を変更したりできます。

[**Edit Schedule**] (スケジュールの編集) をクリックして、設定でスケジュールを更新します。

スケジュールを削除するには、右上隅の[**スケジュールの削除**]をクリックします。



SUSE Managerが正常に動作するために不可欠であるため、スケジュールが必要であると確信している場合のみ、スケジュールを無効にするか削除してください。

バッチ名をクリックすると、そのバッチタイプのランとそのステータスのリストが表示されます。

開始時間のリンクをクリックすると、**スケジュール名** > **基本的なスケジュール詳細**に戻ります。

25.1. 事前定義済みのタスクバッチ

次の事前定義済みのタスクバッチはデフォルトでスケジュールされており、設定できます。

auto-errata-default

必要に応じて自動エラー更新をスケジュールします。

channel-repodata-default

リポジトリメタデータファイルを(再)生成します。

cleanup-data-default

古いパッケージ変更ログをクリーンアップし、データベースから時系列データを監視します。

clear-taskologs-default

ジョブタイプに応じて、指定した日数よりも古いタスクエンジン(taskomatic)履歴データをデータベースからクリアします。

cobbler-sync-default

SUSE ManagerからCobblerに配布データとプロファイルデータを同期します。Cobblerによる自動インストールの詳細については、**Client-configuration** > **Autoinst-intro**を参照してください。

compare-configs-default

設定チャンネルに保存されている設定ファイルと、すべての設定対応サーバに保存されているファイルと比較します。比較を確認するには、**システム**タブをクリックし、対象のシステムを選択します。**設定** > **ファイルの比較**に移動します。詳細については、[reference:systems/system-details/sd-configuration.pdf](#)を参照してください。

cve-server-channels-default

監査 > **CVE監査**ページに結果を表示するために使用される、事前に計算された内部CVEデータを更新します。**監査** > **CVE監査**ページの検索結果は、このスケジュールの最後の実行に更新されます。詳細については、**Reference** > **Audit**を参照してください。

daily-status-default

関連するアドレスに日次レポート電子メールを送信します。特定のユーザの通知を設定する方法の詳細については、**Reference** > **Users**を参照してください。

errata-cache-default

各サーバの更新が必要なパッケージを検索するために使用される、内部パッチキャッシュデータベーステーブルを更新します。また、これにより、特定のパッチに関心がある可能性のあるユーザに通知メールが送信されます。パッチの詳細については、**Reference** > **Patches**を参照してください。

errata-queue-default

自動更新(パッチ)を受信するように設定されているサーバのキューに入れます。

gatherer-matcher-default

仮想ホストマネージャで設定されたVirtual Host Gathererを実行して、仮想ホストデータを収集します。更新されたデータが利用可能になると、Subscription Matcherジョブが実行されます。

kickstart-cleanup-default

古いKickstartセッションデータをクリーンアップします。

kickstartfile-sync-default

設定ウィザードによって作成されたKickstartプロファイルに対応するCobblerファイルを生成します。

mgr-forward-registration-default

SUSE Customer Centerとクライアント登録データを同期します。デフォルトでは、新規、変更済み、または削除済みクライアントデータが転送されます。 `/etc/rhn/rhn.conf`で同期セットを無効にするには、次のコマンドを実行します。

```
server.susemanager.forward_registration = 0
```



Disabling data synchronizing with SCC will lead to reduced visibility of your managed clients between RMT, SMT, SUSE Manager and SCC-directly registered clients. By synchronizing data, you ensure a uniform view of all registered clients. [Help us improve our services by sharing your reason for opting out](#)

mgr-sync-refresh-default

SUSE Customer Centerと同期します(`mgr-sync-refresh`)。デフォルトでは、すべてのカスタムチャンネルもこのタスクの一部として同期されます。カスタムチャンネル同期の詳細については、[administration:custom-channels.pdf](#)を参照してください。

minion-action-chain-cleanup-default

古い動作チェーンデータをクリーンアップします。

minion-action-cleanup-default:

ファイルシステムから古いクライアントアクションデータを削除します。最初に、Saltジョブキャッシュに保存されている対応する結果を検索して、未完了の可能性のあるアクションを完了しようとします。サーバがアクションの結果を見逃した場合、未完了のアクションが発生する可能性があります。アクションが正常に完了した場合は、実行されたスクリプトファイルなどのアーティファクトが削除されます。

minion-checkin-default

クライアントに対して定期的なチェックインを実行します。

notifications-cleanup-default

期限切れの通知メッセージをクリーンアップします。

package-cleanup-default

ファイルシステムから古いパッケージファイルを削除します。

reboot-action-cleanup-default

6時間以上待機中の再起動アクションは失敗としてマークされ、関連データがデータベースからクリーンアップされます。再起動アクションのスケジュール設定の詳細については、[reference:systems/system-details/sd-provisioning.pdf](#)を参照してください。

sandbox-cleanup-default

`sandbox_lifetime` 設定パラメータ(デフォルトでは3日)よりも古いサンドボックス設定ファイルとチャンネルをクリーンアップします。サンドボックスファイルは、システムまたは開発中のファイルからインポートされたファイルです。詳細については、[reference:systems/system-details/sd-configuration.pdf](#)を参照してください。

session-cleanup-default

古いWebインタフェースセッションをクリーンアップします。通常は、ユーザがログインし、ログアウトする前にブラウザを閉じたときに一時的に保存されるデータです。

ssh-service-default

クライアントがSSH Pushの接続メソッドで設定されている場合、SSH経由でSUSE Managerにチェックインするようにクライアントにプロンプトを表示します。また、再起動後に動作チェーンを再開します。

system-profile-refresh-default

すべてのシステムでハードウェアの更新を実行します。これは毎月のみ発生し、SUSE Managerサーバの負荷が増加する可能性があります。ジョブは**Specialized-guides** › **Salt**を使用します。バッチサイズの調整については、[specialized-guides:large-deployments/tuning.pdf](#)を参照してください。

token-cleanup-default

Saltクライアントがパッケージとメタデータをダウンロードするために使用する期限切れのリポジトリトークンを削除します。

update-payg-default

PAYGのクラウドインスタンスの構成から認証データを収集します。

update-reporting-default

ローカルレポートデータベースを更新します。

update-reporting-hub-default

周辺機器SUSE Managerサーバからすべてのレポートデータを収集し、ハブレポートデータベースを更新します。

uuid-cleanup-default

古いUUIDレコードをクリーンアップします。

Chapter 26. 変更ログの調整

一部のパッケージには、変更ログエントリの長いリストがあります。このデータはデフォルトでダウンロードされますが、必ずしも保持すべき役立つ情報とは限りません。ダウンロードする変更ログのメタデータ量を制限し、ディスク容量を節約するために、ディスクに保持するエントリ数を制限できます。



サーバコンテナで手順を実行する前に、`mgrctl term`を使用します。

この設定オプションは、`/etc/rhn/rhn.conf`設定ファイルにあります。パラメータのデフォルトは20です。この値を0に変更すると、無制限の数のエントリが提供されます。

```
java.max_changelog_entries = 20
```

このパラメータを設定すると、新しいパッケージが同期されるときにのみ有効になります。

このパラメータを変更した後で、`mgradm restart`を使用してサービスを再起動します。

キャッシュされたデータを削除して再生成し、古いデータを削除したい場合があります。



キャッシュされたデータの削除と再生成には時間がかかる場合があります。使用するチャンネル数と削除するデータ量に応じて、数時間かかる可能性があります。タスクはTaskomaticによってバックグラウンドで実行されるため、操作が完了するまでSUSE Managerを使用し続けることができますが、多少のパフォーマンスの低下が予想されま

コマンドラインからキャッシュされたデータを削除して、再生成を要求できます。

```
spacewalk-sql -i
```

次に、SQLデータベースプロンプトで、次のように入力します。

```
DELETE FROM rhnPackageRepodata;  
INSERT INTO rhnRepoRegenQueue (id, CHANNEL_LABEL, REASON, FORCE)  
(SELECT sequence_nextval('rhn_repo_regen_queue_id_seq'),  
    C.label,  
    'cached data regeneration',  
    'Y'  
FROM rhnChannel C);  
\q
```


Chapter 27. ユーザ

SUSE Manager管理者は新しいユーザの追加、許可の付与、ユーザの無効化または削除を行うことができます。多数のユーザを管理している場合は、ユーザをシステムグループに割り当てて、グループレベルで許可を管理できます。言語やテーマのデフォルトなど、Web UIのシステムデフォルトを変更することもできます。



[ユーザ] メニューは、SUSE Manager管理者アカウントでログインしている場合にのみ使用できます。

SUSE Managerユーザを管理するには、ユーザ[ユーザー一覧 > すべて]に移動し、SUSE Managerサーバのすべてのユーザを表示します。リスト内の各ユーザにはユーザ名、リアル名、割り当てられたロール、ユーザが最後に署名した日付、ユーザの現在のステータスが表示されます。[ユーザの作成]をクリックして、新しいユーザアカウントを作成します。ユーザ名をクリックして、[ユーザの詳細] ページに移動します。

新規ユーザを組織に追加するには、[ユーザの作成]をクリックして、新しいユーザの詳細を確認し、[ログインの作成]をクリックします。

27.1. アカウントの無効化と削除

ユーザアカウントが不要になった場合は、無効化または削除できます。無効化されたユーザアカウントは、いつでも再有効化できます。削除されたユーザアカウントは表示されず、取得できません。

ユーザは独自のアカウントを無効化できます。ただし、ユーザに管理者ロールがある場合は、アカウントを無効化する前に、ロールを削除する必要があります。

無効化されたユーザはSUSE Manager Web UIにログインしたり、アクションをスケジュールしたりできません。無効化の前にユーザによってスケジュールされたアクションは、アクションキューに残ります。無効化されたユーザはSUSE Manager管理者によって再有効化できます。

27.2. 管理者ロール

ユーザは複数の管理者ロールを保持できます。また、任意の管理者ロールを保持するユーザは、いつでも複数存在することができます。常に少なくとも1人の有効なSUSE Manager管理者が必要です。

SUSE Manager管理者ロールを除く、ユーザの管理者ロールを変更するには、ユーザ > ユーザー一覧 > すべてに移動して、変更するユーザを選択し、必要に応じて管理者ロールをオンまたはオフにします。

ユーザのSUSE Manager管理者ロールを変更するには、管理 > ユーザに移動して、必要に応じて、[SUSE Manager 管理者?] をオンまたはオフにします。

表 15. ユーザ管理者ロールの許可

ロール名	説明
システムグループユーザ	すべてのユーザに関連付けられた標準ロール。

ロール名	説明
SUSE Manager管理者	他のユーザの権限の変更を含む、すべての機能を実行できます。
組織管理者	アクティベーションキー、設定、チャンネル、およびシステムグループを管理します。
アクティベーションキー管理者	アクティベーションキーを管理します。
イメージ管理者	イメージプロファイル、ビルド、およびストアを管理します。
設定管理者	システム設定を管理します。
チャンネル管理者	チャンネルをグローバルにサブスクライブ可能にしたり、新しいチャンネルを作成したりするなど、ソフトウェアチャンネルを管理します。
システムグループ管理者	システムグループの作成と削除、既存のグループへのクライアントの追加、グループへのユーザアクセスの管理など、システムグループを管理します。

27.3. ユーザ許可とシステム

クライアントを管理するシステムグループを作成している場合は、管理するグループをユーザに割り当てることができます。

ユーザをシステムグループに割り当てるには、**ユーザ** > **ユーザー一覧**に移動して、編集するユーザ名をクリックし、**[システムグループ]** タブに移動します。割り当てるグループをオンにして、**[デフォルトの更新]**をクリックします。

ユーザの1つ以上のデフォルトのシステムグループを選択することもできます。ユーザが新しいクライアントを登録すると、デフォルトで選択したシステムグループに割り当てられます。これにより、ユーザは新たに登録されたクライアントに直ちにアクセスできます。

外部グループを管理するには、**ユーザ** > **システムグループ設定**に移動して、**[外部認証]** タブに移動します。**[外部グループの作成]** をクリックして、新しい外部グループを作成します。グループに名前を付けて、適切なシステムグループに割り当てます。

システムグループの詳細については、**Reference** > **Systems**を参照してください。

ユーザが管理できる個々のクライアントを確認するには、**ユーザ** > **ユーザー一覧**に移動し、編集するユーザ名をクリックして、**[システム]** タブに移動します。一括タスクを実行するには、リストからクライアントを選択し、システムセットマネージャに追加します。

システムセットマネージャの詳細については、**Client-configuration** > **System-set-manager**を参照してください。

27.4. ユーザとチャンネルの許可

チャンネルからコンテンツを消費するサブスクライバとして、またはチャンネル自体を管理できる管理者として、ユーザを組織内のソフトウェアチャンネルに割り当てることができます。

ユーザをチャンネルにサブスクライブするには、**ユーザ** > **ユーザー一覧**に移動し、編集するユーザ名をクリックして、**チャンネルの権限** > **サブスクリプション**タブに移動します。割り当てるチャンネルをオンにして、**[許可の更新]**をクリックします。

ユーザにチャンネル管理許可を付与するには、**ユーザ** > **ユーザー一覧**に移動し、編集するユーザ名をクリックして、**チャンネルの権限** > **管理**タブに移動します。割り当てるチャンネルをオンにして、**[許可の更新]**をクリックします。

リスト内の一部のチャンネルはサブスクライブできない場合があります。これは通常、ユーザ管理者のステータス、またはチャンネルのグローバル設定が原因です。

27.5. ユーザのデフォルト言語

新しいユーザを作成するときに、Web UIで使用する言語を選択できます。ユーザを作成した後で、**ホーム** > **設定**に移動して、言語を変更できます。

デフォルト言語は、`rhncnf`設定ファイルで設定されます。デフォルト言語を変更するには、`/etc/rhn/rhncnf`ファイルを開いて、次の行を追加または編集します。

```
web.locale = <LANGCODE>
```

パラメータが設定されていない場合、デフォルト言語は`en_US`です。

SUSE Managerで使用可能な言語は次のとおりです。

表 16. 使用可能な言語コード

言語コード	言語	ダイアレクト
<code>en_US</code>	英語	米国
<code>zh_CN</code>	中国語	本土、簡体字

27.5.1. ユーザデフォルトのインタフェーステーマ

デフォルトでは、SUSE Manager Web UIはインストールした製品に適切なテーマを使用します。テーマを変更して、UyuniまたはSUSE Managerの色を反映できます。SUSE Managerのテーマでは、**ダークオプション**も使用できます。

`rhncnf`設定ファイルでデフォルトのテーマを変更できます。デフォルトのテーマを変更するには、`/etc/rhn/rhncnf`ファイルを開いて、次の行を追加または編集します。

```
web.theme_default = <THEME>
```

表 17. 使用可能なWebUIテーマ

テーマ名	色	スタイル
susemanager-light	SUSE Manager	ライト
susemanager-dark	SUSE Manager	ダーク
uyuni	Uyuni	ライト

Chapter 28. トラブルシューティング

このセクションには、SUSE Managerで発生する可能性のある共通の問題、およびそれらの問題を解決するためのソリューションが含まれています。

パブリッククラウドに固有のトラブルシューティングのトピックについては別途説明します。

パブリッククラウドのトラブルシューティングについては、**Specialized-guides** > **Public-cloud-guide**を参照してください。

28.1. 自動インストールのトラブルシューティング

ベースチャンネルによっては、新しい自動インストールプロファイルは、必要なパッケージがないチャンネルにサブスクライブされる場合があります。

自動インストールを動作させるには、次のパッケージが必要です。

- `pyOpenSSL`
- `rhnlib`
- `libxml2-python`
- `spacewalk-koan`

この問題を解決するには、まず次の点について確認してください。

- 自動インストールプロファイルのベースチャンネルに関するツールソフトウェアチャンネルを組織およびユーザで使用できることを確認します。
- ツールチャンネルが子チャンネルとしてSUSE Managerで使用できることを確認します。
- 関連するチャンネルで、必要なパッケージと依存関係が使用可能であることを確認します。

28.2. サポート終了製品のブートストラップリポジトリのトラブルシューティング

サポートされている製品を同期するとき、ブートストラップリポジトリは、自動的に作成され、SUSE Managerサーバに再生成されます。製品がサポート終了になり、サポートされなくなったが、製品の使用を継続する場合、ブートストラップリポジトリを手動で作成する必要があります。

ブートストラップリポジトリの詳細については、**Client-configuration** > **Bootstrap-repository**を参照してください。

プロシージャ: サポート終了製品のブートストラップリポジトリの作成

1. SUSE Managerサーバのコマンドプロンプトで、`root`として、`--force`オプションを指定して使用可能なサポート対象外のブートストラップリポジトリの一覧を表示してください。たとえば下記ようになります:

```
mgr-create-bootstrap-repo --list --force
1. SLE-12-SP2-x86_64
2. SLE-12-SP3-x86_64
```

2. 製品ラベルとして適切なリポジトリ名を使用して、ブートストラップリポジトリを作成します。

```
mgr-create-bootstrap-repo --create SLE-12-SP2-x86_64 --force
```

ブートストラップリポジトリを手動で作成しない場合、必要な製品およびブートストラップリポジトリでLTSSが使用できるかどうかを確認できます。

28.3. クライアントが複製したSaltクライアントのトラブルシューティング

ハイパーバイザ複製ユーティリティを使用していて、複製したSaltクライアントを登録しようとすると、次のエラーが発生します。

残念ながら、このシステムは見つかりませんでした。

新しい複製システムのマシンIDが既存の登録済みシステムのマシンIDと同じことが原因です。マシンIDを手動で調整してエラーに対処すると、複製したシステムを正常に登録できます。

詳細および手順については、**Administration > Troubleshooting**を参照してください。

28.4. 「ディスクがいっぱいになったコンテナ」イベントのトラブルシューティング

コンテナの永続ストレージメディアとしてマウントされた専用ディスクのストレージ領域が不足した場合は、緊急アクションが必要になります。

ストレージメディアのサイズ変更に関する問題を解決するには、次の手順に従います。

プロシージャ: ストレージメディアのサイズ変更

1. ディスク(例: `/dev/vdb`)のサイズを増やします。たとえば、ディスクがQCOW2イメージの場合は、コマンド`qemu-img resize`を使用します。
2. パーティションが利用可能な容量をすべて使用していることを確認します。
 - `mgrctl term`を使用してコンテナでシェルを開きます。
 - `sudo parted /dev/vdb`
 - `(parted) print`
 - `(parted) resizepart NUMBER 100%`ここで `NUMBER`は`print`コマンドで表示されるパーティション番号です(たとえば、`/dev/vdb1`の場合は1)
 - `(parted) quit`

3. ファイルシステムのサイズを変更します。たとえば、コンテナ内のシェルで実行されるXFSファイルシステムの場合:

```
sudo xfs_growfs /dev/vdb1
```

手順を完了すると、`/dev/vdb1`上のXFSファイルシステムがディスク上の使用可能な容量をすべて使用しているはずで

28.5. 破損したリポジトリのトラブルシューティング

リポジトリメタデータファイルの情報が破損したり、古くなったりする可能性があります。これにより、クライアントの更新で問題が発生する可能性があります。これは、ファイルを削除して再生成することで修正できます。新しいリポジトリデータファイルを使用すると、更新が期待どおりに動作するはずで

プロシージャ: 破損したリポジトリデータの解決

1. `/var/cache/rhn/repodata/<channel-label>`からすべてのファイルを削除します。チャンネルラベルがわからない場合は、SUSE Manager Web UIでソフトウェア、チャンネル、チャンネルラベルに移動して検索できます。
2. コマンドラインからファイルを再生成します。

```
spacecmd softwarechannel_regenerateyumcache <channel-label>
```

28.6. パッケージが競合するカスタムチャンネルのトラブルシューティング

パッケージが競合するカスタムチャンネルを設定する場合、ブートストラップリポジトリの作成などの機能が未定義の動作を引き起こし、クライアントの登録に失敗する可能性があります。

たとえば、バージョン番号がより新しい競合するパッケージがブートストラップリポジトリに含まれる可能性があります。このようなパッケージ(たとえば、`python3-zmq`や`zeromq`)により、ブートストラップリポジトリの作成が破損したり、クライアントのブートストラップ中に問題が発生する可能性があります。

カスタムチャンネル(たとえば、EPELチャンネル)が親ベンダチャンネルの下に追加されると、パッケージの競合に関する問題を直接解決できません。これを解決する方法は、カスタムチャンネルをベンダチャンネルから分離する方法です。カスタムチャンネルを別のツリーで作成する必要があります。カスタムチャンネルを子として配信する必要がある場合は、このような環境をコンテンツライフサイクル管理(CLM)を使用して作成できます。CLMプロジェクトのソースは別のツリーからそこに追加できます。このようなアプローチを使用すると、カスタムチャンネルは構築された環境内で親の下に維持されます。ただし、ベンダチャンネルツリーはカスタムチャンネルとブートストラップリポジトリなしで維持されます。その後、クライアントの登録は正しく機能します。

競合するパッケージ(`salt`、`zeromq`など)を持つカスタムチャンネルを子チャンネルとして作成する場合は、次のステップに従うことで問題を回避できます。

プロシージャ: カスタムチャンネルで競合するパッケージを回避する

1. カスタムチャンネルを親チャンネルから子チャンネルとして削除します。 詳細については
は、 [administration:custom-channels.pdf](#)を参照してください。
2. 別のツリーでカスタムチャンネルを作成します。 詳細については、 [administration:custom-channels.pdf](#)を参照してください。 コンテンツライフサイクル管理(CLM)内で子チャンネルとしてカスタムチャンネルを取得するには、次の手順に従います。
 - SUSE ManagerのWeb UIで、**コンテンツライフサイクル**に移動し、**[プロジェクトの作成]**をクリックします。 **[名前]** と **[ラベル]** に入力します。
 - ソースをプロジェクトに割り当てます。 必要なベンダチャンネルとカスタムチャンネルを使用します。(CentOS8を使用した共有例)
 - プロジェクトに環境を追加します。 たとえば、CentOS8を使用します。
 - 環境を構築するには、**[ビルド]**ボタンをクリックします。 これにより、アクティベーションキーに関連付けて、クライアントのブートストラップに使用できるベンダチャンネルとカスタムチャンネルを備えた環境が作成されます。
3. 重要なメモ: CLMプロジェクトでは、問題のあるパッケージや競合するパッケージを除外するフィルタを追加することをお勧めします。 これを追加しないと、より新しいバージョン番号の競合するパッケージがクライアントの更新中にインストールされます。 フィルタリングの詳細については
[administration:content-lifecycle-examples.pdf](#)を参照してください。
4. 最新のパッチをCLM環境(ベンダチャンネルおよびカスタムチャンネルを使用)に取得するには、プロジェクトの**[ビルド]**ボタンをクリックします。 これは、環境を再構築するために必要です。
 - CLMの詳細については、**Administration > Content-lifecycle** を参照してください。



Extra Packages for Enterprise Linux (EPEL)を直接Red Hat Enterprise Linuxクライアント(または互換性のあるSUSE Liberty Linux、CentOS、Oracle Linuxなど)上で使用すると、EPELからSaltパッケージがインストールされます。この場合、SUSE Managerで提供されているSaltパッケージで利用可能な一部の機能がインストールされません。これが特に重要な理由は、ブートストラップリポジトリにSUSE以外のSaltパッケージが含まれる結果になるためです。したがって、これはサポート対象外のシナリオです。

EPELリポジトリを有効にする必要がある場合は、事前にEPELからSaltパッケージをフィルタで除外してください(たとえば、**ソフトウェア > 管理 > チャンネル > EPEL > パッケージ**でSaltパッケージを削除します)。

28.7. FQDNS grainの無効化のトラブルシューティング

FQDNS grainは、システムのすべての完全修飾DNSサービスのリストを返します。 この情報の収集は、通常、高速プロセスですが、DNS設定が間違っていると、長時間かかる可能性があります。 場合によっては、クライアントが無応答またはクラッシュする場合があります。

この問題を回避するには、Saltフラグを使用してFQDNS grainを無効にできます。 grainを無効にした場合、ネットワークモジュールを使用して、FQDNSサービスを提供できます。この場合、クライアントが無応答になるリスクはありません。



この操作は、古いSaltクライアントにのみ適用されます。最近Saltクライアントを登録した場合、FQDNS grainはデフォルトで無効になっています。

SUSE Managerサーバのコマンドプロンプトで、次のコマンドを使用してFQDNS grainを無効にします。

```
salt '*' state.sls util.mgr_disable_fqdns_grain
```

このコマンドを実行すると、各クライアントが再起動され、サーバが処理する必要があるSaltイベントが生成されます。クライアント数が多い場合、バッチモードでコマンドを実行できます。

```
salt --batch-size 50 '*' state.sls util.mgr_disable_fqdns_grain
```

バッチコマンドの実行完了を待機します。 `Ctrl+C` でプロセスを中断しないでください。

28.8. ディスク容量のトラブルシューティング

ディスク容量が不足すると、SUSE Managerデータベースとファイル構造に重大な影響を及ぼす可能性があります。ほとんどの場合、回復できません。SUSE Managerでは特定のディレクトリの空き容量を監視し、設定可能なアラートを用意しています。スペース管理の詳細については、**Administration** > **Space-management**を参照してください。

一般的に、コンテナボリュームはホストファイルシステムと容量を共有します。`btrfs`ファイルシステムがいっぱいになった場合、ファイルを削除できなくなる可能性があります。これを解決するために、`btrfs device add`コマンドを使用して、小容量のストレージを一時的にファイルシステムに追加できます。これにより、ファイルを削除して容量を増やし、ファイルシステムをさらにメンテナンスできるようになります。メンテナンスが完了したら、`btrfs device delete`を使用して一時ストレージを削除できます。このトピックの詳細については、<https://www.suse.com/support/kb/doc/?id=000018779>を参照してください。

使用されていないソフトウェアチャンネルを削除することにより、ディスク容量を回復できます。

- ベンダチャンネルの削除方法については、**Administration** > **Channel-management**を参照してください。
- カスタムチャンネルの削除方法については、**Administration** > **Custom-channels**を参照してください。

カスタムチャンネルが同期される頻度を確認することもできます。カスタムチャンネル同期の処理方法については、[administration:custom-channels.pdf](#)を参照してください。

未使用のアクティベーションキー、コンテンツライフサイクルプロジェクト、およびクライアント登録をクリーンアップすることで、ディスク容量を回復することもできます。また、冗長なデータベースエントリを削除することもできます。

プロシージャ: 冗長なデータベースエントリの解決

1. `spacewalk-data-fsck`コマンドを使用して、冗長なデータベースエントリを一覧にします。

2. `spacewalk-data-fsck --remove` コマンドを使用して削除します。

28.9. ファイアウォールのトラブルシューティング

送信トラフィックをブロックするファイアウォールを使用している場合は、**REJECT**または**DROP**のいずれかのネットワーク要求を実行できます。 **DROP**に設定されている場合、SUSE Customer Centerとの同期がタイムアウトする可能性があります。

これは、同期プロセスがSUSE Customer Centerだけではなく、SUSE以外のクライアント用のパッケージを提供するサードパーティリポジトリにアクセスする必要があるために発生します。 SUSE Managerサーバがこれらのリポジトリに到達して有効であることを確認しようとする、ファイアウォールは要求をドロップし、同期はタイムアウトするまで応答を待ち続けます。

これが発生する場合、同期が失敗するまで長時間かかり、SUSE以外の製品が製品リストに表示されません。

この問題はさまざまな方法で修正できます。

最も簡単な方法は、SUSE以外のリポジトリに必要なURLへのアクセスを許可するようにファイアウォールを設定することです。 これにより、同期プロセスがURLに到達し、正常に完了することができます。

外部トラフィックを許可できない場合は、SUSE Managerからの**REJECT**(**DROP**ではない)要求を行うようにファイアウォールを設定してください。 これにより、サードパーティURLへの要求が拒否されるため、同期はタイムアウトではなく早期に失敗し、製品はリストに表示されません。

ファイアウォールへの設定アクセス権がない場合は、代わりにSUSE Managerサーバに別のファイアウォールを設定することを検討してください。

28.10. WAN接続を介したSUSE Managerサーバとプロキシ間の長い同期時間に関するトラブルシューティング

WebUIで、あるいはディストリビューションまたはシステム設定へのAPIコールを介して実行される変更によっては、SUSE ManagerサーバからSUSE Managerプロキシシステムにファイルを転送するために、**cobbler sync** コマンドが必要になる場合があります。 これを実現するために、Cobblerは**/etc/cobbler/settings**で指定されたプロキシのリストを使用します。

cobbler syncは、その設計上、変更されたファイルや最近追加されたファイルのみを同期することはできません。

代わりに、**cobbler sync**を実行すると、**/etc/cobbler/settings**で設定された指定のすべてのプロキシに**/srv/tftpboot**ディレクトリの完全同期がトリガされます。 また、関連するシステム間のWAN接続の遅延によっても影響を受けます。

/var/log/cobbler/のログによると、同期のプロセスが完了するまでにかなりの時間がかかる場合があります。

たとえば、次の日時に開始したとします。

```
Thu Jun 3 14:47:35 2021 - DEBUG | running python triggers from
/var/lib/cobbler/triggers/task/sync/pre/*
Thu Jun 3 14:47:35 2021 - DEBUG | running shell triggers from
/var/lib/cobbler/triggers/task/sync/pre/*
```

そして、次の日時に終了したとします。

```
Thu Jun 3 15:18:49 2021 - DEBUG | running shell triggers from
/var/lib/cobbler/triggers/task/sync/post/*
Thu Jun 3 15:18:49 2021 - DEBUG | shell triggers finished successfully
```

転送量は約1.8GBでした。転送には30分ほどかかりました。

比較すると、`/srv/tftboot`と同じサイズの大きな単一ファイルのコピーは、数分以内に完了します。

SUSE Managerサーバとプロキシ間でファイルをコピーするために`rsync`ベースのアプローチに切り替えると、転送時間と待機時間を短縮できる場合があります。

このタスクを実行するためのスクリプトは、https://suse.my.salesforce.com/sfc/p/1i000000gL0d/a/1i000000II5B/B2AmvIJN2_JsAjTQzCVP_x5ioVgd0bYN9X9NpMugS8でダウンロードできます。

このスクリプトはコマンドラインオプションを受け入れません。スクリプトを実行する前に、手動で編集し、`SUMAHOSTNAME`、`SUMAIP`、および`SUMAPROXY1`変数を正しく設定して、スクリプトが正しく機能するようにする必要があります。



スクリプトの個々の調整に利用可能なサポートはありません。スクリプトと内部のコメントは、プロセスの概要と考慮すべきステップを提供することを目的としています。さらにサポートが必要な場合は、SUSEコンサルティングにお問い合わせください。

スクリプトを使用した提案されるアプローチは、次の環境で役立ちます。

- SUSE Manager ProxyシステムがWAN接続を介して接続されている。
- `/srv/tftboot`に多数のディストリビューション用ファイルおよびクライアントPXEブートファイル(合計数千ファイル)が含まれている。
- `/etc/cobbler/settings`の任意のプロキシは無効になっているが、それ以外の場合、SUSE Managerは引き続きプロキシとコンテンツを同期する。

```
#proxies:
# - "sumaproxy.sumaproxy.test"
# - "sumaproxy2.sumaproxy.test"
```

プロシージャ: 新しい同期速度の分析

1. SUSE Managerと関連するシステム間のTCPトラフィックのダンプを取得します。
 - SUSE Managerサーバの場合:

```
tcpdump -i ethX -s 200 host <ip-address-of-susemanagerproxy> and not ssh
```

- SUSE Managerプロキシの場合:

```
tcpdump -i ethX -s 200 host <ip-address-of-susemanager> and not ssh
```

- これにより、分析を実行するのに十分な200のパッケージサイズのみがキャプチャされます。
- プロキシと通信するためにSUSE Managerが使用する各ネットワークインタフェースにehtXを調整します。
- 最後に、さらにパッケージ数を削減するため、ssh通信はキャプチャされません。

2. `cobbler sync`を開始します。

- 同期を強制するため、最初にCobbler jsonキャッシュファイルを削除してから、`cobbler sync`を発行します。

```
rm /var/lib/cobbler/pxe_cache.json
cobbler sync
```

3. `cobbler sync`が終了したら、TCPdumpsを停止します。

- Wiresharkを使用してTCPdumpsを開き、[**Statistics (統計)** > **Conversations (対話)**] に移動して、ダンプが分析されるのを待ちます。
- TCPタブに切り替えます。このタブに表示される数は、SUSE ManagerとSUSE Manager Proxy間でキャプチャされた合計対話数を示しています。
- [**Duration**] (期間) 列を探します。
 - 昇順にソートして開始し、ファイルの転送にかかった最小時間を確認します。
 - 降順にソートして続行し、カーネルやinitrdの転送など、大きなファイルの最大値を確認します。



ポート4505と4506はSalt通信に使用されるため無視してください。

TCPdumpsの分析では、SUSE Managerサーバからプロキシへの、サイズが約1800バイトの小さなファイルの転送に約0.3秒かかったことを示しています。

大きなファイルは多くありませんでしたが、小さなファイルの数が多いため、転送されるファイルごとに新しいTCP接続が作成され、確立された接続数が多くなりました。

したがって、最小転送時間と必要な接続数(たとえば、約5000)がわかれば、転送時間全体の概算推定時間が得られます($5000 * 0.3 / 60 = 25$ 分)。

28.11. 無効なクライアントのトラブルシューティング

Taskomaticジョブは、クライアントが接続されていることを確認するため、クライアントに定期的にpingを送信します。クライアントが24時間以上Taskomaticのチェックインに回答しない場合は、無効であるとみなされます。Web UIで無効なクライアントのリストを表示するには、**システム > システム一覧 > 無効**に移動

します。

クライアントはさまざまな理由で無効になる可能性があります。

- クライアントにSUSE Managerサービスへのエンタイトルメントが付与されていない。
- クライアントがHTTPS接続を許可しないファイアウォールの背後にある。
- クライアントが誤って設定されたプロキシの背後にある。
- クライアントが異なるSUSE Managerサーバと通信しているか、接続が正しく設定されていない。
- クライアントがSUSE Managerサーバと通信できるネットワーク内にない。
- ファイアウォールがクライアントとSUSE Managerサーバ間のトラフィックをブロックしている。
- Taskomaticが正しく設定されていない。

サーバへのクライアント接続の詳細については、**Client-configuration** > **Contact-methods-intro**を参照してください。

ports 設定の詳細については、**Installation-and-upgrade** > **Ports** を参照してください。

ファイアウォールのトラブルシューティングの詳細については、**Administration** > **Troubleshooting**を参照してください。

28.12. サーバ間同期のトラブルシューティング

サーバ間同期では、キャッシュを使用してISSマスターとスレーブを管理します。これらのキャッシュには、無効なエントリを作成するバグが発生する可能性があります。この場合、キャッシュがまだ無効なエントリを使用しているため、バグを解決するバージョンに更新した後もバグが表示される可能性があります。新しいバージョンのISSにアップグレードしても問題が解決しない場合は、すべてのキャッシュをクリアして、問題の原因となる古いエントリがないことを確認します。

キャッシュエラーにより、さまざまなエラーで同期が失敗する可能性があります。エラーメッセージは通常、次のような内容をレポートします。

```
consider removing satellite-sync cache at /var/cache/rhn/satsync/* and re-run satellite-sync with same options.
```

これを解決するには、ISSマスターとISSスレーブでキャッシュを削除して、同期が正常に完了するようにします。



サーバコンテナ内でシェルにアクセスするには、コンテナホストで`mgctl term`を実行します。

プロシージャ: ISSキャッシュエラーの解決

1. ISSマスターのコマンドプロンプトで、rootとして、マスターのキャッシュファイルを削除します。

```
rm -rf /var/cache/rhn/xml-*
```

2. サービスを再起動します。

```
rcapache2 restart
```

3. ISSマスターのコマンドプロンプトで、rootとして、スレーブのキャッシュファイルを削除します。

```
rm -rf /var/cache/rhn/satsync/*
```

4. サービスを再起動します。

```
rcapache2 restart
```

28.13. ローカル発行者証明書のトラブルシューティング

一部の古いブートストラップスクリプトは、ローカル証明書へのリンクを間違った場所に作成します。これにより、zypperはローカルの発行者証明書に関する `Unrecognized error` を返します。 `/etc/ssl/certs/` ディレクトリをチェックすることにより、ローカル発行者証明書へのリンクが正しく作成されていることを確認できます。この問題が発生した場合は、zypperが期待どおりに動作するようにブートストラップスクリプトを更新することを検討する必要があります。

28.14. ログインタイムアウトのトラブルシューティング

デフォルトでは、SUSE Manager Web UIはユーザに30分後に再度ログインするように要求します。環境によっては、ログインタイムアウトの値を調整したい場合があります。

値を調整するには、`rhn.conf`と `web.xml`の両方で変更する必要があります。 `/etc/rhn/rhn.conf`で秒単位の値、`web.xml`で分単位の値を設定してください。この2つの値は同じ時間に等しくなる必要があります。

たとえば、タイムアウト値を1時間に変更するには、`rhn.conf`の値を3600秒に設定し、`web.xml`の値を60分に設定します。



サーバコンテナで手順を実行する前に、`mgrctl term`を使用します。

プロシージャ: Web UIログインタイムアウト値の調整

1. サービスを停止します。

```
mgradm stop
```

2. `/etc/rhn/rhn.conf`を開いて、次の行を追加または編集して、秒単位の新しいタイムアウト値を含めませう。

```
web.session_database_lifetime = <Timeout_Value_in_Seconds>
```

3. ファイルを保存して閉じます。
4. `/etc/tomcat/web.xml`を開いて、次の行を追加または編集して、分単位の新しいタイムアウト値を含めません。

```
<session-timeout>Timeout_Value_in_Minutes</session-timeout>
```

5. ファイルを保存して閉じます。
6. サービスを再開します。

```
mgradm start
```

28.15. メール設定のトラブルシューティング

安全なメール通信にするため、認証を有効にし、ユーザ名とパスワードを定義して、`/etc/rhn/rhn.conf`でSSLまたはSTARTLSを有効にすることができます。

```
java.smtp_port = integer (default: 25)
java.smtp_auth = true/false (default: false)
java.smtp_ssl = true/false (default: false)
java.smtp_starttls = true/false (default: false)
java.smtp_user = string (default: null)
java.smtp_pass = string (default: null)
```

SMTPサーバ通信の接続タイムアウトを増やすには、`/etc/rhn/rhn.conf`で次のパラメータを設定できます:

```
java.smtp_timeout = integer (デフォルト: 5000)
java.smtp_connection_timeout = integer (デフォルト: 5000)
java.smtp_write_timeout = integer (デフォルト: 5000)
```

28.16. noexecで/tmpをマウントする場合のトラブルシューティング

Saltはクライアントのファイルシステム上の`/tmp`からリモートコマンドを実行します。したがって、`noexec`オプションを指定して`/tmp`をマウントしないでください。この問題を解決する別の方法は、一時ディレクトリパスをSaltサービスに指定された`TMPDIR`環境変数で上書きして、`noexec`オプションが設定されていないディレクトリを指すようにすることです。Salt Bundleを使用する場合はsystemdドロップイン設定ファイル`/etc/systemd/system/venv-salt-minion.service.d/10-TMPDIR.conf`を使用し、クライアントで`salt-minion`を使用する場合は`/etc/systemd/system/salt-minion.service.d/10-TMPDIR.conf`を使用することをお勧めします。ドロップイン設定ファイルの内容の例を次に示します。

```
[Service]
Environment=TMPDIR=/var/tmp
```

28.17. noexecで/var/tmpをマウントする場合のトラブルシューティング

Salt SSHは、`/var/tmp`を使用して、Salt Bundleを配備し、バンドルされたPythonを使用してクライアント上でSaltコマンドを実行しています。したがって、`noexec`オプションを指定して`/var/tmp`をマウントしないでください。ブートストラッププロセスがクライアントに到達するためにSalt SSHを使用しているため、`/var/tmp`が`noexec`オプションでマウントされたクライアントをWeb UIでブートストラップすることはできません。

28.18. 十分なディスク容量がない場合のトラブルシューティング

移行を開始する前に、使用できるディスク容量を確認してください。別々のXFSファイルシステムで`/var/spacwalk`と`/var/lib/pgsql`を探すことをお勧めします。

別々のファイルシステムを設定している場合、`/etc/fstab`を編集し、`/var/lib/pgsql`サブボリュームを削除します。サーバを再起動して変更を取得します。

アップグレードの問題の詳細については、移行ログファイルを確認してください。ログファイルは、アップグレードしているシステムの`/var/log/rhn/migration.log`にあります。

28.19. 通知のトラブルシューティング

通知メッセージのデフォルトの有効期間は30日です。その期間が過ぎると、メッセージは読み込みステータスに関係なくデータベースから削除されます。この値を変更するには、`/etc/rhn/rhn.conf`で次の行を追加または編集します。

```
java.notifications_lifetime = 30
```

通知タイプを有効または無効にするには、`/etc/rhn/rhn.conf`で次のように行を追加または編集します。

```
java.notifications_type_disabled = OnboardingFailed,ChannelSyncFailed,\
ChannelSyncFinished,CreateBootstrapRepoFailed,StateApplyFailed,\
PaygAuthenticationUpdateFailed,EndOfLifePeriod,SubscriptionWarning
```

デフォルト設定と設定オプションについては、`usr/share/rhn/config-defaults/rhn_java.conf`テンプレートファイルを参照してください。

28.20. OESリポジトリの有効化のトラブルシューティング

SUSE ManagerサーバでOpen Enterprise Server (OES)を有効にするには、説明されているプロシージャに従います。

プロシージャ: OESリポジトリの有効化

1. OESにアクセスできるMicrofocusからのミラー資格情報があることを確認します。

2. SUSE Managerサーバにログインします。
3. [管理 > セットアップウィザード > 組織の資格情報] に移動します。
4. すでにSUSE ManagerのSUSE資格情報があることを確認します。
5. 新規追加のオプションを選択し、Microfocus資格情報を入力します。
6. [管理 > セットアップウィザード > 組織の資格情報] に移動して、更新操作が完了するのを待ちます。
7. OESは更新された製品リストに表示されます。 これで、他の製品のように、有効にできるようになりました。

OESの詳細については、<https://www.microfocus.com/documentation/open-enterprise-server/>を参照してください。

28.21. パッケージの不整合のトラブルシューティング

クライアント上のパッケージがロックされている場合、SUSE Managerサーバは適用可能なパッチのセットを正しく判断できない場合があります。 この場合、パッケージの更新はWeb UIで使用できますが、クライアントには表示されず、クライアントを更新しようとすると失敗します。 パッケージのロックと除外リストをチェックして、クライアント上でパッケージがロックされているか除外されているかを判断します。

クライアント上で、パッケージのロックと除外リストをチェックして、パッケージがロックされているか、除外されているかを判断します。

- 拡張サポートプラットフォームでは、`/etc/yum.conf`をチェックして、`exclude=`を検索します。
- SUSE Linux EnterpriseおよびopenSUSEでは、`zypper locks`コマンドを使用します。

28.22. grainを開始イベントに渡す場合のトラブルシューティング

Saltクライアントは、起動するたびに、`machine_id` grainをSUSE Managerに渡します。SUSE Managerは、このgrainを使用して、クライアントが登録されたかどうかを判定します。 このプロセスでは、同期Saltコールが必要です。同期Saltコールは、その他のプロセスをブロックするため、多数のクライアントを同時に起動する場合、大幅な遅延が発生する可能性があります。

この問題を克服するために、別々の同期Saltコールを回避するための新しい機能がSaltに導入されました。

この機能を使用するには、この機能をサポートしているクライアントのクライアント設定に設定パラメータを追加できます。

このプロセスを簡単にするには、`mgr_start_event_grains.sls`ヘルパーSaltの状態を使用します。



この操作は、登録済みのクライアントにのみ適用されます。 最近Saltクライアントを登録した場合、この設定パラメータはデフォルトで追加されています。

SUSE Managerサーバのコマンドプロンプトで、次のコマンドを使用して`start_event_grains`設定ヘルパーを有効にします。

```
salt '*' state.sls util.mgr_start_event_grains
```

このコマンドを実行すると、必要な設定がクライアントの設定ファイルに追加され、クライアントを再起動したときに適用されます。クライアント数が多い場合、バッチモードでコマンドを実行できます。

```
salt --batch-size 50 '*' state.sls mgr_start_event_grains
```

28.23. プロキシの接続およびFQDNのトラブルシューティング

プロキシ経由で接続されているクライアントがWeb UIに表示されることがありますが、そのようなクライアントがプロキシ経由で接続されていることは示されません。完全修飾ドメイン名(FQDN)を使用して接続していない場合、SUSE Managerでプロキシが認識されないと、この動作が発生することがあります。

この動作を修正するには、プロキシのクライアント設定ファイルでgrainとして追加のFQDNを指定します。

```
grains:
  susemanager:
    custom_fqdns:
      - name.one
      - name.two
```

28.24. クローンクライアントの登録のトラブルシューティング

SUSE Managerを使用して仮想マシンを管理している場合は、仮想マシンのクローンを作成すると役立つ場合があります。クローンとは、既存のディスクの正確なコピーであるプライマリディスクを使用する仮想マシンのことです。

仮想マシンのクローンを作成すると時間を大幅に節約できますが、ディスク上の識別情報が重複しているために問題が発生する可能性があります。

すでに登録されているクライアントがある場合は、そのクライアントのクローンを作成してから、クローンを登録しようとする、おそらく、SUSE Managerでそれらを2つの別々のクライアントとして登録する必要があります。ただし、元のクライアントとクローンのマシンIDが同じ場合、SUSE Managerは両方のクライアントを1つのシステムとして登録し、既存のクライアントデータはクローンのデータで上書きされます。

これは、SUSE Managerが2つの別のクライアントとして認識できるように、クローンのマシンIDを変更することで解決できます。



このプロシージャの各ステップはクローンクライアントで実行されます。このプロシージャではSUSE Managerに登録されたままである、元のクライアントを操作しません。

プロシージャ: 複製されたSaltクライアントでの重複するマシンIDを解決する

- クローンマシンで、ホスト名とIPアドレスを変更します。 `/etc/hosts` に加えられた変更と正しいホストエントリが含まれていることを確認します。
- systemdをサポートするディストリビューションの場合: マシンに同じマシンIDがある場合は、rootとして、複製された各クライアントのファイルを削除し、再作成します。

```
rm /etc/machine-id
rm /var/lib/dbus/machine-id
rm /var/lib/zypp/AnonymousUniqueId
dbus-uuidgen --ensure
systemd-machine-id-setup
```

3. systemdをサポートしないディストリビューションの場合: rootとして、dbusからマシンIDを生成します。

```
rm /var/lib/dbus/machine-id
rm /var/lib/zypp/AnonymousUniqueId
dbus-uuidgen --ensure
```

4. クライアントがまだ同じSaltクライアントIDを持っている場合は、各クライアントの`minion_id`ファイルを削除します(FQDNはクライアントの再起動時に再生成されるときに使用されます)。 Salt Minionクライアントの場合:

```
rm /etc/salt/minion_id
rm -rf /etc/salt/pki
```

Salt Bundleクライアントの場合:

```
rm /etc/venv-salt-minion/minion_id
rm -rf /etc/venv-salt-minion/pki
```

5. オンボーディングページから受諾されたキーを削除し、SUSE Managerからシステムプロファイルを削除して、次のコマンドを使用してクライアントを再起動します。 Salt Minionクライアントの場合:

```
service salt-minion restart
```

Salt Bundleクライアントの場合:

```
service venv-salt-minion restart
```

6. クライアントを再登録します。各クライアントは異なる`/etc/machine-id`を持つようになり、[\[システムの概要\]](#) ページに正しく表示されるはずですが、

28.25. 削除されたクライアントの登録のトラブルシューティング



サーバコンテナで手順を実行する前に、`mgrctl term`を使用します。

削除された(登録解除された)クライアントを新しく登録できないことがあります。この問題を解決するには、再登録をもう一度試みる前に、SUSE Managerサーバ(Saltマスター)上で一部のSaltキャッシュファイルを削除する必要があります。

```
rm /var/cache/salt/master/thin/version
rm /var/cache/salt/master/thin/thin.tgz
```

28.26. Web UIからの登録が失敗し、エラーが表示されない場合のトラブルシューティング

Web UIからの初期登録では、すべてのSaltクライアントがSalt SSHを使用しています。

その性質上、Salt SSHクライアントはサーバにエラーを報告しません。

ただし、Salt SSHクライアントは、エラーを検査できるログを `/var/log/salt-ssh.log` にローカルに保存します。

28.27. Red Hat CDNチャンネルと複数の証明書のトラブルシューティング

Red Hatコンテンツデリバリーネットワーク(CDN)チャンネルは複数の証明書を提供することがありますが、SUSE Manager Web UIは単一の証明書しかインポートできません。CDNがSUSE Manager Web UIで認識されている証明書とは異なる証明書を提示した場合、証明書が正確であっても検証が失敗し、リポジトリへのアクセスパーミッションが拒否されます。次のようなエラーメッセージが生じます。

```
[error] ([エラー])
Repository '<repo_name>' is invalid. (リポジトリ'<repo_name>'は無効です。)
<repo.pem> Valid metadata not found at specified
URL (有効なメタデータが指定されているURLで見つかりませんでした)
History: (履歴:)
- [[] Error trying to read from
'<repo.pem>' ('<repo.pem>'からの読み込み時にエラーが発生しました)
- Permission to access '<repo.pem>' denied. ('<repo.pem>'へのアクセスが拒否されました。)
Please check if the URIs defined for this repository are pointing to a valid
repository. (このリポジトリ用に定義されているURIが有効なリポジトリを指しているかどうかを確認してください。)
```

Skipping repository '<repo_name>' because of the above error. (上記エラーのため、リポジトリ'<repo_name>'をスキップします。)

Could not refresh the repositories because of errors. (エラーが発生したため、リポジトリを更新できませんでした。)

```
HH:MM:SS RepoMDError: Cannot access repository. Maybe repository GPG keys are not
imported (HH:MM:SS RepoMDError:
リポジトリにアクセスできません。リポジトリGPGキーがインポートされていない可能性があります)
```

この問題を解決するには、すべての有効な証明書を1つの `.pem` ファイルにマージし、SUSE Managerで使用する証明書を再作成します。

手順: 複数のRed Hat CDN証明書の解決

1. Red Hat クライアントのコマンドプロンプトで、rootとして、`/etc/pki/entitlement/`からすべての現行の証明書を単一の `rh-cert.pem` ファイルに収集します。

```
cat 866705146090697087.pem 3539668047766796506.pem redhat-entitlement-
authority.pem > rh-cert.pem
```

2. `/etc/pki/entitlement/`からすべての現行のキーを単一の`rh-key.pem`ファイルに収集します。

```
cat 866705146090697087-key.pem 3539668047766796506-key.pem > rh-key.pem
```

次に、**Client-configuration** > **Clients-rh-cdn**の手順に従って、新しい証明書をSUSE Managerサーバにインポートできます。

28.28. SUSE Managerサーバの名前変更のトラブルシューティング

SUSE Managerサーバのホスト名をローカルで変更する場合は、SUSE Managerインストールが適切に機能しなくなります。これは、変更がデータベースで行われていないため、変更がクライアントとプロキシに伝播されないためです。

SUSE Managerサーバのホスト名を変更する必要がある場合は、`spacewalk-hostname-rename`スクリプトを使用して変更できます。このスクリプトはPostgreSQLデータベースの設定とSUSE Managerの内部構造を更新します。

`spacewalk-hostname-rename`スクリプトは`spacewalk-utils`パッケージの一部です。

このスクリプトの唯一の必須パラメータはSUSE Managerサーバの新たに設定されたIPアドレスです。

プロシージャ: SUSE Managerサーバの名前変更

1. システムレベルのサーバのネットワーク設定を、DNSサーバでローカルおよびリモートで変更します。逆引き名前解決のための設定を指定する必要もあります。ネットワーク設定の変更は、他のシステムの名前変更と同じ方法で実行されます。
2. SUSE Managerサーバを再起動して、新しいネットワーク構成を使用し、ホスト名が変更されていることを確認します。
3. サーバのパブリックIPアドレスを使用して、`spacewalk-hostname-rename`スクリプトを実行します。サーバが新しいホスト名を使用していない場合、スクリプトは失敗します。このスクリプトがすべてのSaltクライアントのpillarデータを更新することに注意してください。実行にかかる時間は登録済みクライアントの数によって異なります。
4. **クライアントが SUSE Managerプロキシ経由で管理されている場合は、この手順をスキップしてください。** 直接管理されているクライアントを再設定して、新しいホスト名とIPアドレスを認識できるようにします。Saltクライアント設定ファイルでは、新しいSaltマスター(SUSE Managerサーバ)の名前を指定する必要があります(ファイル名は`/etc/venv-salt-bundle/minion`または、Saltバンドルを使用しない場合は、`/etc/salt/minion`):

```
master: <new_hostname>
```

5. `venv-salt-minion`サービスを再起動します(Saltバンドルを使用している場合):

```
systemctl restart venv-salt-minion
```

または、`salt-minion`サービス (Saltバンドルを使用していない場合):

```
systemctl restart salt-minion
```

6. ホスト名がSaltクライアント設定に完全に伝播されるようにするには、`highstate`を適用します。`highstate`を適用すると、リポジトリURLのホスト名が更新されます。



プロキシを再設定する必要があります。新しいサーバ証明書とキーをプロキシにコピーして、`configure-proxy.sh`スクリプトを実行する必要があります。



プロキシ経由でPXEブートを使用する場合は、プロキシの設定を確認する必要があります。プロキシで、`configure-tftpsync.sh`セットアップスクリプトを実行して、要求される情報を入力します。

28.29. RPC接続タイムアウトのトラブルシューティング

RPC接続は、ネットワークが低速になったり、ネットワークリンクがダウンしたりするためにタイムアウトすることがあります。その結果、パッケージのダウンロードやバッチジョブがハングしたり予想よりも時間がかかります。設定ファイルを編集することで、RPC接続にかかる最大時間を調整できます。ただし、これではネットワークの問題は解決されず、プロセスがハングするのではなく失敗します。

プロシージャ: RPC接続タイムアウトの解決

1. SUSE Managerサーバで、`/etc/rhn/rhn.conf`ファイルを開いて、最大タイムアウト値(秒単位)を設定します。

```
server.timeout = `number`
```

2. SUSE Managerプロキシで、`/etc/rhn/rhn.conf`ファイルを開いて、最大タイムアウト値(秒単位)を設定します。

```
proxy.timeout = `number`
```

3. `zypper`を使用するSUSE Linux Enterprise Serverクライアントで、`/etc/zypp/zypp.conf`ファイルを開いて、最大タイムアウト値(秒単位)を設定します。

```
## Valid values: [0,3600]
## Default value: 180
download.transfer_timeout = 180
```

4. `yum`を使用するRed Hat Enterprise Linuxクライアントで、`/etc/yum.conf`ファイルを開いて、最大タイムアウト値(秒単位)を設定します。

```
timeout = `number`
```



RPCタイムアウトを180秒未満に制限する場合は、完全に正常な操作が中断されるリスクがあります。

28.30. ダウンと表示されるSaltクライアントとDNS設定のトラブルシューティング

Saltクライアントが実行されている場合でも、パッケージの更新や状態の適用などのアクションは、次のメッセージで失敗としてマークされる可能性があります。

Minionがダウンしているか、接続できませんでした。

この場合、アクションのスケジュールを変更してみてください。スケジュールの変更が成功した場合、問題の原因はDNS設定の誤りである可能性があります。



サーバコンテナ内でシェルにアクセスするには、コンテナホストで`mgrctl term`を実行します。

Saltクライアントが再起動されたとき、または `grain`が更新された場合、クライアントはFQDN `grain`を計算し、`grain`が処理されるまで応答しません。SUSE Managerサーバでスケジュールされたアクションが実行される場合、SUSE Managerサーバは、実際のアクションの前にクライアントに対して`test.ping`を実行し、クライアントが実際に実行されていてアクションをトリガできることを確認します。

デフォルトでは、SUSE Managerサーバは`test.ping`コマンドからの応答を取得するために5秒間待機します。5秒以内に応答が受信されない場合、アクションは失敗に設定され、クライアントがダウンしているか、接続できなかったというメッセージが表示されます。

これを修正するには、クライアントのDNS解決を修正して、クライアントがFQDNの解決中に5秒間スタックしないようにします。

これができない場合は、SUSE Managerサーバ上の`/etc/rhn/rhn.conf`ファイルの`java.salt_presence_ping_timeout`の値を4より大きい値に増やしてみてください。

例:

```
mgrctl term
vim /etc/rhn/rhn.conf
java.salt_presence_ping_timeout = 6
```

その後、次のコマンドを実行します。

```
mgradm restart
```



この値を大きくすると、minionに到達できないのかminionが応答しないのかをSUSE Managerサーバが確認するのに時間がかかり、SUSE Managerサーバの全体的な速度が低下したり応答しなくなったりします。

28.31. スキーマのアップグレードが失敗する場合のトラブルシューティング

スキーマのアップグレードに失敗すると、データベースのバージョン確認およびその他すべてのspacewalkサービスが開始されません。詳細および続行する方法のヒントについては、`mgradm start`を実行してください。



サーバコンテナ内でシェルにアクセスするには、コンテナホストで`mgrctl term`を実行します。

バージョン確認をコンテナ上で直接実行することもできます。

```
systemctl status uyuni-check-database.service
```

または

```
journalctl -u uyuni-check-database.service
```

一般的な `mgradm` コマンドを実行しない場合、これらのコマンドを実行するとデバッグ情報が出力されます。

28.32. 同期のトラブルシューティング

同期はさまざまな理由で失敗する可能性があります。接続問題に関する詳細情報を取得するには、次のコマンドを実行します。

```
export URLGRABBER_DEBUG=DEBUG
spacewalk-repo-sync -c <channelname> <options> > /var/log/spacewalk-repo-sync-$(date +%F-%R).log 2>&1
```

`/var/log/zypper.log`にあるZypperによって作成されたログを確認することもできます。

GPGキーの不一致

SUSE ManagerはサードパーティのGPGキーを自動的に信頼しません。パッケージ同期が失敗する場合は、信頼されていないGPGキーが原因である可能性があります。この場合は、`/var/log/rhn/reposync`を開いて、次のようなエラーを検索することで確認できます。

```
['/usr/bin/spacewalk-repo-sync', '--channel', 'sle-12-sp1-ga-desktop-
nvidia-driver-x86_64', '--type', 'yum', '--non-interactive']
RepoMDError: Cannot access repository. Maybe repository GPG keys are not imported
```

この問題を解決するには、SUSE ManagerにGPGキーをインポートする必要があります。GPGキーのインポートの詳細については、**Administration** > **Repo-metadata**を参照してください。

spacewalk-repo-syncからのGPGキーの削除

リポジトリのGPGキーが`spacewalk-repo-sync`を使用して手動でインポートされ、このキーが不要になった場合(たとえば、キーが侵害された場合や、テスト目的専用で使用された場合)、次のコマンドを使用し

て、`spacewalk-repo-sync`によって使用されるzypper RPMデータベースから削除できます。

```
rpm --dbpath=/var/lib/spacewalk/reposync/root/var/lib/rpm/ -e gpg-pubkey-*
```

ここで、`gpg-pubkey-*`は削除されるGPGキーの名前です。

GPGキーの更新

GPGキーを更新する場合は、まず古いキーを削除してから、新しいキーを生成してインポートします。

チェックサムの一貫性

チェックサムが失敗すると、`/var/log/rhn/reposync/*.log`ログファイルに次のようなエラーが表示される場合があります。

```
Repo Sync Errors: (50, u'checksums did not match
326a904c2fbd7a0e20033c87fc84ebba6b24d937 vs
afd8c60d7908b2b0e2d95ad0b333920aea9892eb', 'Invalid information uploaded
to the server')
The package microcode_ctl-1.17-102.57.62.1.x86_64 which is referenced by
patch microcode_ctl-8413 was not found in the database. This patch has
been skipped.
```

`-Y`オプションを使用して、コマンドラインプロンプトから同期を実行することで、このエラーを解決できます。

```
spacewalk-repo-sync --channel <channelName> -Y
```

このオプションはローカルにキャッシュされたチェックサムに依存するのではなく、同期前にリポジトリデータを検証します。

接続タイムアウト

ダウンロードが次のエラーでタイムアウトする場合:

```
28, 'Operation too slow. Less than 1000 bytes/sec transferred the last 300 seconds
```

このエラーは、`/etc/rhn/rhn.conf`で`reposync_timeout`と`reposync_minrate`の設定値を指定することで解決できます。デフォルトでは、300秒で1秒あたり1000バイト未満の転送が行われると、ダウンロードが中止されます。`reposync_minrate`で1秒あたりのバイト数を調整でき、`reposync_timeout`で待機する秒数を調整できます。

28.33. Taskomaticのトラブルシューティング

リポジトリメタデータの再生成は比較的集中的なプロセスであるため、Taskomaticが完了するまでに数分かかる可能性があります。また、Taskomaticがクラッシュした場合、リポジトリメタデータの再生成が中断される可能性があります。



サーバコンテナ内でシェルにアクセスするには、コンテナホストで`mgctl term`を実行します。

Taskomatic がまだ実行されている場合、またはプロセスがクラッシュした場合は、Web UIでパッケージ更新が使用可能に見える場合がありますが、クライアントに表示されず、クライアントを更新しようとすると失敗します。この場合、`zypper ref`コマンドを使用すると、次のようなエラーが表示されます。

```
Valid metadata not found at specified URL
```

これを修正するには、Taskomaticがまだリポジトリメタデータを生成中であるか、またはクラッシュが発生した可能性があるかどうかを判断します。クライアントの更新が正しく実行されるように、メタデータの再生成が完了するまで待つか、クラッシュ後にTaskomaticを再起動します。

プロシージャ: Taskomaticの問題の解決

1. SUSE Managerサーバで、`/var/log/rhn/rhn_taskomatic_daemon.log`ファイルを確認して、メタデータ再生成プロセスがまだ実行されているか、クラッシュが発生したかどうかを判断します。
2. taskomaticを再起動します。

```
service taskomatic restart
```

3. Taskomaticログファイルで、次のような開始および終了行を検索することで、メタデータ再生成に関連するセクションを特定できます。

```
<YYYY-DD-MM> <HH:MM:SS>,174 [Thread-584] INFO
com.redhat.rhn.taskomatic.task.repomd.RepositoryWriter - Generating new repository
metadata for channel 'cloned-2018-q1-sles12-sp3-updates-x86_64'(sha256) 550 packages,
140 errata
...
<YYYY-DD-MM> <HH:MM:SS>,704 [Thread-584] INFO
com.redhat.rhn.taskomatic.task.repomd.RepositoryWriter - Repository metadata generation
for 'cloned-2018-q1-sles12-sp3-updates-x86_64' finished in 4 seconds
```

28.34. Web UIの読み込みが失敗する場合のトラブルシューティング

移行後、Web UIが読み込まれない場合があります。新しいシステムのホスト名およびIPアドレスが古いシステムと同じ場合、通常、このエラーはブラウザのキャッシュが原因です。この重複によって一部のブラウザが混乱する可能性があります。

この問題は、キャッシュをクリアしてページを再読み込みすると解決します。ほとんどのブラウザでは、この操作は、`Ctrl+Shift+F5`を押すことで実行できます。

Chapter 29. GNU Free Documentation License

Copyright © 2000, 2001, 2002 Free Software Foundation, Inc. 51 Franklin St, Fifth Floor, Boston, MA 02110-1301 USA. Everyone is permitted to copy and distribute verbatim copies of this license document, but changing it is not allowed.

0. PREAMBLE

The purpose of this License is to make a manual, textbook, or other functional and useful document "free" in the sense of freedom: to assure everyone the effective freedom to copy and redistribute it, with or without modifying it, either commercially or noncommercially. Secondly, this License preserves for the author and publisher a way to get credit for their work, while not being considered responsible for modifications made by others.

This License is a kind of "copyleft", which means that derivative works of the document must themselves be free in the same sense. It complements the GNU General Public License, which is a copyleft license designed for free software.

We have designed this License in order to use it for manuals for free software, because free software needs free documentation: a free program should come with manuals providing the same freedoms that the software does. But this License is not limited to software manuals; it can be used for any textual work, regardless of subject matter or whether it is published as a printed book. We recommend this License principally for works whose purpose is instruction or reference.

1. APPLICABILITY AND DEFINITIONS

This License applies to any manual or other work, in any medium, that contains a notice placed by the copyright holder saying it can be distributed under the terms of this License. Such a notice grants a world-wide, royalty-free license, unlimited in duration, to use that work under the conditions stated herein. The "Document", below, refers to any such manual or work. Any member of the public is a licensee, and is addressed as "you". You accept the license if you copy, modify or distribute the work in a way requiring permission under copyright law.

A "Modified Version" of the Document means any work containing the Document or a portion of it, either copied verbatim, or with modifications and/or translated into another language.

A "Secondary Section" is a named appendix or a front-matter section of the Document that deals exclusively with the relationship of the publishers or authors of the Document to the Document's overall subject (or to related matters) and contains nothing that could fall directly within that overall subject. (Thus, if the Document is in part a textbook of mathematics, a Secondary Section may not explain any mathematics.) The relationship could be a matter of historical connection with the subject or with related matters, or of legal, commercial, philosophical, ethical or political position regarding them.

The "Invariant Sections" are certain Secondary Sections whose titles are designated, as being those of Invariant Sections, in the notice that says that the Document is released under this License. If a section does not fit the above definition of Secondary then it is not allowed to be designated as Invariant. The Document may contain zero Invariant Sections. If the Document does not identify any Invariant Sections then there are none.

The "Cover Texts" are certain short passages of text that are listed, as Front-Cover Texts or Back-Cover Texts, in the notice that says that the Document is released under this License. A Front-Cover Text may be at most 5 words, and a Back-Cover Text may be at most 25 words.

A "Transparent" copy of the Document means a machine-readable copy, represented in a format whose specification is available to the general public, that is suitable for revising the document straightforwardly with generic text editors or (for images composed of pixels) generic paint programs or (for drawings) some widely available drawing editor, and that is suitable for input to text formatters or for automatic translation to a variety of formats suitable for input to text formatters. A copy made in an otherwise Transparent file format whose markup, or absence of markup, has been arranged to thwart or discourage subsequent modification by readers is not Transparent. An image format is not Transparent if used for any substantial amount of text. A copy that is not "Transparent" is called "Opaque".

Examples of suitable formats for Transparent copies include plain ASCII without markup, Texinfo input format, LaTeX input format, SGML or XML using a publicly available DTD, and standard-conforming simple HTML, PostScript or PDF designed for human modification. Examples of transparent image formats include PNG, XCF and JPG. Opaque formats include proprietary formats that can be read and edited only by proprietary word processors, SGML or XML for which the DTD and/or processing tools are not generally available, and the machine-generated HTML, PostScript or PDF produced by some word processors for output purposes only.

The "Title Page" means, for a printed book, the title page itself, plus such following pages as are needed to hold, legibly, the material this License requires to appear in the title page. For works in formats which do not have any title page as such, "Title Page" means the text near the most prominent appearance of the work's title, preceding the beginning of the body of the text.

A section "Entitled XYZ" means a named subunit of the Document whose title either is precisely XYZ or contains XYZ in parentheses following text that translates XYZ in another language. (Here XYZ stands for a specific section name mentioned below, such as "Acknowledgements", "Dedications", "Endorsements", or "History".) To "Preserve the Title" of such a section when you modify the Document means that it remains a section "Entitled XYZ" according to this definition.

The Document may include Warranty Disclaimers next to the notice which states that this License applies to the Document. These Warranty Disclaimers are considered to be included by reference in this License, but only as regards disclaiming warranties: any other implication that these Warranty Disclaimers may have is void and has no effect on the meaning of this License.

2. VERBATIM COPYING

You may copy and distribute the Document in any medium, either commercially or noncommercially, provided that this License, the copyright notices, and the license notice saying this License applies to the Document are reproduced in all copies, and that you add no other conditions whatsoever to those of this License. You may not use technical measures to obstruct or control the reading or further copying of the copies you make or distribute. However, you may accept compensation in exchange for copies. If you distribute a large enough number of copies you must also follow the conditions in section 3.

You may also lend copies, under the same conditions stated above, and you may publicly display copies.

3. COPYING IN QUANTITY

If you publish printed copies (or copies in media that commonly have printed covers) of the Document, numbering more than 100, and the Document's license notice requires Cover Texts, you must enclose the copies in covers that carry, clearly and legibly, all these Cover Texts: Front-Cover Texts on the front cover, and Back-Cover Texts on the back cover. Both covers must also clearly and legibly identify you as the publisher of these copies. The front cover must present the full title with all words of the title equally prominent and visible. You may add other material on the covers in addition. Copying with changes limited to the covers, as long as they preserve the title of the Document and satisfy these conditions, can be treated as verbatim copying in other respects.

If the required texts for either cover are too voluminous to fit legibly, you should put the first ones listed (as many as fit reasonably) on the actual cover, and continue the rest onto adjacent pages.

If you publish or distribute Opaque copies of the Document numbering more than 100, you must either include a machine-readable Transparent copy along with each Opaque copy, or state in or with each Opaque copy a computer-network location from which the general network-using public has access to download using public-standard network protocols a complete Transparent copy of the Document, free of added material. If you use the latter option, you must take reasonably prudent steps, when you begin distribution of Opaque copies in quantity, to ensure that this Transparent copy will remain thus accessible at the stated location until at least one year after the last time you distribute an Opaque copy (directly or through your agents or retailers) of that edition to the public.

It is requested, but not required, that you contact the authors of the Document well before redistributing any large number of copies, to give them a chance to provide you with an updated version of the Document.

4. MODIFICATIONS

You may copy and distribute a Modified Version of the Document under the conditions of sections 2 and 3 above, provided that you release the Modified Version under precisely this License, with the Modified Version filling the role of the Document, thus licensing distribution and modification of the Modified Version to whoever possesses a copy of it. In addition, you must do these things in the Modified Version:

- A. Use in the Title Page (and on the covers, if any) a title distinct from that of the Document, and from those of previous versions (which should, if there were any, be listed in the History section of the Document). You may use the same title as a previous version if the original publisher of that version gives permission.
- B. List on the Title Page, as authors, one or more persons or entities responsible for authorship of the modifications in the Modified Version, together with at least five of the principal authors of the Document (all of its principal authors, if it has fewer than five), unless they release you from this requirement.
- C. State on the Title page the name of the publisher of the Modified Version, as the publisher.
- D. Preserve all the copyright notices of the Document.
- E. Add an appropriate copyright notice for your modifications adjacent to the other copyright notices.
- F. Include, immediately after the copyright notices, a license notice giving the public permission to use the Modified Version under the terms of this License, in the form shown in the Addendum below.
- G. Preserve in that license notice the full lists of Invariant Sections and required Cover Texts given in the Document's license notice.

H. Include an unaltered copy of this License.

- I. Preserve the section Entitled "History", Preserve its Title, and add to it an item stating at least the title, year, new authors, and publisher of the Modified Version as given on the Title Page. If there is no section Entitled "History" in the Document, create one stating the title, year, authors, and publisher of the Document as given on its Title Page, then add an item describing the Modified Version as stated in the previous sentence.
- J. Preserve the network location, if any, given in the Document for public access to a Transparent copy of the Document, and likewise the network locations given in the Document for previous versions it was based on. These may be placed in the "History" section. You may omit a network location for a work that was published at least four years before the Document itself, or if the original publisher of the version it refers to gives permission.
- K. For any section Entitled "Acknowledgements" or "Dedications", Preserve the Title of the section, and preserve in the section all the substance and tone of each of the contributor acknowledgements and/or dedications given therein.
- L. Preserve all the Invariant Sections of the Document, unaltered in their text and in their titles. Section numbers or the equivalent are not considered part of the section titles.
- M. Delete any section Entitled "Endorsements". Such a section may not be included in the Modified Version.
- N. Do not retitle any existing section to be Entitled "Endorsements" or to conflict in title with any Invariant Section.
- O. Preserve any Warranty Disclaimers.

If the Modified Version includes new front-matter sections or appendices that qualify as Secondary Sections and contain no material copied from the Document, you may at your option designate some or all of these sections as invariant. To do this, add their titles to the list of Invariant Sections in the Modified Version's license notice. These titles must be distinct from any other section titles.

You may add a section Entitled "Endorsements", provided it contains nothing but endorsements of your Modified Version by various parties—for example, statements of peer review or that the text has been approved by an organization as the authoritative definition of a standard.

You may add a passage of up to five words as a Front-Cover Text, and a passage of up to 25 words as a Back-Cover Text, to the end of the list of Cover Texts in the Modified Version. Only one passage of Front-Cover Text and one of Back-Cover Text may be added by (or through arrangements made by) any one entity. If the Document already includes a cover text for the same cover, previously added by you or by arrangement made by the same entity you are acting on behalf of, you may not add another; but you may replace the old one, on explicit permission from the previous publisher that added the old one.

The author(s) and publisher(s) of the Document do not by this License give permission to use their names for publicity for or to assert or imply endorsement of any Modified Version.

5. COMBINING DOCUMENTS

You may combine the Document with other documents released under this License, under the terms defined in section 4 above for modified versions, provided that you include in the combination all of the Invariant Sections of all of the original documents, unmodified, and list them all as Invariant Sections of your combined work in its license notice, and that you preserve all their Warranty Disclaimers.

The combined work need only contain one copy of this License, and multiple identical Invariant Sections may be replaced with a single copy. If there are multiple Invariant Sections with the same name but different contents, make the title of each such section unique by adding at the end of it, in parentheses, the name of the original author or publisher of that section if known, or else a unique number. Make the same adjustment to the section titles in the list of Invariant Sections in the license notice of the combined work.

In the combination, you must combine any sections Entitled "History" in the various original documents, forming one section Entitled "History"; likewise combine any sections Entitled "Acknowledgements", and any sections Entitled "Dedications". You must delete all sections Entitled "Endorsements".

6. COLLECTIONS OF DOCUMENTS

You may make a collection consisting of the Document and other documents released under this License, and replace the individual copies of this License in the various documents with a single copy that is included in the collection, provided that you follow the rules of this License for verbatim copying of each of the documents in all other respects.

You may extract a single document from such a collection, and distribute it individually under this License, provided you insert a copy of this License into the extracted document, and follow this License in all other respects regarding verbatim copying of that document.

7. AGGREGATION WITH INDEPENDENT WORKS

A compilation of the Document or its derivatives with other separate and independent documents or works, in or on a volume of a storage or distribution medium, is called an "aggregate" if the copyright resulting from the compilation is not used to limit the legal rights of the compilation's users beyond what the individual works permit. When the Document is included in an aggregate, this License does not apply to the other works in the aggregate which are not themselves derivative works of the Document.

If the Cover Text requirement of section 3 is applicable to these copies of the Document, then if the Document is less than one half of the entire aggregate, the Document's Cover Texts may be placed on covers that bracket the Document within the aggregate, or the electronic equivalent of covers if the Document is in electronic form. Otherwise they must appear on printed covers that bracket the whole aggregate.

8. TRANSLATION

Translation is considered a kind of modification, so you may distribute translations of the Document under the terms of section 4. Replacing Invariant Sections with translations requires special permission from their copyright holders, but you may include translations of some or all Invariant Sections in addition to the original versions of these Invariant Sections. You may include a translation of this License, and all the license notices in the Document, and any Warranty Disclaimers, provided that you also include the original English version of this License and the original versions of those notices and disclaimers. In case of a disagreement between the translation and the original version of this License or a notice or disclaimer, the original version will prevail.

If a section in the Document is Entitled "Acknowledgements", "Dedications", or "History", the requirement (section 4) to Preserve its Title (section 1) will typically require changing the actual title.

9. TERMINATION

You may not copy, modify, sublicense, or distribute the Document except as expressly provided for under this License. Any other attempt to copy, modify, sublicense or distribute the Document is void, and will automatically terminate your rights under this License. However, parties who have received copies, or rights, from you under this License will not have their licenses terminated so long as such parties remain in full compliance.

10. FUTURE REVISIONS OF THIS LICENSE

The Free Software Foundation may publish new, revised versions of the GNU Free Documentation License from time to time. Such new versions will be similar in spirit to the present version, but may differ in detail to address new problems or concerns. See <http://www.gnu.org/copyleft/>.

Each version of the License is given a distinguishing version number. If the Document specifies that a particular numbered version of this License "or any later version" applies to it, you have the option of following the terms and conditions either of that specified version or of any later version that has been published (not as a draft) by the Free Software Foundation. If the Document does not specify a version number of this License, you may choose any version ever published (not as a draft) by the Free Software Foundation.

ADDENDUM: How to use this License for your documents

Copyright (c) YEAR YOUR NAME.

Permission is granted to copy, distribute and/or modify this document under the terms of the GNU Free Documentation License, Version 1.2 or any later version published by the Free Software Foundation; with no Invariant Sections, no Front-Cover Texts, and no Back-Cover Texts. A copy of the license is included in the section entitled "GNU Free Documentation License".